風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書15

史跡出雲国府跡

－2－

2004年3月

島根県教育委員会

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書15

史跡出雲国府跡

—2—

2004年3月

島根県教育委員会

題字：勝部　昭

出 雲 国 府 跡（西から）

巻頭図版 2

出 雲 国 府 跡（西から）

序

出雲国府跡は昭和46年（1971）に国指定史跡となり、一部は史跡公園に整備され、児童生徒の遠足や市民の憩いの場となっております。

出雲国府跡のある意宇平野は北に茶臼山をはじめとする山塊や南に大草古墳群のある丘陵があり、平地は水田地帯として、秋には黄金色の稲穂が広がります。このような平野の姿は古代・中世から続くと考えられ、全国的には国府周辺の開発が行なわれ、都市化が進んで行く中で貴重な景観となっています。

島根県教育委員会では、この風土記の丘に存在する遺跡を保存活用するため、平成３年（1991）には「八雲立つ風土記の丘整備構想」、平成９年（1997）には「古代文化の郷“出雲”整備構想」を策定し、史跡の公有地化や整備を進めてまいりました。また、平成15年３月には八雲立つ風土記の丘整備基本計画を策定し、継続的に出雲国府跡の調査を行い、今後の整備活用を計画しております。

本書は、平成14（2002）～15（2003）年度の２年間にわたる調査成果を取りまとめたものです。「門」と考えられる大形建物跡や区画溝跡などの施設、「介」と書かれた墨書土器や水晶・筋砥石といった玉作関係遺物などの国府の施設や生産の実態にせまる調査成果を盛り込んだ内容となっております。本書が今後の出雲国府研究はもとより、より豊かな地域の歴史像を構築する上で一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御指導・御協力を賜りました地権者の方々、地元自治会、松江市教育委員会、関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成16年３月

島根県教育委員会教育長
広　沢　卓　嗣

例　言

1．本書は島根県教育委員会が2002（平成14）年度から2003（平成15）年度に国庫補助事業として実施した風土記の丘地内遺跡発掘調査事業の報告書である。

2．本書に収録した内容は、2002（平成14）年度から2003（平成15）年度に実施した発掘調査についてであり、2003（平成15）年度は発掘調査、遺物整理と報告書作成を行った。2003（平成15）年度は２班体制で発掘調査を行っており、調査結果の一部は次年度以降のものとまとめて、今後順次報告書作成を進める予定である。

3．発掘調査にあたっては、地権者である門脇敦美、川見巌、川見昌春、角嘉昭、引野一雄、三島秀雄、三島美和子、水野誠、吉岡勝次の各氏から多大な協力を賜った。記して衷心より謝意を表したい。

4．挿図中の方位は、測量法による平面直角座標系ＸＹ座標（日本測地系）、第Ⅲ座標系のＸ軸方向をさしており、磁北より７°12′、真北より０°32′東の方向を示している。

5．本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院が発行した1：25,000「松江」、「揖屋」、遺跡周辺の地形図は島根県教育委員会が作成している風土記の丘地内の１：1000地形図を基に作成したものである。

6．本書に掲載した図面は、丹羽野裕、林健亮、守岡正司、阿部智子、平井大介、勝部悠美、伊藤幸子、寺本和明が分担して作成した。

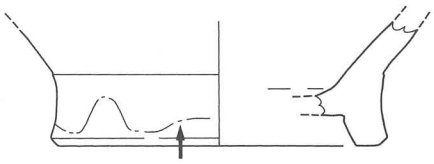
7．本書に掲載した写真は林健亮、守岡正司が撮影した。

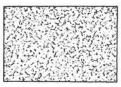
8．本書に掲載した出土遺物、写真・実測図などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

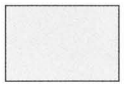
9．本書の編集は、各執筆者の協力を得ながら守岡正司が行った。

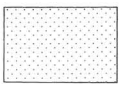
凡例

図中の一点破線（右図の矢印）は
施釉範囲の境界を示す。




炭


漆


赤色顔料

調査組織

2002（平成14）年度

調査指導委員会委員　町田章（奈良文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学大学院教授）、佐藤信（東京大学大学院教授）、蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）、渡邊貞幸（島根大学教授）

指導助言　玉田芳英（文化庁文化財調査官）

調査指導　亀田修一（岡山理科大学教授）、山本信夫（山本考古研究所）、高橋照彦（大阪大学大学院助教授）、三辻利一（大谷女子大学教授）、榊原博英（浜田市教育委員会主任主事）、片岡詩子（玉湯町立出雲玉作資料館副館長）、中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）

事務局　勝部昭（島根県教育庁教育次長）、宍道正年（教育庁文化財課長）、藤原弘（同課長補佐）、宮澤明久（同課長補佐）、廣江耕史（同主幹）、池渕俊一（同文化財保護主事）、伊藤徳広（同主事）、卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター副所長）、内田融（同総務課長）、柳浦俊一（同調査第２係長）、坂本淑子（同総務係長）

調査員　角田徳幸（同文化財保護主事）、守岡正司（同文化財保護主事）

調査補助員　阿部智子（同臨時職員）、平井大介（同臨時職員）

2003（平成15）年度

調査指導委員会委員　町田章（奈良文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学大学院教授）、佐藤信（東京大学大学院教授）、蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）、渡邊貞幸（島根大学教授）

指導助言　加藤真二（文化庁文化財調査官）

調査指導　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、米田克彦（岡山県立古代吉備文化財センター）

事務局　金築孝（島根県教育庁教育次長）、宍道正年（教育庁文化財課長）、祖田浩志（同課長補佐）、宮澤明久（同課長補佐）、廣江耕史（同主幹）、原田敏照（同文化財保護主事）、伊藤徳広（同主事）、卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター副所長）、永島静司（同総務課長）、西尾克己（同調査第１課長）、椿真治（同企画調整係長）

調査員　林健亮（同調査第３係長）、守岡正司（同文化財保護主事）

調査補助員　阿部智子（同臨時職員）、勝部悠美（同臨時職員）

調査協力機関・協力者

文化庁、奈良文化財研究所、松江市教育委員会、松江市大庭公民館・竹矢公民館、玉湯町教育委員会、浜田市教育委員会、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館、島根県古代文化センター

山中敏史（奈良文化財研究所）、平川南（国立歴史民俗博物館）、平澤毅（文化庁）、稲田孝司（岡山大学）、杉井健（熊本大学）、杉原和恵（防府市教育委員会）、中森祥・八峠興（財団法人鳥取県教育文化財団）、佐伯純也（財団法人米子市教育文化財団）、穴沢義功（たたら研究会委員）、岡崎雄二郎・吉岡弘行（松江市教育委員会）

本文目次

第１章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 ……（守岡正司）　1
第２節　歴史的環境 ……（守岡正司）　1

第２章　調査に至る経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 ……（角田徳幸）　7
第２節　調査の経過 ……（林　健亮）　7

第３章　本　調　査　（守岡正司）
第１節　調査区の区割り …… 12
第２節　遺構の名称 …… 12
第３節　調査の概要 …… 12
第４節　古墳時代の遺構と遺物 …… 15
第５節　古代の遺構と遺物 …… 18
第６節　生産関係遺物 …… 51
第７節　出雲国府跡出土の遺物 …… 57

第４章　範囲確認調査
第１節　平成14年度の調査 ……（守岡正司）　63
第２節　平成15年度の調査 ……（林　健亮）　71

第５章　ま　と　め
第１節　縄文時代から弥生時代 ……（守岡正司）　82
第２節　古墳時代中期 ……（守岡正司）　82
第３節　奈良時代から平安時代 ……（守岡正司）　83
（１）奈良・平安時代の施設群 ……（守岡正司）　83
（２）国府における手工業生産 ……（守岡正司）　86
（３）平安時代の土器・陶磁器 ……（守岡正司）　88
（４）古 代 の 扇 ……（守岡正司）　91
第４節　出雲国府跡とその周辺 ……（守岡正司）　92
第５節　トレンチ調査による周辺の古代遺構残存状況 ……（林　健亮）　97
第６節　成果と今後の課題 ……（守岡正司）　97

出雲国府跡出土土器・陶磁器観察表 ……100
出雲国府跡出土玉作関係遺物観察表 ……109
出雲国府跡出土石製品・木製品観察表 ……110

付　論
付論１　出雲国府跡発掘調査に係る花粉分析 ……（渡辺正巳）112
付論２　出雲国府跡出土木製品の樹種（２） ……（渡辺正巳・古野毅）118

挿図目次

第１図　来美廃寺出土石器実測図…… 1
第２図　出雲国府跡と周辺の遺跡（１）（Ｓ＝1/50,000）…… 2
第３図　出雲国府跡出土遺物（採集品）（１）…… 3
第４図　出雲国府跡出土遺物（採集品）（２）…… 4
第５図　出雲国府跡と周辺の寺社・遺跡（２）（Ｓ＝1/50,000）…… 5
第６図　出雲国府跡発掘調査区配置図（Ｓ＝1/6,000）…11
第７図　出雲国府跡本調査区遺構実測図（Ｓ＝1/200）……13～14
第８図　出雲国府跡３号竪穴住居・18号・19号・22号溝17号土坑実測図・遺物実測図……15
第９図　出雲国府跡17号・25号土坑出土遺物実測図……17
第10図　出雲国府跡９号建物実測図……19
第11図　出雲国府跡10号建物・３号柵列実測図……20
第12図　出雲国府跡９号・10号建物出土遺物実測図……21
第13図　出雲国府跡１号・２号柵列実測図……23
第14図　出雲国府跡１号柵列出土遺物実測図……24
第15図　出雲国府跡１号・２号柵列出土遺物実測図……25
第16図　出雲国府跡柱痕等のある柱穴実測図……26
第17図　出雲国府跡18～23号土坑・20号溝実測図・遺物実測図……28
第18図　出雲国府跡23号土坑・20号溝出土遺物実測図……29
第19図　出雲国府跡24号土坑・21号溝実測図・遺物実測図……31
第20図　出雲国府跡５号・８号溝実測図・遺物実測図……33
第21図　出雲国府跡８号溝実測図・遺物実測図……34
第22図　出雲国府跡８～11号溝実測図・遺物実測図……35
第23図　出雲国府跡12号溝実測図・遺物実測図……37
第24図　出雲国府跡13～16号溝実測図・遺物実測図……39
第25図　出雲国府跡17号溝実測図・遺物実測図……40
第26図　出雲国府跡２号井戸実測図……41
第27図　出雲国府跡２号井戸出土遺物実測図（１）……42
第28図　出雲国府跡２号井戸出土遺物実測図（２）……43
第29図　出雲国府跡３号井戸実測図・遺物実測図……44
第30図　出雲国府跡４号井戸実測図……45
第31図　出雲国府跡４号井戸出土遺物実測図（１）……46
第32図　出雲国府跡４号井戸出土遺物実測図（２）……47
第33図　出雲国府跡遺物出土地点図（Ｓ＝1/600）……48
第34図　出雲国府跡３区黒色土出土遺物実測図……48
第35図　出雲国府跡遺構出土遺物実測図（１）……49
第36図　出雲国府跡遺構出土遺物実測図（２）……50
第37図　出雲国府跡金属器生産関係遺物実測図……51
第38図　出雲国府跡玉作関係遺物実測図（１）……53
第39図　出雲国府跡玉作関係遺物実測図（２）……54
第40図　出雲国府跡玉作関係遺物実測図（３）……55
第41図　出雲国府跡出土遺物実測図（１）……58
第42図　出雲国府跡出土遺物実測図（２）……59
第43図　出雲国府跡出土遺物実測図（３）……60
第44図　出雲国府跡出土遺物実測図（４）……61
第45図　出雲国府跡第28・第29トレンチ遺構実測図……64
第46図　出雲国府跡第28・第29トレンチ出土遺物実測図…66
第47図　出雲国府跡第26・第27・第30～32トレンチ遺構実測図……67
第48図　出雲国府跡第26トレンチ出土遺物実測図……68
第49図　出雲国府跡第26・第27・第30～32トレンチ出土遺物実測図（１）……69
第50図　出雲国府跡第26・第27・第30～32トレンチ出土遺物実測図（２）……70
第51図　出雲国府跡第33トレンチ遺構実測図（１）……71
第52図　出雲国府跡第33トレンチ遺物出土状況実測図……72
第53図　出雲国府跡第33トレンチ遺構実測図（２）……73
第54図　出雲国府跡第33トレンチ・23号溝実測図……74
第55図　出雲国府跡第33トレンチ出土遺物実測図（１）…76
第56図　出雲国府跡第33トレンチ出土遺物実測図（２）…77
第57図　出雲国府跡第34～36トレンチ実測図・遺物実測図……80
第58図　古墳時代中期の遺構分布図……82
第59図　本調査区内施設群の変遷……85
第60図　平安時代後半の遺構分布図……86
第61図　出雲国府跡中心部の遺構配置図……87
第62図　出雲国府跡墨書・ヘラ書き文字実測図……88
第63図　意宇平野周辺の遺跡（Ｓ＝1/60,000）……93
第64図　史跡指定地周辺の調査状況（Ｓ＝1/4,000）……94
第65図　史跡出雲国府跡周辺微地形図……95～96

表目次

第１表　調査地一覧 …… 7
第２表　史跡出雲国府跡発掘調査 …… 10
第３表　出雲国府跡建物・柵列の法量 …… 27
第４表　出雲国府跡金属器生産関係遺物観察表 …… 51
第５表　玉素材別重量集計表 …… 56
第６表　玉素材別点数集計表 …… 56
第７表　水晶製作段階別集計表 …… 56
第８表　墨書・ヘラ書き土器一覧表 …… 88
第９表　陶磁器分類表 …… 89
第10表　初期貿易陶磁出土遺跡一覧表 …… 90
第11表　山陰地方の古代の扇一覧表 …… 91
第12表　出雲国府跡出土土器・陶磁器観察表 ……100～108
第13表　出雲国府跡出土玉作関係遺物観察表 ……109
第14表　出雲国府跡出土石製品観察表 ……110
第15表　出雲国府跡出土木製品観察表 ……110
第16表　遺構名新旧対照表 ……111

図版目次

図版１－１　出雲国庁跡史跡公園と本調査区（北から）
図版１－２　意宇平野と本調査区（東から）
図版１－３　本調査区（上が北）
図版２－１　2002(H14)年度本調査区（西から）
図版２－２　2002(H14)年度本調査区　１区（南から）
図版３－１　2002(H14)年度本調査区　２区（南から）
図版３－２　2002(H14)年度本調査区　３区（南から）
図版４－１　2003(H15)年度本調査区　１区（東から）
図版４－２　2003(H15)年度本調査区（東から）
図版４－３　2003(H15)年度本調査区　２区北（東から）
図版５－１　３号竪穴住居（東から）
図版５－２　22号溝遺物出土状況（東から）
図版５－３　19号溝（南から）
図版６－１　17号土坑土層（東から）
図版６－２　17号土坑遺物出土状況（１）（西から）
図版６－３　17号土坑遺物出土状況（２）（南から）
図版７－１　９号建物（南から）
図版７－２　９号建物（東から）
図版８　９号建物柱穴
図版９－１　10号建物（東から）
図版９－２　10号建物Ｐ１～Ｐ４（東から）
図版９－３　10号建物Ｐ５～Ｐ７（東から）
図版10　10号建物根石（１）
図版11　10号建物根石（２）・３号柵列・Ｐ363・Ｐ175
図版12　１号柵列（１）
図版13　１号柵列（２）・２号柵列
図版14　柱根のある柱穴
図版15－１　18号土坑（南西から）
図版15－２　19号土坑（南から）
図版15－３　20号土坑（南から）
図版16－１　21号土坑（西から）
図版16－２　22号土坑（西から）
図版16－３　23号土坑・20号溝遺物出土状況（南から）
図版17－１　24号土坑遺物出土状況（北から）
図版17－２　Ｐ93遺物出土状況（西から）
図版17－３　第27トレンチ検出溝（西から）
図版18－１　11号溝検出状況（東から）
図版18－２　16号溝遺物出土状況（東から）
図版18－３　20号溝検出状況（東から）
図版18－４　21号溝検出状況（北から）
図版19－１　５号溝・10号溝（東から）
図版19－２　５号溝土層（南から）
図版19－３　８号溝（西から）
図版20－１　８号溝Ｂ地点遺物出土状況（南から）
図版20－２　８号溝Ｂ地点土層（東から）
図版20－３　10号溝土層（北から）
図版21－１　Ｐ371遺物出土状況（北から）
図版21－２　13号溝遺物出土状況（東から）
図版21－３　15号溝検出状況（東から）
図版22－１　12号溝遺物出土状況（１）（東から）
図版22－２　12号溝遺物出土状況（２）（東から）
図版22－３　17号溝遺物出土状況（１）（北から）
図版22－４　17号溝遺物出土状況（２）（南から）
図版23－１　２号井戸遺物出土状況（１）（東から）
図版23－２　２号井戸遺物出土状況（２）（南西から）
図版23－３　２号井戸土層（西から）
図版24－１　２号井戸土層（南から）
図版24－２　３号井戸石出土状況（北から）
図版24－３　３号井戸腐植物堆積状況（東から）
図版25－１　４号井戸漆膜検出状況（西から）

図版25－２　４号井戸検出状況（北から）
図版25－３　４号井戸土層（東から）
図版26－１　４号井戸（北から）
図版26－２　４号井戸（東から）
図版26－３　４号井戸扇出土状況（南から）
図版27－１　第27トレンチ（西から）手前が落ち込み
図版27－２　第30トレンチ（北から）
図版27－３　第31トレンチ（南から）
図版27－４　第32トレンチ（南から）
図版28－１　第27トレンチ東壁土層（西から）
図版28－２　第28トレンチ（東から）
図版28－３　第29トレンチ（西から）
図版29－１　３号竪穴住居・18号・19号・22号溝・17号・25号土坑出土遺物
図版29－２　９号・10号建物出土遺物
図版30　採集品・９号・10号建物・22号溝・17号土坑出土遺物
図版31　１号柵列出土遺物
図版32－１　１号・２号柵列出土遺物
図版32－２　18号・20号～23号土坑出土遺物
図版33－１　20号溝・23号土坑出土遺物
図版33－２　20号・21号溝・24号土坑出土遺物
図版34－１　５号・８号溝出土遺物
図版34－２　８号溝出土遺物
図版35－１　８～10号溝出土遺物
図版35－２　10～12号溝出土遺物
図版36　９号建物・１号柵列・８号・11号・17号・20号・21号溝・23号・24号土坑出土遺物
図版37－１　13～16号溝出土遺物
図版37－２　15号・17号溝出土遺物
図版38　15号・17号溝・２～４号井戸・出雲国府跡出土遺物
図版39　２号・４号井戸・出雲国府跡出土遺物
図版40－１　３号・４号井戸出土遺物
図版40－２　４号井戸・出雲国府跡出土遺物
図版41　出雲国府跡出土遺物
図版42　金属器生産・玉作関係遺物
図版43　出雲国府跡出土遺物
図版44　出雲国府跡出土遺物
図版45　出雲国府跡出土遺物
図版46　来美廃寺・４号井戸・出雲国府跡出土遺物
図版47－１　第28・29トレンチ出土遺物
図版47－２　第26・27トレンチ出土遺物
図版48　第26～32トレンチ出土遺物
図版49－１　第33トレンチ遺構検出状況（北から）
図版49－２　23号溝遺物出土状況（北から）
図版49－３　23号溝土層堆積状況（北から）
図版50－１　第33トレンチと国府中枢部との位置関係（北から）
図版50－２　第33トレンチ南壁土層堆積状況（高坏出土位置が23号溝）
図版50－３　23号溝土器出土状況（南から）
図版50－４　第33トレンチ完掘状況（北から）
図版51　第33トレンチ出土遺物
図版52　第33トレンチ出土遺物
図版53　第33トレンチ出土遺物
図版54　第33トレンチ出土遺物
図版55　第33トレンチ出土遺物
図版56　第33トレンチ出土遺物
図版57－１　第34トレンチ全景（北東から）
図版57－２　第34トレンチ土層断面（東から）
図版57－３　第34トレンチ完掘状況（北から）
図版58－１　第35トレンチ完掘状況（西から）
図版58－２　第35トレンチ遺構検出状況（西から）
図版58－３　第35トレンチ遺物出土状況（北西から）
図版59－１　第36トレンチ全景（南東から）
図版59－２　第36トレンチ土層断面（東から）
図版59－３　第35トレンチ出土遺物
図版60　出雲国府跡出土墨書土器赤外線写真

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

出雲国府跡は、昭和46年12月13日に約42haの広さが国の史跡に指定された。指定地は松江市大草（おおくさ）町、竹矢（ちくや）町、山代（やましろ）町にまたがり、国府跡あるいは条里制としての指定面積では全国でも有数である。

出雲国府跡の位置する意宇（いう）平野は島根県東部・松江市の南郊にあり、意宇（いう）川が平野の南端を西から東に流れ、中海に注いでいる。平野の西には、標高25m前後の段丘面（乃木段丘）が分布している。茶臼山（ちゃうすやま）（標高171.5m）をはじめとする平野の南北の丘陵は、新第三系の火山岩類からなる。

平野には、旧河道にともなう小崖や自然堤防列が認められ、自然堤防の微高地に中島・春日・今宮の集落が形成されている。国府跡は中島の微高地にある[1]。

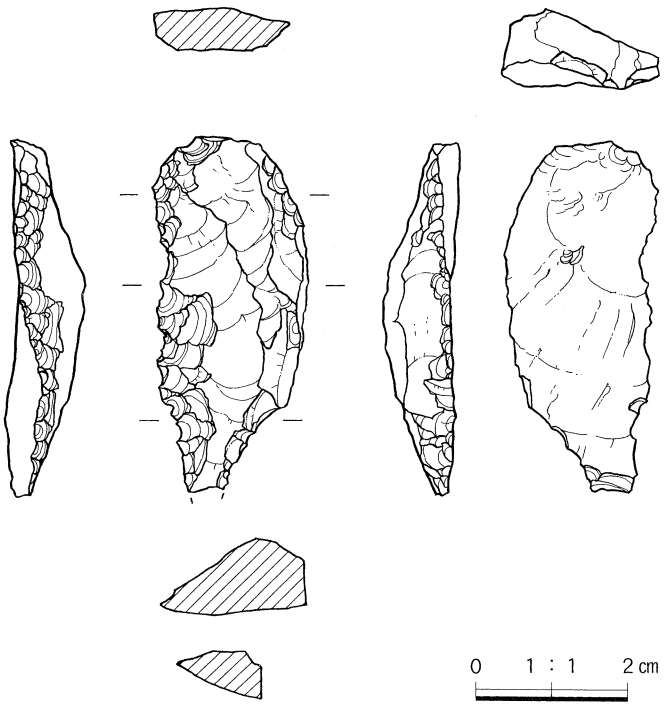
第２節　歴史的環境

出雲国府跡の位置する意宇平野周辺には数多くの遺跡が存在する。意宇平野の西に位置する乃木段丘上からは旧石器時代の遺物が各所で採集され[2]、下黒田遺跡の発掘調査では良好な状態で遺物が出土し、出雲地域での貴重な資料となっている[3]。来美廃寺では第３基壇T1の溝から瓦片と伴に玉髄製ナイフ形石器が１点出土している[4]（第１図）。

縄文時代の遺跡は馬橋川周辺の石台遺跡[5]や意宇平野北側の才塚遺跡や法華寺前遺跡[6]、平野南西側の鷂貫遺跡[7]などが見られる。

弥生時代になると遺跡が増加し、人の営みが克明に残こり、平野の開発が進んだことがわかる。意宇平野東側に位置する夫敷遺跡[8]からは弥生時代後期の水田跡が検出され、平野中央部の上小紋・向小紋遺跡[9]からは弥生時代後期から古墳時代初めの水田跡が発見された。また、鐸形土製品や分銅形土製品が発見された布田遺跡[10]からは、玉作関係遺物も確認された。丘陵部には間内越墳丘墓[11]や来美墳丘墓[12]などの墳墓が築かれている。

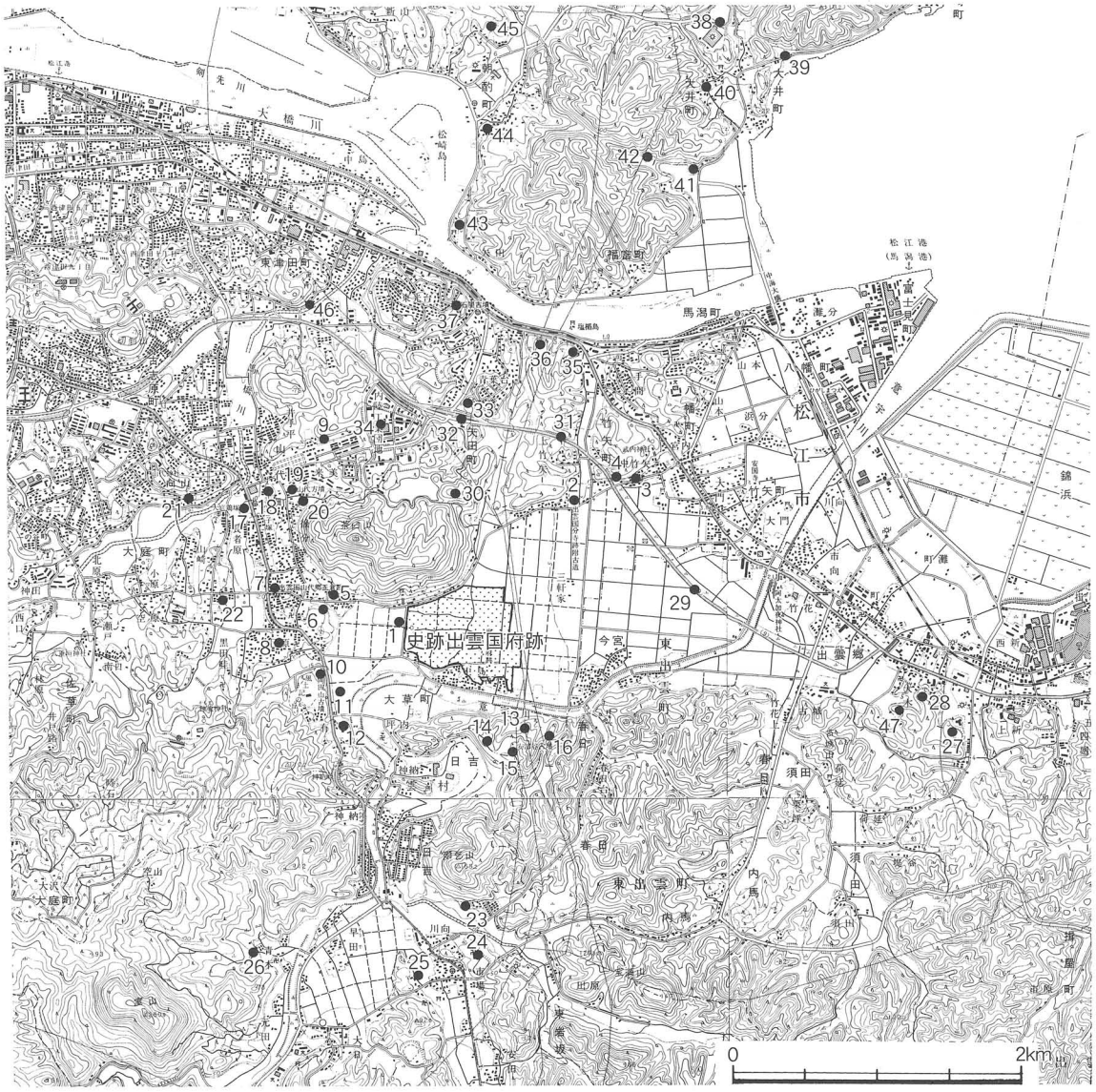
古墳時代前期から中期にかけては傑出した規模をもつ大形古墳はないが、意宇平野の北側、大橋川・中海沿岸を中心に寺床１号墳（方墳30m）[13]、廻田１号墳（前方後円墳58m）[14]、石屋古墳（方墳40m）[15]、などが営まれている。また、意宇平野の南側丘陵から八雲村にかけては、東百塚山古墳群（64基以上）・西百塚山古墳群（42基以上）・増福寺古墳群（26基）[16]など中期から後期前半の小方墳からなる群集墳が分布している。



第１図　来美廃寺出土石器実測図

この時期の集落跡は明確になっているものは少ない。夫敷遺跡は平野の東側、中海汀線近くの意宇川河口付近に位置するもので、第Ⅳ調査区中層では甑・甕など陶質または軟質の韓式系土器が出土している[8]。

古墳時代後期になると、茶臼山の北西麓に6世紀から7世紀前半にかけて営まれた大形の古墳が出現する。大庭鶏塚古墳（方墳42m）、山代二子塚古墳（前方後方墳92m）、山代方墳（方墳45m）、永久宅後古墳がそれで、出雲東部における最高首長の世代墓と考えられる[17]。また、意宇平野の西から南側にかけて「各田部臣」の銘文入り大刀が出土した岡田山1号墳（前方後方墳24m）[18]、御崎山古墳（前方後方墳40m）[19]、古天神古墳（前方後方墳27m）など最高首長を支えたと見られる勢力が残した古墳も確認されている。



1．大坪遺跡　2．出雲国分寺跡　3．出雲国分尼寺跡　4．中竹矢遺跡　5．山代郷南新造院跡　6．小無田Ⅱ遺跡
7．山代郷正倉跡　8．黒田畦遺跡　9．山代郷北新造院跡　10．岡田山古墳群　11．岩屋後古墳　12．御崎山古墳
13．古天神古墳　14．西百塚山古墳群　15．東百塚山古墳群　16．安部谷横穴墓群　17．大庭鶏塚古墳　18．山代二子塚古墳
19．山代方墳　20．永久宅後古墳　21．向山1号墳　22．東淵寺古墳　23．雨乞山古墳　24．増福寺古墳群　25．前田遺跡
26．青木遺跡　27．寺床古墳群　28．大木権現山墳墓群　29．夫敷遺跡　30．廻田古墳群　31．才ノ峠遺跡　32．平所遺跡
33．間内越墳墓　34．来美墳墓　35．竹矢岩舟古墳　36．手間古墳　37．石屋古墳　38．池ノ奥窯跡群　39．山津窯跡群
40．寺尾窯跡　41．ババタケ窯跡　42．岩汐窯跡群　43．魚見塚古墳　44．朝酌岩屋古墳　45．廻原1号墳　46．石台遺跡
47．島田池遺跡

第2図　出雲国府跡と周辺の遺跡（1）（S＝1/50,000）

古代の遺跡としては、茶臼山の北西から南西麓にかけて『出雲国風土記』に登場する山代郷正倉跡[20]、四王寺跡（山代郷南新造院跡）[21]、来美廃寺（山代郷北新造院跡）[22]が営まれ、古代社会を遺跡と文献から復原・検討できる全国的にも数少ない地域となっている。

さらに、意宇郡家、駅家、軍団については、その所在は明らかになっていないが、『風土記』に記載されていない遺跡も多く存在する。宗教関連の遺跡としては前述の寺院のほかに、意宇平野北東側の丘陵裾部に出雲国分寺[23]、国分尼寺[24]、土馬や手捏ね土器、墨書土器などが出土した才ノ峠遺跡[15]がある。また、来美廃寺の南側丘陵に位置する狐谷横穴墓群[26]、意宇平野東端に位置する島田池遺跡[7]、岸尾遺跡[27]からは鉄鉢形土器が出土している。島田池遺跡５区SB01からは平安時代の八稜鏡が出土し、周囲からは緑釉陶器や多量の土師器が検出されている。

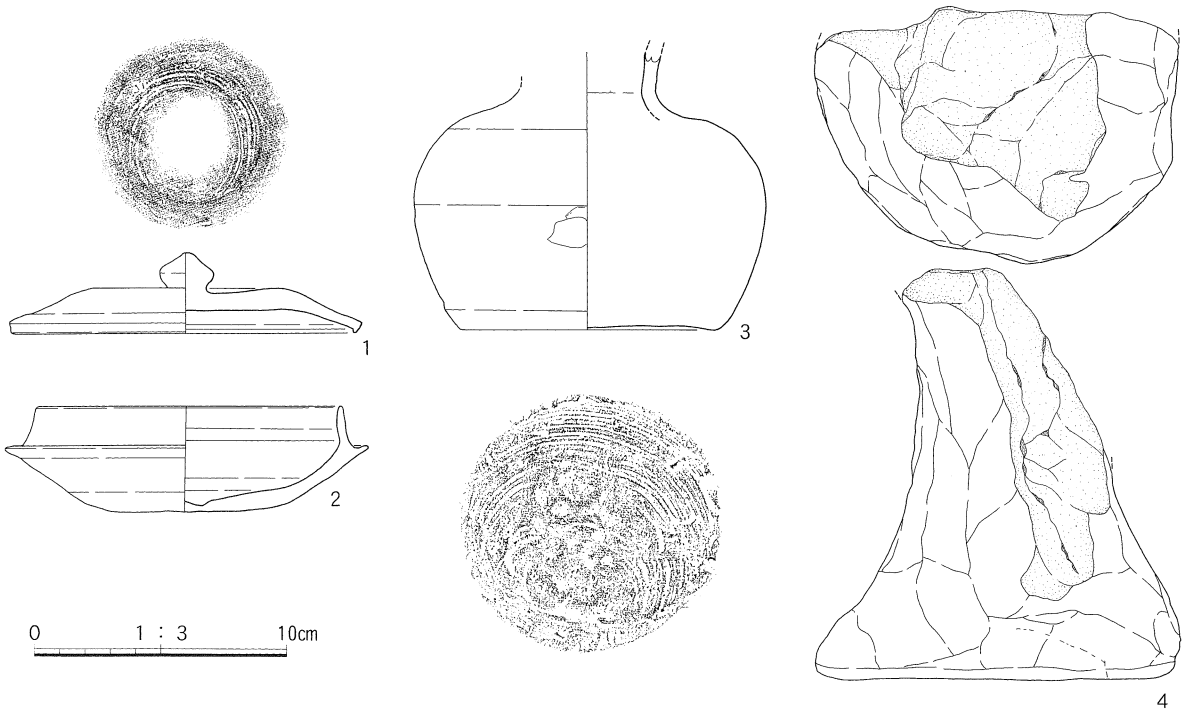
生産遺跡としては四王寺跡などの瓦窯と考えられる小無田Ⅱ遺跡[28]、国分尼寺の瓦窯が検出された中竹矢遺跡[29]、出雲国府から大橋川を挟んだ対岸には大井古窯跡群（池ノ奥窯跡・山津窯跡・ババタケ窯跡・岩汐窯跡）がある。

墓としては火葬骨や八稜鏡が入った壺が出土した社日古墳群[30]、鉄釘が出土した中峯遺跡[31]、意宇平野からやや東に位置する勝負遺跡[32]の木棺墓（八稜鏡出土）などが在存し、意宇平野周辺の丘陵上が墓として使用されていた。

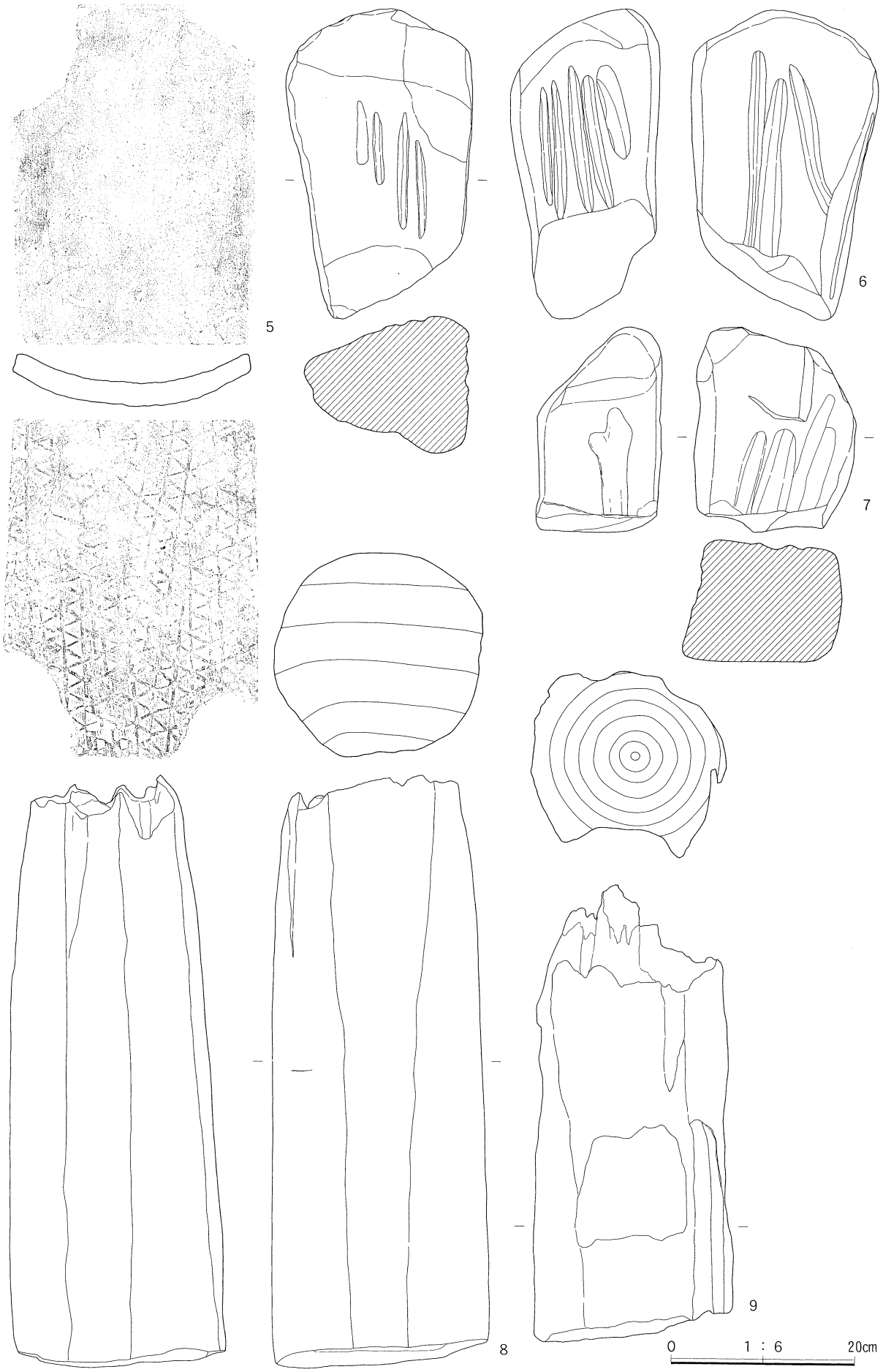
その他、出雲国内の郡名である「云石（いいし）」と書かれた墨書土器が検出された黒田畦遺跡[33]、真名井神社参道沿いで「延暦八年」と推定される木簡が出土した大坪遺跡[34]がある。

集落遺跡や館跡としては緑釉陶器や灰釉陶器が出土した渋山池遺跡や原ノ前遺跡[35]、出雲国府の東側に位置する神田遺跡、大屋敷遺跡、天満谷遺跡[9]が確認されている。このうち、天満谷遺跡は掘立柱建物跡が６棟検出された他、白磁・越州窯系青磁・同安窯系青磁などがまとまって出土しており、国府との関わりが考えられる。

多くの遺跡が存在する意宇平野では分布調査時には遺物を採集することができ、その結果は『史



第３図　出雲国府跡出土遺物（採集品）（１）



第４図　出雲国府跡出土遺物（採集品）（２）

跡出雲国府跡－１－』[1]に報告している。耕作などで採集された遺物としては第３・４図がある。

第３図１は口縁部端部が僅かに屈曲する坏蓋である。天井部は糸切り後につまみを貼り付けている。２は坏身で、口縁部の立ち上がりは高く、底部はヘラ切りである。３は壺の体部で、焼成後穿孔される。底部は静止糸切り。４の土製支脚は、底部が深さ２cmほど擂鉢状に凹む。第４図５はほぼ完形の瓦で、格子タタキが明瞭に残る。６、７は筋砥石である。筋砥石や水晶などは出雲国府跡周辺では多く採集され、古くから紹介されている[36]。８、９は柱根である。８の底部には幅５cmほどのコ字形の工具痕が残る。９の底部から９cmほど上に方形の刳り込みが施されている。

註

（１）島根県教育委員会「史跡出雲国府跡－１－」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』14　2003

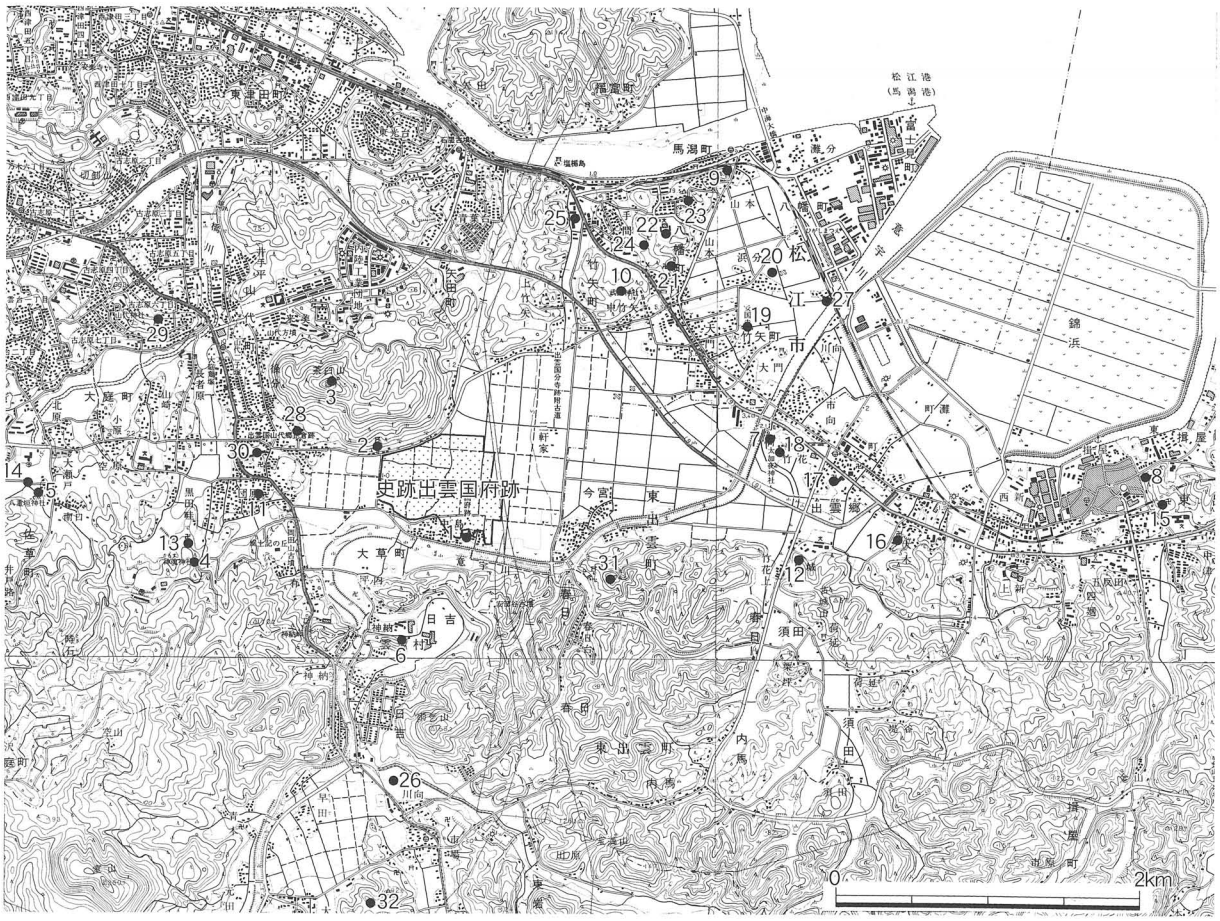
（２）伊藤徳広・丹羽野裕「島根県出土の旧石器時代の石器について」『古代文化研究』11　2003

（３）島根県教育委員会「下黒田遺跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅵ　1989

（４）島根県教育委員会「来美廃寺」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』13　2002
　　伊藤徳広・丹羽野裕「島根県出土の旧石器時代の石器について」『古代文化研究』11　2003

（５）島根県教育委員会『石台遺跡』Ⅱ　1993

（６）島根県教育委員会「縄文・弥生遺跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会　1975



１．六所神社　２．真名井神社　３．茶臼山城跡　４．神魂神社　５．八重垣神社　６．剣神社　７．阿太加夜神社
８．揖屋神社　９．王子権現　10．平浜八幡宮　11．浄音寺　12．古城山城跡　13．正林寺　14．常徳寺　15．栄泉寺
16．浄土寺　17．浄円寺　18．来光寺　19．円通寺（安国寺）　20．阿弥陀堂　21．迎接寺　22．宝光寺　23．観音寺
24．菩提寺　25．安郷寺　26．戸波遺跡　27．八幡津　28．市場　29．古市場　30．黒田館跡　31．春日城跡
32．禅定寺城跡　　（大社町史上巻（1993年）第三編第三章図14を参考に作図）

第５図　出雲国府跡と周辺の寺社・遺跡（２）（Ｓ＝1/50,000）

（7）島根県教育委員会他「島田池遺跡・鷂貫遺跡」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区』Ⅷ　1997
（8）島根県教育委員会他「夫敷遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅵ　1989
（9）島根県教育委員会他『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
(10) 島根県教育委員会他「布田遺跡」『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅷ　1991
(11) 松江市教育委員会他『間内越1号墓・間内越遺跡』1989
(12) 山本清「松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘」『間内越1号墓・間内越遺跡』1989
(13) 東出雲町教育委員会『寺床遺跡調査概報』1983
(14) 島根県教育委員会『出雲地方における前方後円墳の出現とその時代』2003
(15) 松江市教育委員会『史跡石屋古墳』1985
(16) 八雲村教育委員会『増福寺古墳群発掘調査報告書』1981、1982
(17) 渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』1986
(18) 島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』1987
(19) 島根県立八雲立つ風土記の丘・島根県教育委員会『御崎山古墳の研究』1996
(20) 島根県教育委員会『史跡出雲国山代郷正倉跡』1981
(21) a,島根県教育委員会「四王寺跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅳ　1985
b,島根県教育委員会「四王寺跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅴ　1988
c,島根県教育委員会「山代郷南新造院（四王寺）跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅹ　1994
(22) a,島根県教育委員会「来美廃寺」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』12　1998
b,島根県教育委員会「来美廃寺」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』13　2002
(23) a,石田茂作・山本清「出雲国分寺の発掘」『出雲・隠岐』地方史研究所　1963
b,前島己基「古代寺院跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会　1975
c,松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団『出雲国分寺跡発掘調査報告書』1995
(24) a,島根県教育委員会『出雲国分尼寺第1次発掘調査概報』1973
b,島根県教育委員会『出雲国分尼寺第2次発掘調査概報』1974
c,島根県教育委員会『出雲国分尼寺第3次発掘調査概報』1975
(25) 島根県教育委員会他「才ノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1983
(26) 島根県教育委員会「松江・狐谷横穴群（Ⅱ）」『島根県埋蔵文化財調査報告書』ⅩⅢ　1987
(27) 島根県教育委員会他「岸尾遺跡・島田遺跡」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区』Ⅴ　1997
(28) 松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』1997
(29) 島根県教育委員会他「中竹矢遺跡」『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅹ　1992
(30) 島根県教育委員会他「社日古墳」『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』12　2000
(31) 松江市教育委員会『中竹矢後1号墳・中峯遺跡』1986
(32) 島根県教育委員会他「勝負遺跡・堂床古墳」『一般国道9号安来道路西地区埋蔵文化財発掘調査報告書』10　1998
(33) 松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団『黒田畦遺跡発掘調査報告書』1995
(34) 松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』2002
(35) 島根県教育委員会他「渋山池遺跡・原ノ前遺跡」『一般国道9号安来道路西地区埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区』Ⅶ　1997
(36) 濱田耕作他「出雲上代玉作遺物の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』10　1927

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

出雲国府跡は島根県松江市大草町・山代町地内に所在する遺跡である。その所在地については江戸時代から諸説があったが、松江市教育委員会が昭和43（1968）～45（1970）年の３年間にわたり行った発掘調査で計画的に配置された奈良時代の建物跡群が検出されたことにより、初めて明らかになった。昭和46（1971）年12月13日には史跡出雲国府跡として約420,000㎡が国指定史跡となり、島根県教育委員会がその中心区域である六所脇・宮ノ後地区で昭和47（1972）年度から３か年で環境整備事業を行って、八雲立つ風土記の丘の中核となる史跡公園として活用が図られた。

その後、平成３（1991）年には「八雲立つ風土記の丘整備構想」、平成９（1997）年には「古代文化の郷“出雲”整備構想」が策定された。いずれも八雲立つ風土記の丘を中核とした遺跡整備の必要性が唱えられ、これに基づいて史跡の公有地化や整備が進められてきた。

こうした状況を受けて、島根県教育委員会では昭和43～45年の調査以来、現状変更に伴う小規模な調査を除いて本格的な調査が中断していた史跡出雲国府跡を継続的に発掘調査することとした。調査は、昭和48（1973）年から継続して実施している風土記の丘地内遺跡調査の一環として平成11（1999）年度より行っており、今年度で５年目である。

出雲国府跡は、昭和40年代の調査では政庁後殿と後方官衙が明らかになっている。しかし、国庁を含め他の諸施設の構造や時期変遷など、まだ具体的に明らかになっていない課題も多い。したがって、調査は史跡地内におけるトレンチ調査による遺構の範囲確認と、確認された遺構のうち中心となる施設群の構造・性格を明らかにするための発掘を行った。また、併せて地下レーダー探査を行い、発掘調査前に地下遺構の情報を極力得ることとした。

第２節　調査の経過

（１）平成14（2002）年度

平成14年度はトレンチ調査の一部を除き、主に大舎原地区で発掘調査を実施した。現地調査は１パーティで、５月20日より作業員を投入しての掘削を開始する一方、角田徳幸が平成13年度までの発掘調査報告書の作成業務を実施している。

現地調査開始直後の５月22日には、早くも８号溝等の遺構を検出しており、同月28日には八雲小学校による発掘体験も実施した。

７月18日には、第７回となる発掘調査指導委員会を開催した。平成14年の

第１表　調査地一覧

地区名	所在地	字	面積（㎡）
１区	松江市大草町522-1	大シヤラ田	140＋155
２区	松江市大草町522-1	大シヤラ田	153.5＋191
３区	松江市大草町510-2	大シヤラ田	195
４区	松江市大草町510-1	大シヤラ田	－
T26	松江市大草町573-1	壱貫尻	32
T27	松江市大草町510-1	大シヤラ田	40
T28	松江市大草町510-1	大シヤラ田	25
T29	松江市大草町510-1	大シヤラ田	10
T30	松江市山代町	鍛冶ヶ免	20
T31	松江市山代町	鍛冶ヶ免	20
T32	松江市山代町	樋ノ口	20
T33	松江市大草町	大シヤラ田	60
T34	松江市大草町	深坪	20
T35	松江市山代町	神田	20
T36	松江市山代町	水ノ尻	20

夏は、好天に恵まれる日が比較的多く、調査は順調に進展しており、８月８日には八雲立つ風土記の丘資料館主催による発掘体験、９月10日に掛合小学校による発掘現場見学などの行事を実施したほか、県内外から多くの見学者が発掘現場に訪れている。

10月15日には中村唯史氏（三瓶自然館）より古地形についての調査指導を受けた。同月22日には、９号建物の全体像が判明し、八脚門と判断されるようになったことから調査員を驚かせた。

10月29日に町田章氏（奈良文化財研究所）による調査指導会、31日に第８回調査指導委員会を開催し、これを受けて11月４日に地元向けの、10日に一般向けの現地説明会を開催した。11月４日には八雲立つ風土記の丘周辺を主会場に文化財課が中心となって古代体感事業（クイズラリー）を開催している。出雲国府発掘現場では、この事業の内の発掘体験を実施すべく準備をしていたが、雨天のため遺跡の説明のみとなった。

10月からは古代山陰道を確認するため鍛冶ヶ免地区の第30・第31トレンチを、樋ノ口地区の遺構の広がりを確認するため第32トレンチを調査した。

全ての遺構の掘削を終えた11月７日には空中写真撮影を行い、同月14日に田中義昭氏（県文化財保護審議会委員）による調査指導を受けた。これらをもって平成14年度の現地調査は終了し、同月29日に撤収している。なお、柱根については埋め戻し前にはサンプリングを行い、樹種同定を行った。

なお、調査報告書の作成に際しては、５月31日に亀田修一氏（岡山理科大学）より朝鮮系遺物について、７月31日に片岡詩子氏（玉湯町教育委員会）により玉作関係遺物について、８月27～29日に山本信夫氏（山本考古研究所）・榊原博英氏（浜田市教育委員会）により陶磁器について、10月４日に高橋照彦氏（大阪大学大学院）により緑釉陶器について、10月31日に三辻利一氏（大谷女子大学）により胎土分析についての調査指導を受けており、発掘現場の調査員も参加した。報告書は、平成15年３月31日に刊行している。

（２）平成15（2003）年度

平成15年度は２パーティー体制で準備を開始し、５月21日より一貫尻地区で重機を使用しての表土掘削を、同月26日より作業員を投入しての本格的な調査に着手した。調査は守岡班が大舎原地区１・２区を、林班が一貫尻地区を受け持つこととし、作業員合計約30名の体制で掘削を開始した。

一貫尻地区では掘削開始直後から、水面に隣接した石敷き遺構が出土しており、石を配した池のような施設が存在したかどうかが大きな関心事となった。６月25日に現地を見学した飯沼健二氏（別府大学）は池とは考え難いとの私見を示されたが、７月14日に開催した佐藤信氏（東京大学大学院）による調査指導会、同月17日の第９回発掘調査指導委員会、同月22日の井上寛司氏（大阪工業大学）による調査指導会では、国司館に隣接する池が存在した可能性が話題となった。一方、７月28日の中村唯史氏、８月６日の平澤毅氏（文化庁）の調査指導ではいずれも池と考えることについて否定的な見解が示され、現場での判断も揺れ動くこととなる。また、指導委員会では９号建物が門と考えられることからそれに続く４号柵列と４号溝との関係を明らかにするよう指導があったため、大舎原地区東端にトレンチを開けることが決定した。

大舎原地区では６月10日に大型礎石建物跡である10号建物を検出している。大舎原地区１・２区での調査を担当した守岡班は８月29日で現地調査を切り上げ、本報告書の作成業務に入った。守岡班が報告書作成業務に入ったことにより、大舎原地区での残りのトレンチ調査（第33トレンチと指

導委員会で設定が決まった仮称東トレンチ）を林班が引き継ぐこととなった。

平成15年は冷夏に見舞われ、特に７月から８月前半は発掘現場が度々水没し、調査も難航した。ようやく天候も安定し始めた９月初旬からは、一貫尻地区での調査を一旦停止し、本格的に日岸田地区の調査に着手した。日岸田地区では、９月18日に獣足付き須恵器など特殊な遺物が出土し、発掘現場を湧かせた。８月16日に八雲立つ風土記の丘資料館主催の行事として、９月３日には八雲小学校による、10月５日には古代体感事業（クイズラリー）での発掘体験を日岸田地区で実施している。

大舎原地区の仮称東トレンチでは当初の目的であった４号柵列を検出することができなかったが、あらたな問題として石を貼った南北に延びる溝を発見した。10月15日の山中敏史氏（奈良文化財研究所）の調査指導、29日の第10回指導委員会、31日の井上寛司氏の調査指導でも、この溝が話題の中心となり、トレンチ内での溝の完掘と来年度以降の溝の追跡調査を求められることとなった。これを受けて10月30日よりトレンチを拡張して掘削し、幅約１ｍの両岸に石を階段状に貼った溝を検出した。また、11月５日からは、守岡班が補足調査を行い、翌６日には大舎原地区４号井戸から扇が出土している。これらの成果を受けて11月17日には現地説明会（参加者約50人）を開催した。また、10月末の段階で、主な遺構の掘削をほぼ終えたことから11月４・18日には空中写真撮影を行った。この間、11月13日に加藤友康氏（東京大学）、19日に田中義昭氏の調査指導を受けている。11月からは範囲確認調査を第34～36トレンチで行った。

大舎原地区の第33トレンチは10月６日に、仮称東トレンチは11月14日に、日岸田地区は11月21日に作業を終了した。最後まで難航していた一貫尻地区の実測も11月４日に３次元データ計測を行い、同月28日に全ての現地作業を終了した。12月以降は林班も合流して報告書作成業務を行った。

第２表　史跡出雲国府跡発掘調査

	年　度	調　査　主　体	調　査　原　因	文　献
1	昭和43(1968)	松江市教育委員会	学術調査	註(1)
2	昭和44(1969)	松江市教育委員会	学術調査	
3	昭和45(1970)	松江市教育委員会	学術調査	
4	昭和49(1974)	島根県教育委員会	史跡整備	註(2)
5	昭和60(1985)	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	註(3)
6	昭和61(1986)	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	
7	昭和62(1987)	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	
8	平成５(1993)	松江市教育委員会	道路拡幅	註(4)
9	平成８(1996)	松江市教育委員会	個人住宅建設・道路拡幅	
10	平成９(1997)	松江市教育委員会	個人住宅建設	
11	平成11(1999)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	註(5)
12	平成12(2000)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	
13	平成13(2001)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	
14	平成14(2002)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	本報告
15	平成15(2003)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	

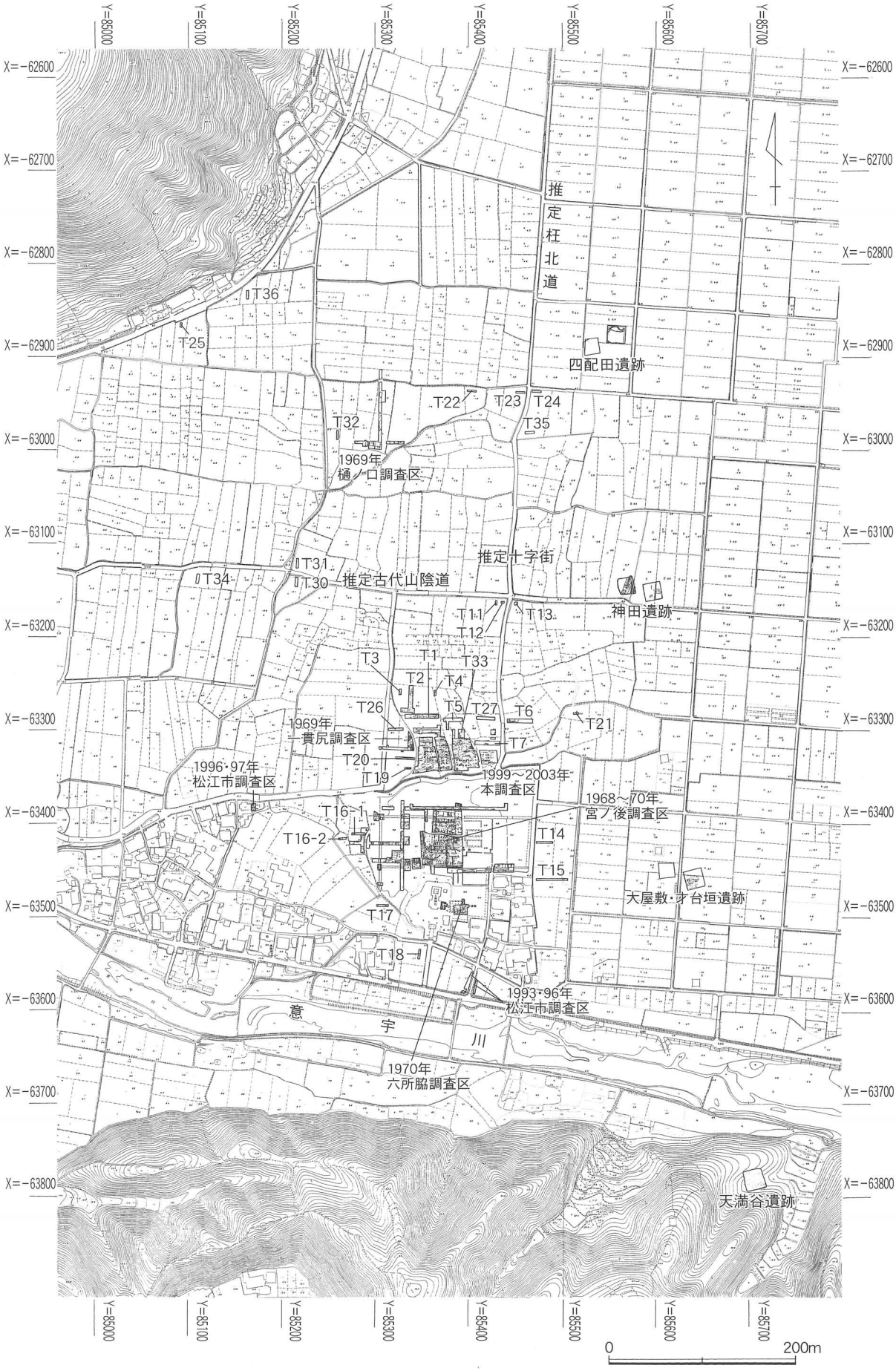
（１）松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1971

（２）島根県教育委員会『史跡出雲国府跡環境整備報告書』1975

（３）島根県教育委員会『土地改良総合整備事業に伴う史跡出雲国府跡発掘調査報告書』1988

（４）財団法人松江市教育文化振興事業団『財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課年報』Ⅰ　1997

（５）島根県教育委員会「史跡出雲国府跡－１－」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』14　2003



第６図　出雲国府跡発掘調査区配置図（Ｓ＝1/6,000）

第３章　本調査

第１節　調査区の区割り

出雲国府跡は国史跡指定面積が約42haにわたる広大な遺跡である。調査区も広域にわたることが考えられたので、平成11年度の確認調査の折りに区割りを設定した。区割りの基準は国土地理院第Ⅲ座標系（日本測地系）の南北軸座標Ｘ＝－63400ｍと東西軸座標Ｙ＝85400ｍの交点を原点とした。交点から西にはＷを、東にはＥを、北にはＮを、南にはＳをふり、北西交点を地区名とし、Ｎ10, W25などと呼称した。また、大舎原地区は３つの畦畔で区切られているため、便宜的に西から１区、２区、３区、４区と呼び、遺構の実測や遺物の取り上げを行った。

第２節　遺構の名称

遺構を検出した時点では既成報告書の遺構との関連が不明であり、切り合いや遺物の内容等検討を実施する報告書作成時に修正することとし、調査時点では調査年度により遺構名を付けた。よって、遺構実測図や遺物の注記は調査時の遺構名で実施している。報告書に遺構名新旧対照表を記載することで、混乱をさけた（第16表）。今後、周辺の調査箇所との関連が確実な遺構は既成遺構名にするなど、調査方法のマニュアル化が必要である。なお、報告書の遺構名に欠番や略号と性格が異なるものがある。

第３節　調査の概要

本調査は、前年度までの調査結果を受け、東西に主軸をもつ建物が検出された大舎原地区の周辺で実施した。調査区内や周辺は畦畔や水路、道路があり、可能な範囲で調査を実施した。

検出された遺構は、古墳時代中期、奈良時代から平安時代前半、平安時代後半に大きく分けられる。

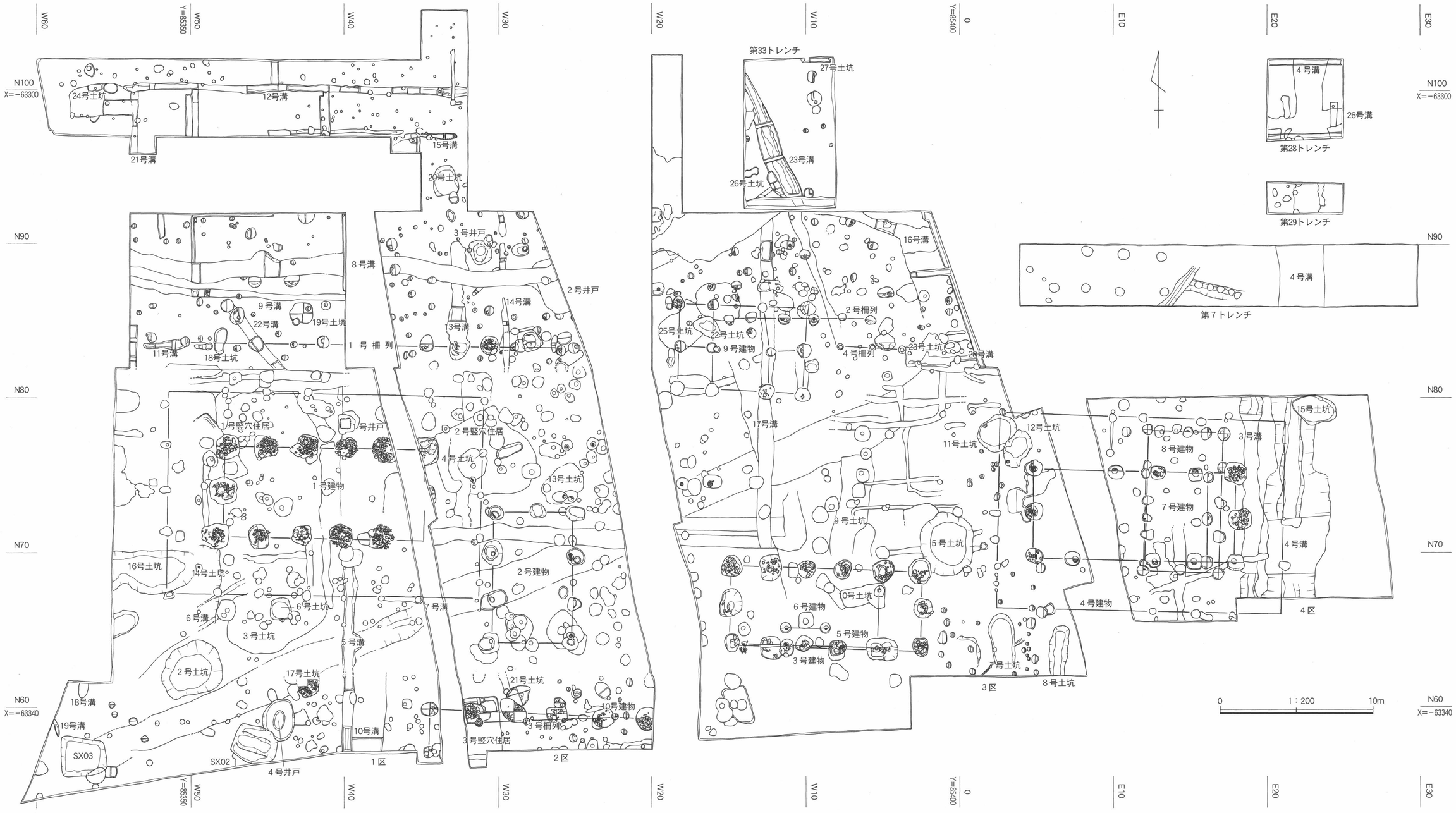
古墳時代中期の遺構は、既報告の続きが検出されたものを含め溝５条、竪穴住居１棟、土坑２基が確認された。１区では６・７号溝が南側に続くことがわかり、隣接して17号土坑が検出された。２区からは方形の３号竪穴住居が検出され、集落の一部にあたっていると考えられる。

奈良時代から平安時代前半の遺構としては９号建物が１号建物と４号建物の中間の北側で見つかった。さらに、それに続くと考えられる１号柵列がある。その他、２区12号溝、24号土坑、３区17号溝がその前半期の遺構と考えられる。また、南側では５間×２間以上の10号建物を確認した。

４号溝は第28トレンチで確認され、北側へ続くが、検出レベルが低く、遺構の深さも浅く、第27トレンチでは明確に確認することができなかった。

平安時代後半の遺構は２・４号井戸、８・９号溝がある。２号井戸は井戸枠は未検出であるが、内部から下駄や土師器が出土した。４号井戸は方形の井戸枠が残っており、内部からは箸、扇などが出土した。また、調査区からは比較的径の小さく黒色土が詰まった柱穴が確認され、明確に建物等を復原できなかったが、当該期の施設があったと思われる。

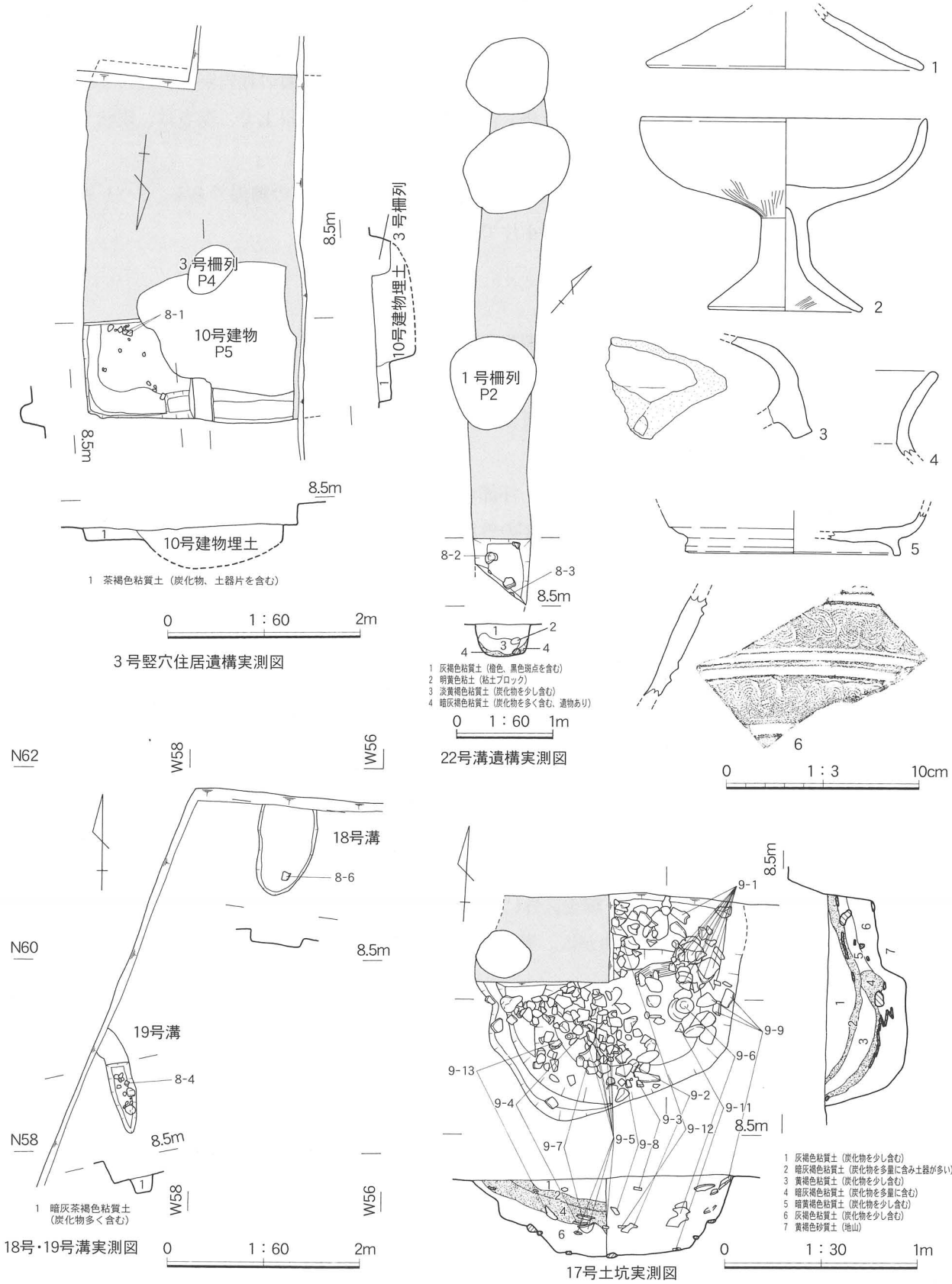
時期が不明なものとして２号柵列や10号建物を切っている３号柵列がある。建物の可能性もあるが対応する柱穴が検出できず、柵列とした。



第７図　出雲国府跡本調査区遺構実測図（Ｓ＝1/200）

第４節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、１区で、17号土坑・７・18・19・22号溝・P371・P399下層、２区で、３号



第８図　出雲国府跡３号竪穴住居・18号・19号・22号溝・17号土坑実測図・遺物実測図

竪穴住居、３区で、25号土坑・23号溝が確認された。調査区の全域から確認され、竪穴住居が存在することから古墳時代の集落が周囲に広がっていると考えられる。古墳時代の遺構は、古代の遺構の調査・保存を最優先に考え、最小限の調査しか行っていない。

（１）３号竪穴住居（第８図）

遺　構　２区の南西端に位置する方形の住居跡である。古代の建物跡の柱穴が掘り込んでいる。規模は西側が畦畔のため調査できなかったが、南北3.6m、東西2.2m以上で、深さは、現状で14cmを測る。床面には壁に沿って幅10～20cm、深さ10mの溝が廻っている。

出土遺物　第８図１は茶褐色粘質土の埋土から出土した土師器高坏の脚部である。「ハ」の字に開き、端部は面を持つ。その他の土師器は小片である。

（２）22号溝（第８図）

遺　構　１区北側中央付近に位置し、既報告記載の溝と連続すると考えられる。南東から北西に主軸を持ち、規模は幅60～70cm、深さ35cm、長さは確認できる範囲で、10mを測る。断面形は丸みをもつ「コ」の字である。埋土は灰褐色粘質土、淡黄褐色粘質土、暗灰褐色粘質土である。最下層は炭化物を大量に含んでいる。

出土遺物　第８図２は土師器高坏である。坏部が半分欠損しているが、立った状態で出土した。碗形の坏部に「ハ」の字に開く脚が付く。坏の外面下半にはハケメが残る。３は竈の口縁部から庇にかけての破片と考えられる。

（３）18号溝（第８図）

遺　構　１区南西に位置し、調査区外に延びる溝跡である。規模は幅60cm、深さ10cm、検出した長さ90cmを測る。断面形は「コ」の字で、浅い。

出土遺物　第８図５は遺構検出面より浮いて出土した須恵器坏身で、高台が付く。６は須恵器器台の受部と思われる。２条の沈線の上下に櫛状工具による波状文が施される。焼成は軟質である。

（４）19号溝（第８図）

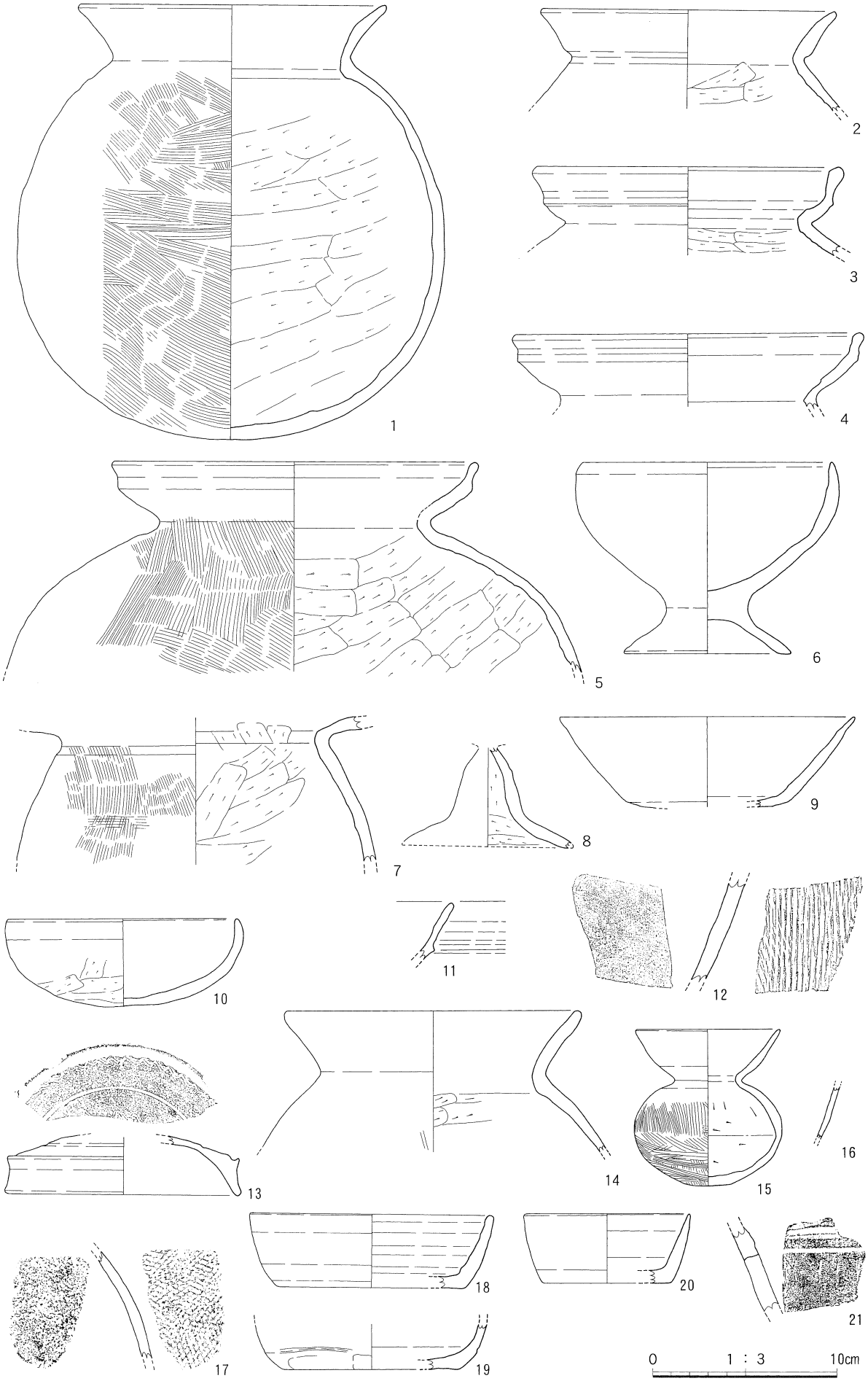
遺　構　18号溝の南西に位置し、調査区外に延びる。規模は幅24cm、深さ16cm、検出した長さ110cmを測る。溝は途中で北西方向に曲がる。竪穴住居の壁体溝の可能性もある。埋土は暗灰褐色粘質土の１層であり、遺物を含んでいる。

出土遺物　第８図４は土師器甕で、「く」の字に屈曲した口縁部を持ち、外面に煤が付着する。

（５）17号土坑（第８・９図）

遺　構　１区南側の中央部に位置する土坑である。７号溝と切り合い関係があるが、別の柱穴が存在し、前後関係を明瞭にすることは出来なかった。

平面形は不整形な楕円形を呈し、主軸は南北方向である。規模は東西1.35m、南北は1.16m以上、深さ0.4mである。埋土は灰褐色粘質土の上に炭化物を多量に含む４層と２層が堆積し、多量の遺物を含んでいる。下層からは完形に近い個体や完形に復元できるものが出土し、２層からは土師器の甕・壺の体部が折り重なるように出土した。第９図６は口縁部が下になっていた。



第９図　出雲国府跡17号・25号土坑出土遺物実測図

出土遺物　第９図１～５・７は土師器甕で、１・２は「く」の字に屈曲した口縁部を持ち、端部は肥厚しない。３～５は口縁部外面に鈍い稜があり、複合口縁の名残を留める。３は立ち上がりが明瞭で、受け部状を呈し、端部は面を持つ。６・８・９は土師器高坏で、６は短く「ハ」の字に開く脚を持つ。口縁部は内湾し、坏部から脚部にかけて滑らかである。８は脚部で、明瞭に屈曲し、「ハ」の字に開く。９は外面に鈍い稜を持つ坏部で、内外面風化し、器壁が薄くなっている。10は土師器坏で、口縁部の立ち上がりは垂直に近い。内面はナデ、底部はヘラケズリである。11は須恵器瑳と思われ、外面には明瞭な稜を持つ。12は須恵器甕の体部で、外面はタタキ痕が残るが、内面は磨り消している。13は陶質土器蓋と思われ、垂直に下がる口縁部に、明瞭な稜を持つ。外面には沈線の両側に波状文が一部残存している。波状文を施し、一部ナデ消し、その後１条の沈線を施していると考えられる。内面はナデ調整である。図版46-8の須恵器坏身は、薄い器壁を持つ。

（６）25号土坑（第７・９図）

遺　構　３区の北西側に位置し、７号溝より北側に位置する。古代の遺構と重複しているため、土坑の内部は調査していないが、不整な楕円形で、北東から南西に主軸を置いている。規模は東西2.3m、北側が別の土坑に切られるが、残存長で3.1mを測る。第９図14～17は埋土から、18～21は遺構検出時に出土し、須恵器は確実に遺構に伴うものではない。

出土遺物　第９図14は土師器甕で、「く」の字に屈曲する口縁部を持つ。15の土師器壺は「ハ」の字に開く口縁部を持ち、体部外面にハケメを残す。口縁部は内外面ヨコナデ調整である。16・17は軟質土器で、長胴甕と思われる。外面は黒灰色で、格子タタキが残る。18～20は須恵器坏で、高台を持たない。口縁部は直線上に広がるが、小片のため、底径等は小さくなる可能性がある。21は須恵器器台あるいは高坏の脚部で、２条の沈線と櫛状工具による波状文が施され、透孔を持つ。

第５節　古代の遺構と遺物

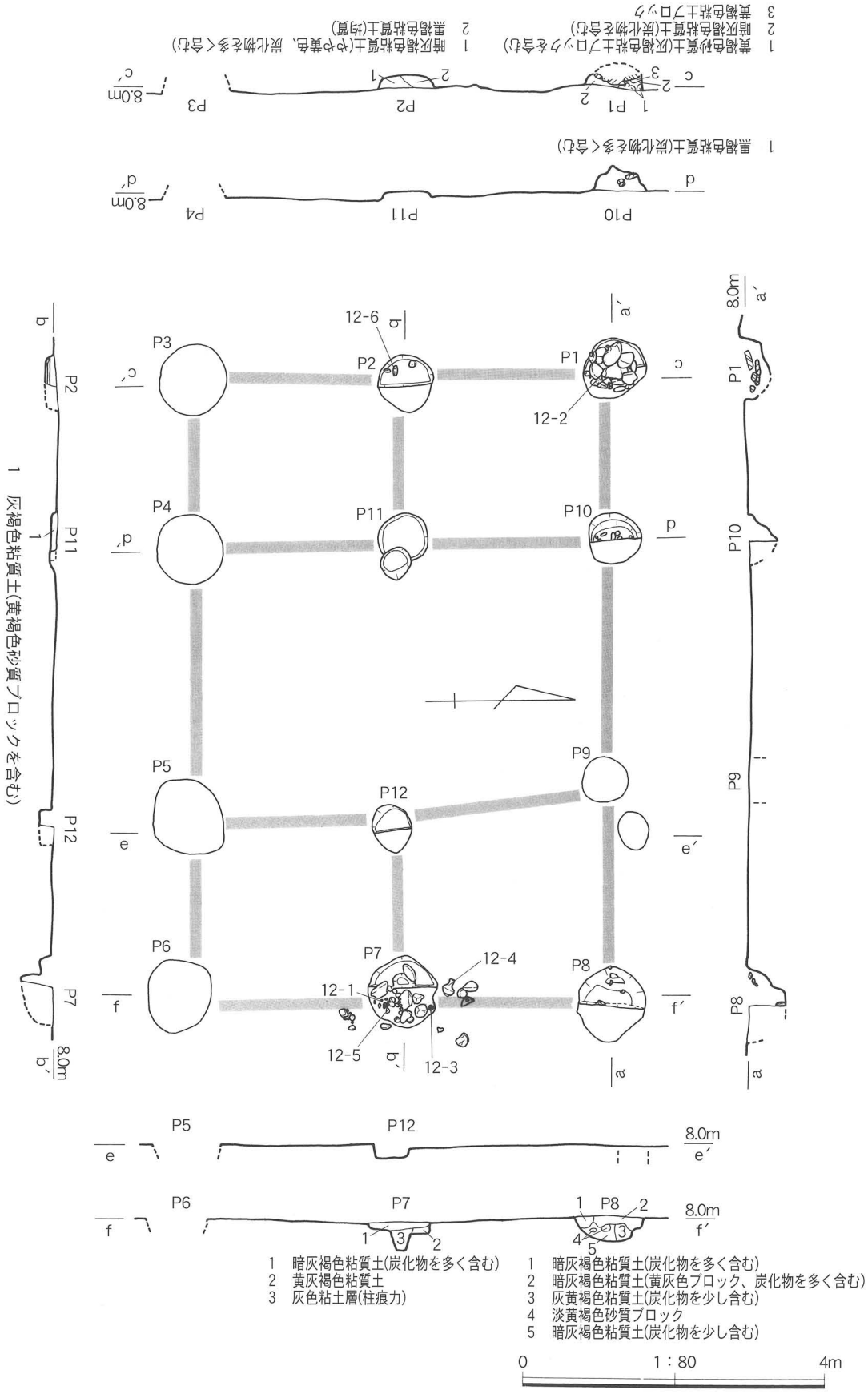
古代の遺構と思われる遺構は、１～２区にかけて10号建物、１号柵列、１～３区にかけて８号溝、１区で、18・19号土坑、５・９～11号溝、４号井戸、２区で、３号柵列、20・21・24号土坑、12～15・21号溝、２・３号井戸、３区で、９号建物、２・４号柵列、22・23号土坑、16・17・20号溝が確認された。９号建物の北側への遺構の広がりを検討するため第33トレンチを設定したが、古代の遺構は確認できなかった。

（１）９号建物（第10・12図）

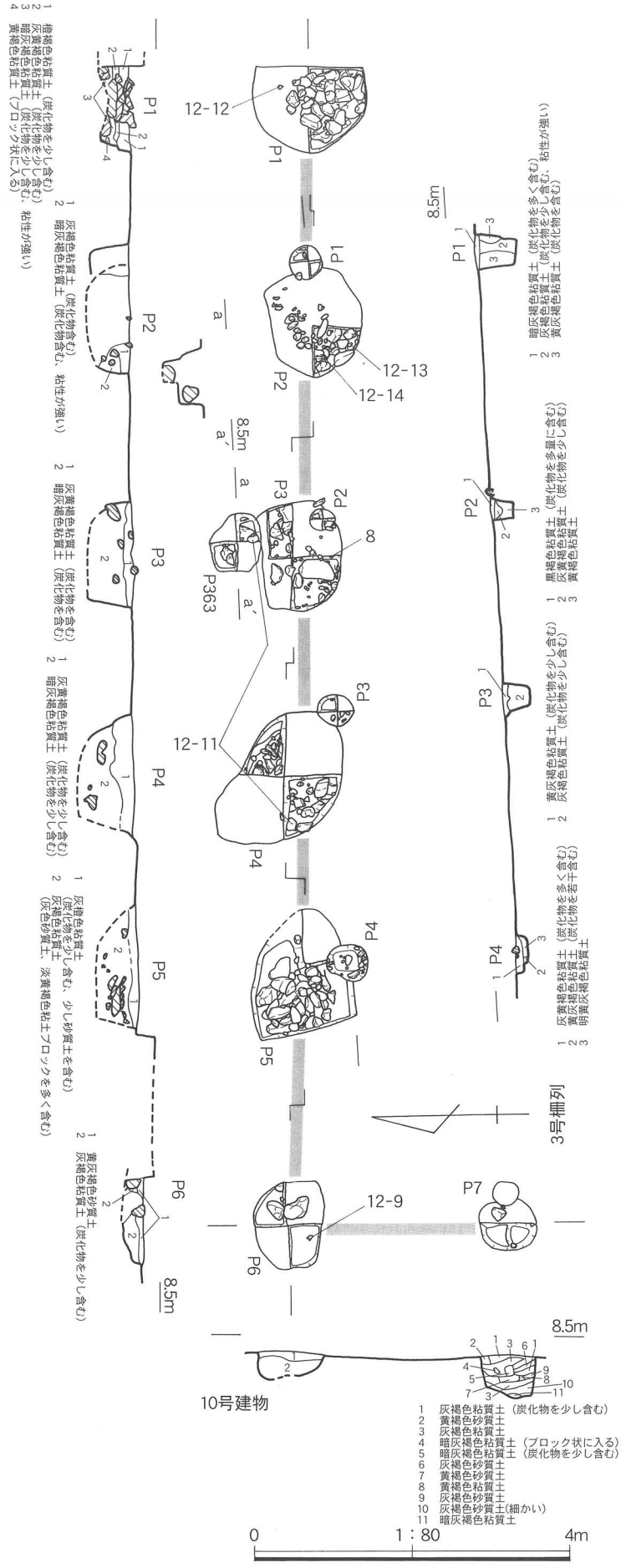
遺　構　３区北側中央付近に位置し、１号柵列が西7.8m、４号柵列が東2.4mに存在する。９号建物は切り合いから17号溝より新しい。

建物は南北２間、東西３間で、南北軸はほぼ軸方向である。規模は南北5.4m、東西は北側で、8.3mを測る。柱間は北側では西から2.2m、3.1m、3.0m、中央では西から2.1m、3.9m、2.1m、南側では西から2.1m、3.9m、2.1mであり、北側の柱間が少しずれる。P9は内側に入り込み、柱間がずれる。P9の西側に径25cmの柱穴はあったが、規模が小さく、検討を要するが、現状に復元した。南北の柱間は2.7mで、P9とP12の柱間が2.9mである。P1は断ち割り調査を行うと、中央に拳大から人頭大の石があり、その周辺に小さな石が詰められ、掘形全体に石が存在した。その石に

挟まるように遺物が出土した。P7は検出時に掘形の上面に石が存在し、礎石根石の可能性があっ



第10図　出雲国府跡９号建物実測図



第11図　出雲国府跡10号建物・３号柵列実測図

た。断ち割り調査を行うと、柱痕と思われる土層を確認した。掘立柱建物から礎石建物への立て替えがあったかは上層がかなり削平されており、不明である。

遺物出土状況　P1では石の間から出土した。P2では埋土から出土した。P7では上層の根石の間から第12図１・３・５が出土し、４は掘形の隣接地から転倒した状態で出土した。４は完形に近く、直接、建物の時期を表しているか不明である。

遺　物　第12図１は須恵器坏蓋で、天井部に１条の沈線があり、つまみは剥離している。２は須恵器高台付坏で、底部高台内に爪状圧痕がある。３は須恵器高台付皿で、底径が大きい。４は須恵器高台付長頸壺で、肩は張っているが丸みを持つ。５は土師器甕で、頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は大きく開く。６の平瓦は凸面のタタキが縄目タタキで、端部に径６㎜ほどの目釘穴が残る。７の磨石は底面が平坦で、煤が付着する。

（２）10号建物（第11・12図）

遺　構　１～２区の南側に位置し、３号柵列により柱穴が切られている。西側の南北柱列が１号建物の身舎の東側柱列のラインに乗る。P5は３号竪穴住居を切り、P3はP363に切られている。

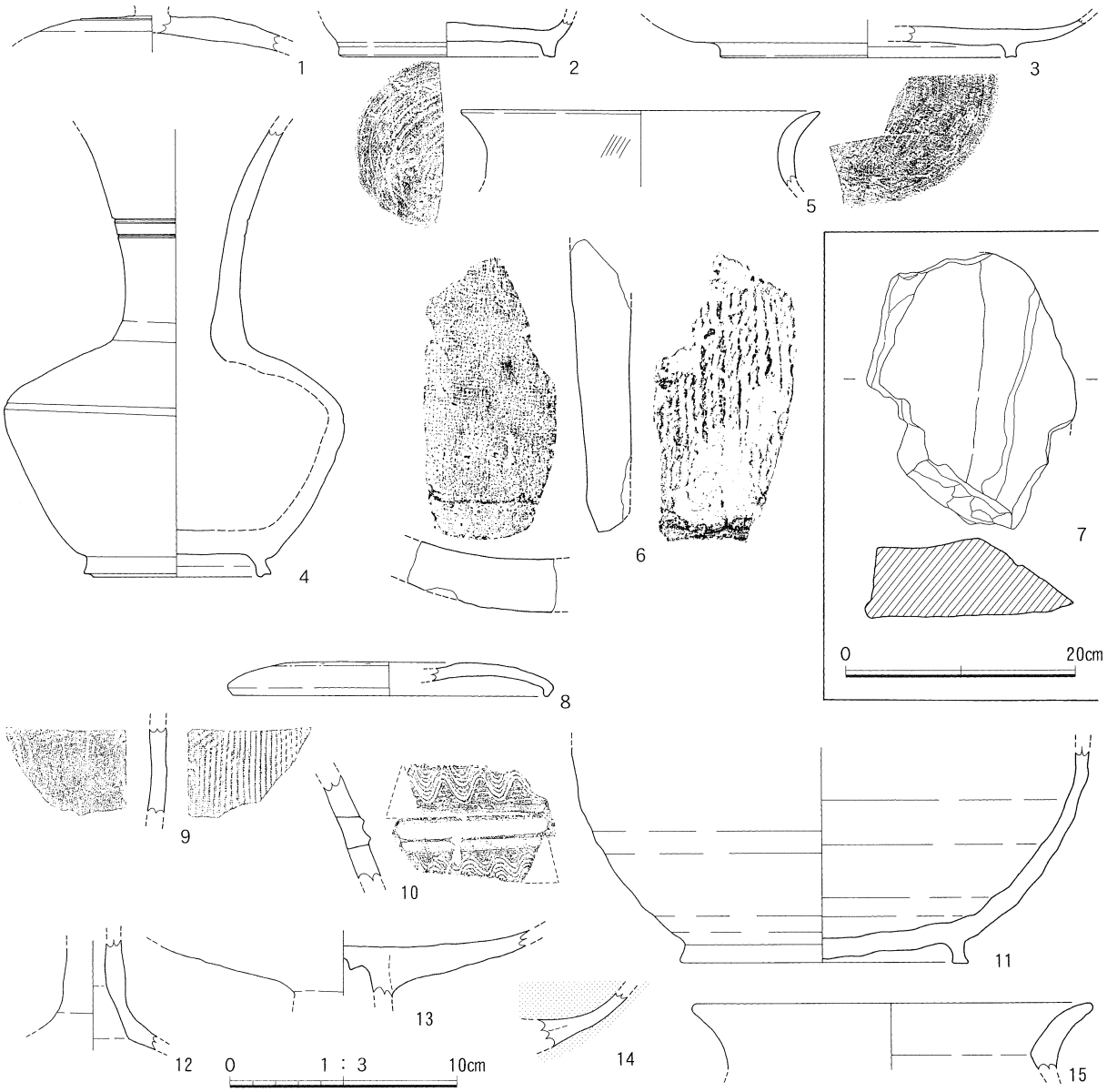
建物はP1東側、P7南側が畦畔や水路のため未調査である。P5の南側でも調査区を広げ柱穴の確認調査を行ったが柱穴はなかった。また、前回の調査時に３区においては続きの柱穴が未検出のため現状では、南北２間以上、

東西５間で、建物の南北軸は２°東に傾く。

規模は南北2.7m、東西は14.4mを測る。柱間は西から3.0m、2.7m、2.7m、3.0m、3.0m、南北（P6～P7）2.7mである。P1～5は不整形な楕円形で、径1.2～1.4m、深さ0.4～0.8mを測り、P6・7は径が１m前後で、深さも浅い。規模については第３表であるが、深さについては完掘していないので、発掘停止の深さである。

P1は検出面で礎石根石と思われる径５～20cmの石が存在した。掘形の中に20～30cmの石が詰まり、その上に長さ50cm、厚さ５cmほどの扁平な石の存在した。扁平な石の上部には10～20cmの石がある。P2は検出段階で10～30cmの石が径25～30cmの空間をあけ、円形状に存在した。下層では、25～30cmの石が掘形に詰まっていた。P3・4では下層から20～30cmの石が検出された。P5は断ち割り調査を行うと、中央に拳大から人頭大の石があり、その周辺に小さな石が詰められ、掘形全体に石が存在し、P1と似た構造である。P6・7から石は検出されなかった。

遺物出土状況　遺物は柱穴の埋土から出土したが、直接建物の時期を表すかは検討を要する。第



第12図　出雲国府跡９号・10号建物出土遺物実測図

12図11はP4とP363から出土した遺物が接合した。

遺　物　第12図８は須恵器坏蓋で、端部がわずかに屈曲している。天井部はヘラケズリで、つまみは剥離している。９は須恵器甕で内面のタタキは磨り消されている。10は須恵器器台の脚部で、２段以上の三角形透孔がある。11は須恵器高台付壺で、内面は丁寧な回転ナデ調整である。12～14は土師器高坏で、12は「ハ」の字に開く脚部である。14は内外面に赤彩されている。15は土師器甕で、外反する口縁部を持つ。

（３）３号柵列（第11図）

遺　構　２区南側に位置し、10号建物を切って存在する。径30～50cmの円形で、深さ30～50cmを測る。３間の柵列で、柱間は西から3.3m、2.4m、3.3mを測る。南北軸は座標方位の北より３°西を指している。

３号柵列からは遺物は出土しなかった。

（４）１号柵列（第13～15図）

遺　構　１～２区北側に位置し、１号建物身舎から6.6m北に存在する。１区と２区で確認され、柱間が通っていることから１つの柵列と判断した。しかし、１区と２区では柱間が異なり、同一遺構かは検討を要する。P5は13号溝と切り合いがあるが、前後関係は未調査である。

１区では４間分検出した。柱間は西から1.7m、3.0m、2.4m、1.9mを測り、P1とP2の間、P2とP3の間の柱穴は規模が小さい。２区では４間分検出し、柱間は西から2.1m、2.1m、2.1m、2.4mを測る。南北軸は座標方位の北より1.5°東を指している。柱穴は不整形な楕円形で、径0.6～1.3m、深さ20～50cm前後である。P6には柱の基部を固定するために入れられた根巻きの石が残っていた。また、P7は未調査であるが、土層から柱痕が確認でき、掘立柱の構造であった。P6の根巻き石には第15図34の玉生産用の筋砥石が使用されていた。

P2の埋土は暗灰褐色粘質土で、炭化物が多量に混じっており、多量の遺物が出土した。

遺　物　第14図１～９は須恵器坏で、８は高台が付く。１の底部には「高上」と思われる墨書がある[1]。２の底部にも墨痕がある。３の口縁部はわずかに屈曲する。７の体部外面には５条の沈線が残り、強くナデられている。10～13は須恵器皿で、10・11は高台が付く。10の口縁部内面にはわずかに段がある。11の口縁部は外反する。13の口縁部は外反し、わずかに肥厚する。14は須恵器高坏で、口縁端部はわずかに屈曲する。15は土師器甕で、内外面に煤が付着する。16は竈で、垂直にあがる頸部に外傾する口縁部がつく。17は須恵器坏、18は須恵器甑で、穴に木製の栓が残る。内面の栓付近には漆が付着する。19～23は須恵器坏で、22・23は高台が付く。21の口縁端部はわずかに屈曲し、端部外面下が沈線状になる。22の高台内は糸切り後丁寧にナデられている。24は須恵器皿で、口縁部は直線状に立ち上がる。25は須恵器坏蓋で、口縁端部が屈曲する。26は須恵器壺の底部と思われ、内面は粗いナデ調整。27は土師器甕、28は製塩土器である。

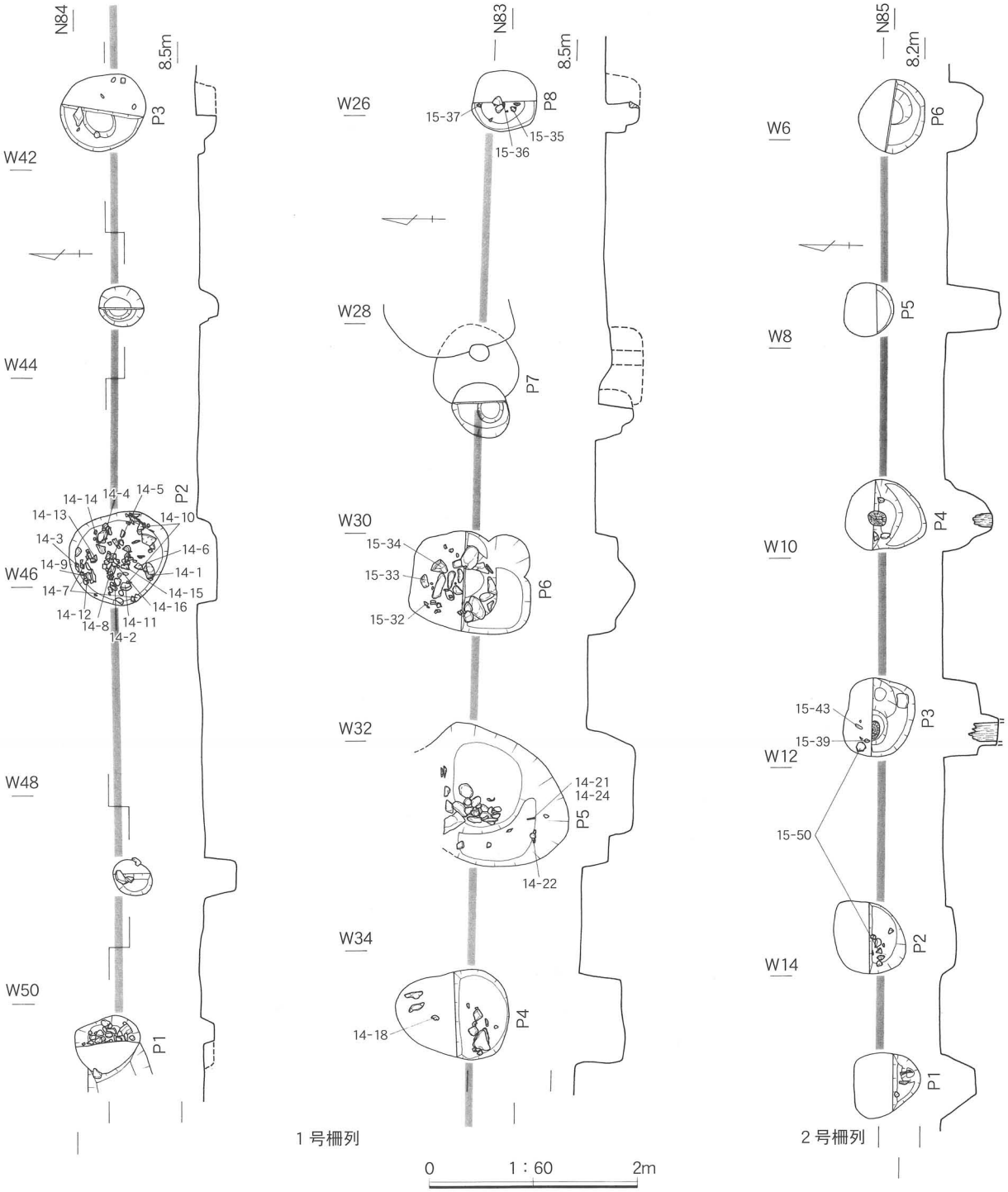
第15図29は古墳時代の須恵器坏蓋で、端部が外傾し、内面に段がある。30は須恵器坏で端部は丸い。31・32は須恵器皿で、底部は糸切りである。33の砥石は１面使用されている。34は玉生産用の筋砥石で、３面使用され、１面は断面U字の溝状に窪む。35は須恵器坏蓋で、輪状つまみを持ち、内面は硯に転用されている。36は須恵器高坏と思われ、端部はわずかに屈曲する。37は須恵器短頸

壺である。

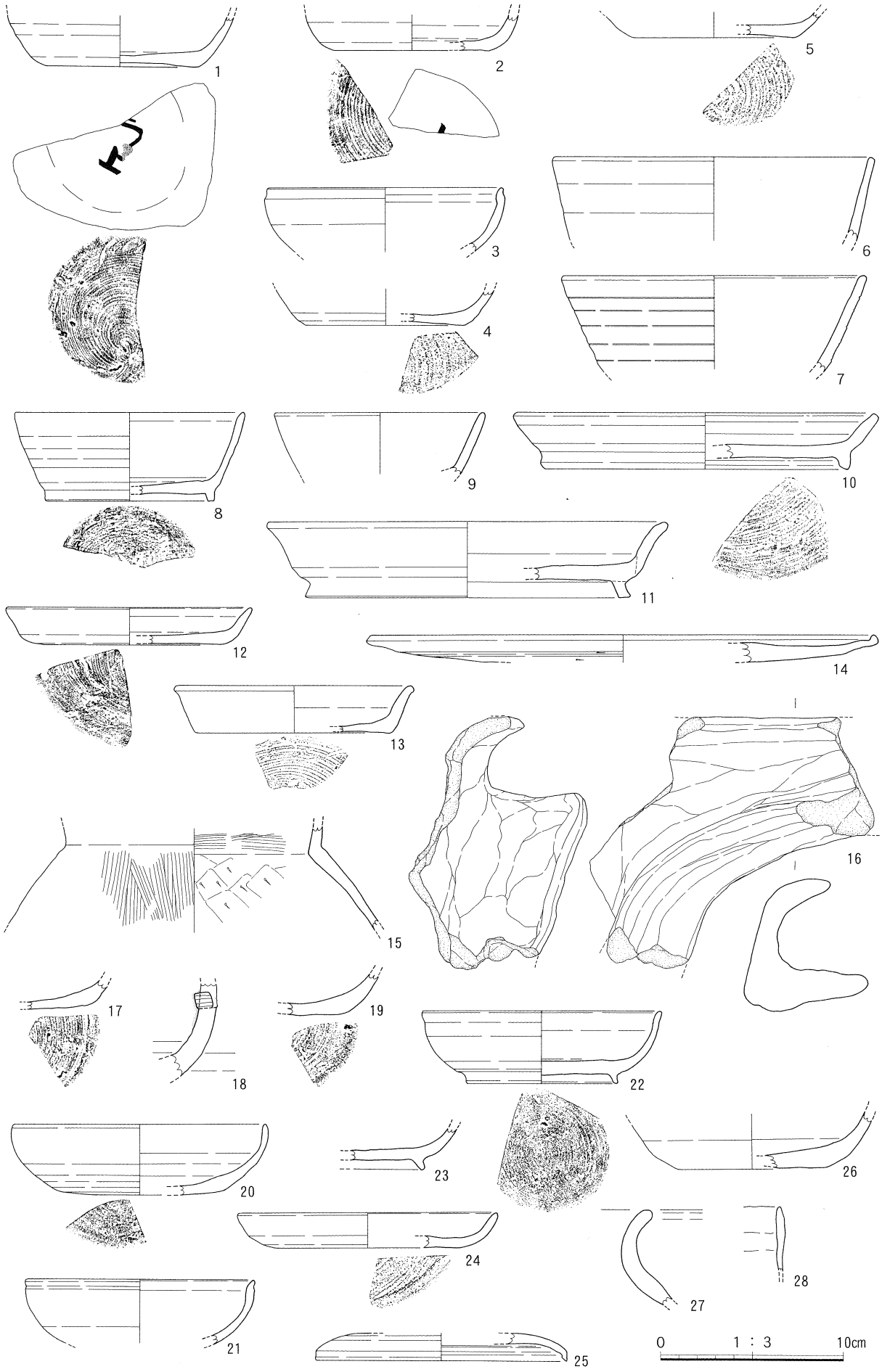
（5）２号柵列（第13・15図）

遺　構　３区北側に位置し、９号建物と重複する。

５間分検出し、柱間は西から1.3m、2.0m、2.0m、2.1m、1.9mを測る。南北軸は座標方位のほぼ北を指している。柱穴は不整形な楕円形で、径0.5～0.7m前後、P3～P6の深さ50㎝前後である。P1には柱根と思われる木質が、P3とP4からは柱材が出土し、P1がサクラ属、P3がクリ、P4がシイ属である。P6は土層から柱痕が確認でき、また、柱材も残っていることから、掘立柱の構造



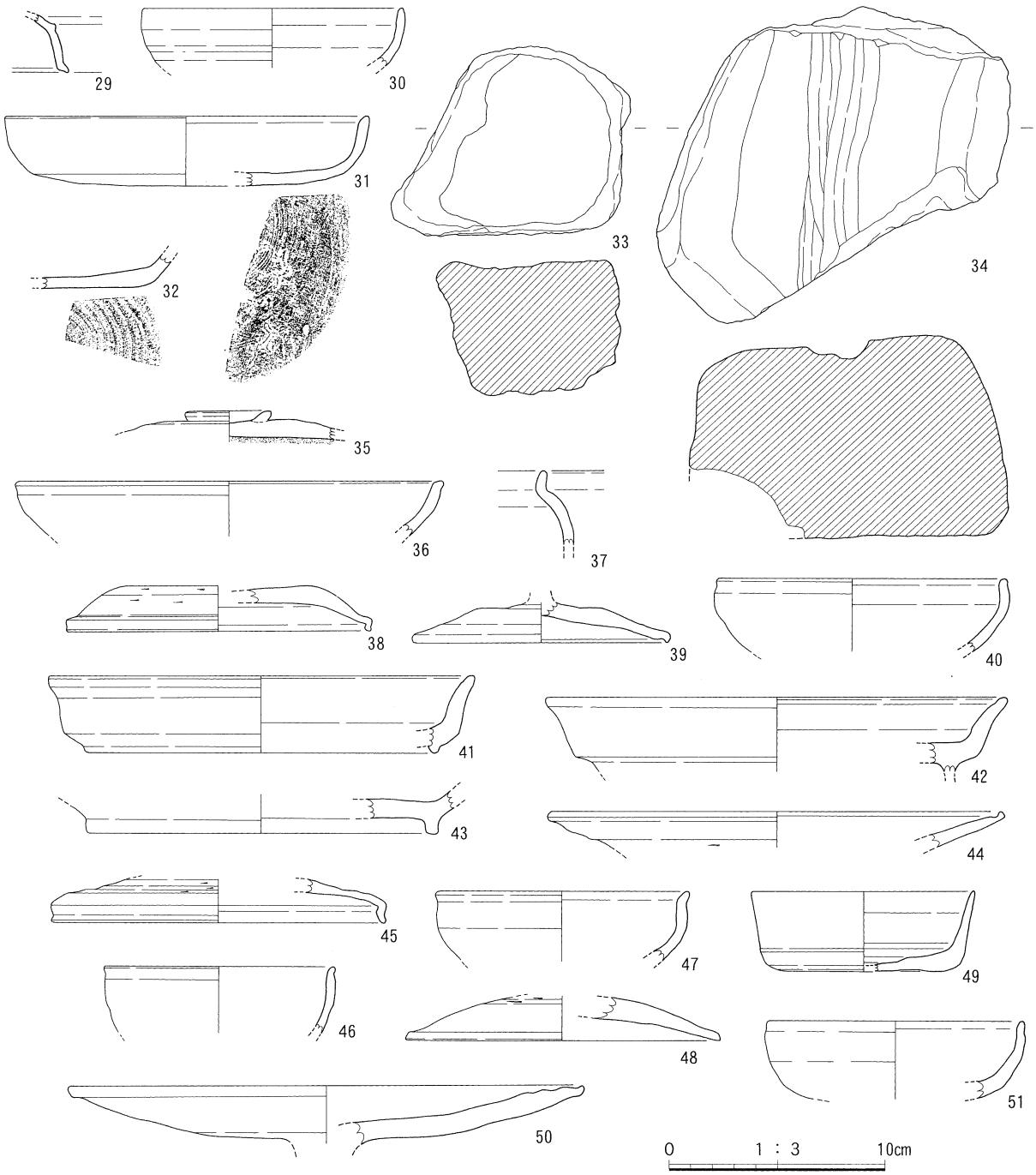
第13図　出雲国府跡１号・２号柵列実測図



第14図　出雲国府跡１号柵列出土遺物実測図

であることが判明した。

遺　物　第15図38・39は須恵器坏蓋で、38は天井部に稜があり、端部は屈曲する。39の端部はわずかに屈曲する。40は須恵器坏で、端部は内傾し、外面に煤が付着する。41～43は高台付き須恵器皿である。44の須恵器高坏は端部がわずかに屈曲する。45の須恵器坏蓋はしっかり屈曲した口縁部を持つ。46・47の須恵器坏は端部がわずかに屈曲する。48は須恵器坏蓋あるいは高坏と考えられる。高坏の端部は普通屈曲しているので、蓋として図化した。49は直線状に広がる口縁部を持つ須恵器坏。50は大型の須恵器高坏で、端部がわずかに屈曲する。51の須恵器坏は口縁端部がわずかに屈曲する。



第15図　出雲国府跡１号・２号柵列出土遺物実測図

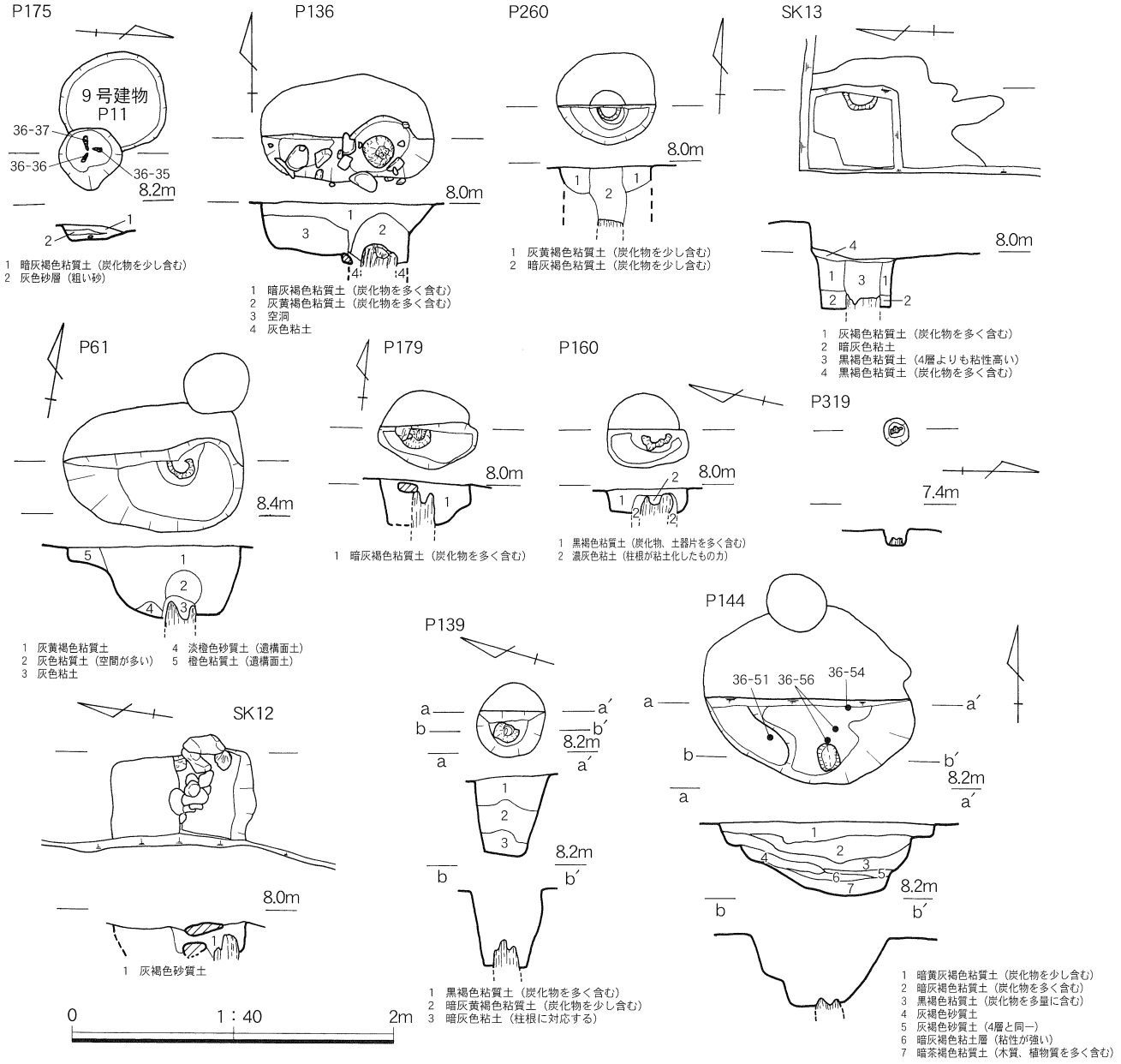
（6）４号柵列（第７図）

遺　構　３区北側に位置し、９号建物の2.4m東側に位置する。９号建物の中央柱列の延長線から50cm北側に位置する。１号柵列の対になる可能性がある。規模は径60cmほどで、内部は未調査ある。土層から柱痕が確認できる。

（7）柱根のある柱穴（第16・33・36図）

掘立柱建物や柵列として復元できなかったが、柱根が残っていた柱穴が２・３区で確認された。また、３区P175は９号建物P11を切っている柱穴で、先端の尖った栓状木製品が、尖った方を中央にして３本検出された。第36図35～37は径3.0cm、3.6cm、長さは６～８cmを測る。用途や性格は不明である。

３区P136は２号柵列の北西に位置し、西側に柵列状に続く可能性がある。柱穴は南北0.7m、東



第16図　出雲国府跡柱痕等のある柱穴実測図

西1.1mを測り、柱根は径22cmである。柱材はケヤキである。３区P260は９号建物の北側に位置する。柱穴は径60cmを測り、柱根は径16cmである。柱材はクリである。３区SK13は調査区北西角で検出した。柱根は径22cmと太く、クリである。２区P61は３号井戸の東側に位置し、柱穴は南北0.8m、東西1.1mを測り、柱根は径20cmである。柱材はクリである。３区P179は９号建物の北側に位置し、P136から続く柵列の可能性がある。柱穴は径60cm、柱根は径22cmを測り、ケヤキである。３区P160は９号建物の北側に位置し、柱穴は径46cm、柱根は径22cmを測り、スギである。第28トレンチP319は４号溝に直交する26号溝を調査中に検出した。柱穴は15cm、柱根は径８cmを測り、ヒノキ属である。３区SK12は９号建物の北西側に位置し、南北0.4m、東西0.8m以上の土坑を調査中、南東端から検出された。SK12には根巻き石があり、未調査の北側に柱根があると思われる。検出された柱根は径12cmを測り、ヒノキ属である。３区P139は２号柵列の東側に位置し、柱穴は径45cm、柱根は径12cmを測り、シイ属である。３区P144は９号建物の東側に位置し、柱穴は径1.3mを測る。しかし、柱根は柱穴の南端から出土し、柱根の周りが深くなることから、別の柱穴があった可能性がある。柱根は径10cmを測り、シイ属である。

（８）18号土坑（第17図）

遺　構　１区北側に位置し、１号柵列と重複する。規模は南北1.7m、東西0.76m、深さ８cmである。埋土は黒褐色粘質土で、多量の炭化物を含む。

出土遺物　第17図１・２は須恵器坏で、２は外側に開く高台が付く。

（９）19土坑（第17図）

遺　構　18号土坑の北東に位置し、南西部を柱穴で切られている。不整形な方形で、1.5m前後の規模である。深さ６cmと浅く、埋土は18号土坑と同じ黒褐色粘質土で、多量の炭化物を含む。北東部の柱穴は１層を除去した後に検出された。遺物は小片のため実測できなかった。

（10）20号土坑（第17図）

遺　構　２区北側に位置する。不整形な方形で、南北1.72m、東西1.6m、深さ20cmを測り、底部は平坦である。埋土は暗灰褐色粘質土で、石材が含まれていた。

出土遺物　第17図３の須恵器坏は口縁端部がわずかに屈曲する。４・５は須恵器高台付皿あるいは坏である。

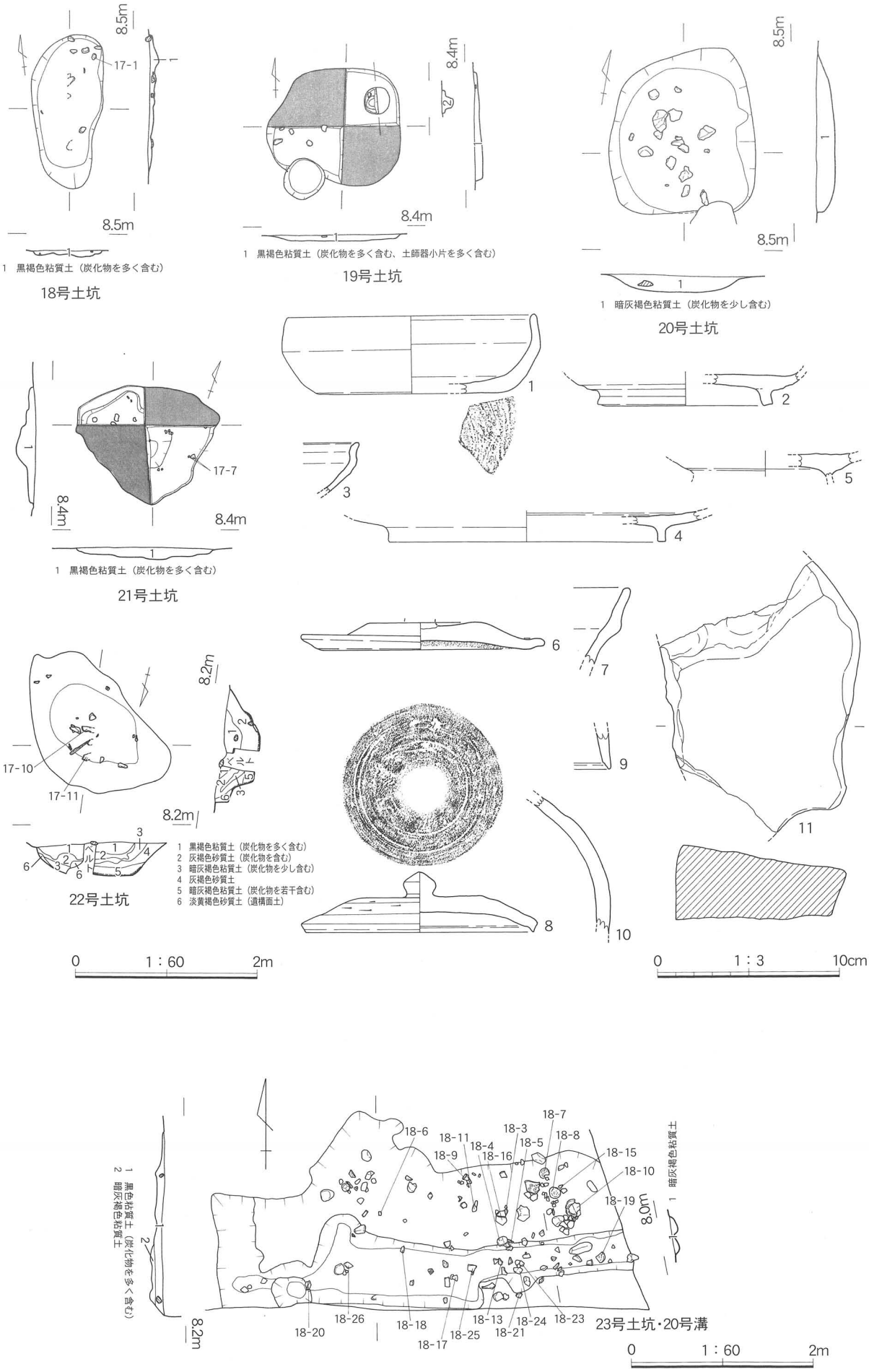
（11）21号土坑（第17図）

遺　構　２区南側に位置し、10号建物に切られている。規模は南北1.3m、東西1.54m、深さ10cmで、中央が深さ20cmに窪んでいる。埋土は黒褐色粘質土である。

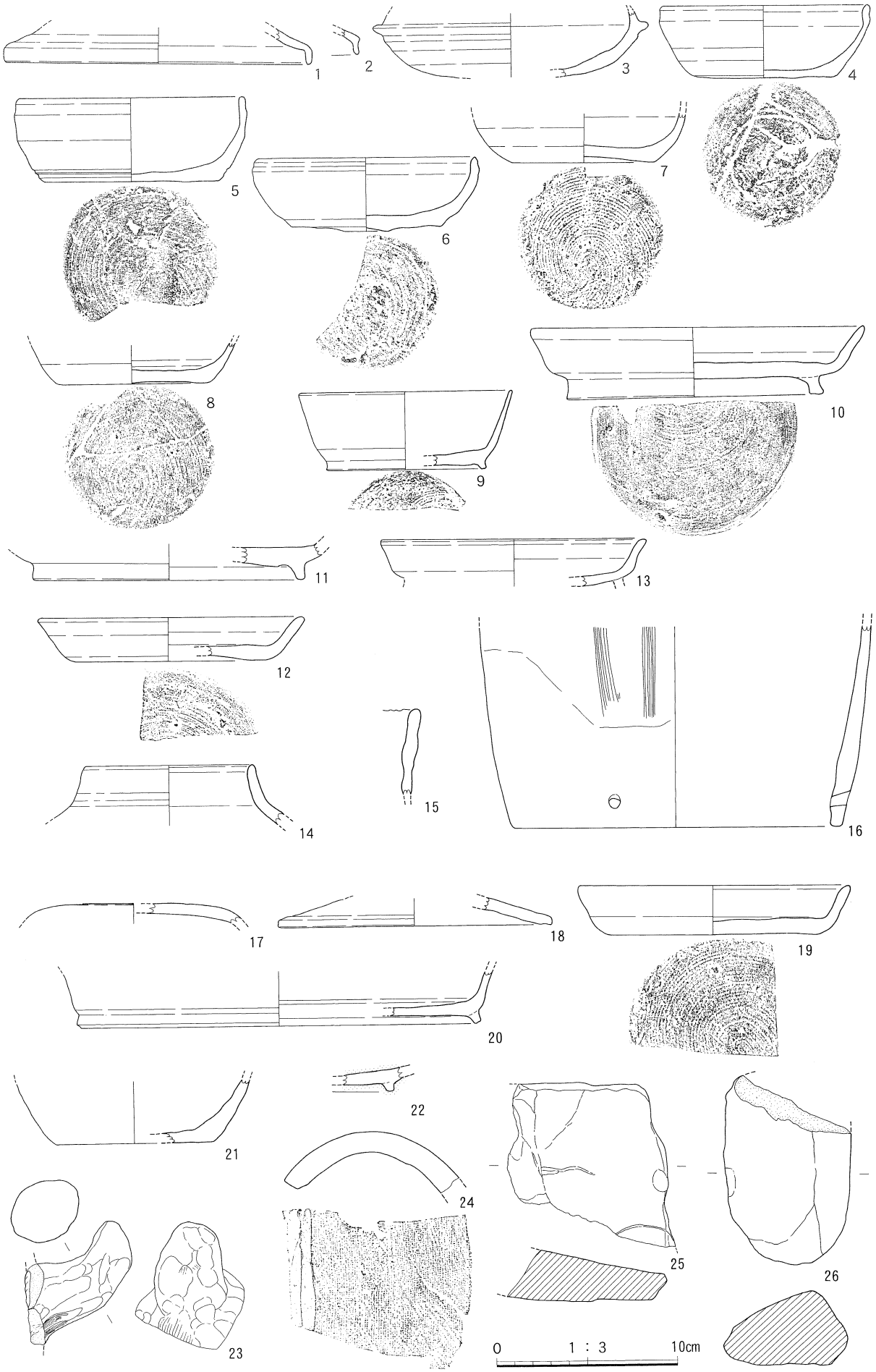
出土遺物　土師器が少し出土しているが、図化出来た

第３表　出雲国府跡建物・柵列の法量

遺構名	柱穴	直径(m) 長径	直径(m) 短径	深さ(m)
９号建物	Ｐ１	0.87	0.62	0.38
	Ｐ２	0.76	0.76	0.15
	Ｐ３	0.92	0.84	—
	Ｐ４	0.92	0.86	—
	Ｐ５	0.98	0.92	—
	Ｐ６	0.96	0.80	—
	Ｐ７	0.96	0.91	0.38
	Ｐ８	0.99	0.86	0.32
	Ｐ９	—	—	—
	Ｐ10	0.77	0.60	0.32
	Ｐ11	0.66	0.60	0.08
	Ｐ12	0.64	0.50	0.18
10号建物	Ｐ１	1.46	—	0.45
	Ｐ２	1.30	1.18	0.39
	Ｐ３	1.55	—	0.57
	Ｐ４	1.54	1.24	0.80
	Ｐ５	1.24	—	0.52
	Ｐ６	1.08	0.88	0.28
	Ｐ７	0.72	0.64	0.54
１号柵列	Ｐ１	0.64	0.50	0.14
	Ｐ２	0.96	0.88	0.19
	Ｐ３	0.82	0.74	0.20
	Ｐ４	1.08	0.86	0.48
	Ｐ５	1.34	—	0.45
	Ｐ６	1.17	0.96	0.46
	Ｐ７	0.80	—	—
	Ｐ８	0.62	0.58	0.32
２号柵列	Ｐ１	0.64	0.62	0.33
	Ｐ２	0.68	0.66	0.16
	Ｐ３	0.74	0.64	0.52
	Ｐ４	0.78	0.66	0.50
	Ｐ５	0.52	0.48	0.54
	Ｐ６	0.70	0.62	0.56
３号柵列	Ｐ１	0.44	0.41	0.50
	Ｐ２	0.32	0.27	0.29
	Ｐ３	0.45	0.39	0.32
	Ｐ４	0.50	0.47	0.17



第17図　出雲国府跡18～23号土坑・20号溝実測図・遺物実測図



第18図　出雲国府跡23号土坑・20号溝出土遺物実測図

ものは第17図７の土師器甕のみで、わずかに複合口縁の名残を留めている。

(12) 22号土坑（第17図）

遺　構　３区北側に位置し、９号建物と重複するが、切り合い関係がなく、前後関係は不明。古墳時代の25号土坑を切っている。長径1.66m、短径1.08mを測る不整形である。底部は平坦で、木質が残っていた。土坑からは棒状の木が出土した。

出土遺物　第17図９は古墳時代の須恵器坏蓋で、口縁部に段を有する。10は土師器壺の体部で、外面は赤彩されている。11は厚さ4.2cmの扁平な石で、表面に煤が付着している。

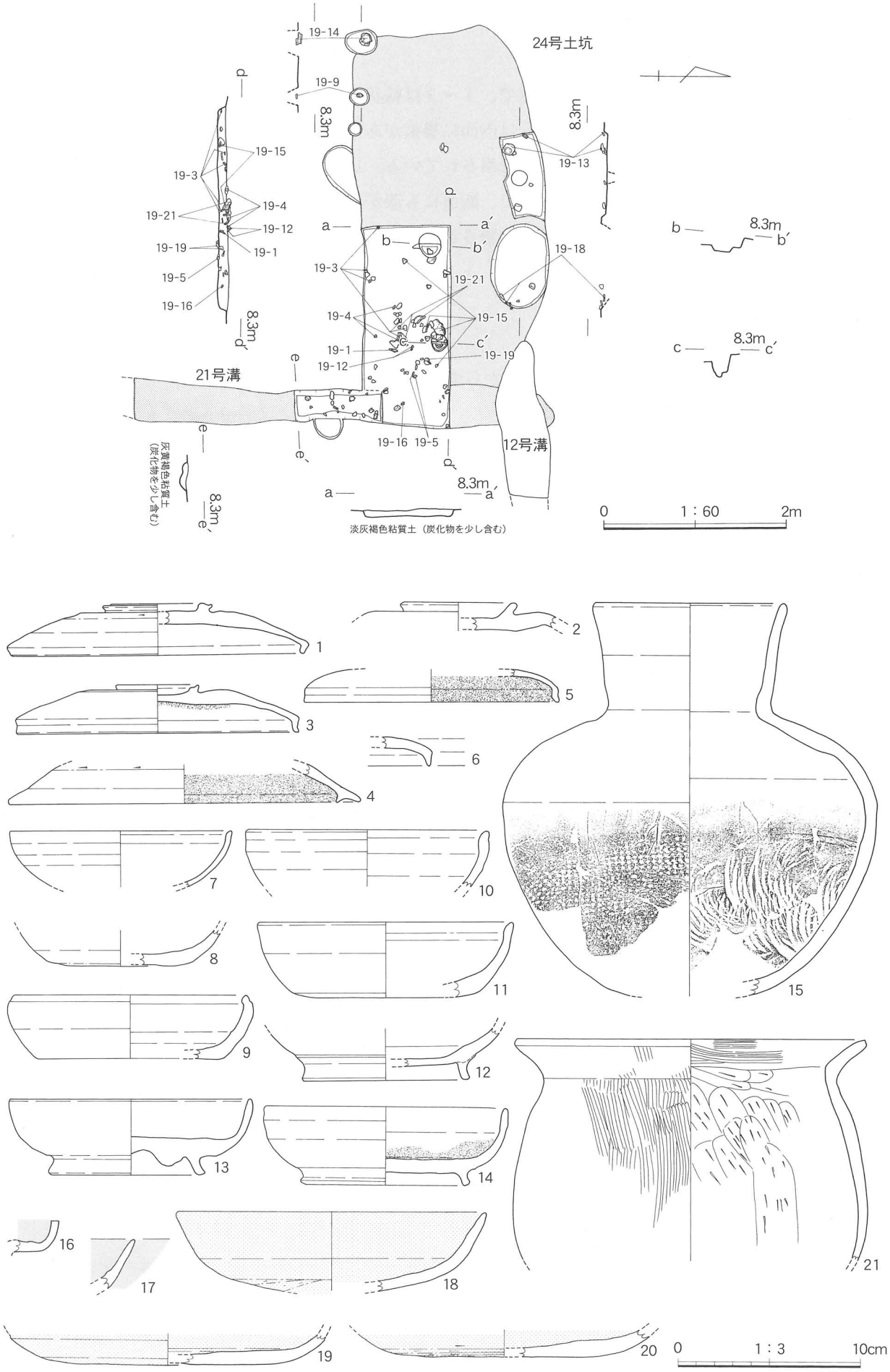
(13) 23号土坑・20号溝（第17・18図）

遺　構　３区北の東側に位置し、４号柵列に隣接する。東側に続き、23号土坑の下層から20号溝が検出された。23号土坑は現状で東西4.4m、南北は中央部で2.1m、他は1.4m、深さ10cmを測る。埋土は炭化物を多く含む黒色粘質土である。遺物が多量に出土した。20号溝は幅0.4m、長さ4.4m、深さ10cmを測り、埋土は炭化物を多量に含む暗灰褐色粘質土である。23号土坑は20号溝を覆う状態であり、20号溝の周辺の窪みに黒色粘質土が堆積した可能性がある。

出土遺物　第17図６・第18図１・２は須恵器坏蓋で、６の口縁端部はわずかに屈曲する。つまみは剥離し、内面を硯として転用している。第17図８は20号土坑の周辺から出土した。わずかに屈曲する口縁端部を持ち、宝珠のつまみが付く。３は須恵器坏身で、軟質である。４～９は須恵器坏で、９は高台が付く。10～13は須恵器皿で、12以外には高台が付く。14は須恵器短頸壺で、口縁部と体部の境は不明瞭である。15は製塩土器である。16は土師器甑で、端部に円形の穿孔がある。17以降は20号溝出土遺物である。17・18は須恵器坏蓋で、17は軟質で、古墳時代の形態である。18の口縁端部はほとんど屈曲しない。19は須恵器皿で、口縁端部は面を持つ。20は須恵器高台付坏で、高台は底部と体部の境に外向きに付く。21は須恵器坏である。22は土師器坏で、高台を持つ。内外面に赤彩される。23は土師器甑の把手で、端部は上方に立ち上がる。24は丸瓦で、須恵質に焼成される。25は不明瞭であるが、磨石の可能性がある。26は叩石と思われるが使用痕はない。

(14) 24号土坑・21号溝（第19図）

遺　構　２区北側に存在する12号溝の西端に位置する。21号溝は南北溝である。調査時には12号溝をまず検出し、調査を開始したが、調査区の西側に続かないことが判明した。しかし、12号溝西側において広い範囲に遺物が出土したことから周囲を精査すると、南北２m、東西3.9mの24号土坑を検出した。当初、柱穴として掘り下げていた北側も土坑内であることを確認した。南東区を掘り下げると、深さ10cmで、いわゆる地山が現れ、柱穴を２穴確認した。埋土は淡灰褐色粘質土で、遺物がまとまって出土する場所があった。少し時間をおいて調査を再開すると、24号土坑の東端に南北に走る21号溝が切り合っていることが判明した。幅40cm、深さ10cm、長さは南側に続くが現状で、4.6mである。検出状況から21号溝が新しいので、24号土坑の東端が不明であることになる。また、当初、24号土坑として、遺物を取り上げた物の中に、21号溝のものが混じっている可能性が出てきた。出土状況の実測図があるものは確認できる。12号溝との切り合い関係は、21号溝の存在を想定せず、12号溝を掘削したので、確認できなかった。



第19図　出雲国府跡24号土坑・21号溝実測図・遺物実測図

出土遺物　第19図１～６は須恵器坏蓋で、１～３は輪状つまみを持つ。１・３・５・６の口縁端部は屈曲し、４はかえりがある。３～５は内面に墨痕があり、硯に転用されている。７～14は須恵器坏で、12～14は高台が付く。14は硯に転用されている。15は須恵器壺で、体部下半には内外面ともタタキ痕が残る。16は須恵器壺の肩部で、断面にも漆が付着する。17の須恵器皿は内外面に漆が付着する。18～19は土師器皿で、内外面赤彩される。18は坏の可能性もある。21は土師器甕で、煤が付着する。その他に製塩土器がある。

(15) ５号溝（第20図）

遺　構　１区南側に位置し、前回の調査から南へ連続する溝を確認した。東には10号溝が存在し、５号溝が新しい。幅60～70cm、深さ20cm、断面はU字形である。埋土は灰褐色粘質土の１層である。

出土遺物　第20図１・２は須恵器坏蓋で、１は扁平な器形を持ち、口縁端部は屈曲する。３～５須恵器坏で、３・４は高台を持つ。６は平瓦で、遺構検出中に出土した。凸面はタタキ痕が残る。

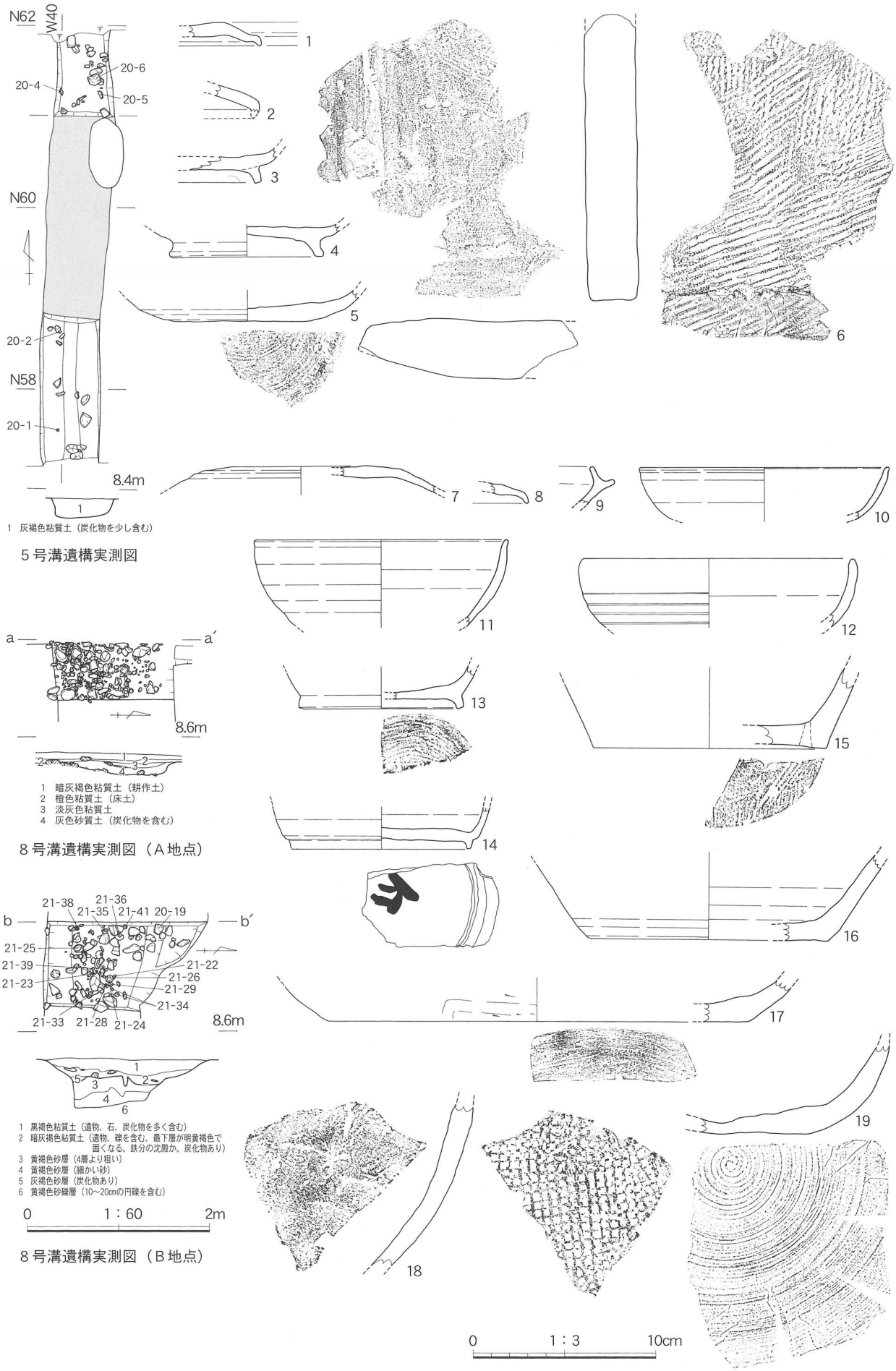
(16) 8号溝（第22～22図）

遺　構　１～３区の北側に位置し、１号井戸が南11mに存在する。前回３区北側のトレンチで確認していたが、今回、他の調査区でも明瞭に検出できた。３区でやや広がっているのは、この周辺から北にかけて遺物と礫を多量に含む層が存在し、レベルが下がっていたので、調査区を水平に保つため、８号溝の南側の掘形を出さなかった。１区ではほぼ東西に延びるが、２区では南側に少し蛇行し、３区においては北側に大きく、向きを変える。２区では２号井戸を切っている。第33トレンチでは古代の遺構が削平されているため、確認できなかった。１区において深さと床面の標高を確認すると、Ａ地点で深さ18～20cm、標高8.2m、Ｂ地点で深さ20cm、標高８～8.1mであった。幅0.8～1.1m、Ｂ地点では1.8mを測る。溝内には多量の礫があり、Ａ地点では礫が南側で多く、床面も敷かれているように観察できた。床面は北側に向かって低くなっていた。北側では石は疎らであった。Ｂ地点では礫は疎らであったが、南側に多い傾向がある。遺物は礫の間や埋土から出土した。第21図は遺構検出時に遺物の場所を押さえたものである。

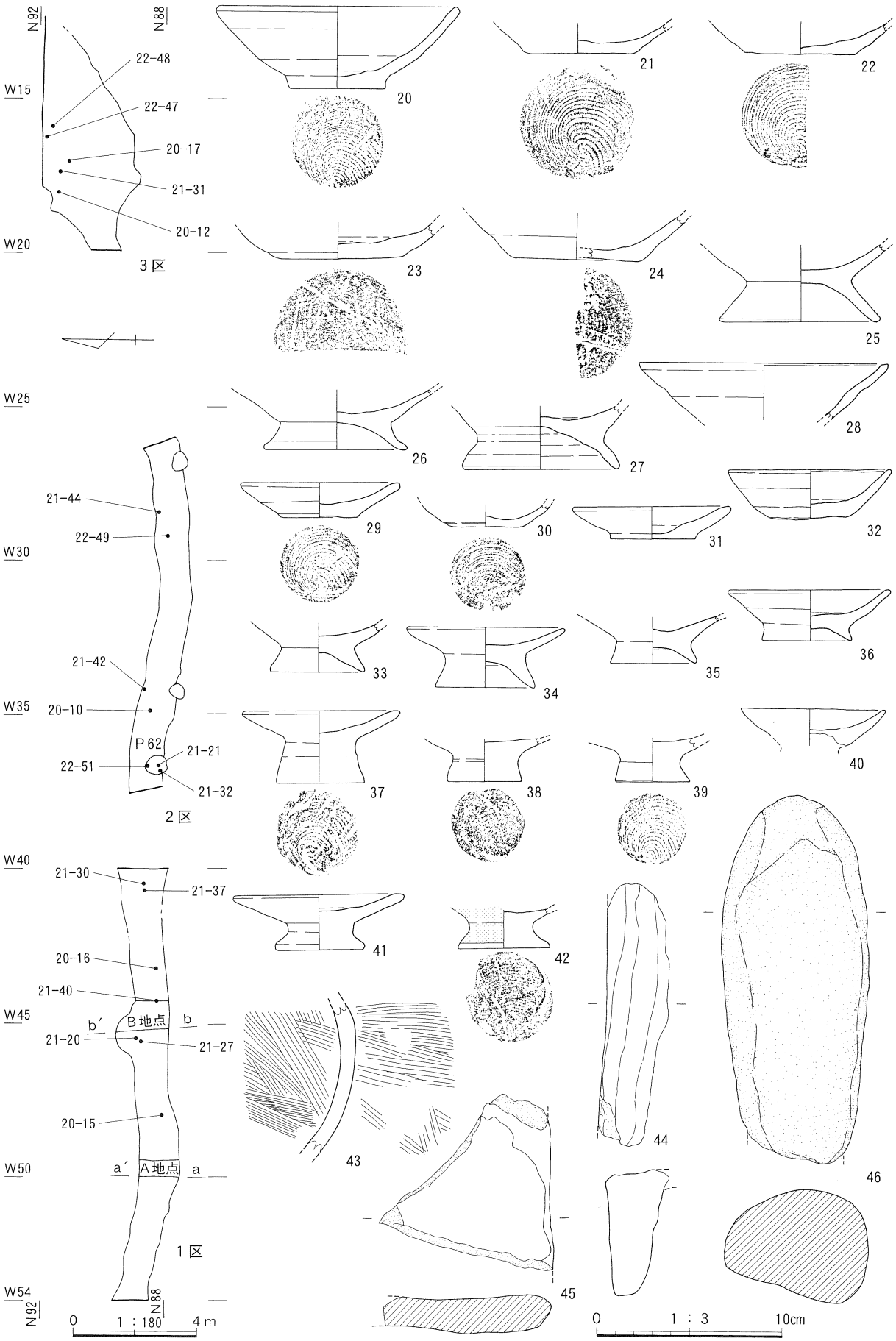
出土遺物　第20図７・８は須恵器坏蓋で、８の口縁端部はわずかに屈曲する。９はかえりのある須恵器坏身で、立ち上がりは低い。10～14は須恵器坏で、13・14は高台が付く。12の外面には沈線が入る。14の底部外面に「介」の墨書がある。15は須恵器壺の底部で、外面はカキメである。16・17は須恵器鉢で、16の内面は摩滅し、胎土が他の須恵器と異なり、搬入品の可能性がある。18は須恵器甕で、外面が格子タタキである。19は須恵器提瓶と思われ、密なカキメが施されている。

第21図20～28は土師器坏で、25～27は「ハ」の字に広がる高台を持ち、底部は回転糸切りである。28は乳白色で、外面は強いナデ調整で、他の土師器坏と雰囲気が違う。29～42は土師器皿で、33～36は「ハ」の字に開く高台を持つ。36の高台は低く、口縁端部もわずかに外反する。37～42は柱状高台を持つ。43は土師器の壺あるいは甕と思われる破片で、明赤橙色を呈し、内外面ハケメ調整である。44は竈の焚口の破片である。45は厚さ２cmの砥石である。46は自然石の可能性もあるが、石棒状を呈する。21・32はP62と重複する地点から出土しており、P62出土の可能性も残る。

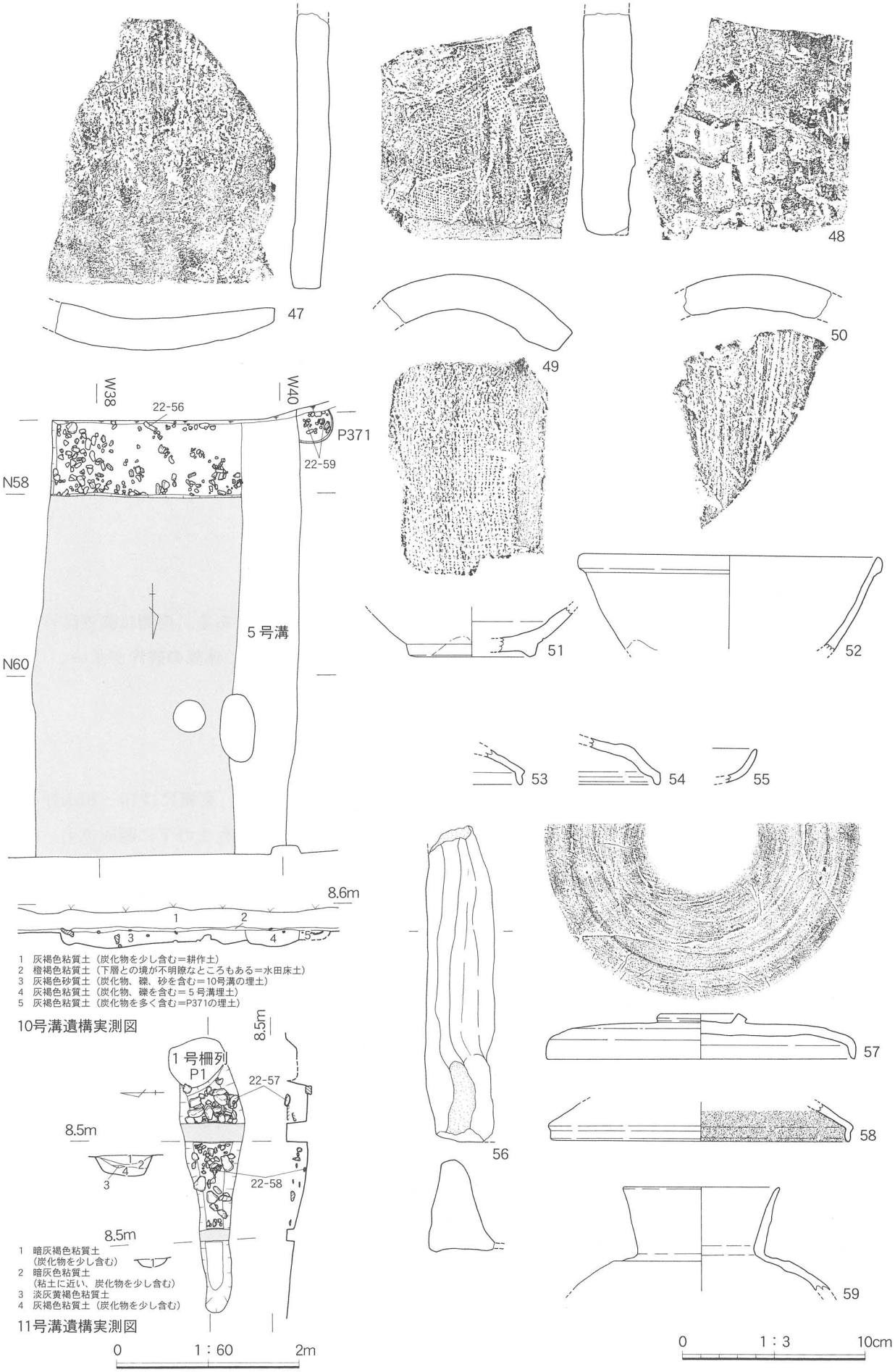
第22図47・48は平瓦で、47の凹面に糸切り痕が残る。48は厚く、荒いタタキ痕が残る。49・50は丸瓦で、50の凹面は糸切り痕が残る。51は中国製白磁碗Ⅳ-1b類[2]の底部である。



第20図　出雲国府跡５号・８号溝実測図・遺物実測図



第21図　出雲国府跡８号溝実測図・遺物実測図



第22図　出雲国府跡８～11号溝実測図・遺物実測図

(17) 9号溝（第7・22図）

遺　構　1区北側に位置し、8号溝の南1m前後に存在する東西溝である。幅0.5m、深さ10cmで、2区では検出できなかった。

出土遺物　第22図52は遺構検出時に出土し、確実に伴うか不明であるが、9号溝に伴う遺物は極端に少ない。52は中国製白磁碗Ⅳ類で、体部下半は無釉である。

(18) 10号溝（第22図）

遺　構　1区南側に位置する南北溝で、5号溝により切られている。前回の調査時には検出されていないが、10号溝の北側で、7号溝が途切れていることから10号溝が北に連続していた可能性がある。溝の東端は小石が存在し、掘形は検出しやすい。現状で幅2.2m、深さ0.2mである。埋土は灰褐色砂質土で、礫や炭化物を多く含む。

出土遺物　第22図53・54は須恵器蓋坏で、口縁端部は屈曲する。55は須恵器皿と思われる。56は竈の焚口の破片で、断面三角形を呈する。

(19) P371（第22図）

遺　構　3区南側に位置し、5号溝に東側を切られる古墳時代の柱穴である。南側は調査区外へ続き、現状で径0.4cm、深さ10cmを測り、内部からは遺物が出土した。壺の体部の破片が多い。

出土遺物　第22図59は土師器壺で、直線状に開く単純口縁を持つ。

(20) 11号溝（第22図）

遺　構　1区北側に位置し、1号柵列P1に切られている東西溝である。東側には10～20cm程の石が詰まっていた。断面形は「コ」の字からU字形を呈し、埋土は暗灰褐色土の下に暗灰色土、灰褐色土が堆積していた。遺物は石の上面から出土した。

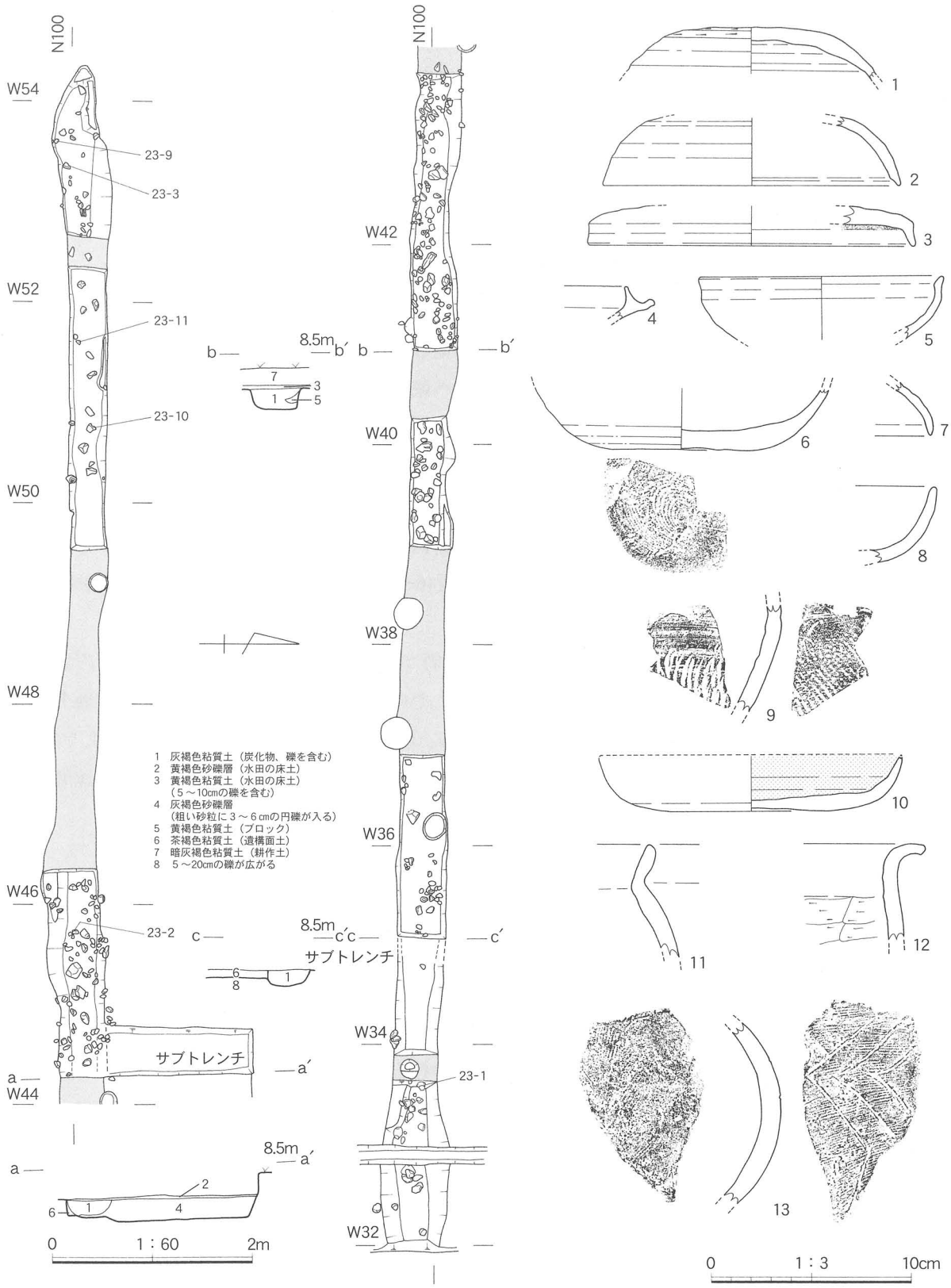
出土遺物　第22図57・58は須恵器坏蓋で、57の天井部は糸切り後、つまみを付けている。内面が摩滅している。58は天井部と口縁部に明瞭な稜を持つ。内面に墨痕が残り、硯に転用されている。

(21) 12号溝（第23図）

遺　構　2区北側に位置し、24号土坑を切っている。東西に延びる溝で、東側調査区外へに続く。1号柵列から北16.5m、1号建物の身舎から北23mにある。検出長22.4m、幅40～60cm、深さ15～20cmを測る。断面形はU字形で、埋土は灰褐色粘質土である。溝内からは遺物に混じり、10～20cmの礫が出土した。当初、15号溝と対になり、道路側溝や築地の雨落溝と考えられたが、15号溝が西側に連続しなかった。また、12号溝から南側にかけて2ヶ所にサブトレンチを設定し、土層観察を行ったが、地山のみの検出で、掘り込み地業の跡はなかった。

出土遺物　第23図1～3・7は須恵器坏蓋で、1は天井部がヘラケズリである。2の口縁端部は内側に段を残す。3は口縁端部が屈曲し、内面に墨痕が残る。4～6・8は須恵器坏で、4はかえりがある。5は口縁端部がわずかに屈曲する。6の底部は回転糸切りで、体部との境がヘラケズリされ、壺の底部の可能性がある。9は須恵器壺で、下半には内外面タタキ痕が残る。内面には漆が付着する。10は土師器皿で、内面は赤彩される。11・12は土師器甕で、11は「く」の字に開く口縁

部がある。12はほぼ水平に広がる口縁部である。13は器種・器形が不明である。内外面ともハケメ調整で、外面にはヘラにより施文される。弥生土器の底部付近か。



第23図　出雲国府跡12号溝実測図・遺物実測図

(22) 13号溝（第24図）

遺　構　２区北側の中央に位置し、８号溝により切られる南北溝である。１号柵列P5と切り合いがあるが、未調査である。南端が不明であるが、長さ約6.3cm、幅0.66～1.14m、深さ24cmを測る。断面は「コ」の字で、暗灰褐色粘質土と橙色砂質土が堆積していた。

出土遺物　第24図１～５は須恵器坏で、１～３の口縁端部はわずかに屈曲する。６は須恵器高坏で、口縁端部が屈曲し、沈線状になる。７は土師器皿で、高台が付く。風化が著しく、赤彩は不明。

(23) 14号溝（第24図）

遺　構　２区北側に位置する南北溝で、１号柵列と重複関係にある。南側は調査区外へ延び、検出長は4.1mで、深さは６cmと浅い。幅は30～40cm前後で、北側は10cmと狭くなる。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物　第24図８は須恵器横瓶で、遺構検出時に出土した。内外面にタタキ痕が残る。

(24) 15号溝（第24図）

遺　構　２区北側に位置する東西溝で、12号溝の南３mに位置する。トレンチ内では12号溝と平行するが、西ではやや南に向かって延び、調査区外へ続く。幅40cm、深さ12cmを測り、埋土は灰褐色粘質土である。溝の北側も少し窪んでおり、そこからも甑・甕・竈片が出土した。

出土遺物　第24図13は須恵器坏蓋で、口縁端部が屈曲する。12・14～16は須恵器坏で、12・16は高台が付く。14の体部は途中で上方に立ち上がる。17は須恵器皿である。18・19は竈で、18は庇部が剥離している。19は底部付近が肥厚する。20は須恵器高坏である。21は土師器高坏で、２方向に円形の透孔があり、一方は１穴、一方は２穴である。図版46-5は土師器で、表面が内外面とも剥離する。

(25) 16号溝（第24図）

遺　構　３区北東端に位置し、南東から北東に軸を持つ溝である。平成14年度３区調査区の北側では耕作土・床土の下に遺物と礫を多量に含む層があり、その層を除去すると砂質が強い遺構面を確認した。幅60～70cm、深さ10cm前後であり、東側が広がる。埋土は炭化物を含んだ灰褐色砂質土である。

出土遺物　第24図９は須恵器壺で、頸部は回転ナデ調整である。10は土師器坏で、内面は黒色である。11は平瓦で、凸面は粗い格子タタキである。

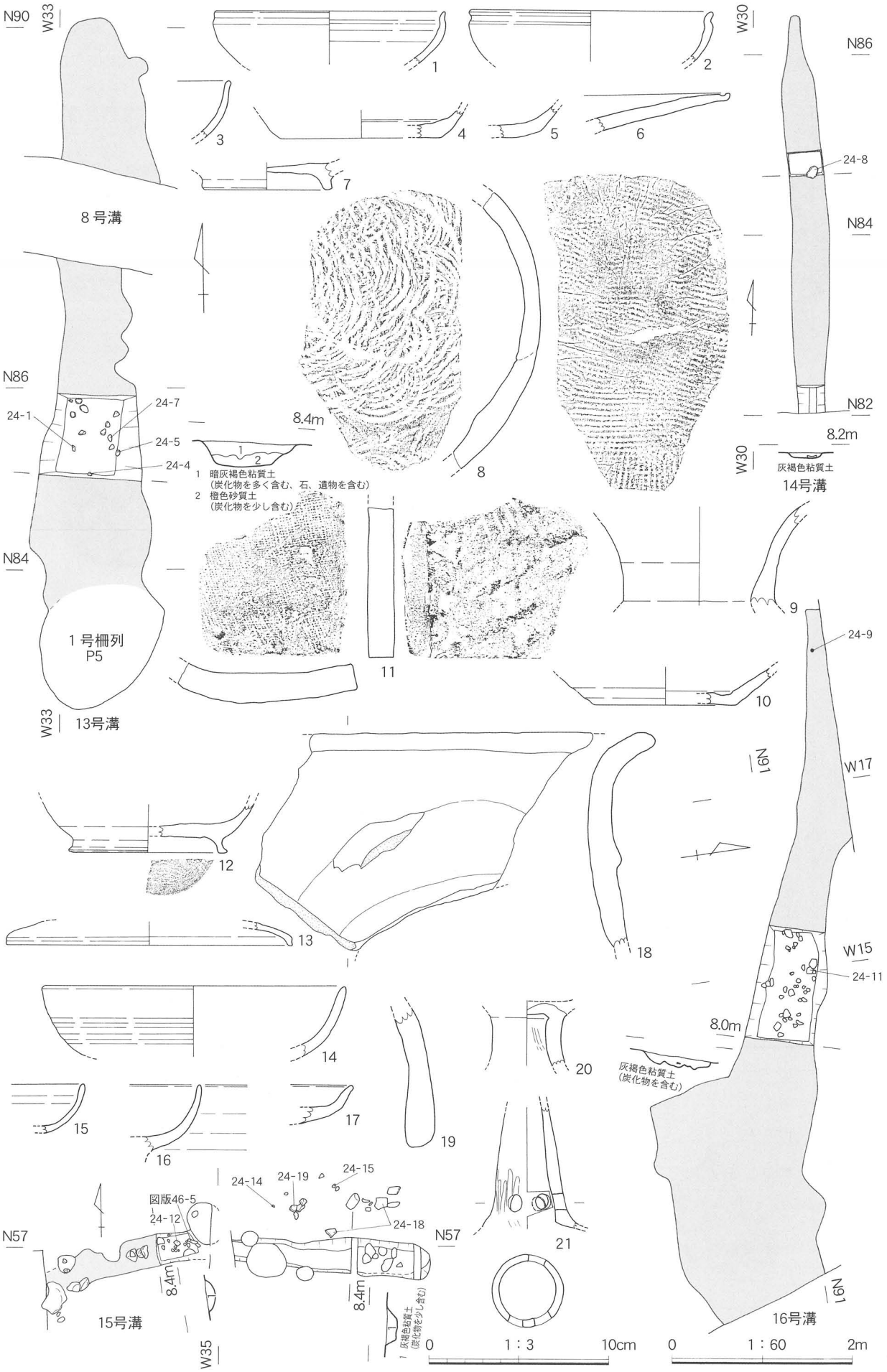
(26) 17号溝（第25図）

遺　構　３区中央に位置する南北溝で、９号建物・８号溝に切られ、３号柵列と重複関係にある。４区３号溝が東32m、３区７号建物が東25mに位置する。前回の調査区に続き、規模は検出長21.2m、幅80cm前後、深さ10cmである。溝の上面や埋土中からは10～20cmの礫が検出された。埋土は炭化物を多く含む暗灰褐色粘質土で、遺物を多く含んでいた。

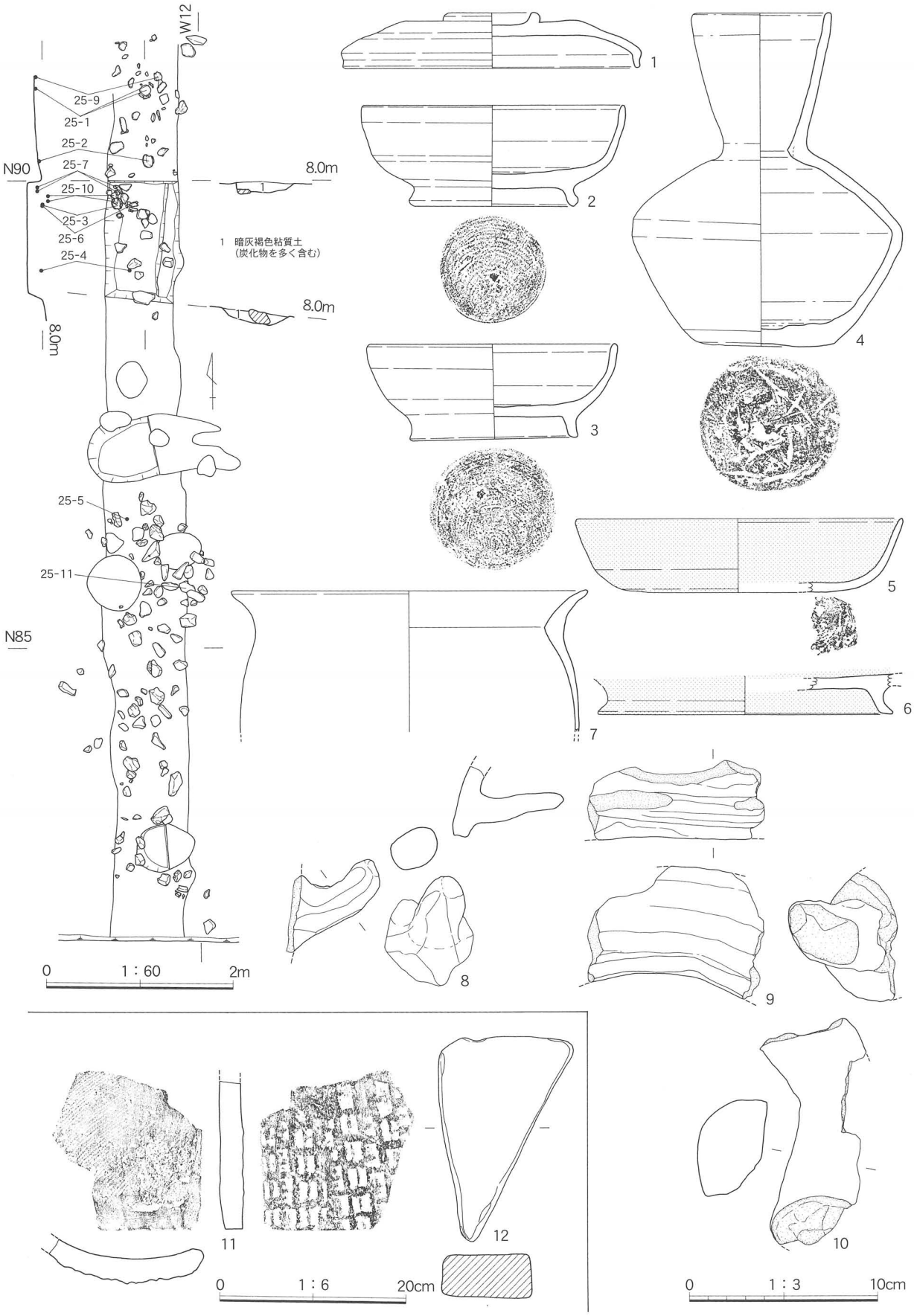
出土遺物　第25図１は須恵器坏蓋で、輪状つまみを持ち、口縁端部が屈曲する。２・３は須恵器坏で、しっかりした高台を持つ。底部は回転糸切りである。４は須恵器壺で、肩は滑らかである。５は土師器坏、６は土師器高台付皿で、内外面に赤彩される。７は土師器甕で、「く」の字に開く口縁を持つ。８の甑の把手は短くて細い。９は竈の庇部、10は土製支脚である。11は平瓦で、凸面に粗いタタキ痕が残る。12は厚さ５cm前後の扁平な砥石である。

(27) ２号井戸（第26～28図）

遺　構　２区北側に位置し、東側は調査区外へ広がる。８号溝に切られている。



第24図　出雲国府跡13～16号溝実測図・遺物実測図

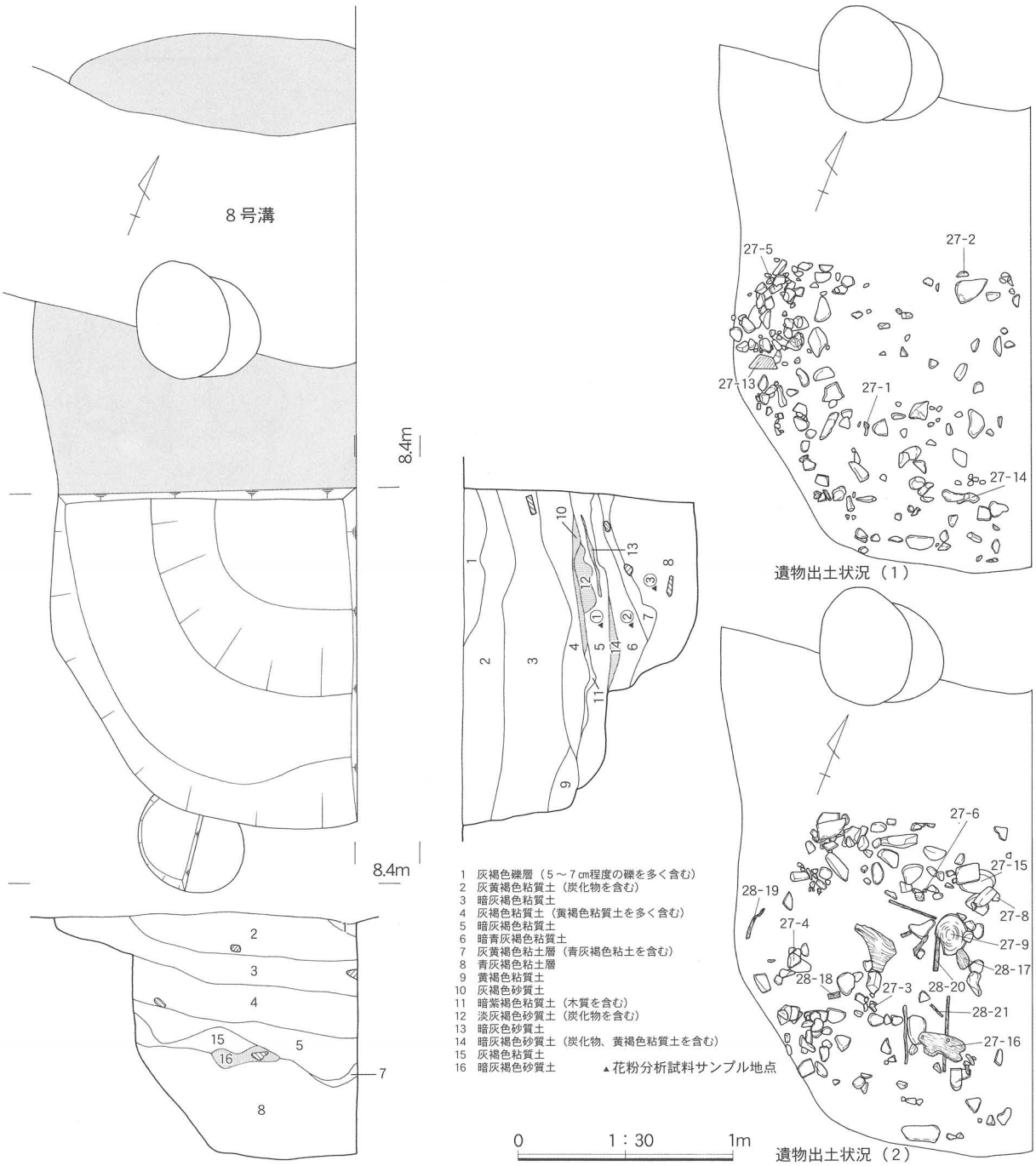


第25図　出雲国府跡17号溝実測図・遺物実測図

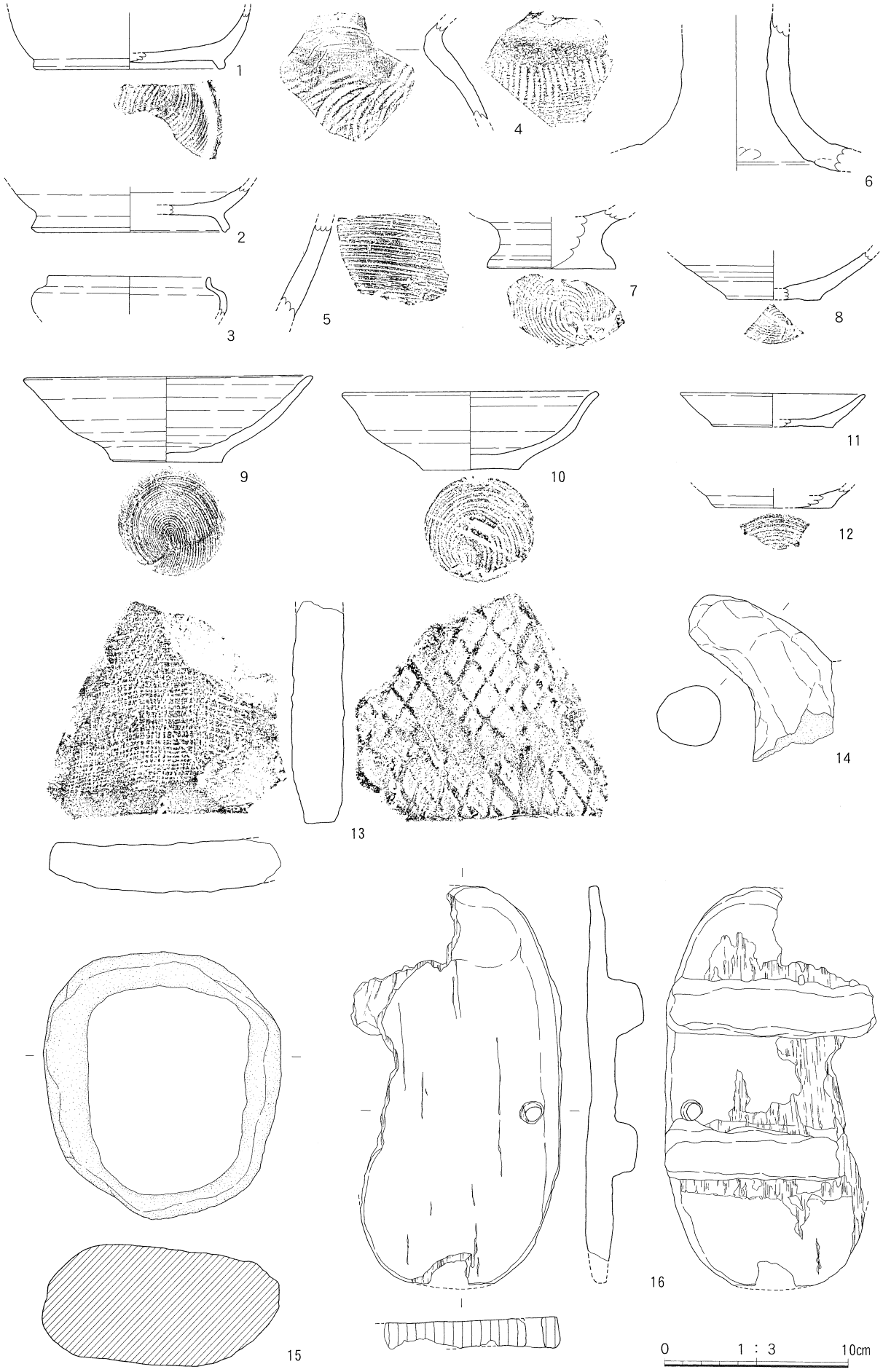
南北3.7m、東西14.5m以上、深さ1.1m以上を測り、長方形の掘形を持つ。南側では検出面から深さ65cmの所に、幅35cmの平坦面がある。井戸跡の中央には10cm以下の礫を多く含む層（１層）があり、２～４層の灰褐色粘質土系の土が堆積していた。下層は粘質土の間に10・12～14・16層の砂質土が堆積し、７層以下は粘土であった。

井戸枠は検出できなかったが、上層から須恵器や土師器の破片が、下層からはほぼ完形の土師器坏や木製品が出土した。２号井戸については、古環境・植生を復元するため花粉分析を行った。

出土遺物　第27図１・２は須恵器坏で高台をもつ。３は小型の短頸壺、４・６は須恵器壺である。５は須恵器鉢と思われ、外面にカキメが残る。７は上部が破損し、皿か坏か不明であるが、柱状高



第26図　出雲国府跡２号井戸実測図



第27図　出雲国府跡２号井戸出土遺物実測図（１）

台を持つ。８～10は土師器坏で、底部回転糸切りである。底部から体部にかけ段を有し、内湾しながら立ち上がり、途中でやや外側に開く。内面にはろくろ目が残る。11は土師器皿で、「ハ」の字に広がる。12は土師器坏で、内面が黒色である。13は平瓦で、凹面の布目は伸びて粗い。14は土製支脚である。15は厚さ６cmほどの扁平な磨石と思われる。16は一木連歯下駄である。現状で長さ21.7cm、幅11.4cm　高さ3.0cmを測り、歯が低い。樹種はケヤキである[3]。

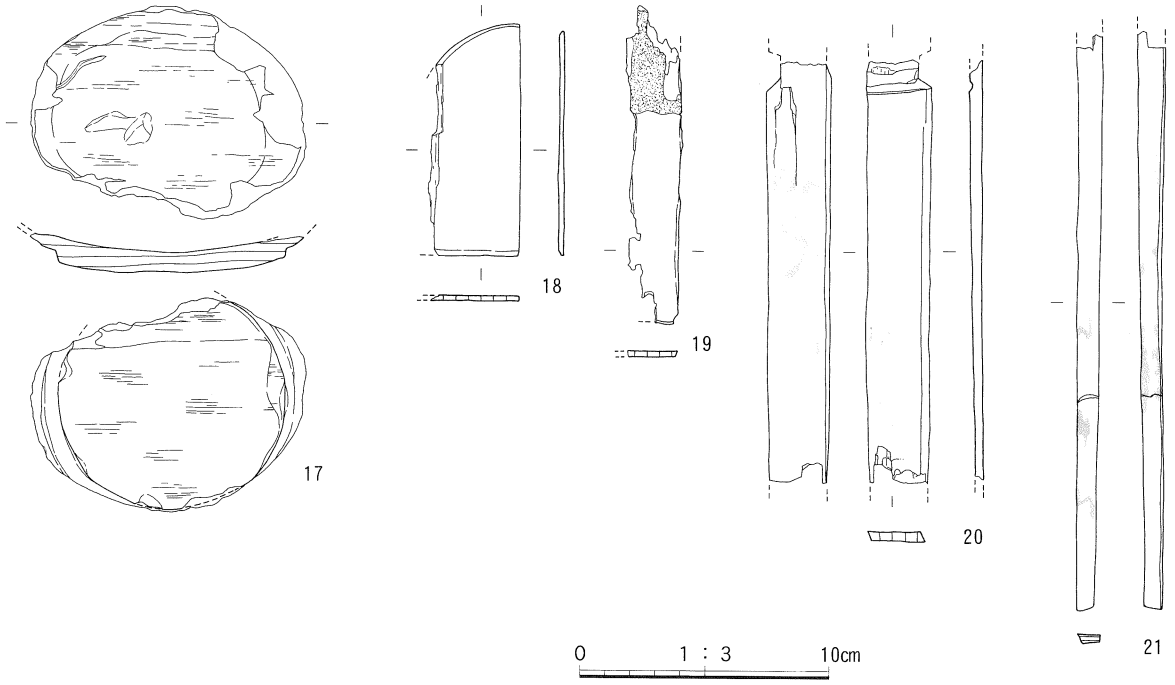
第28図17は刳物の木皿で、上部は破損している。円形の底部からわずかに立ち上がる。18は曲物の蓋板あるいは底板である。外側の端部は斜めになる。19は厚さ２mmの板状で、表面には炭が付着する。20は幅2.5cm、厚さ0.5cmの板状で、幅４mm、深さ1.5mmの刳り込みがある。表面には墨痕がある。21は幅７～11mm、厚さ４mmの細い棒状を呈し、墨痕がある。

(28) ３号井戸（第29図）

遺　構　２区北側中央に位置し、８号溝が0.5m南、12号溝が10m北、17号溝が18.5m東にある。

３号井戸は径1.4～1.5mの不整形な楕円形を呈し、深さ0.8mを測る。大きく３層に分層でき、炭化物を多く含む灰褐色粘質土（１層）、灰褐色粘質土（２層）、灰色粘土層（３層）が堆積していた。２・３層の下層には木質や断面円形の枝が薄く存在した。１層からは10～20cmの石が一部直線状に出土した。井戸跡という確証はないが、植物層の存在から水が堆積していたと推定し、井戸とした。

出土遺物　第29図１は須恵器坏蓋で、口縁端部は屈曲する。２～５は須恵器坏で、２は皿の可能性もある。３の底部には墨書がある。４の底部は静止糸切りである。５の口縁端部はわずかに屈曲する。６は須恵器皿で、口縁部は外傾する。７・８は須恵器高坏で、７の体部には沈線がある。９は須恵器壺で、内面に漆が付着する。10は製塩土器で、胎土中に砂粒を多く含む。11は土師器皿で、内外面に赤彩される。12～14は土師器甕であり、12は水平に広がる口縁部を持つ。15は断面三角形

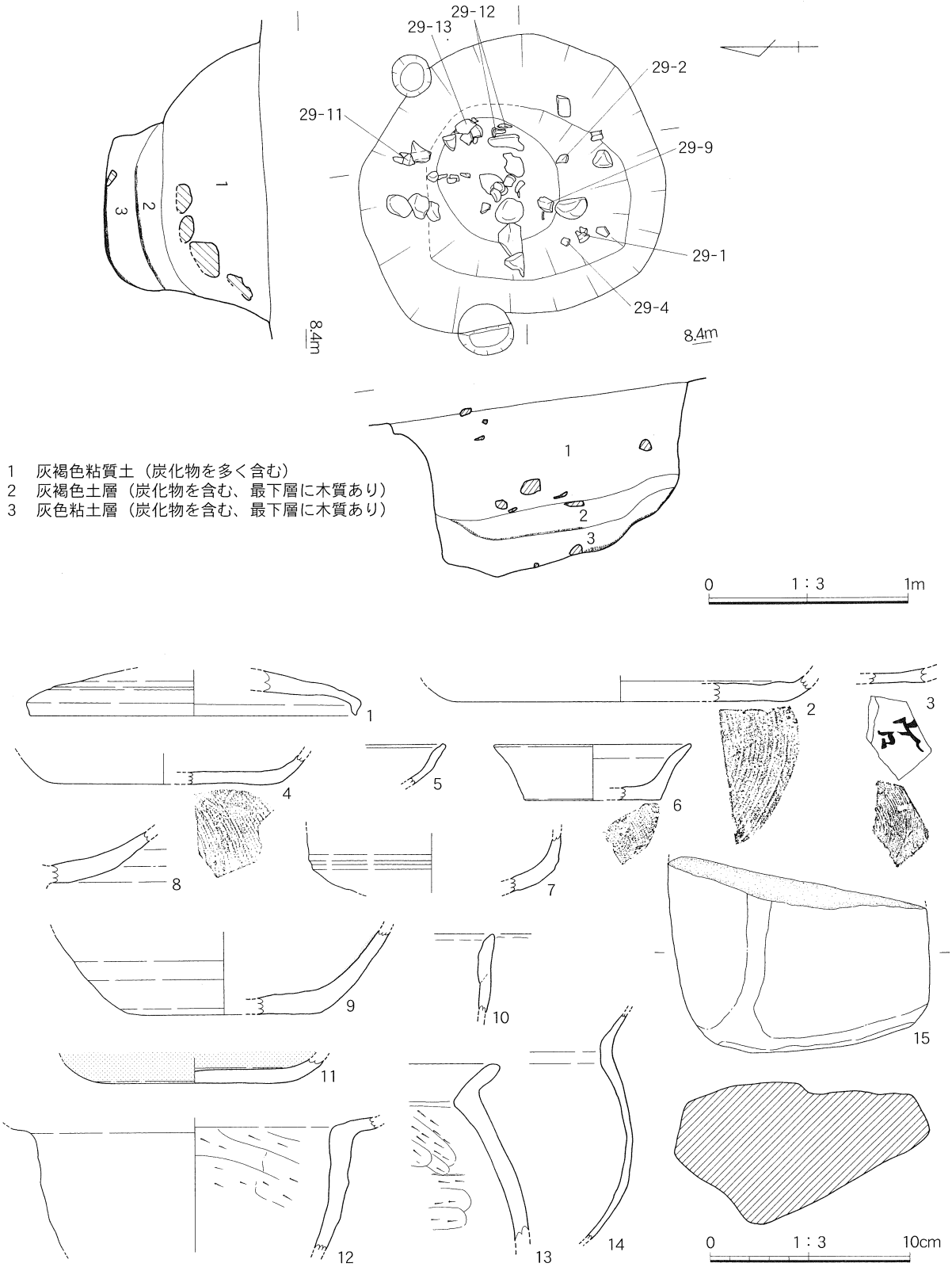


第28図　出雲国府跡２号井戸出土遺物実測図（２）

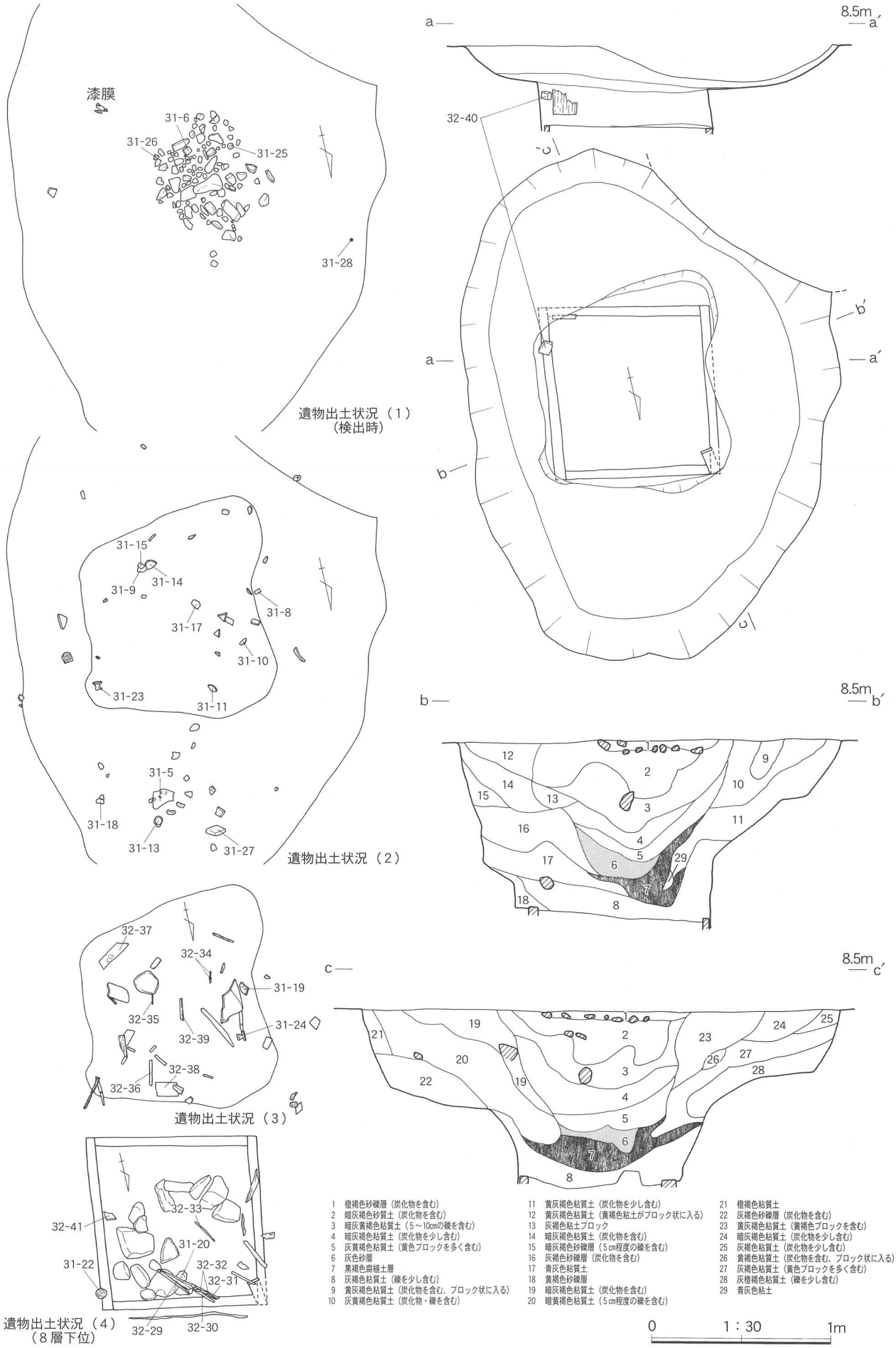
の花崗岩の砥石である。

(29) 4号井戸（第30～32図）

遺　構　1区南側中央に位置し、8号溝が北29m、1号井戸が北19mに存在する。南西端をSX



第29図　出雲国府跡3号井戸実測図・遺物実測図



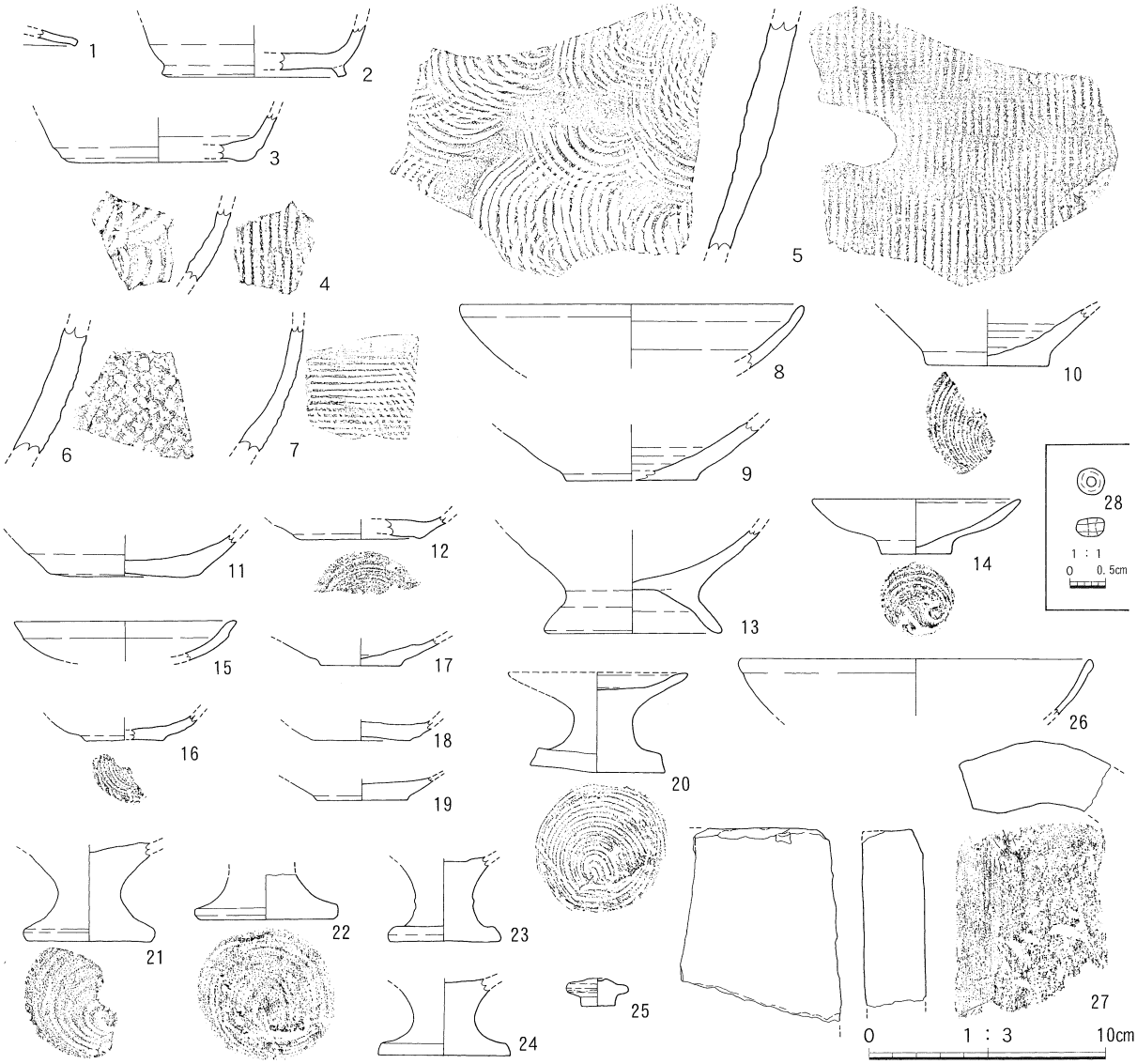
第30図　出雲国府跡４号井戸実測図

02[4]で切られている。

4号井戸は南北2.85m、東西2.1mの楕円形の掘形の中に、方形の井戸枠を持つ。井戸枠は厚さ4cmの木材を使用し、東西の木材で南北の木材を挟んでいる。大きさは内法で、南北84～86cm、東西85cmを測り、深さは7cm以上あるが発掘していない。井戸枠の北西隅から厚さ3.5cmの板状の木材が約1m立ち上がり、隅柱の可能性がある。南側では井戸枠から15cm上方で、幅13cm、厚さ1.1cmの板が出土した。縦板と思われたが、下端が平坦で、井戸枠まで続いておらず用途は不明である。また、南東からは30cm上方で立方体の木材（第32図40）が出土した。隅柱と思われたが、全ての面が加工され、井戸枠まで続いておらず用途は不明であった。

井戸の中央には礫を多く含んだ1層が径70cmの範囲に堆積し、分層しているが2～6層は似ており、井戸の廃棄後に堆積した土層と思われる。7層は植物が腐食した状態であった。8層は井戸枠の上面を全面覆い、その下層からは礫が検出された。

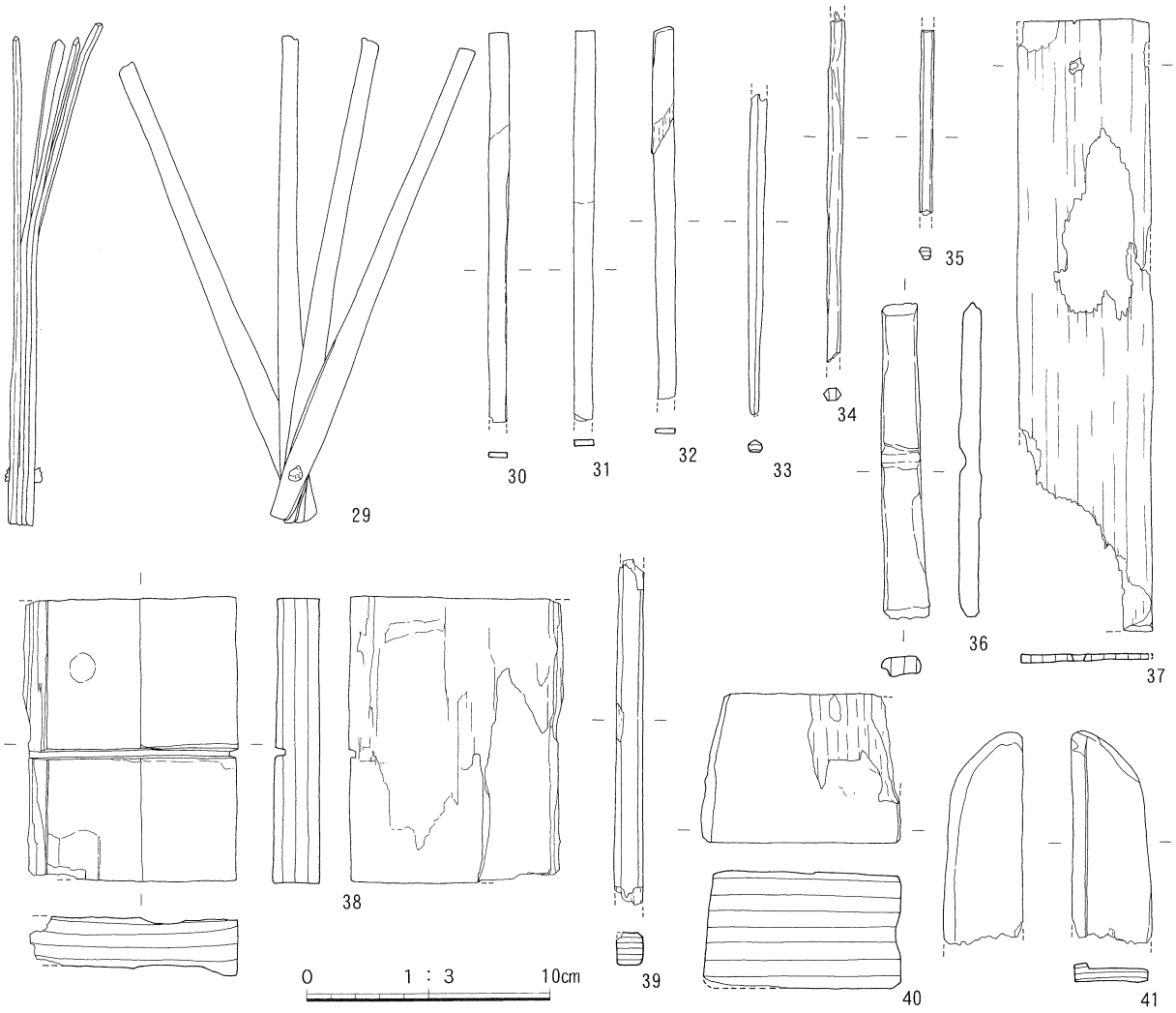
第32図29～32の扇は8層下層から出土し、29に接して下から第31図20が出土し、22は少し上から検出された。なお、南東上面では黒に赤で草文が描かれた漆膜が検出された。



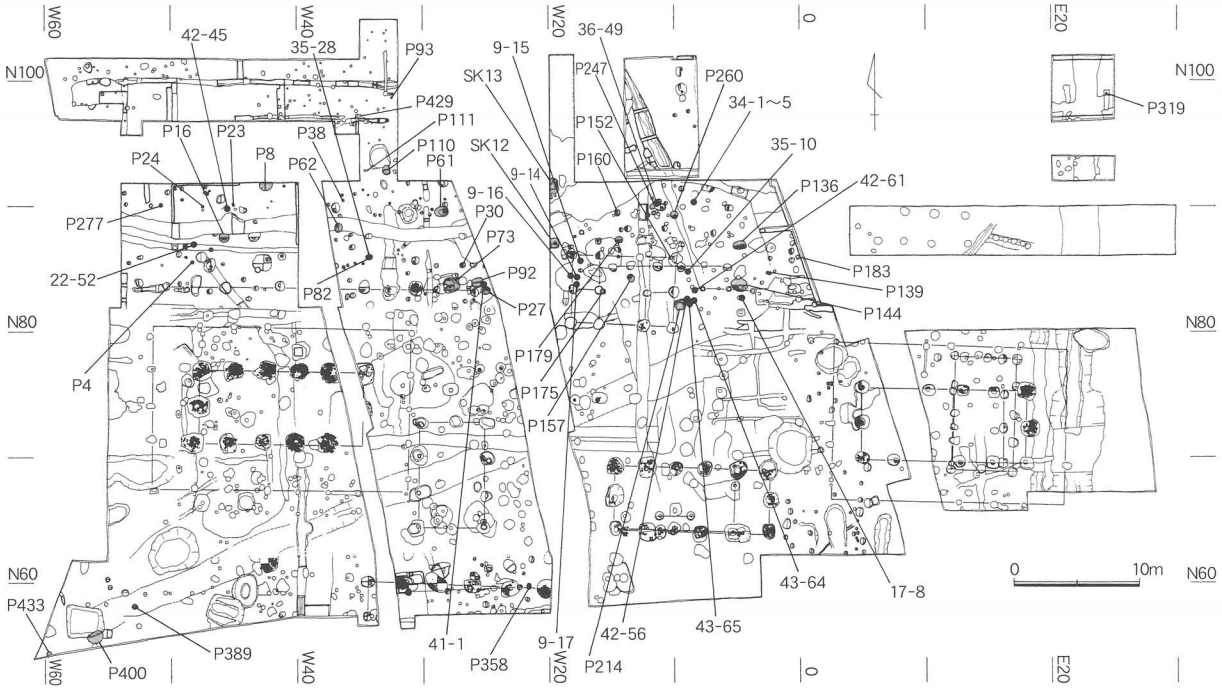
第31図　出雲国府跡4号井戸出土遺物実測図（1）

出土遺物　第31図１は須恵器坏蓋で、口縁端部がわずかに屈曲する。２・３は須恵器坏で、２は高台が付く。４～７は須恵器甕で、４・５は内外面にタタキが残る。６の外面は格子タタキ、７は矢羽状のタタキがあり、７の断面を見ると中央が褐色に焼成されている。８～11・13は土師器坏で、口縁部から体部にかけて段がある。11の内面は黒色である。12は土師器坏あるいは皿である。13は「ハ」の字に広がる高台を持つ。14～19は土師器皿で、高台と口縁部の境は段を有する。15の口縁部はナデられ、端部が外傾する。20～24は柱状高台を持つ土師器皿で、20以外は坏の可能性もある。25は中国製白磁蓋である。天井部外面のみ施釉される。26は中国製白磁碗Ⅱ類で、小さい玉縁を持つ。27の丸瓦は土師質の焼成である。28はガラス小玉で、濃紺色を呈する。

第32図29～32は扇で、29は径５㎜の木釘で４本の骨を止めている。親骨が１枚しかなく、元はもう少し枚数があったと思われる。親骨の厚さ４㎜、子骨は２㎜で、先端が破損している。本はほぼ平坦で、先端に向かって幅1.1cmに広がり、また、細くなる。骨はスギである[3]。30～32は先端付近と思われ、幅８㎜前後で、先端は平坦である。33～35は箸で、全体に丁寧な面取りが施されている。33は先細りし、端の先端と思われる。36は板状で、中央に刳り込みがある。37は板状木製品で、一方に径５㎜前後の穴があく。表面には墨痕がある。38は２方向に断面コ字形の刳り込みがある。39は断面方形の棒状木製品である。41は曲物の蓋板あるいは底板と思われ、中央が厚くなる。



第32図　出雲国府跡４号井戸出土遺物実測図（２）



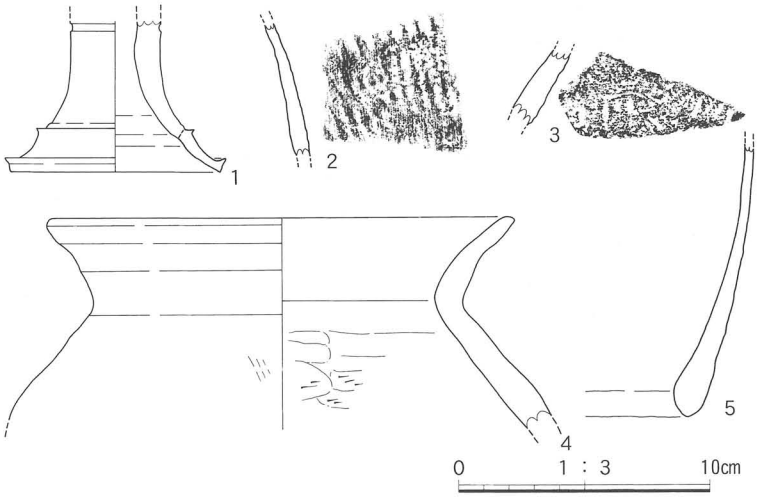
第33図　出雲国府跡遺物出土地点図（S＝1/600）

(30) その他の遺構から出土した遺物（第33～36図）

建物や柵列に復元できなかった柱穴や遺構面から一定範囲にまとまって出土した遺物を掲載した。

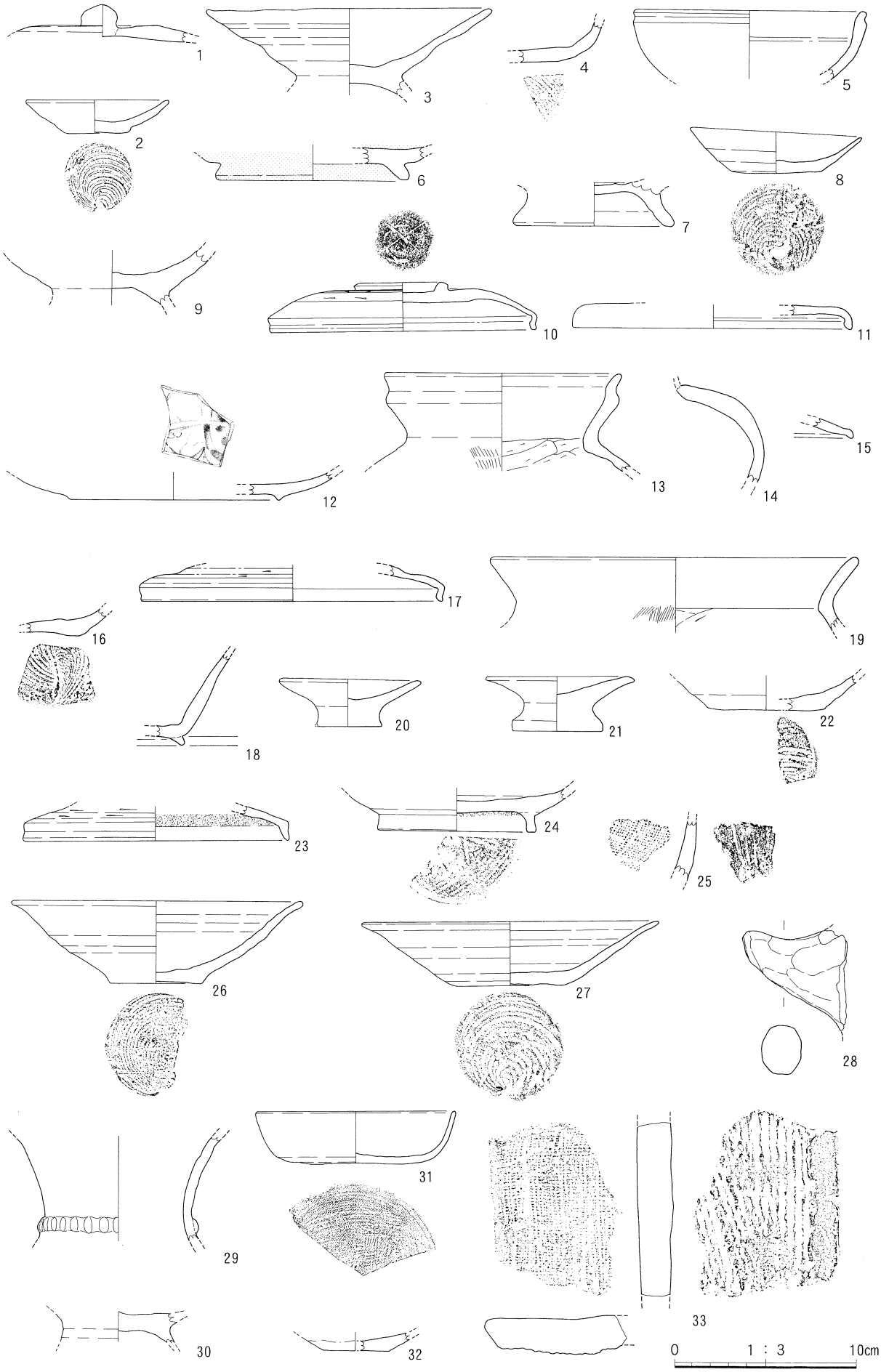
第34図１～５は３区北側でまとまって出土した。土坑状に黒色土が堆積していたが、深くないので遺構とは認定できない可能性がある。１は須恵器高坏で、３方向に透孔がある。端部には明瞭な稜が造られている。２・３は軟質の須恵器甕で、外面は格子タタキがあるが、内面は不明。４は土師器甕で、「く」の字に開く口縁部を持つ。５の甑は、外面は縦方向のハケメ調整で、黒色を呈する。その他に瓦片もある。

第35図１～３は１区P8出土で、２は土師器皿、３は高台を持つ土師器坏で、内面黒色である。４～６はP16出土で、６は土師器高台付き坏で、内外面赤彩される。８・９はP24出土で、８の土師器皿は、底部と口縁部の境は不明瞭である。12は肥前系磁器皿で、P400の最下層から出土した。13～15はP433出土で、13はP433を掘りすぎ、その下層から出土した。複合口縁の名残を持つ土師器甕で、古墳時代中期の７号溝がP433の下に続いていると思われる。14は壺の体部で、口縁部が剥離している。



第34図　出雲国府跡３区黒色土出土遺物実測図

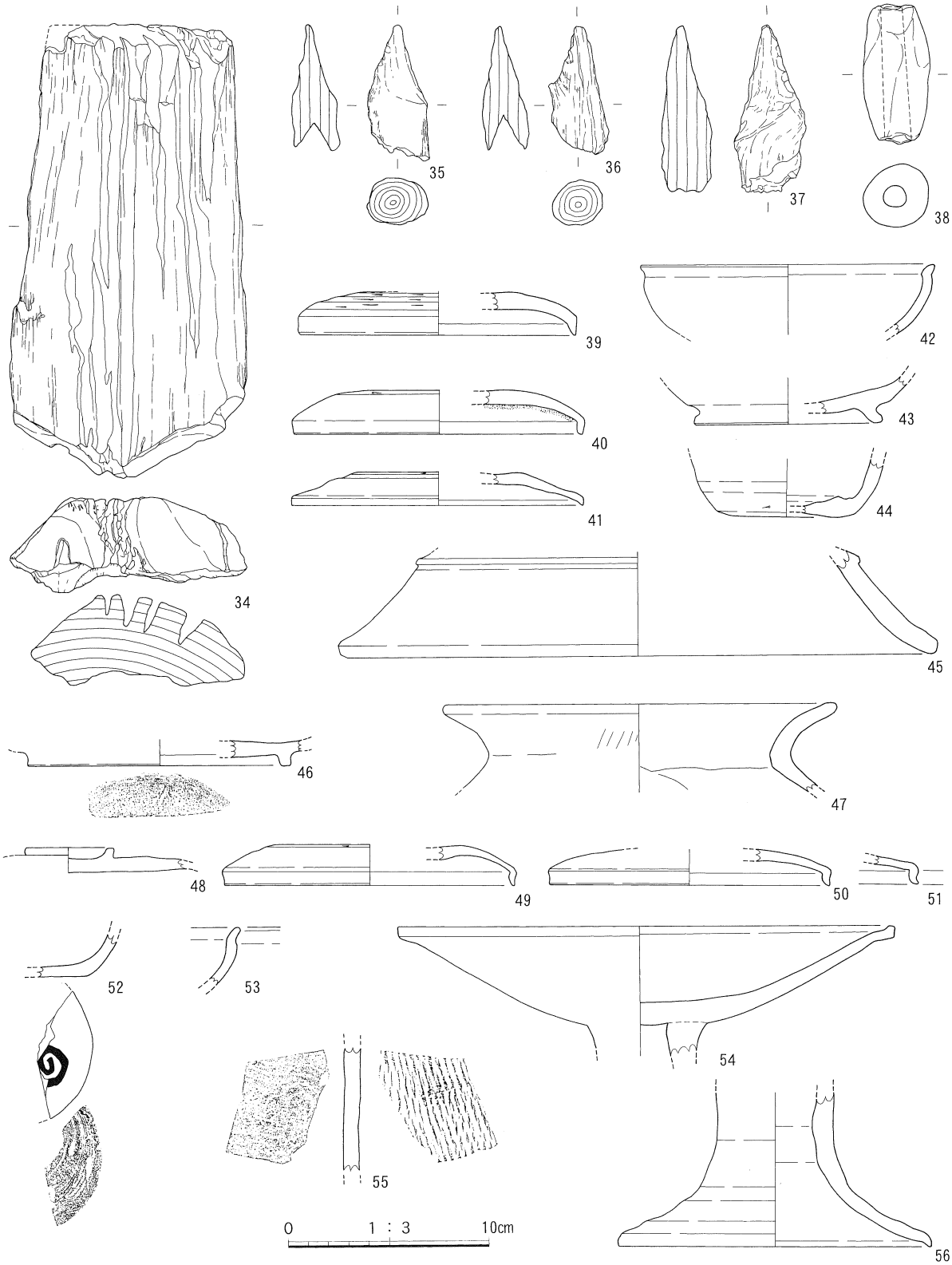
16は２区P27出土の須恵器坏である。17・18はP30出土で、18の須恵器坏は低い高台が底部の一番外側に付く。20～22はP62出土で、20・21は土師器柱状高台付皿である。23～25はP73出土で、23・24は硯に転用され、25の製塩土器の内面には布目が残る。26・27はP93出土で、底部を上にして置かれていた。26の内部には黒色物が付着する。



第35図　出雲国府跡遺構出土遺物実測図（1）

32はP412出土で、中国製白磁皿Ⅵ類である。28は甑の把手、29は弥生土器の頸部で、突帯を持つ。33はP110出土で、凸面は縄目タタキである。

第36図34は３区P157の床面からの出土で、柱穴の先端が尖らしている。38～44はP214出土で、39・40の口縁端部はしっかり屈曲し、41はわずかに屈曲させる。45はP183出土の須恵器器台ある



第36図　出雲国府跡遺構出土遺物実測図（２）

いは高坏脚部である。51～58はP144出土である。52は須恵器坏で、底部外面に墨書がある。54・56は須恵器高坏で、口縁端部や脚端部はわずかに屈曲する。55は須恵器甕で、外面は平行タタキを残し、内面はタタキを消している。P111は肥前系磁器皿で、内面に草文が描かれている。

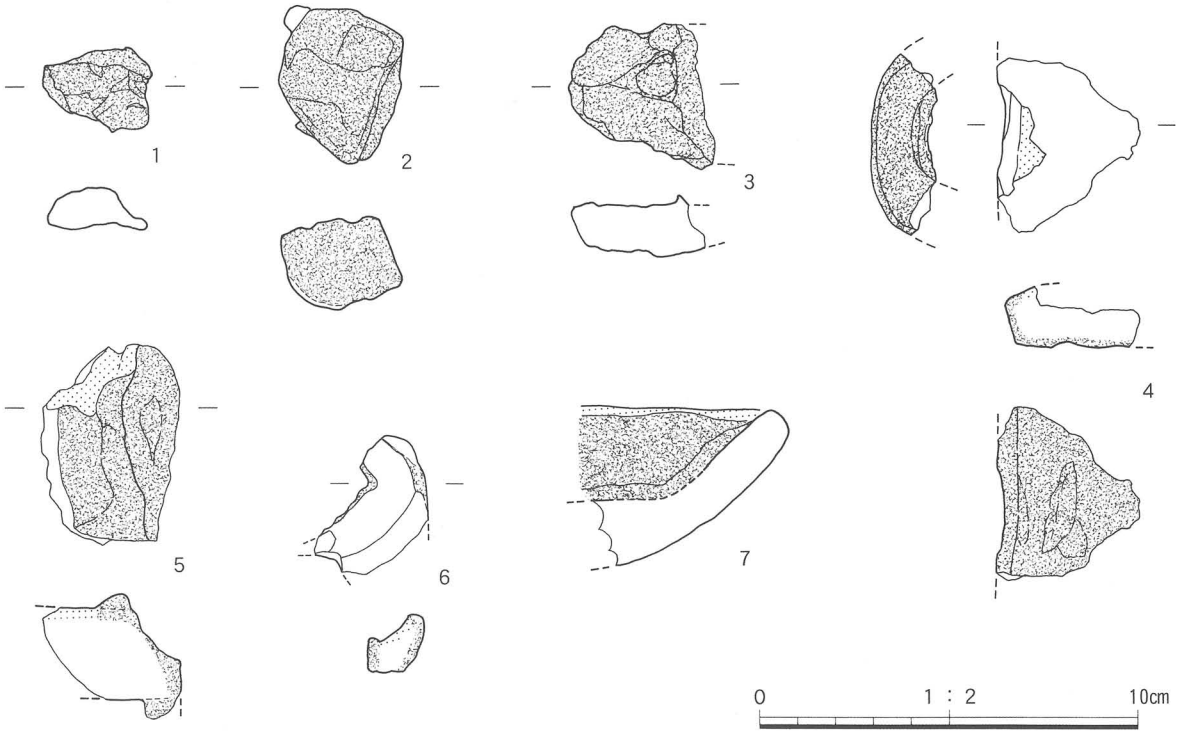
第６節　生産関係遺物

出雲国府跡からは金属器生産、玉生産、木器生産、織物生産に関わる遺物が本調査及び確認調査で出土している。柱穴や土坑、溝からも出土するが、二次的に動いた状態で検出され、炉跡など本来の生産場所は特定されていない。多量に出土することから調査区周辺で生産が行われていたことと思われる。

第４表　出雲国府跡金属器生産関係遺物観察表

挿図番号	図版	出土地点	種別	胎土	色調	重量(g)	備考
37-1	42	３区 N87W15 ２層	滓		黒色	8.18	流動状
37-2	42	３区 N92W05 バラス内	碗形鍛冶滓		黒色	47.10	炉床の土付着(灰色)
37-3	42	２区 N62W25 床土	碗形滓		黒橙色	35.23	黒色のガラス質になる
37-4	42	P214No.16	羽口の先端	２～３㎜の白色砂粒含む	灰色	16.72	黒色のガラス質になる
37-5	42	３区 N92W05 １層	羽口	１㎜の白色砂粒多く含む	黒緑色	50.49	内面明茶褐色
37-6	42	３区 N92W10 ２層	転用坩堝	密	灰色	5.59	土器転用 非鉄カ
37-7	42	１区 N62W60 １層	坩堝	１～２㎜程度の砂粒多く含む	灰白色	81.70	内面黒褐色滓 指頭圧痕 非鉄カ
8	42	３号井戸	碗形鍛冶滓		橙色	61.39	鉄分なし
9	42	１区 N62W40 ２層	碗形鍛冶滓		黒色	81.48	メタル分なし
10	42	１区 N62W60 ２層	碗形鍛冶滓		黒色	37.22	メタル分なし
11	42	４号溝	羽口の溶解物		黒色	22.38	黒色のガラス質になる
12	42	１区 N62W40 １層	羽口の溶解物		黒色	2.72	ガラス質になる
13	42	３区 N92W10 ２層	羽口の溶解物		黒色	11.60	黒色のガラス質になる 気泡多い

注：８～13は写真のみ



第37図　出雲国府跡金属器生産関係遺物実測図

（1）金属器生産関係遺物（第37図）

平成14・15年度調査では炉壁片、滓、羽口片などが、コンテナ1箱分出土した。第37図1は流動状の滓で、鉄あるいは非鉄かは不明。2・3・図版42-8～10は碗形鍛冶滓である。2は炉床の土が付着している。3はメタル分が多い。8～10はメタル分はない。4・5は羽口の破片で、断面形は円形である。先端は黒茶褐色のガラス質になる。図版42-11～13は羽口の溶解物と思われ、黒色～茶褐色を呈する。6・7は坩堝で、非鉄系と思われる。6は土器転用坩堝で、断面にも滓が付く。7の内面は黒褐色にガラス質滓化している。坩堝の外面は白色で、高さが低く、取瓶の可能性もある。なお、これらは化学分析を行っておらず、表面観察による。

（2）玉生産関係遺物（第38～40図）

玉素材の構成　本調査区及び確認調査区で出土した玉素材は碧玉・通称「カド石」・黒曜石・メノウ・水晶・頁岩などである。通称「カド石」とは玉湯町周辺で使用される言葉で、玉を作るために必要な部分を取った残りの不要な部分をさしている。表にはカド石の他、使用目的は不明であるが玉作遺跡でも出土することが多い黒曜石、砥石の可能性がある珪化木も記載した。その他とは黒色・灰色・白色の碁石状の円盤状の石、球状の石、石英などである。

第5表の重量別を見れば水晶11156.32g（71%）、メノウ1488.06g（10%）、カド石1818.46g（12%）、碧玉857.18g（5%）、頁岩133.57g（1%）、その他159.97（1%）となる。第6表の点数別では、水晶1069点（71%）、カド石151点（10%）、メノウ106点（7%）、碧玉71点（5%）、頁岩65点（4%）、その他44点（3%）の順になる。

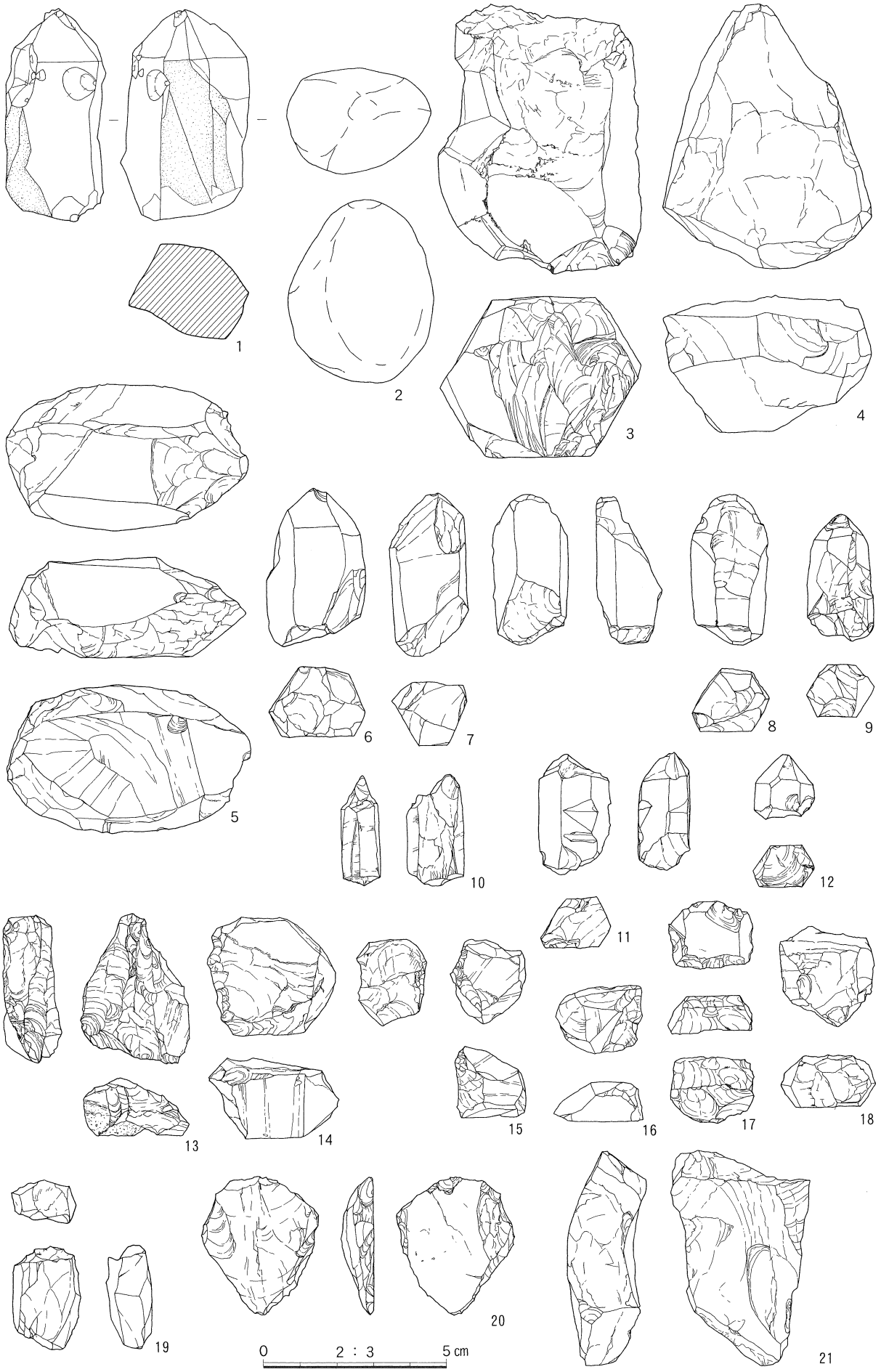
この結果、水晶が重量で7割、点数でも7割近く占める。前回報告分では水晶は重量で4割、点数で7割近くを占め、今回とほぼ同じ割合を示した。出雲国府跡では玉生産の中心は水晶であったことがわかる。

生産された玉　出土した遺物を見ると、水晶では敲打まで進んだ丸玉（第39図32～34）、研磨と穿孔がある丸玉（第39図39）、研磨された平玉（第39図38）、勾玉を作成すると思われる素材（第38図21・第39図25・26）がある。碧玉では研磨された平玉（第40図57）がある。

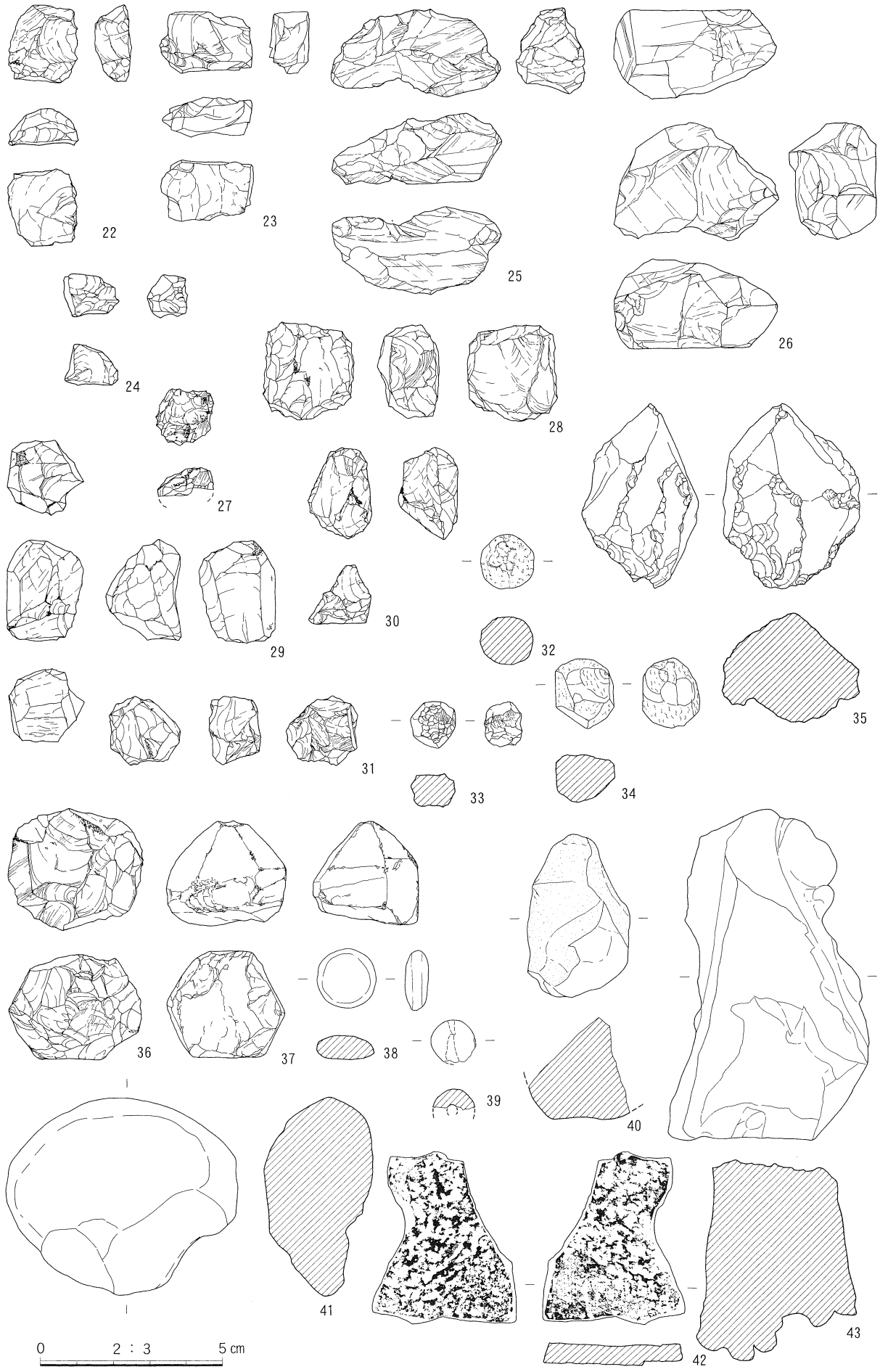
水　晶　第38図1・6・9は原石で、1のような幅3.2cmと大きいものと、8の幅2cmのものがある。2は白色の円礫である。3～5・7・8・10～12は荒割で、原石の両端を折り取ったもので、4や12は折り取った先端である。5・10は両端を折り取った素材を側面に沿って縦に分割している。13・14・16は一部自然面を残し、縦に分割している。15は平玉あるいは丸玉の素材にし始めたものである。17～20は平玉の素材にするために大きさを整えている。21は形態から勾玉の素材の可能性がある。片側に自然面を残し、細かな調整は行われていない。

第39図22～24は平玉の未成品で、二次調整があるが、敲打はない。25・26は形態から勾玉の素材の可能性がある。自然面を残し、粗い調整である。27は敲打のある平玉の破片である。敲打中に割れてものか。28は平玉の未成品で、一部自然面を残すが、敲打も行われている。29～34は丸玉の未成品で、32は径1.5cmの球形を呈する。35～37は大型の水晶を調整剥離し、円形に調整している。自然面を残すが、36・37は敲打もある。38は平玉の未成品で、研磨し始めているが、敲打も残る。39の丸玉は研磨・穿孔が終了しているが、半分に割れている。

メノウ　第39図40～43は原石で、40・41は円礫である。42は板状のものである。

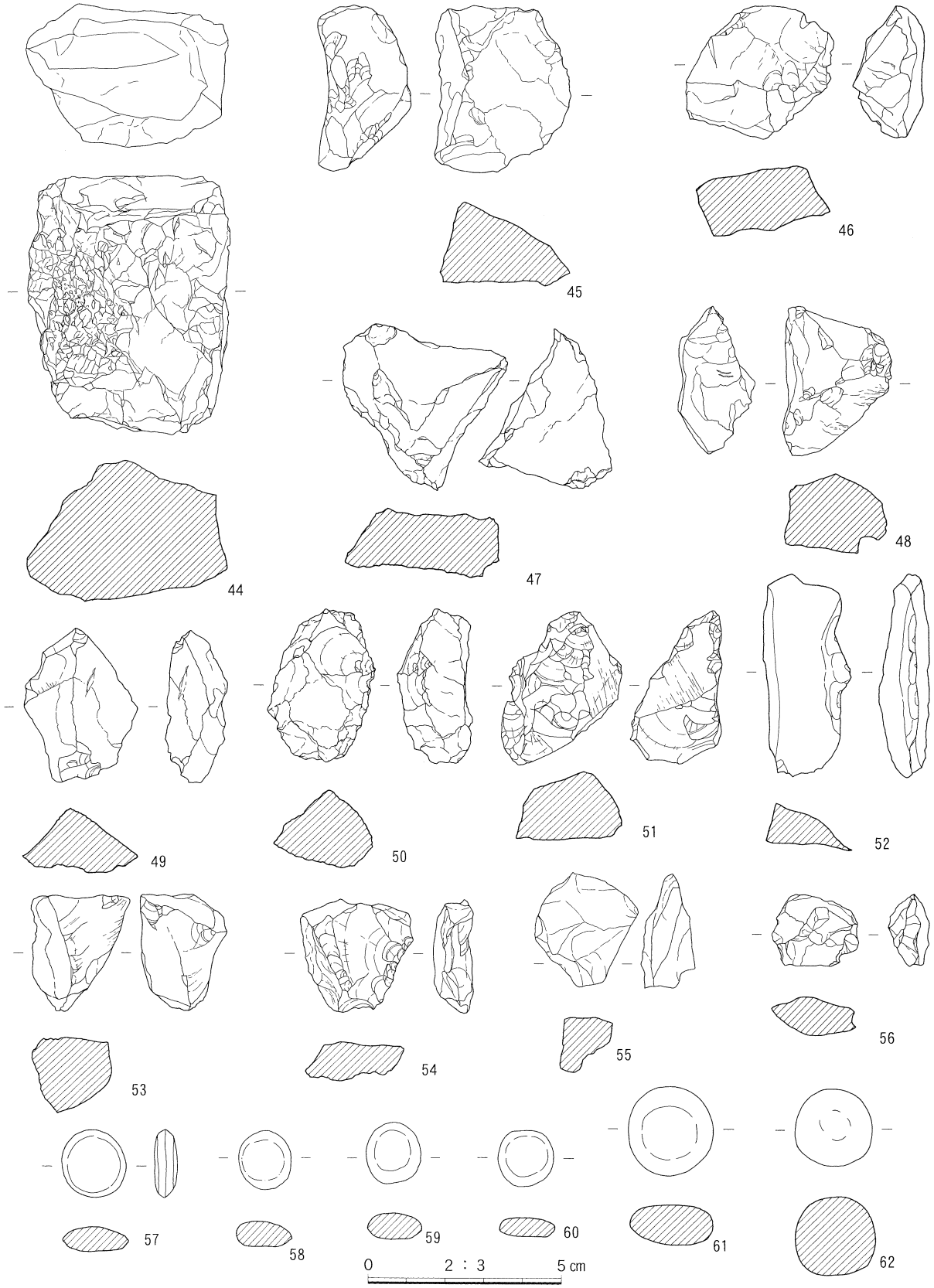


第38図　出雲国府跡玉作関係遺物実測図（1）



第39図　出雲国府跡玉作関係遺物実測図（2）

碧　玉　第40図44は原石で、長方形を呈する。45～51・53は素材と思われる破片で、割って大きさを整えている。52は厚さ、大きさから平玉の素材と思われるが、明瞭な調整はない。54～56は平



第40図　出雲国府跡玉作関係遺物実測図（3）

第５表　玉素材別重量集計表（単位：ｇ）

	碧玉	カド石	黒曜石	めのう	水晶	頁岩	その他	珪化木	合計
１区	156.19	332.37	101.65	340.25	5165.46	62.18	68.97	7.78	6234.85
２区	111.19	573.24	20.71	96.06	1732.59	19.73	21.52	0.00	2575.04
２区北	38.57	113.24	23.19	145.89	445.84	8.89	1.43	0.00	777.05
３区	389.12	611.22	41.90	756.75	3310.11	38.56	67.15	18.67	5233.48
本調査区計	695.07	1630.07	187.45	1338.95	10654.00	129.36	159.07	26.45	14820.42
T26	0.00	0.00	0.00	0.00	10.07	0.00	0.00	0.00	10.07
T27	97.57	3.44	0.47	6.99	88.80	0.00	0.00	0.00	197.27
T28・29	0.00	0.00	0.00	110.14	40.26	0.00	0.00	0.00	150.40
５T	64.29	184.95	1.11	25.94	341.20	2.62	0.90	0.00	621.01
T30・31	0.25	0.00	2.69	6.04	21.99	1.59	0.00	0.00	32.56
トレンチ計	162.11	188.39	4.27	149.11	502.32	4.21	0.9	0	1011.31
総合計	857.18	1818.46	191.72	1488.06	11156.32	133.57	159.97	26.45	15831.73

第６表　玉素材別点数集計表（単位：個）

	碧玉	カド石	黒曜石	めのう	水晶	頁岩	その他	珪化木	合計
１区	16	36	18	34	497	25	19	1	646
２区	16	42	6	12	246	9	5	0	336
２区北	6	7	5	8	47	5	2	0	80
３区	27	58	17	36	235	23	17	1	414
本調査区計	65	143	46	90	1025	62	43	2	1476
T26	0	0	0	0	5	0	0	0	5
T27	3	1	1	1	7	0	0	0	13
T28・29	0	0	0	7	6	0	0	0	13
５T	2	7	1	7	25	2	1	0	45
T30・31	1	0	1	1	1	1	0	0	5
トレンチ計	6	8	3	16	44	3	1	0	81
総合計	71	151	49	106	1069	65	44	2	1557

注：１～３区にかかる８号溝は便宜上１区に集計している

第７表　水晶製作段階別集計表

	剥　片		原　石		荒　割		素材大		平玉　素材		平玉(二次調整あり 敲打前)		平玉　敲打あり		平玉　仕上げ	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
１区	215	578.52	24	364.97	99	2373.55	54	945.70	66	529.47	22	141.15	4	23.20	1	2.57
２区	145	351.52	7	144.59	20	365.16	12	215.24	30	260.71	16	90.43	0	0.00	0	0
２区北	31	73.25	1	28.11	5	211.06	4	83.82	1	10.80	0	0	0	0.00	0	0
３区	112	289.34	10	363.73	33	1369.42	27	598.95	21	208.01	19	131.28	2	6.41	0	0
本調査区計	503	1292.63	42	901.40	157	4319.19	97	1843.71	118	1008.99	57	362.86	6	30	1	2.57
T26	5	10.07	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
T27	4	5.56	1	38.28	0	0.00	1	38.32	0	0.00	1	6.64	0	0.00	0	0.00
T28・29	4	9.42	1	8.00	0	0.00	0	0.00	1	22.84	0	0.00	0	0.00	0	0.00
５T	13	43.20	1	33.96	5	182.88	2	51.76	3	21.93	0	0.00	0	0.00	0	0.00
T31	0	0.00	0	0.00	1	21.99	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
トレンチ計	26	68.25	3	80.24	6	204.87	3	90.08	4	44.77	1	6.64	0	0.00	0	0.00
総合計	529	1360.88	45	981.64	163	4524.06	100	1933.79	122	1053.76	58	369.50	6	29.61	1	2.57

	丸玉(二次調整あり 敲打前)		丸玉　敲打あり		丸玉　仕上げ		勾玉　素材		勾玉 ２次調整あり		大　玉		合　計	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
１区	1	5.38	4	22.81	1	0.89	3	81.31	0	0.00	3	95.94	497	5165.46
２区	4	27.93	3	9.05	0	0.00	2	74.48	1	4.60	6	188.88	246	1732.59
２区北	3	20.75	1	6.16	0	0.00	1	11.89	0	0.00	0	0.00	47	445.84
３区	0	0.00	3	13.91	0	0.00	3	186.45	3	53.47	2	89.14	235	3310.11
本調査区計	8	54.06	11	51.93	1	0.89	9	354.13	4	58.07	11	373.96	1025	10654.00
T26	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	5	10.07
T27	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	7	88.80
T28・29	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	6	40.26
５T	0	0.00	1	7.47	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	25	341.20
T31	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	21.99
トレンチ計	0	0.00	1	7.47	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	44	502.32
総合計	8	54.06	12	59.40	1	0.89	9	354.13	4	58.07	11	373.96	1069	11156.32

玉の未成品で、二次調整が一部にある。57は平玉で、径1.6cmを測る。

その他　第40図58・60は頁岩の平玉状を呈する。敲打や研磨痕は見えない。59・61は灰色～白色の石材で、平玉状を呈する。調整等は見えない。62は淡灰色の球状を呈し、丸玉の可能性がある。

第７節　出雲国府跡出土の遺物（第41～44図）

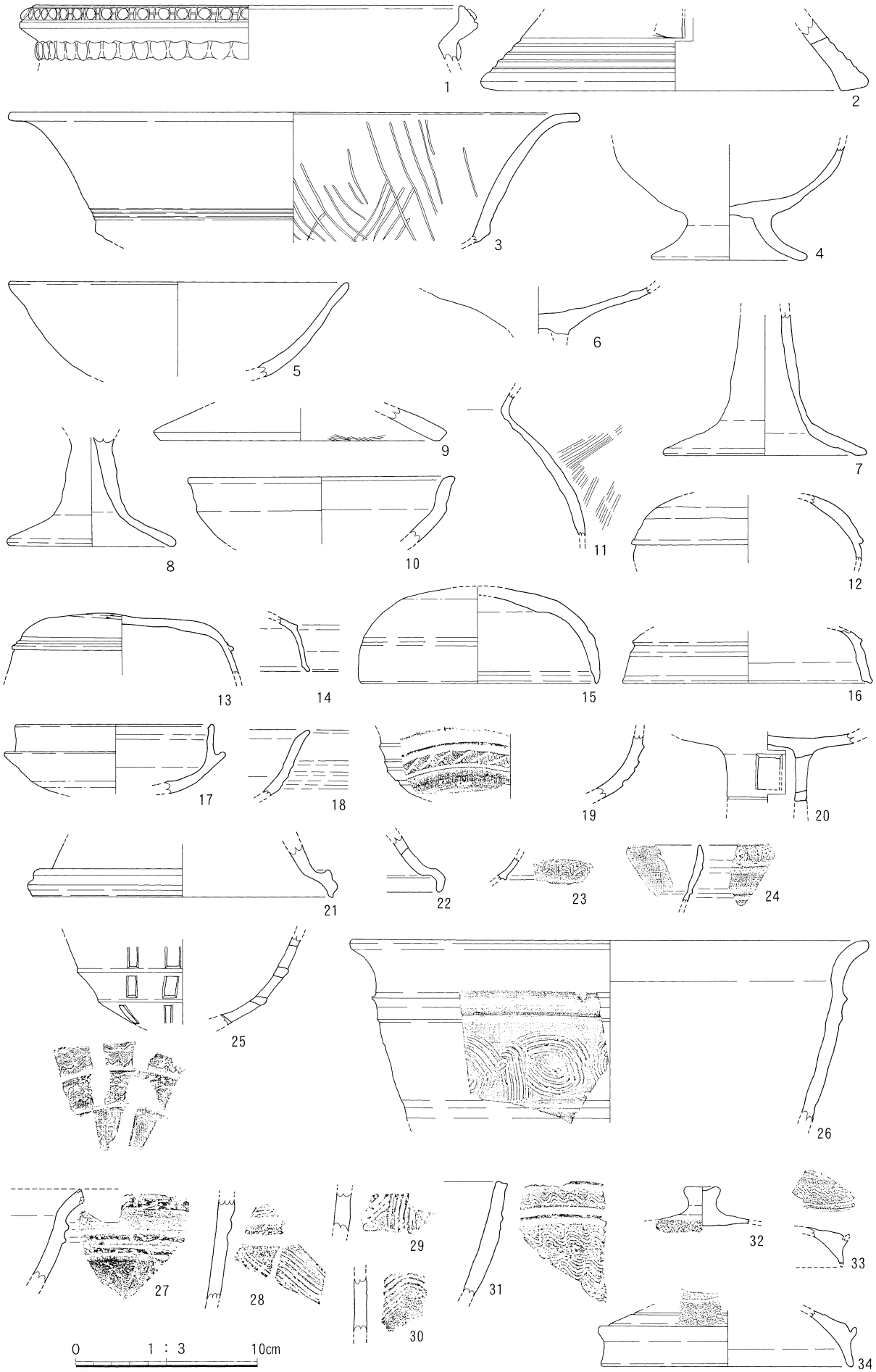
出雲国府跡から出土した遺物はコンテナ150箱にのぼるが、耕作が継続しているため、細片になり、接合することは困難であった。耕作土から出たものを中心に実測できた遺物を掲載した。

第41図１～２は弥生土器で、１は口縁部に凹線文を３条施し、それに縦方向に刺突がはいる。その上に円形浮文が施され、頸部には突帯が巡る。２は高坏の脚部で、５条の凹線文に、透孔が施される。３～９は土師器高坏で、３は外面に明瞭な稜があり、内面には放射状の暗文が施される。４は低脚である。５の坏部は丸みを持ち立ち上がる。６は坏部で、口縁部が剥離している。７・８は「ハ」の字に広がる脚部を持つ。９は脚端部に面を持ち、黒斑がある。10・11は土師器甕で、10は口縁端部に面を持ち、複合口縁の名残りがある。11は頸部から体部にかけての破片で、外面のハケメが残り、煤が付着する。

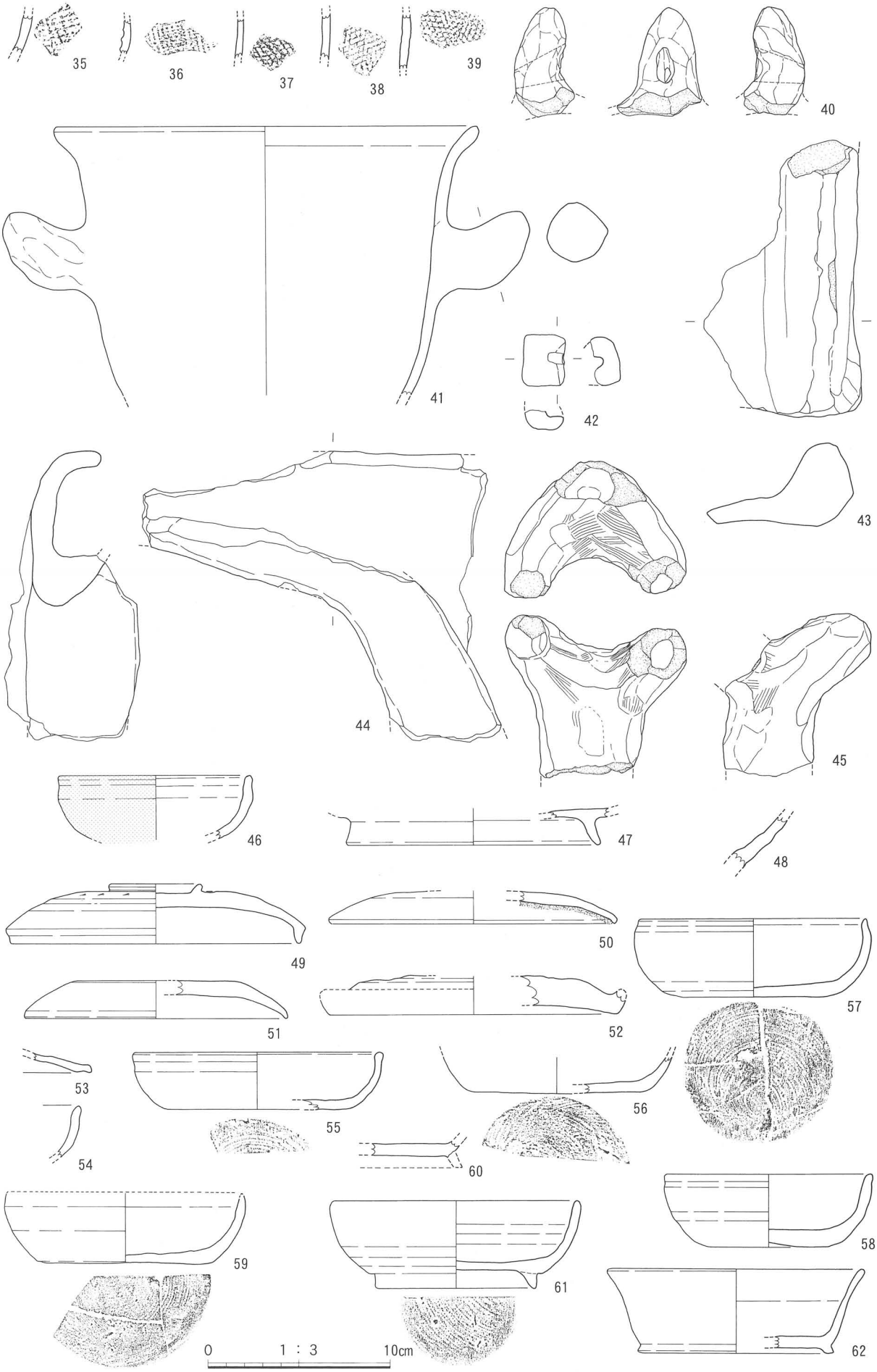
12～16は須恵器坏蓋である。12・13は焼成不良で、突帯が横方向に出る。14は口縁端部に明瞭な段を持つ。15は天井部ヘラケズリで、２条の沈線で突帯を表現する。16は立ち上がりの低い口縁部で、端部は面を持ち、突帯もしっかり表現される。17は須恵器坏身で、底部は緑色の自然釉が付着する。18～22は須恵器高坏で、18は口縁端部が外傾する。19の坏部は沈線の間に丁寧な波状文が施され、稜も明瞭である。20は３方向に２段以上の方形の透孔がある。21の端部は断面三角形を呈し、22は丸みを持つ。23・24は須恵器瑳と思われる破片で、波状文が施される。24は口縁部が内傾する。25は須恵器二重瑳と思われる。方形の透孔が３段以上あり、透孔間には波状文が施され、下段や内面は回転ナデ調整である。26～31は須恵器器台で、26・28～30は６条１単位の櫛描きの組紐文が施される。前回報告分の第31図12と同形である。27は外反する口縁部に２条の稜がつき、櫛描き波状文が施される。31は口縁端部は平坦で、沈線の上下に櫛描き波状文が施される。32～34・図版46-2・3・4は陶質土器蓋と思われる。32は中央が少し凹むつまみが付き、一部に櫛描き波状文が残る。33・34・図版46-2・3は断面三角形を呈し、上方に稜が立つ。櫛描き波状文と沈線が天井部に施される。

第42図35～39は軟質土器で、35の外面は方形のタタキで、煤が付着する。36～39は長胴甕の破片と思われ、外面が黒色、内面が橙褐色で、外面には菱形のタタキが残る。40は甑の把手で、長楕円形の孔があき、把手先端は鋭い。41は甑で、外反する口縁部に太くて短い把手が付く。42は形態不明の土製品で、把手の可能性がある。断面半円形で、円形の刺突がある。43・44は竈で、43は焚口付近、44は口縁部から庇付近である。45は土製支脚で、３方向に突起が付き、１方向の突起は挿入する接合方法である。46は土師器坏で、口縁端部がわずかに屈曲し、外面は赤彩される。形態が須恵器坏に似る。47は土師器皿で、高台が付く。48は内面が黒色を呈する坏である。49～53は須恵器坏蓋で、49は内面が摩滅している。50は内面に墨痕がある。51は口縁端部がわずかに屈曲する。52の器壁は厚く、口縁端部が上方に上がる。内面が摩滅し、外面にはヘラ記号がある。53は器高が低く、口縁端部がわずかに屈曲する。54～59は須恵器坏で、54は外面及び口縁端部内面に煤が付着する。55～58は口縁端部がわずかに屈曲する。59は底部から丸みを持ちながら立ち上がる。

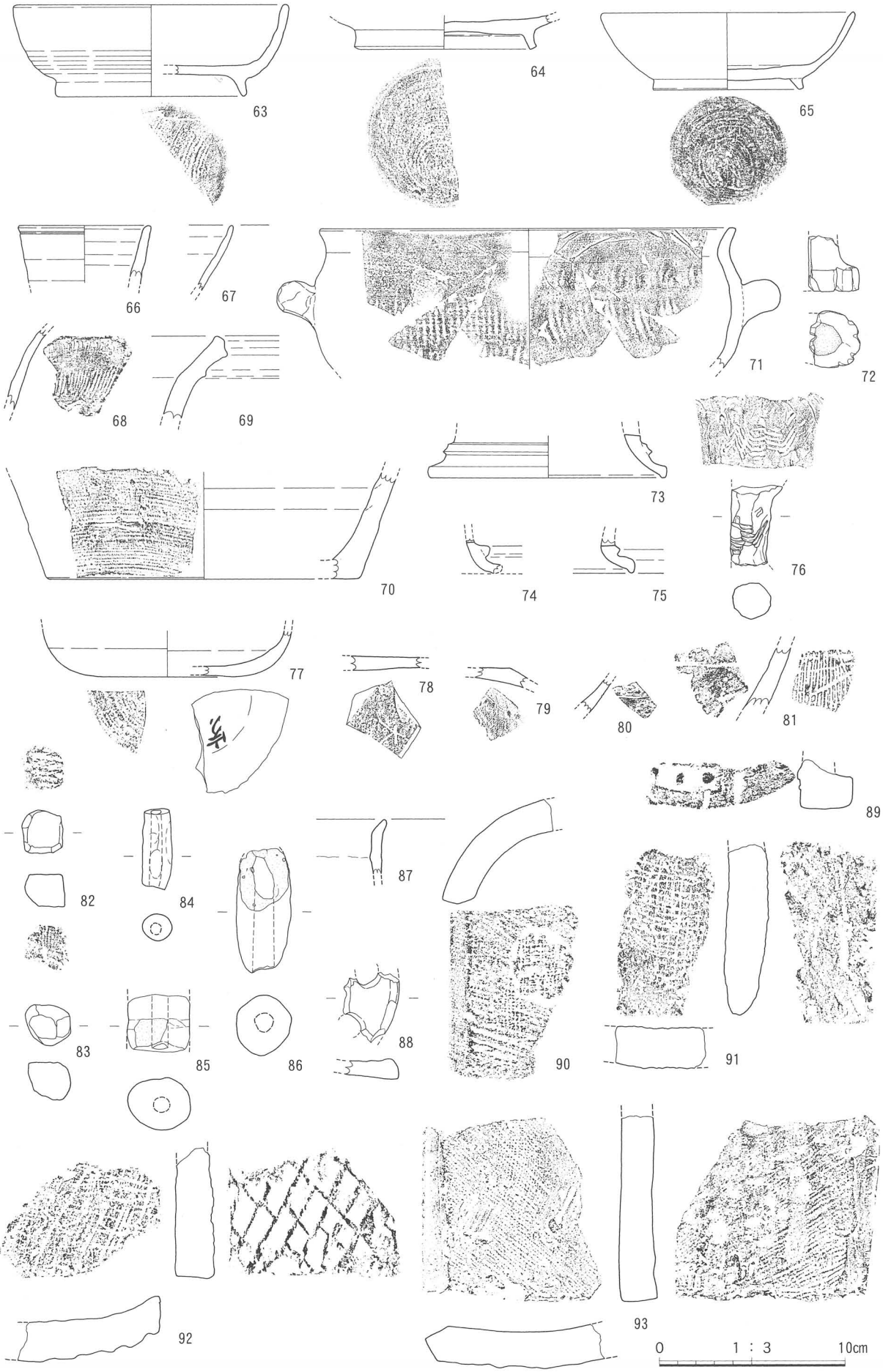
第42図60～第43図65は須恵器坏で、高台をもつ。60は高台が剥離している。61は静止糸切りで、



第41図　出雲国府跡出土遺物実測図（1）

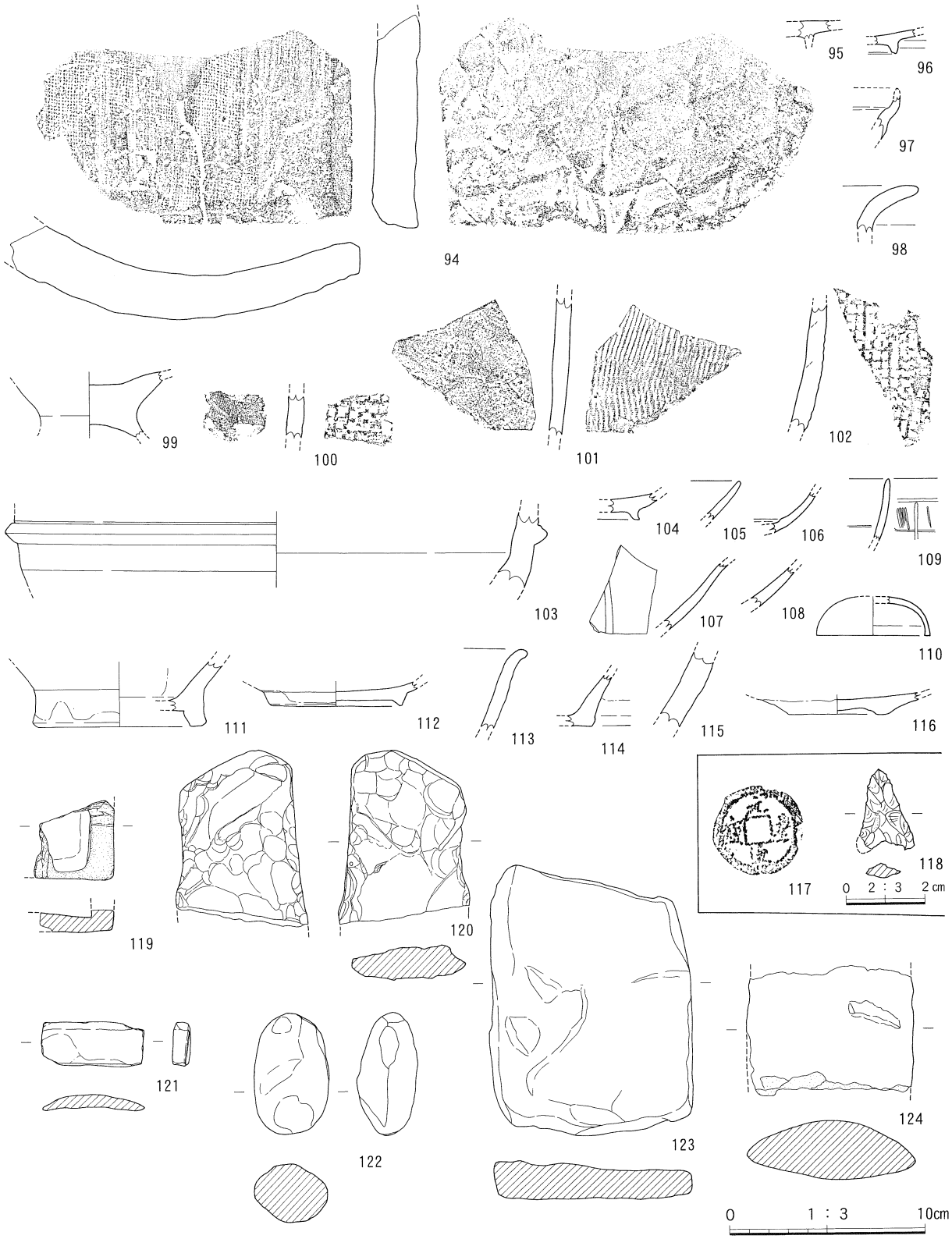


第42図　出雲国府跡出土遺物実測図（2）



第43図　出雲国府跡出土遺物実測図（3）

62の口縁部は外傾する。64は皿の可能性もある。66・67は須恵器長頸壺で、66の口縁端部は沈線状になる。68は須恵器瑳の頸部で、粗い波状文がナデで一部消えている。69は須恵器甕の口縁部で、肥厚し、一条の稜がある。70は須恵器鉢で、内面が摩滅している。71は須恵器把手付き鉢で、内外面にタタキが残る。72は須恵器鉢あるいは硯の脚である。獣足で、前に4条、後ろに1条の刻みで



第44図　出雲国府跡出土遺物実測図（4）

脚を表現している。73～75は須恵器硯の脚であり、透孔が残るものもある。76は須恵器の把手と思われるが、上下は不明である。表面には波状文が施される。

77は須恵器坏で、底部に「家」と思われる墨書がある。78は須恵器の外面に「大」のヘラ描きがある。79は須恵器蓋と思われ、内面に「在」と思われるヘラ描きがある。80は須恵器で、外面に1条の沈線と文字と思われるヘラ描きがある。外面に漆が付着する。81の須恵器の表面には10条以上のヘラによる沈線がある。82・83は円形加工品で、82は瓦を再利用している。

84～86は土錘で、84は須恵器、他は土師器である。87は製塩土器で、胎土は粗い。88は円形の孔があく土製品で、一面は被熱している。七輪の中蓋か窯道具と思われる。第43図89～第44図94は瓦である。89は軒丸瓦で、珠文帯が巡る。91の凹面は粗い布目である。93の凸面は糸切りが残る。94は須恵質で、離れ砂が認められる。

第44図95・96は緑釉陶器である。硬質で、表面には淡い緑色の釉が施されている。10世紀前半の京都産の思われる。97は瓦質土器と思われる破片で、内外面暗灰色である。口縁部は受け部を持つ。98は瓷器系陶器と思われ、内外面茶褐色である。口縁部が大きく外反する。99は高台を持つ土師器坏である。100～102は中世須恵器甕で、100・102の外面は格子タタキである。103は備前壺と思われ、突帯が付く。

104～107は越州窯系青磁で、104は碗あるいは皿のⅠ類、105は碗Ⅰ-1類、106は皿あるいは坏のⅠ類、107は外面にヘラ押しによる縦線があり、碗Ⅰ-2b類である。108は白磁碗Ⅰ類で、淡白色を呈する。109は広東系の白磁碗で、外面にヘラによる区画線と櫛描き文が施される。110は外面のみ施釉された白磁合子蓋で、口縁端部は平坦である。111は白磁水注Ⅲ-1類である。112の青白磁碗は、高台が無釉で、高台内に窯道具痕が残る。113は黄褐色を呈し、口縁端部は外反する。龍泉窯系青磁D類。114・115は中国製陶器で、114は内面の一部にも釉が着く。115の鉢は内面が摩滅し、胎土中には砂粒を多く含む。116は肥前系陶器皿で、砂目が残る。

117は行書の元豊通寶で、背面には文様はなく、大きさから模鋳銭と思われる。118は黒曜石の石鏃で、凹基式である。119は頁岩の石硯で、墨痕が残る。120は流紋岩製の打製石斧である。121は扁平片刃石斧と思われ、一方の先端は鋭い。やや湾曲している。122は敲石で、使用痕が両端にわずかに残る。123は扁平な砥石である。124は凝灰岩で、両端は鋭く、磨石と思われる。

なお、104・106・107・109・110・117・119は前回報告分で非掲載により今回実測した。

図版46-1は土師器あるいは弥生土器で、やや厚い器壁が湾曲し、薄い器壁が外反して付く。内外面赤彩される。6は土師器あるいは弥生土器で、胎土中に黒曜石片が混入している。10は玉髄の剥片である。一部に自然面を残すが、他は剥離している。11は石鏃の未成品の可能性がある剥片で、平面形はいびつな三角形で、二辺に細かい剥離調整が入る。

註

（1）以下、墨書土器については島根県古代文化センター平石充主任研究員に指導を得た。

（2）以下、貿易陶磁の分類は太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡』XV　2000によった。

（3）下駄と扇の樹種同定は文化財調査コンサルタント㈱に委託した。

（4）SX02、SX03は出土遺物から近代以降の土坑と判明した。

第４章　範囲確認調査

第１節　平成14（2002）年度の調査（第６図）

出雲国府跡では平成11年度から発掘調査を開始し、現在本調査を行っている周辺においても継続して確認調査を行っている。平成14年度は平成13年度に実施した第19・20トレンチの結果を受け、本調査区西側において建物や石敷き遺構などの広がりを確認するために、第26トレンチを設定した。また、東側で確認されている４号溝の続きを確認するために、第27～29トレンチを設定した。

さらに、史跡出雲国府跡は広く、本調査区外について遺構や遺物の内容・広がりが不明なため、各所にトレンチを設定し、遺構の内容を調査した。古代山陰道の遺構を確認するために、第30・31トレンチを設定し、また、樋ノ口地区での遺構や遺物の広がりを確認するために、第32トレンチを設けて調査を行った。

第26～29トレンチの設定では、平成11年度に設定した調査用区割りに準拠した。その基準は国土座標第Ⅲ系（日本測地系）Ｘ＝－63400・Ｙ＝85400を原点として、10ｍ間隔に北へＮ10・Ｎ20・Ｎ30……、東へＥ10・Ｅ20・Ｅ30……、西へW10・W20・W30……と表すこととした。

（１）トレンチ調査の概要

第26トレンチ（第47図）　一貫尻地区で、２ｍ×16ｍで東西方向に設定したトレンチである。表土（耕作土）下0.4ｍのところに遺物包含層（３層）があり、調査区東端から7.5ｍ前後の範囲では遺構が存在する黄褐色粘質土の地山が検出され、柱穴が１つ確認できた。南壁に沿ってサブトレンチを設定し調査を実施すると、地山は西側に緩く傾斜していることが判明した。堆積土は灰色系砂層と、黒褐色または青灰色粘質土が互層状に堆積しており、軟質で、停滞した水付の堆積土である。遺物は古墳時代中期から12世紀代まで存在する。なお、堆積土は古環境・植生復原のため花粉分析を実施している。

西側へ傾斜する窪地は第19・20トレンチでも確認され、旧河道または池であった可能性が高いと評価されており、窪地が北側へ続くことが確認できた。しかし、第19・20トレンチや昭和44（1969）年の一貫尻調査区で検出されている護岸施設と考えられる石敷はない。なお、この地点は平成15年度に本調査されている。

第27トレンチ（第47図）　大舎原地区で、東西方向に２×20ｍで設けたトレンチである。調査区西端では耕作土下0.5ｍほどのところで地山である橙灰色粘質土が確認され、幅30㎝の溝が検出された。この地山は西側に向かって下がっており、西端から6.5ｍ付近で灰褐色砂質土になる。耕作土下30～40㎝はほとんど遺物を含まず、上部が削平されている可能性がある。下層ではわずかに溝状の土層を確認でき、これが４号溝の痕跡の可能性があるが、湧水があり十分な調査ができなかった。

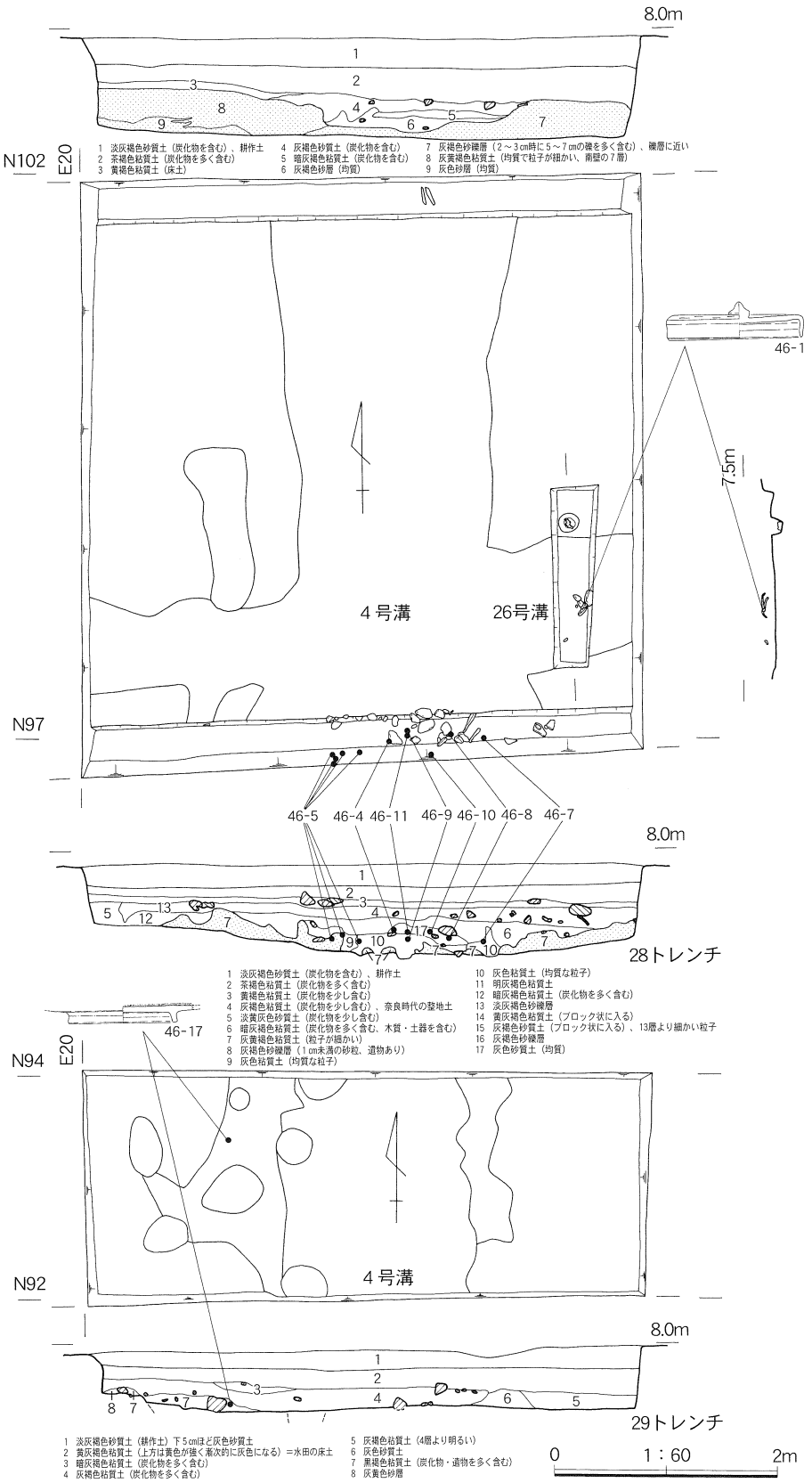
第28トレンチ（第45図）　大舎原地区で、５×５ｍのトレンチである。耕作土下0.4ｍまで、淡灰褐色砂質土や茶褐色粘質土の耕作土が堆積していた。遺構検出面は東方向に低く傾斜し、北側では７層の砂礫層が検出面になり、遺構の上部が削平されていると思われる。

４号溝は北に続き、北壁で溝床面の標高は7.1ｍ、深さ30㎝を測る。４号溝の埋土は北壁で４～

6層、南壁で6・9・10・17層で、砂質土と粘質土が堆積し、遺物が多く出土する。4号溝に十字に交わる幅1m前後の26号溝が検出された。4号溝と埋土は同じで、切り合い関係は不明である。

第29トレンチ（第45図）　大舎原地区で、東西方向に2×5mで設けたトレンチで、第28トレンチの南3mに位置する。1層は耕作土で、4～6層を除去すると、4号溝や柱穴の掘形が検出できた。4号溝上に盛土がされ、新たに遺構が掘られていることが前回の調査で確認されており、4層以下は盛土の可能性もある。調査区南西からはやや大形の石が検出されたが、性格は不明である。遺構内は未調査である。

第30トレンチ（第47図）　鍛冶ヶ免地区で、南北方向に2×10mで設けたトレンチである。調査時点で湧水があり十分な調査ができなかったが、耕作土下0.4m前後で暗灰褐色粘質土（3・5層）が確認され、その



第45図　出雲国府跡第28・第29トレンチ遺構実測図

下層の砂礫層から遺物がまとまって出土した。

遺物は礫の間から砂に交じって出土した。調査区の南端と北端は礫が少なく、落ち込んでいた。また、南端から1.3mと4.8m地点にはやや大きな礫が東西に並んでいるようにも見受けられた。

第31トレンチ（第47図）　鍛冶ヶ免地区で、第30トレンチの北側10mに南北方向に2×10mで設けたトレンチである。調査時点で湧水があり十分な調査ができなかったが、耕作土下0.3m前後で暗灰色粘土が確認され、わずかな遺物と杭が出土した。下層は灰色粘土が堆積していた。

第32トレンチ（第47図）　樋ノ口地区で、南北方向に2×10mで設けたトレンチである。耕作土（茶褐色粘質土）の下、0.2～0.3mの厚さで灰黄褐色粘質土（2層）が堆積し、遺構面が検出された。遺構面からは南北に並んだ方形の柱穴や溝などの遺構が検出された。遺物は1・2層から須恵器、瓦、金属滓、漆付土器などが出土した。

（2）第28・29トレンチ出土遺物（第46図）

第46図1は26号溝から出土した須恵器蓋で、垂直に下る口縁部に大形の宝珠つまみがつく。短頸壺の蓋の可能性がある。2～14は4号溝から出土した遺物である。2は須恵器坏蓋で、口縁端部はわずかに屈曲する。内面に墨痕がある。3～6は須恵器坏で、6の体部には突帯がつく。7・8・10・12は須恵器高台付坏である。9・11は須恵器高台付皿である。11は内面が摩滅し、口縁端部は厚く丸い。13は須恵器長頸壺で、頸部に1条の沈線がある。14は幅3.3cm、厚さ1.3cmを測り、孔が3ヶ所存在するが、両端が欠損しており、全形は不明である。15は須恵器坏蓋で、回転糸切り後、大形の宝珠つまみをつける。内面には墨痕がある。16は須恵器坏で、口縁端部はわずかに屈曲する。17・18は須恵器高台付皿で、17の内面には墨痕がある。19は須恵器壺で、口縁部は上下に肥厚し、中央が窪む。20は須恵器甕片を利用した円形加工品で、両側にタタキ痕が残る。21は須恵器高坏で、坏部に筒状の脚部が接合され、粘土で補強されている。22は軒丸瓦で、外区に唐草文と珠文帯をめぐらす。23は形態や傾きが不明なものである。内面には布目と青海波文のタタキが残り、外面はヘラケズリされ、端部は明瞭に処理されている。瓦か。24は流紋岩の打製石斧片と思われる。

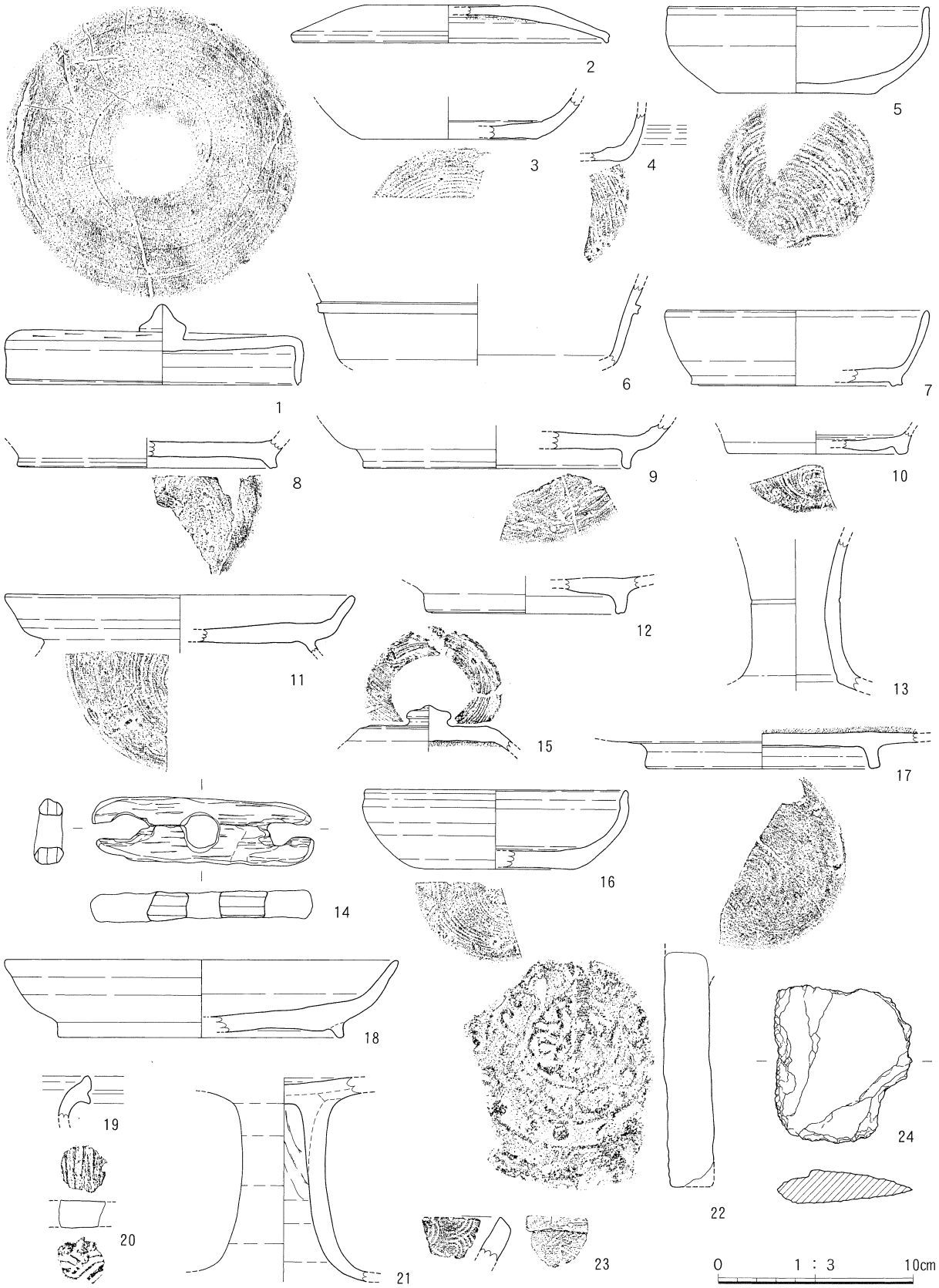
（3）第26トレンチ窪地出土遺物（第48図）

第48図1は須恵器坏蓋で、口縁端部に段を有し、肩に明瞭な稜を持つ。胎土に銀色に光る粒子を含む。2は須恵器高坏で、透孔の痕跡がある。3は須恵器壺で、体部下半には内外面タタキ痕が残る。4は須恵器坏身で、立ち上がりが高く、口縁端部に段を有する。5は土師器皿で、内外面に赤彩される。6は土師器甕で、外面は粗いハケメ調整で、煤が付着する。7は土師器高坏である。8は栓と思われる木製品で、扁平な栓部に円形のつまみが付く。9は厚さ2.5cmの板状木製品で、表面に墨痕がある。図版46-9は肥前系陶器灰釉皿で、口縁部のみ淡緑灰色釉がかかる。

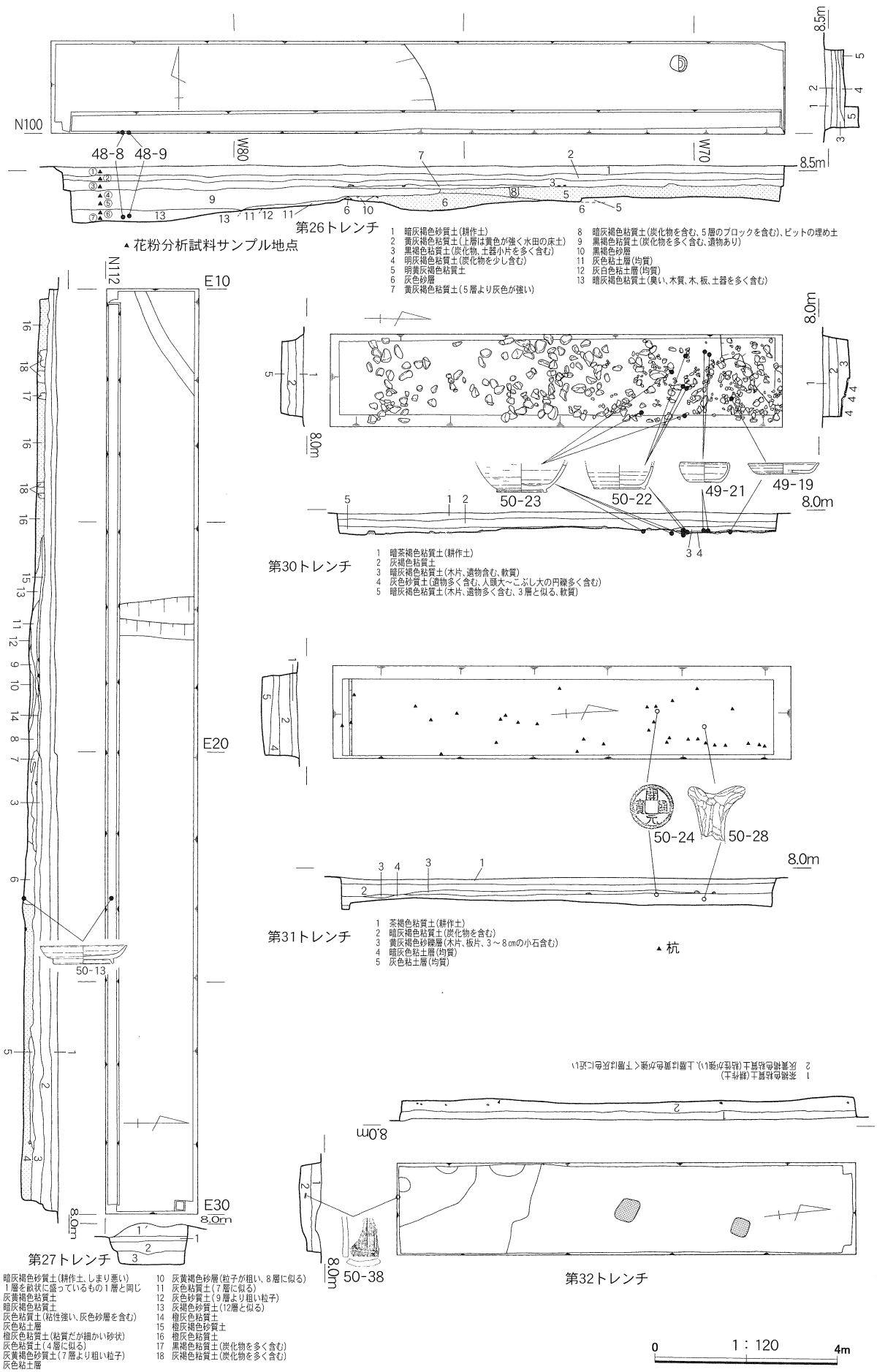
（4）第26・27・30～32トレンチ出土遺物（第49・50図）

第49図1～9は第26トレンチの上層から出土した。1～3は土師器坏で、柱状高台を持つ。底部は回転糸切りである。1は器壁が厚く、短い高台である。3の高台端部には面を持つ。4は「ハ」の字に広がる高台を持つ白色の土師器坏である。5は甑の把手で、上面に幅5㎜の溝があり、先端部は切り落とされ平坦になっている。6は小型の須恵器壺で、高台を持つ。7は須恵器坏蓋と思わ

れ、天井部はヘラ切りである。8は須恵器坏身で、立ち上がりは低い。9は砥石で、4面使用され、溝が残る。



第46図　出雲国府跡第28・第29トレンチ出土遺物実測図



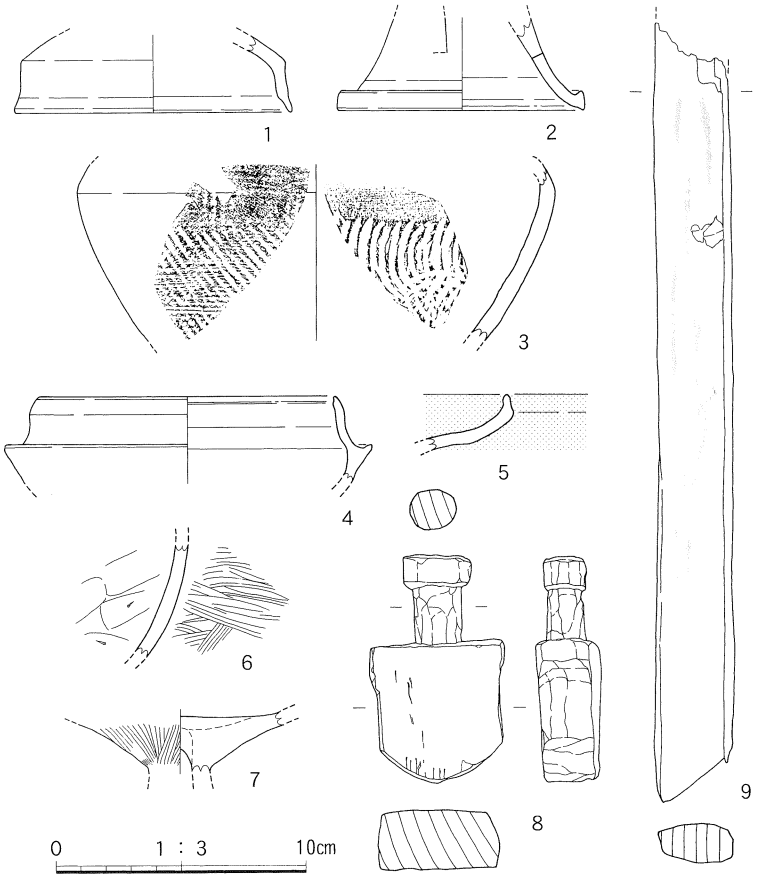
第47図　出雲国府跡第26・第27・第30～32トレンチ遺構実測図

10～17は第27トレンチ出土で、遺構には伴わない。10は土師器皿で、内外面に煤が付着する。11は高台が付く土師器坏である。12は柱状高台で、土師器の皿あるいは坏であろう。表面は赤い。13は須恵器の高台付皿で、底部内面に重ね焼きによる色調の違いがある。14は須恵器坏で、底部は糸切りである。15は須恵器甕で、外面は格子タタキである。16は平瓦で、両面に一部糸切り痕が残る。17はメノウの原石で、加工痕はない。

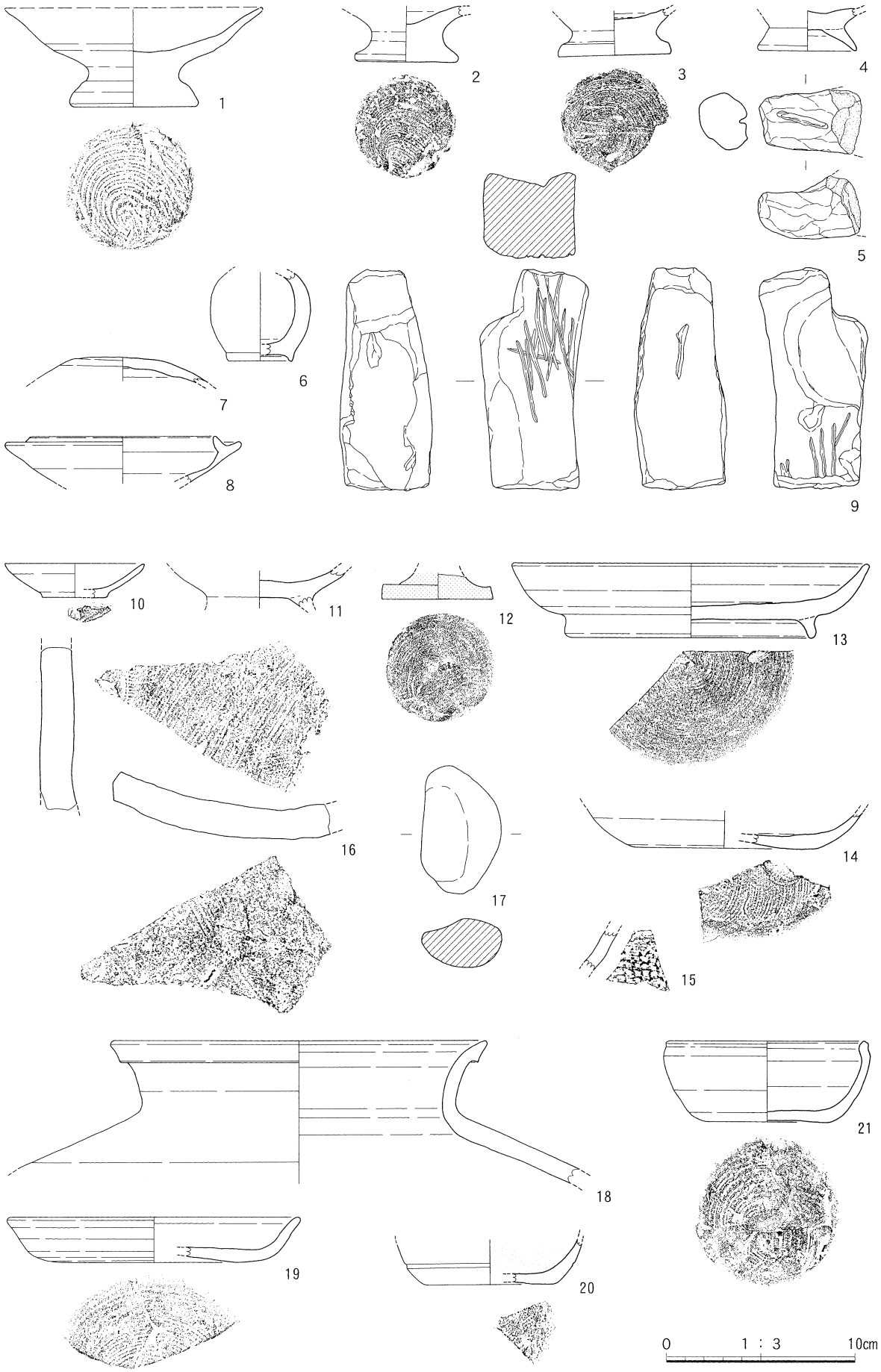
第49図18～第50図23は第30トレンチ出土である。18は須恵器甕で、口縁端部は肥厚する。19は須恵器皿で、口縁端部がわずかに外傾する。20・21は須恵器坏で、20の内面には漆が付着し、21の口縁端部はがわずかに屈曲する。第50図22は須恵器坏で、高台を持ち、底部に「σ」の墨書がある。23は須恵器壺で、高台が付く。

第50図24～35は第31トレンチ出土である。24は開元通宝で、裏側には文様・文字はない。大きさから模鋳銭である。25・26は軟質の甑と思われ、把手が付く。外面はタタキ痕があり、煤が付着する。27は土師器甕で、外面はハケメ調整である。口縁部内面に煤が付着する。28は土製支脚で、3方向に突起が付く。29は須恵器の脚部で、風字硯の脚と思われる。30は須恵器坏蓋で、内面に「嶋」と墨書される。31は須恵器壺で、外面に1条の沈線がある。32は須恵器坏蓋で、口縁端部はわずかに屈曲する。33・34は須恵器坏身で、立ち上がりが高い。33の胎土は精良である。35は平瓦で、凸面にはタタキが明瞭に残る。

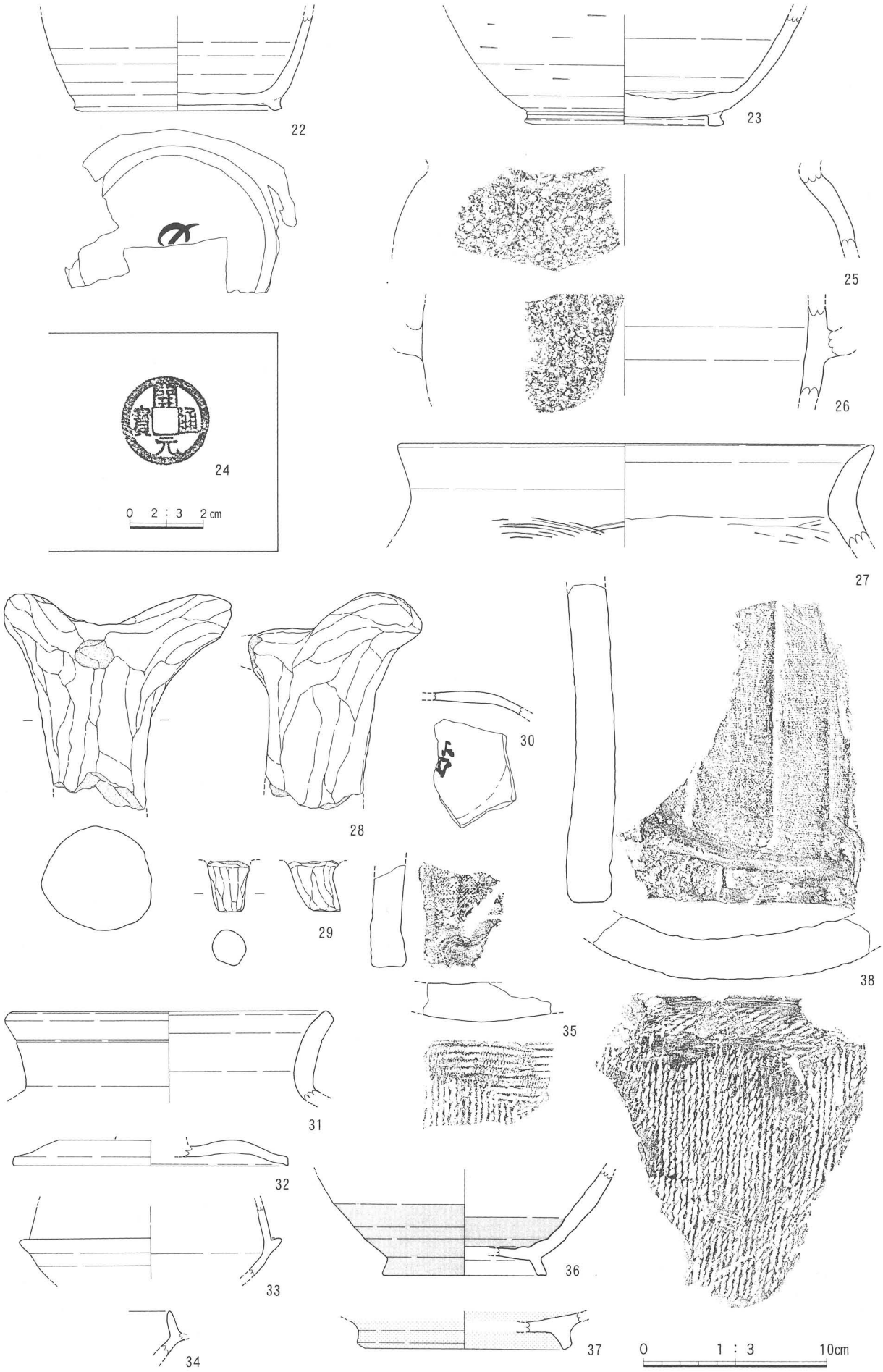
第50図36～38は第32トレンチ出土である。36の須恵器壺は高台を持ち、内面及び断面に漆が付着する。37は土師器坏あるいは皿で、内外面は赤彩される。38は平瓦で、凸面は縄目タタキである。



第48図　出雲国府跡第26トレンチ出土遺物実測図



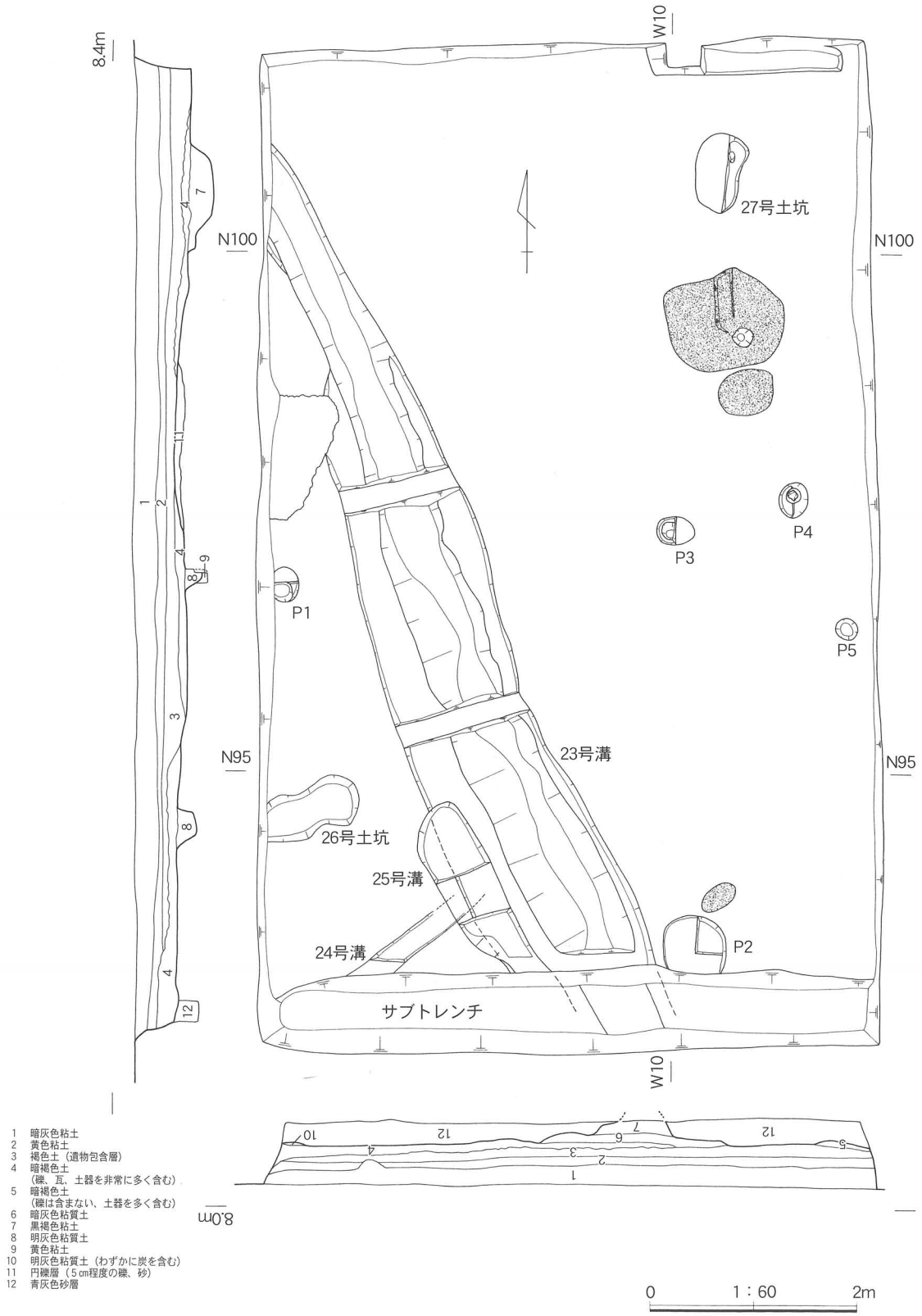
第49図　出雲国府跡第26・第27・第30～32トレンチ出土遺物実測図（1）



第50図　出雲国府跡第26・第27・第30～32トレンチ出土遺物実測図（2）

第２節　平成15（2003）年度の調査

大舎原地区Ⅱ区北調査区の北側の広がりを確認するため、第33トレンチを設定した。設定に際しては平成11年度からの調査成果と図面上での整合性を持たせるために、旧測地系に準拠した前年度



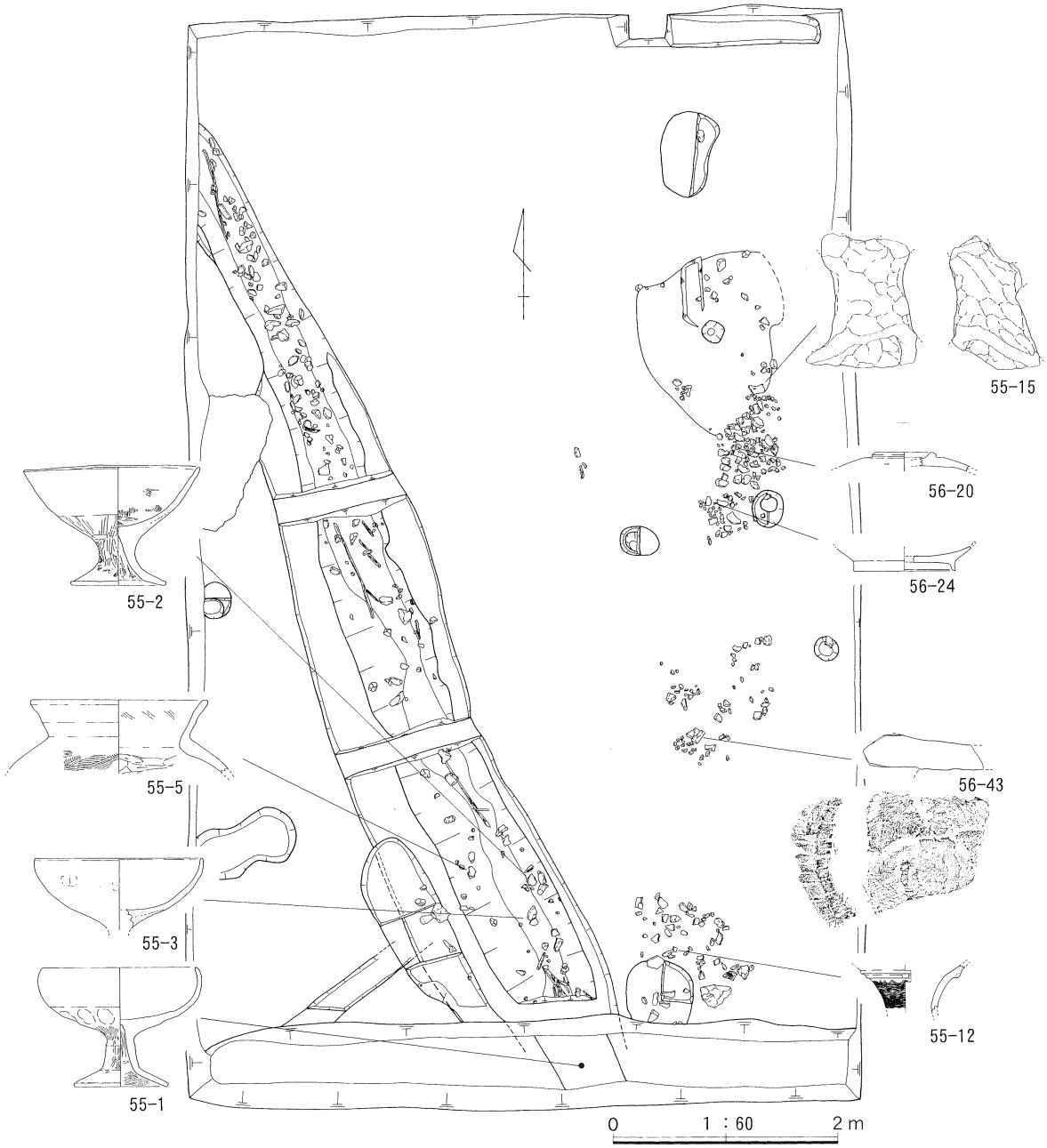
第51図　出雲国府跡第33トレンチ遺構実測図（１）

からの調査区割りを踏襲した。

また、古代山陰道（正西道）の遺構を確認する目的で深坪地区に第34トレンチを、枉北道の遺構を確認する目的で神田地区に第35トレンチを、遺構の広がりを確認するために水ノ尻地区に第36トレンチを設定した。

（1）第33トレンチの概要

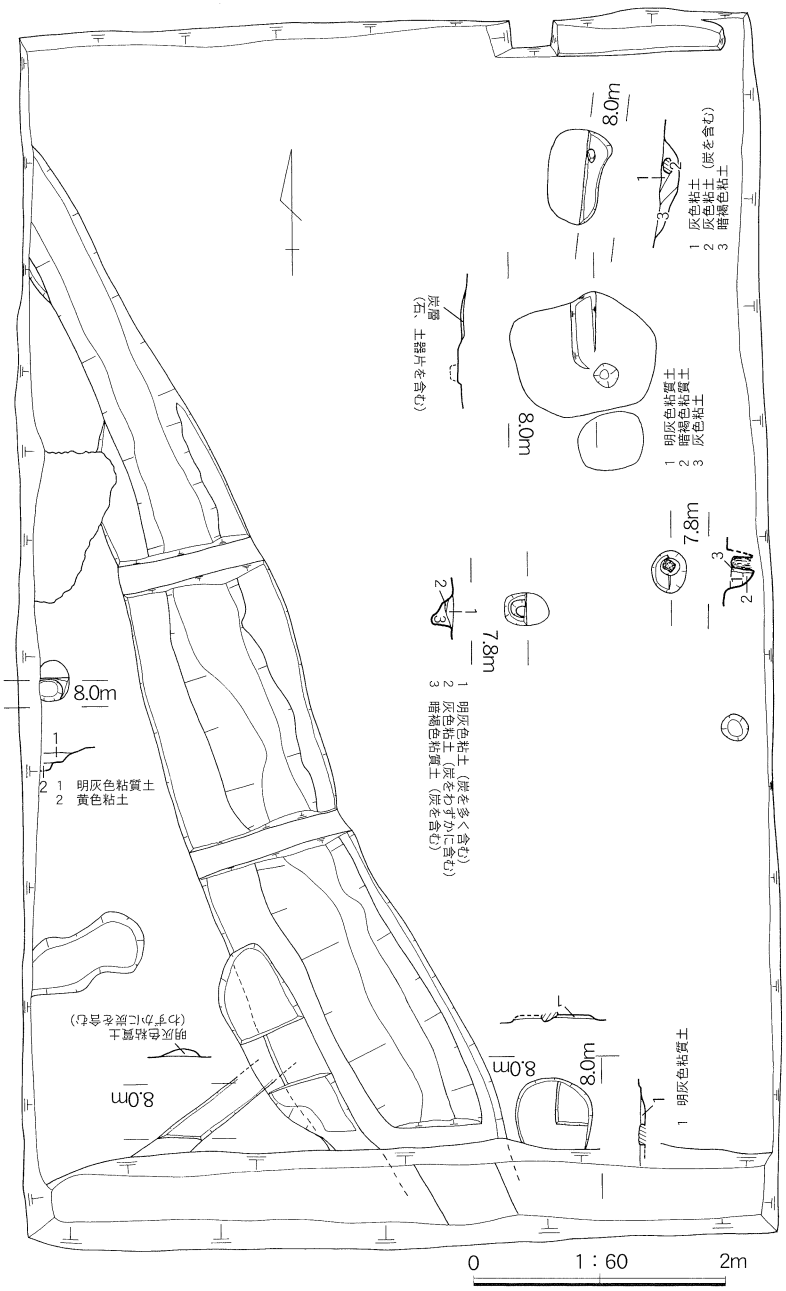
第33トレンチ（第51図）　大舎原地区で南北方向に6×10mで設けたトレンチである。トレンチ西壁が出雲国府跡推定中軸線上に当たり、門跡と考えられる9号建物跡からは北へ10mの位置である。推定国府中軸線上であり、推定門跡の真北に位置することから、9号建物へ続く道路などの存在が考えられる位置である。また、前年度に調査した2区北調査区の東18mに当たり、2区北調査区で検出した12・15号溝の東側への広がりを確認することを目的としてトレンチを設定した。



第52図　出雲国府跡第33トレンチ遺物出土状況実測図

第33トレンチは、表土・耕作土が周辺の他のトレンチに比べ厚く、地表下0.5～0.7mまで及んでいる。耕作土の下には薄い遺物包含層を挟んで、標高約7.5mのところで人頭大からこぶし大の礫を多量に含む層（暗褐色土）が見られた。この層には多くの遺物が含まれており、洪水等により一度に流れ込んで堆積したものである可能性が高い。その直下には青灰色砂層の堆積が見られ、遺構面となるようなしっかりした基盤層は確認できない。遺構検出面は青灰色砂層であり、砂層上面に溝・土坑等の遺構が見られる。

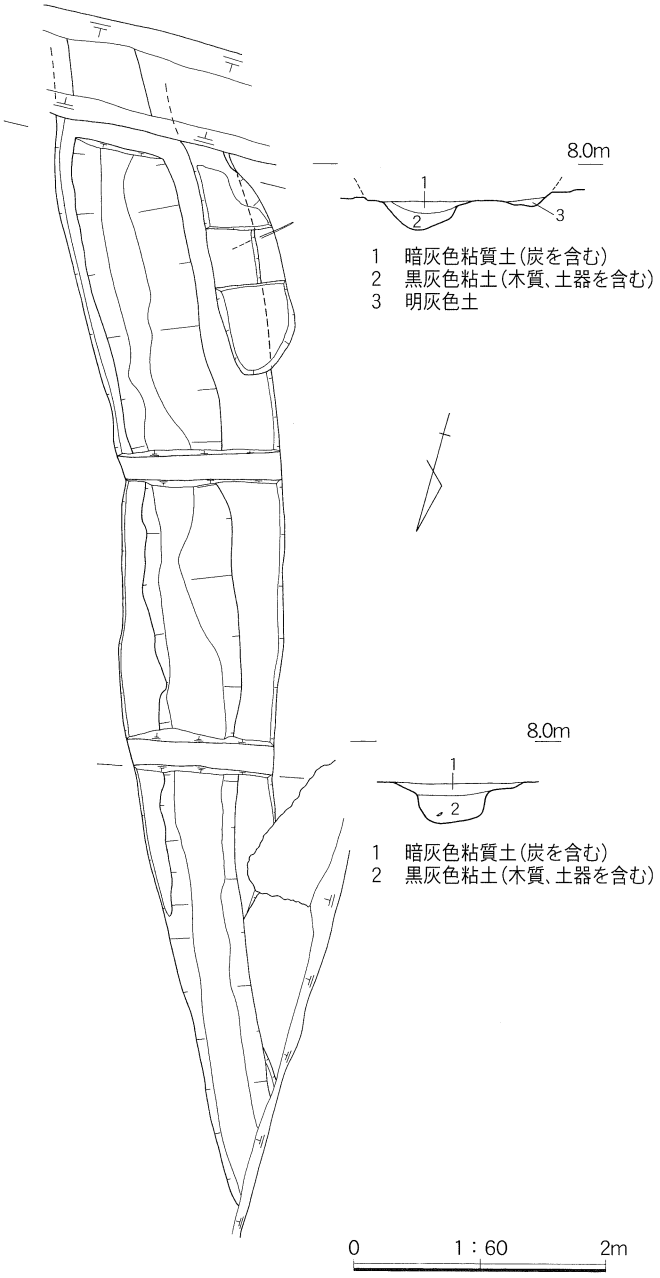
第33トレンチで検出した遺構には、トレンチ南壁中央から北西に延びる23・25号溝、それらと直行する24号溝の他、土坑３基、柱穴５穴、焼土を含んだ炭溜まり３ヶ所などが見られた。



第53図　出雲国府跡第33トレンチ遺構実測図（２）

遺構検出当初には23号溝北西側で多量の石が集積されたかのように見える部分があり、その部分が、平面的には23号溝を切っているようにも見えたことから半裁して掘削したが、下面に向かうに従って、次第に広がっており、砂層よりも下面に広がる古い堆積（円礫層）であることが判った。この円礫層からは遺物はまったく出土していない。この下面円礫層の問題など、土層に判断しがたい点が多かったため、33トレンチ南側に深さ30cm程度のサブトレンチを設定し、青灰色砂層下方の状況を確認した。青灰色砂層下方では、水性堆積と思われる細かい砂層が続くばかりで、基盤層や遺物を含む土層は見られなかった。青灰色砂層の上面に広がる暗褐色土は、前述のように洪水等による堆積と判断され、粗密は見られるもののトレンチ全面に広がっている。

遺構面検出に際しては、上面の遺物を含んだ暗褐色土を除去してから行ったが、遺物や礫の一部には、下面の砂層にめり込んで検出されるものも見られ、遺構面直上遺物と判断しかねないものも



第54図　出雲国府跡第33トレンチ・23号溝実測図

多かったため、それらについては実測して取り上げることとした（第52図）。しかし、遺構外出土の遺物には古墳時代と考えられるもの（第55図12）から、古代の須恵器（第56図20、第56図24）、軒丸瓦（第56図43）までが含まれており、一括遺物ではないことが確認できた。一方、23号溝中には多量の木質や小石の他、ほぼ完形に近い土器類（第55図1～3、5）が含まれており、いずれも古墳時代中期と考えられるものである。

23号溝は、幅約１m、深さ約40cmで、南北約10mに渡って検出した。23号溝の断面は階段状に掘り込まれており、検出面での最大幅が140cm、下段最上部の幅が約84cm、検出面と溝底部の比高差が約30cmである。床面の標高は7.3～7.5mで、北側へわずかに傾斜している。砂の面に掘り込まれているため、検出直後から壁面が崩落し始めており、この砂層が遺構掘り込み面とは考えがたい。よって、上面が一旦削平され、その直上に暗褐色土が堆積したものと考えられる。

23号溝以外の溝・土坑・ピットから出土した遺物には、わずかに土師器小片が見られるのみで、遺構の時期を決定できる資料は見られない。

25号溝は、23号溝を切り込んで掘られている浅い溝で、調査区南壁から23号溝に平行して伸び、約３mで消滅する。深さ12cmしかなく、埋土は暗灰色土である。第33トレンチより南側については、３区の２号柵列付近から北西に伸びる溝が25号溝に連続するものと思われるが、３区ではこの溝を掘削していないため不明である。25号溝の埋土は白色砂層で、水が流れていたものと考えられる。遺物はまったく含んでいなかった。23号溝と主軸方向が同一であることから、23号溝の掘り直しと考えられ、古墳時代の遺構であろう。

24号溝は、23・25号溝に直交して南西－北東方向に続く小さな溝で、24号溝に切られて消滅している。検出長さ約1.3m、幅約25cm、深さ約８cmの小さなもので、23号溝に連結していた可能性もある。南側の３区では確認できなかった。

26号土坑は幅約42cm、深さ約20cm、検出長65cmで調査区西壁へ続いている。埋土は明灰色粘質土で、土師器小片が含まれていた。出土土師器は小片のため、時期性格は特定できない。

27号土坑は調査区北東で検出した長径約75cm、短径約41cm、深さ約13cmの不整形な小土坑である。遺物は伴っていない。

P1・3～6の柱穴はいずれも直径30cmほどの小さなもので、P4には柱根が残る。P4・5・6は、一直線に並んでおり、P3・4を結ぶ線がそれと直交する。P4～5間が1.4m、P4～6間が1.6m、P3～4間が1.3mである。P4～5を結ぶ線は23号溝とほぼ並行しており、同時期の建物跡である可能性がある。ほぼ同様の規模のP1に関しては他の柱穴との関連は見られない。最も深いP1でも25cmしか残っていない事から、上面を大きく削平されていると思われる。遺物は出土していない。

P2は直径約60cm、深さ5cmほどの浅いくぼみとして検出した。底面は平らで、明灰色粘質土が入っている。

第33トレンチでは、炭溜まり3箇所が見られる。検出面では浅い窪みとして認識されるが、さらに上方から掘り込まれた土坑の下部だけが残存したものであろう。最も北側に見られる炭溜まりは、堆積した炭を除去した後にP5を検出できていることから、P5などを掘り込んだ遺構面が削平された後に堆積したものと言える。時期は不明である。

包含層下面の暗褐色土中の遺物には、古墳時代中期から平安時代後半までのものが見られる。この層は、大舎原地区全域で薄く見られるものであるが、いずれの場所においても平安時代後半以降の遺物はほとんど含んでいないことから、平安時代後半を大きく離れない時期に大舎原地区を覆ったものと思われる。

トレンチ設定の目的であった12・15号溝は、第33トレンチでは検出できなかった。これは、第33トレンチが前述のように削平を受け、遺構検出面が大きく下がっていることが原因であり、この付近に存在した古代の遺構は、ほとんどが消滅してしまっていると考えられる。同様の状況は第33トレンチより西10mの地点で行った平成13年度の調査でも見られ、大舎原地区の第33トレンチ周辺については古代の遺構面の残存は期待できない。

（2）出土遺物（第55・56図）

第55図1～7は、23号溝から出土した遺物である。

第55図1～3は土師器高坏である。第55図1はサブトレンチの23号溝埋土中からほぼ完形を呈して出土したものである。坏部に明瞭な稜はなく、緩やかに湾曲し、口縁部が内側を向く。筒部と脚部の間には明瞭な屈曲が見られ、脚端部に面を持つ。坏部外面に指頭圧痕を残すほか、筒部にはヘラミガキの痕跡が見える。坏部内面の調整は摩滅のため観察できない。第55図3も同様のものであるが、口縁部はほぼ直立する。

第55図2も土師器高坏であるが、坏部が強く湾曲することなく直線的に開く形状である。脚部は太く低く、筒部と脚端部との間も緩やかに湾曲させ、明瞭な屈曲が見られない。坏部中程から筒部にかけてヘラミガキが見える。坏部内面は摩滅しており、ハケメが僅かに観察される。

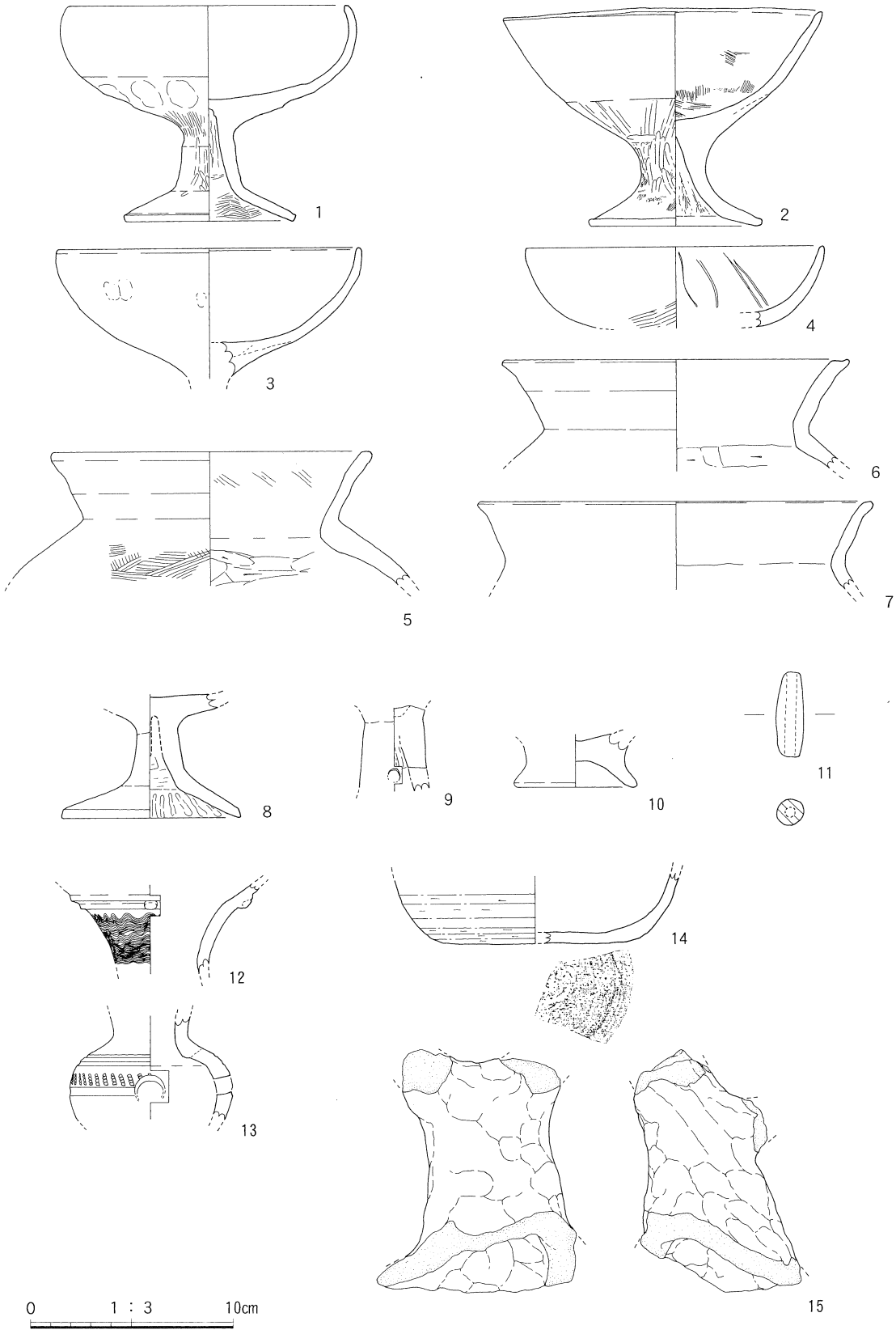
第55図4は土師器高坏の坏部であろうか。内面には、ヘラによる焼成後の線刻が見える。ミガキの痕跡は見えない。

第55図5～7は土師器甕である、第55図5は体部外面にハケメを残しているが、他は摩滅のため調整不明である。第55図6は、口縁端部に明瞭な面をつまみ出している。

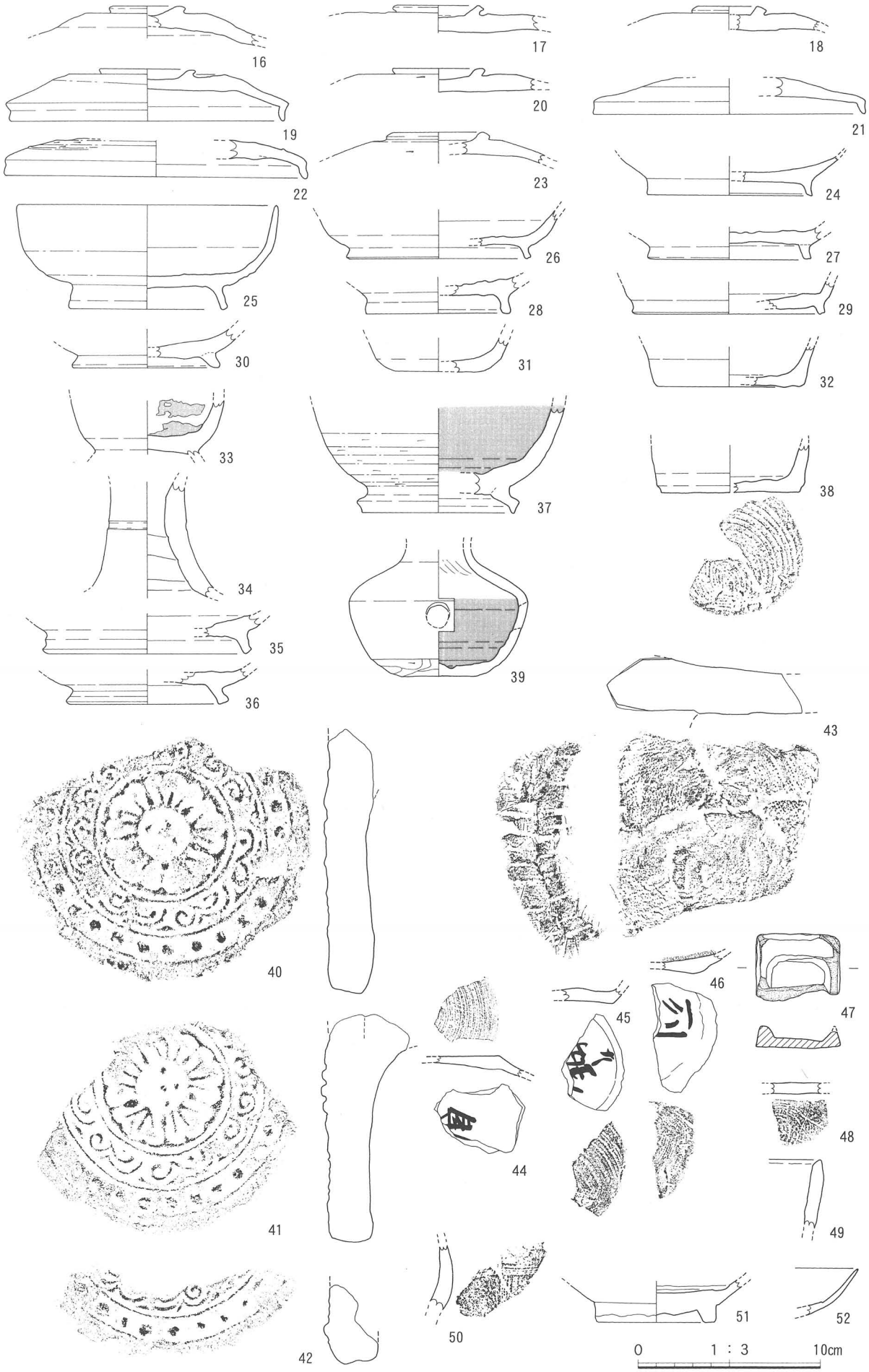
第55図8～15、第56図は包含層中出土遺物である。

第55図8・9は土師器高坏の脚部である。第55図9には円形の透孔が見られる。

第55図1～9は古墳時代中期のものと考えられる。第33トレンチ出土遺物の内、古墳時代中期と考



第55図　出雲国府跡第33トレンチ出土遺物実測図（1）



第56図　出雲国府跡第33トレンチ出土遺物実測図（2）

えられる遺物は23号溝埋土に集中している一方、上層の包含層出土遺物に占める古墳時代中期の遺物の割合は多くはない。

第55図10は土師器低脚坏の脚部である。器面は摩滅しており、調整は見えない。

第55図11は土錘である。暗褐色に焼成され、器面は摩滅している。

第55図12・13は須恵器瑳である。

第55図14は須恵器壺底部である。底部外面には回転ヘラ切り痕を明瞭に残す。

第55図15は土製支脚である。基部と突起部の全てが失われている。背面側に穿孔せずに突起を延ばす形状のものである。

第56図16～49は、古代のものと考えられる遺物を図示した。いずれも包含層中出土のもので、確実に遺構に伴うものはない。

第56図16～23は須恵器蓋である。図示できたものはいずれも輪状つまみを持ち、口縁端部を垂下させカエリを持たないものである。第33トレンチ出土の須恵器蓋については、宝珠つまみ部分だけの小片も数点が出土しているが、輪状つまみを持つものに比べ圧倒的に少ない。

第56図24～29は須恵器の高台付坏と考えられるものの底部である。体部が内湾気味に緩やかに立ち上がるもの（第56図25など）と、直線的に開くもの（第56図29など）が見られる。

第56図30は須恵器高台付坏であろうか。高台を斜めに張り出すものである。体部は内湾気味に立ち上がるものと思われる。

第56図31は小型の坏底部であろうか。器面は赤褐色を呈し、内面には墨と思われる黒色付着物が張り付いている。底部には回転糸切り痕を残している。

第56図32は無高台の須恵器坏底部である。体部が直線的に立ち上がる形状のもので、軟質に焼成され、摩滅が進んでいる。

第56図33は高台付の須恵器瑳か小型の壺である。高台部分が剥落した小片で、内面には漆が付着している。

第56図34は須恵器長頸壺の頸部である。

第56図35・36は、須恵器壺底部と考えられるものである。

第56図37は須恵器壺底部である。内面には漆が厚く付着しているほか、破断面にも漆の付着が見られ、破損した壺を漆塗り作業時のパレットとして使用したものと考えられる。第56図37以外にも、須恵器小片の破断面に漆が付着しているものが見られることから、破損した須恵器が漆塗りのパレットとして一般的に使用されていることが伺える。

第56図38は須恵器壺底部である。底面に回転糸切り痕を明瞭に残し、薄手の体部はほぼ直立する。

第56図39は須恵器瑳の小片である。内面には漆が厚く付着しているほか、破断面にも僅かに漆が付着している。蓋をしにくい瑳を漆容器として使用するのは不向きと思えることから、第56図37と同様に破損後にパレットとして使用したと思われる。

第56図40～42は軒丸瓦である。蓮華文の周囲に退化した唐草文帯と朱文帯を廻らすもので、出雲国分寺第２形式軒丸瓦と同笵と思われるものである。この形式の軒丸瓦は出雲国府跡の発掘調査では一般的に見られるものである。他の調査区においても出雲国分寺第２・３形式の軒丸瓦は比較的多く見られるが、軒平瓦の出土の割合が少ない。

第56図43は瓦当面が剥落した軒丸瓦丸瓦部である。丸瓦広端部を斜めに面取りし、凹凸両面から

ヘラによる刻み線を施したものである。瓦当部接合のための補強粘土の痕跡が凸凹両面に見られるが、凹面側では、補強粘土の内側にも布目圧痕が見られ、通常の丸瓦と同様の成形を行って瓦当部を接合している事が判る。出雲国分寺第２・３形式軒丸瓦の丸瓦部であろう。また、第33トレンチからは、通常の丸瓦・平瓦数点も出土している。

第56図44～46は墨書土器である。第56図44は蓋の外面に、第56図45・46は坏底部に墨痕が見られるがいずれも判読できない。

第56図47は頁岩製の石製品である。小型の石硯であろうか。幅4.6cm、残存長3.6cmの小さなもので三面に縁が削り出されている。底面と縁の２面が板状に剥離して破損した状態で出土した。

第56図48は坏底部と思われる須恵器の小片である。糸切り痕を残す底部外面に「×」のヘラ記号を施している。

第56図49は製塩土器と考えられるものの小片である。手づくねで整形された土師質の土器の口縁部で、同様のものが複数出土しているが、いずれも小片で摩滅が進んでいる。

第56図50～52は古代末以降の遺物である。第56図50・52は包含層中から、第56図51は耕作土中から出土した。

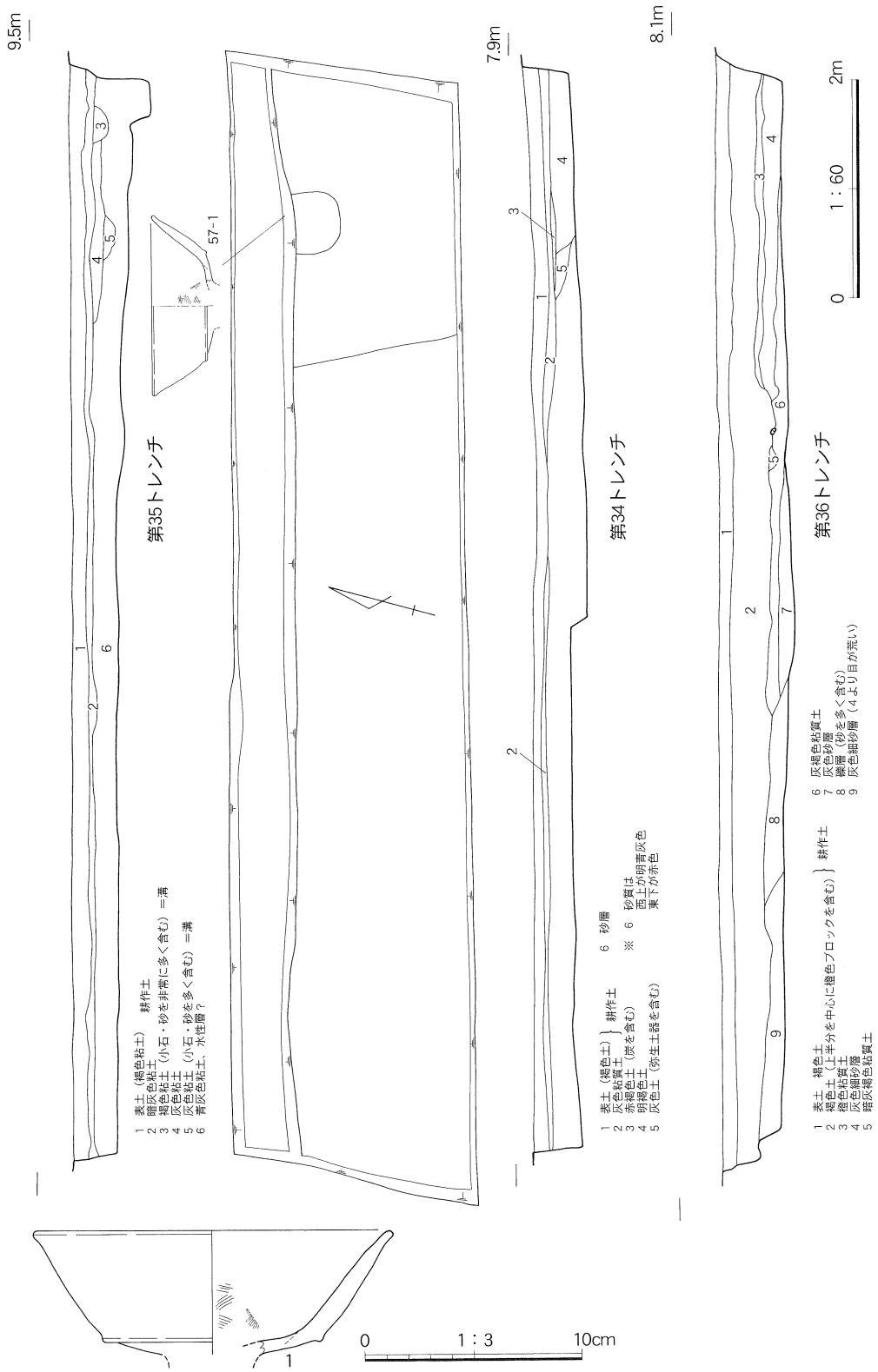
第56図50は瓦質土器の体部小片である。接合できなかったが、同一個体と考えられる破片７点が見られ、その内の１点を図示した。口縁部、底部の破片が見られないため器種は判らないが、壺であろう。図示した以外の個体を含め、いずれも外面に刷毛による文様が見られる。中世末頃のものであろうか。

第56図51・52は白磁である。第56図51は、内面に釉の掻き取りが見られる碗の底部で、椀Ⅷ類である。

第56図52は、小皿の口縁部の小片で、内面に明瞭な段を持つ。皿Ⅷ-1類と思われる。いずれも平安時代終わり頃に使用されたものと思われる。図示できなかったが、白磁の小片は出土が目立ったほか、同時期と考えられる土師器柱状高台皿の破片も複数点が出土している。

（3）第34～36トレンチの概要（第57図）

第34トレンチ　山陰道（正西道）検出を目的に深坪地区に設定した2×10mのトレンチである。山陰道がこの付近を通るとする説の根拠の一つとなっている条理余剰帯と言われる水田の東側隣接地にあたり、この位置に山陰道が存在すれば、山陰道の南側側溝が当たると想像される位置に設定



第57図　出雲国府跡第34～36トレンチ実測図・遺物実測図

した。耕作土直下には水性堆積と考えられる青灰色粘砂層の厚い堆積が見られ、基盤となる土層は見られない。トレンチ北側では耕作土直下に狭い溝状の落ち込み（土層図３～５層）が切り合いながら３条程度見られるが、掘り込み面の浅さから考えても近代のものであろう。

第34トレンチでは耕作土中から摩滅した須恵器の小片が出土しているのみで、図示できる遺物は見られない。掘削範囲内では基盤層となる土層が確認できず、古代に遡る遺構面の残存は認められない。

第35トレンチ　枉北道の確認を目的に神田地区に設定した２×10mのトレンチである。平成13年度に調査した第23・24トレンチ(1)の南約40mに当たる。第23トレンチの調査では、南北方向に続く道状の硬化面を検出しており、その南側延長線上で同様の硬化面か溝の検出を目標に設定した。

土層堆積状況は、地表下約25cmで水性堆積と思われる灰色砂層にあたる。砂層上面を削っていくと標高約7.5m地点で砂層は東西２色に分かれ、東側が青灰色砂層となる。土層断面では青灰色砂層が西に潜り込んでおり、西側の灰色砂層より下層が残存した状況と考えられる。トレンチ内では基盤層となるような面は見られず、古代の遺構面に関しては消滅してしまっていると思われる。

第35トレンチで出土した土師器（第57図1）は高坏の坏部の比較的大きな破片で、遺構を完掘すれば他の部位の破片も出土したものと思われる。坏部の中ほどに明瞭な稜を持ち、口縁部は直線的に延びるもので、古墳時代中期のものであろう。

第36トレンチ　県道八重垣竹矢線南側の水ノ尻地区に設定した２×10mのトレンチである。耕作土は地表下約40cmまでで、その下方は砂と礫の層が交互に切り合った状況になっており、自然流路中の状況と考えられる。耕作土から下方の礫層中まで摩滅した土器小片が出土している。トレンチ南側では杭を検出したが、掘り込み面は耕作土中であろう。杭周辺からは人頭大の石がまとまってみられた。第36トレンチ付近には古代の遺構面は残存しておらず、自然流路が３条以上見られるが、各流路の時期は不明である。

註

（1）第24トレンチは、報告書１において領拝地区としていたが、神田地区の誤りであったことを訂正しておく。現地は字領拝ではなく字神田であり、字領拝は第35トレンチから道を挟んだ西側に当たる。今年度までに領拝地区でのトレンチ調査の実績はない。

第5章　まとめ

出雲国府跡の発掘調査は再開されて５年目を迎え、史跡公園の北側（大舎原地区）で行ってきた本調査区では建物跡などが発見され、内容が具体的に判明してきた。また、史跡指定地内の確認調査では、遺構の残存状況が次第に明らかになり始めた。

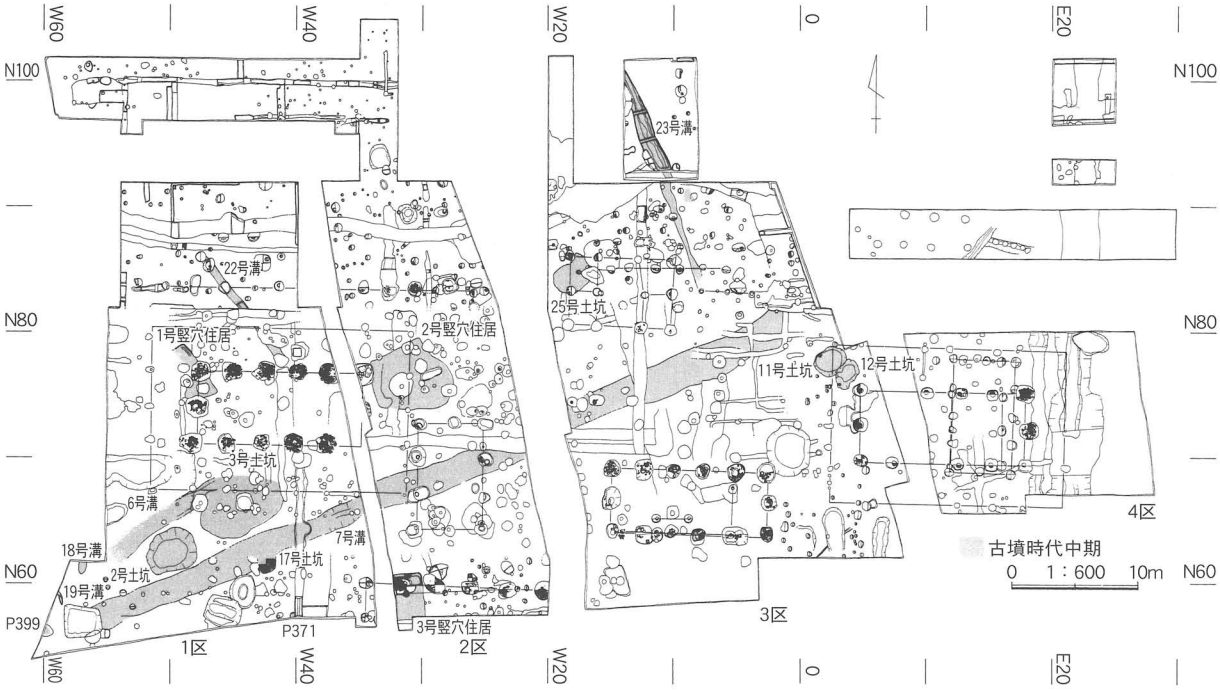
第１節　縄文時代から弥生時代

本調査区周辺からは打製石鏃と思われる流紋岩片（第44図120・第46図24）、黒曜石製石鏃（第44図118）や用途は不明であるが、黒曜石片が48点（189.03ｇ）出土している。遺構面の茶褐色粘質土から採取した試料を放射性炭素年代分析すると、縄文時代後期頃の年代が出ている[1]。分析試料が１点であり、遺構が検出されていないので、縄文時代の様相については未だ不明である。

弥生時代については、明確な前期や後期の遺構・遺物はなく、弥生Ⅳ様式の土器（第41図１・２）など数点が出土しているのみである。本調査区の西約300ｍに位置する大坪遺跡[2]では、比較的まとまって、弥生前期から後期の遺物が出土し、基盤がしっかりしている地点では弥生後期の溝なども検出されている。周辺では夫敷遺跡、上小紋遺跡などで、水田跡が知られており、弥生時代では基盤がしっかりした地点を拠点に、水田開発が行われ始めていることが明らかになりつつある。

第２節　古墳時代中期（第58図）

本調査区で、明確に遺構が確認できるのは古墳時代中期からである。今回の調査では竪穴住居１棟、溝４条、土坑２基が確認され、前回の報告を合わせると竪穴住居３棟、溝６条、土坑６基となり、調査区周辺に集落が広がっていることが判明した。



第58図　古墳時代中期の遺構分布図

遺構の配置は、前回の報告で指摘されているように、南東から北西の軸が基準になっている。3棟を確認した竪穴住居の辺は溝の軸に揃えているようで、同時に存在したかは不明ながら、7号溝の両側に点在し、昭和40年代に調査が行われた宮ノ後・六所脇地区にも拡がっている。

1区から3区にかけて確認した7号溝は大きく、その溝に直交するように22・23号溝が存在する。22号溝と23号溝の間隔は、約34mを測り、7号溝と繋がっているかは古代の遺構を保護するため調査していない。これらの溝の性格は意宇川の旧河道の方向と一致することから水路や水田の大畦畔の可能性が指摘される[3]。

遺構の時期は調査面積が少なく不明な点も多いが、3号竪穴住居、22・23号溝、P371の須恵器を含まない一群、17号土坑、18・19号溝の須恵器を含む一群に大きく分けることができる。17号土坑は①退化した複合口縁を持つ甕（第9図3～5）、②内湾する坏に直線的に広がる脚をもつ高坏（第9図6）、③坏（第9図10）の存在、④外面が平行タタキで内面を磨り消す須恵器（第9図12）があり、松山編年のⅢ～Ⅳ期[4]、出雲1期[5]に含まれると思われる。

この時期の遺物としては渡来系遺物が存在する。軟質土器としては外面が黒色、内面が橙色を呈し、外面には格子タタキが存在する長胴甕が25号土坑（第9図16・17）、包含層（第42図35～39）から出土している。また、口縁部が断面三角形を呈し、天井部に波状文、沈線、つまみを持つ蓋が17号土坑（第9図13）、包含層（第41図32～34）から出土している。また、把手が細工された甑が出土している。第42図40は先端が細く、楕円形の穴が貫通する。第49図5は把手先端が平坦にカットされ、溝状の切り込みをもつ。第50図25・26は把手は残っていないが、外面にタタキを有している。これらの軟質土器や蓋、甑などは朝鮮半島からの搬入品の可能性もある。しかし、大阪府陶邑大庭寺遺跡[6]などで定型化以前の須恵器や軟質土器を焼成した遺跡が知られてきており、地元（出雲地域）やその周辺で製作された可能性も考えておく必要がある。

第3節　奈良時代から平安時代

（1）奈良・平安時代の施設群（第59・60図）

前回の調査では、一括性の高い土坑資料等を扱い、遺物の様相の変遷を、切り合い関係を含め検討し、出雲国府跡大舎原地区の奈良・平安時代の施設群の変遷について、大きく3期に分けた[7]。今回の報告もそれに準じて記述する。

Ⅰ期　南北に主軸をもつ掘立柱建物の時期で、出土遺物から第3型式をⅠ－1期、第4型式をⅠ－2期として新古に分けた。

Ⅰ－1期の遺構は、前回報告の8号建物、3号溝、4・14号土坑があり、今回の調査では、12・17・21号溝、24号土坑、3号井戸などがある。12号溝は2区北側を東西に伸びる溝で、幅は狭いが、しっかりしている。12号溝の西側で検出した21号溝や24号土坑もこの時期の遺構であるが、切り合い関係がある。また、17号溝は3区中央を南北に伸びる溝であり、上面には多数の礫が存在した。4区の3号溝とは32m、約10尺離れ、その間に8号建物が存在する。21号溝とは41.5m、約14尺離れ、その中央付近に3号井戸が存在する。

Ⅰ－2期の遺構は、前回報告の2号建物、5号土坑、4号溝などがあり、一貫尻地区の石敷護岸施設が明確な時期は不明であるが、存在していると東西81mの区画内にこれらが配置されていたことになる。今回の調査では、明確な遺構は検出できなかった。

Ⅱ期　東西に主軸をもつ建物の時期で、前回の調査では１・３・４号建物がある。これらの建物は掘立柱建物から礎石建物に同じ場所で建て替えられており、前者の段階をⅡ－１期（第４～５型式)、後者の段階をⅡ－２期とし、廃絶期をⅡ－３期とした。

Ⅱ－１期の遺構は、前回報告の１・３・４号建物と４号溝があり、今回の調査では、９号建物、１号柵列がある。１・３・４号建物はいずれも２間×５間の掘立柱建物で、９号建物が２間×３間の掘立柱建物である。

遺構の配置をみると、１号建物と４号建物は六所脇地区で検出された「政庁後殿」と考えられているSB20の中心から中軸線を真北に延ばした軸を挟んで東西20mの位置に並んでいる。また、その軸は３号建物西辺を通過し、９号建物の中央に伸びている（第61図)。言い換えれば、９号建物は１・４号建物の中央北側に位置することになり、計画的な配置といえる。さらに、１・４号柵列は９号建物の東西に位置し、建物に取り付いていた可能性が高い。１号柵列と１号建物の距離は約6.5mである。

９号建物の性格については東西の柱間より中央の柱間が広いことから「門」の可能性があり、南側に施設群が存在し、北側に同時期の建物が確認できないことから北側を区画する「北門」の可能性が高い。９号建物の北側に設定した第33トレンチでは、遺構面が削平されていることから北へ続く道路や同時期の遺構は確認できなかった。９号建物を「門」とした場合にも課題はある。９号建物の南側に３号建物が存在し、門を通過すると目の前に建物が建つことになり、各建物の同時性などさらに検討する必要がある。

この時期の施設群の性格は、国に関わるものであり、国司館の可能性が高いものと考えられている[8]。今回、この時期の遺構から性格を表す遺物は出土していないが、８号溝から底部外面に「介」と墨書された須恵器が検出されている。介は次官級国司の官名で、前回の報告では４号溝から「介」墨書須恵器が出土している（第60図169)。

Ⅱ－２期の遺構は、前回報告の１・３・４号建物、今回報告の10号建物がある。10号建物は礎石自体は残っていなかったが、根石や柱穴内の地業から礎石建物と判断した。また、時期決定については出土遺物からは難しく、10号建物西辺が１号建物東辺と一致する規格性からこの時期とした。

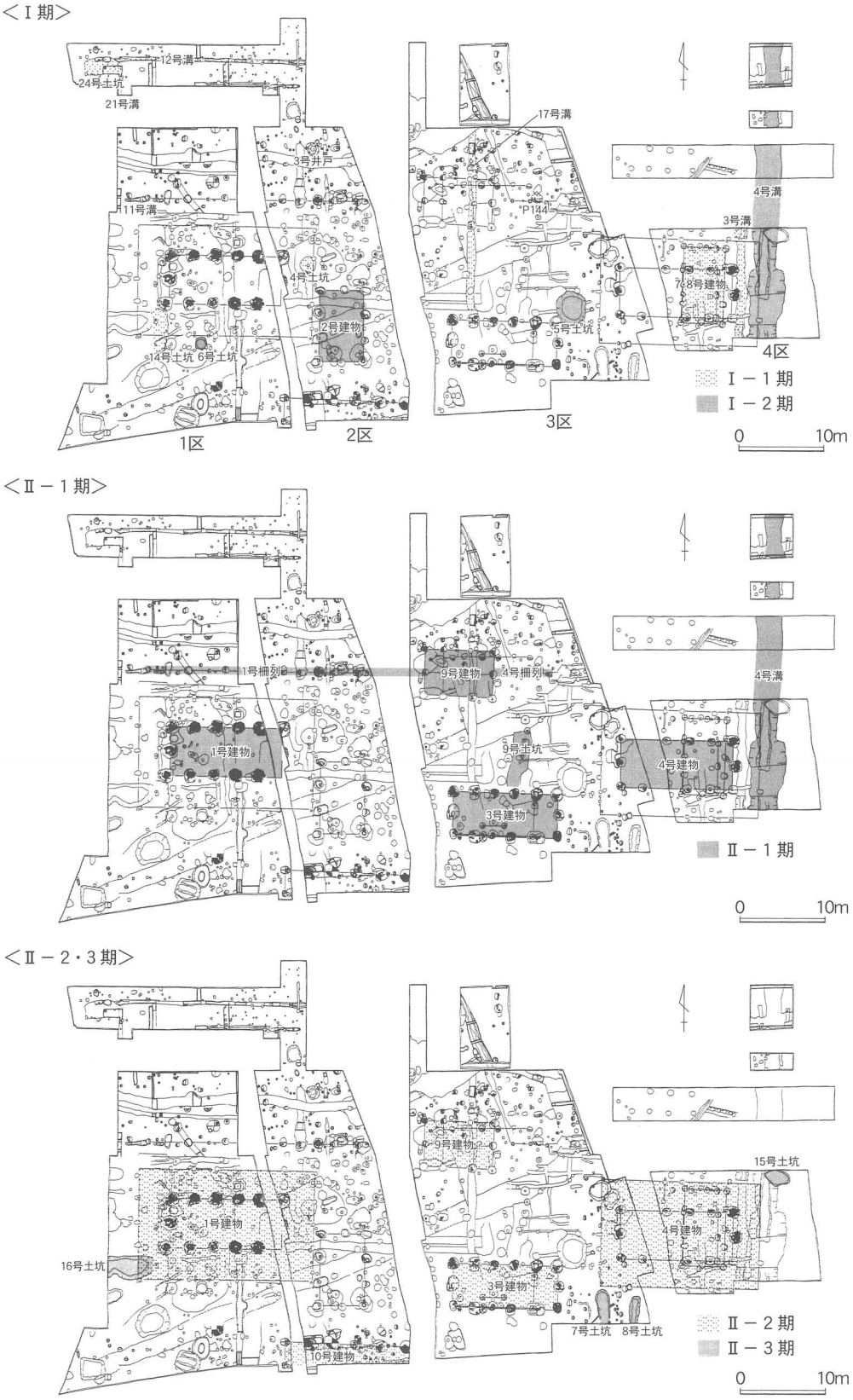
Ⅱ－３期は、建物跡の周辺もしくは一部重複して、前回報告の７・８・15・16号土坑が営まれている[9]。今回の報告では明確な遺構は未検出である。

Ⅲ期　白磁を伴う遺構が見られる時期[10]で、前回報告の２・８号溝・１号井戸、今回の４号井戸がある。前回、８号溝はトレンチ内での確認であったが、今回１～３区で確認できた。また、２号井戸は白磁が出土していないが、土師器の特徴からこの時期前後と思われる。また、P93など径20cm程度の小さい柱穴や黒色土を埋土とする柱穴が多数存在し、同時期の建物が存在すると思われるが、建物を復元することはできなかった。

２号井戸は、土師器坏・皿・柱状高台付皿が出土し、白磁は出土していない。土師器坏をみると底部と体部の境は明瞭で、１号井戸の坏が底部と体部の境が不明瞭であることと比べ、やや古相である。白磁が出土していないことを含め、１号井戸と時期差が存在する可能性もある[11]。

この時期の遺構の性格については未だ語れるだけの資料はない。８号溝からは須恵器坏の底部外面に「介」と墨書されているが、この須恵器の形態は第４～５型式で、Ⅱ－１期を中心とした時期である。一貫尻地区で検出された石敷き遺構がこの時期まで存在し、石敷きの西側は浅い水付きの景

観である。８号溝が石敷きにどのように取り付くか検討する必要はあるが、８号溝は１区ではほぼ東西で走り、２・３区では湾曲している。また、溝の南側では石が多数出土し、北側ではあまり出土しない。南側が丁寧に加工され、水の浸透を防いでいるとも考えられ水が流れていたと推定される。



第59図　本調査区内施設群の変遷

さらに、建物は明確ではないが、中国製白磁など貿易陶磁がある程度まとまって出土している。しかし、貿易陶磁でも大部分を占める中国製白磁の集計で、大舎原地区で368点、前回報告の第6トレンチで631点出土し、調査面積を比べると大舎原地区の出土量が多いわけではない。この数値と比較でき、かつ性格が明らかな遺跡がなく、この時期の施設群の性格は今後の検討課題である。

（2）国府における手工業生産

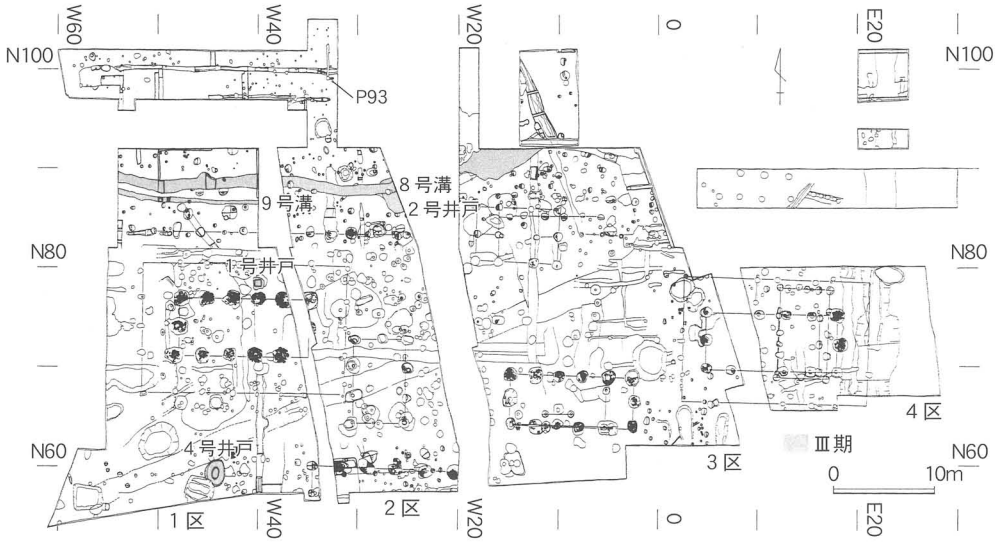
今回の発掘調査では、手工業生産が行われた工房については明らかにできなかった。しかし、出土した遺物を見ると、金属器生産（滓・碗形鍛冶滓・羽口・坩堝）、玉生産（水晶・碧玉・瑪瑙・筋砥石）、木器生産（漆壺・漆付着土器）、その他（土錘・円形加工品）に関わるものがあり、本調査区の付近や諸施設に先立って、こうした多様な手工業生産が行われていたことが想定できる。

金属器生産については、肉眼観察によるが、鉄と非鉄がある[12]。鍛冶関連遺物としては径6㎝を測る碗形鍛冶滓があり、非鉄系では坩堝が存在する。時期や内容は不明であるが、出雲国府跡周辺で金属器生産が行われていたこと示している。

玉は水晶・碧玉・瑪瑙を主な素材とし、平玉・丸玉の生産が行われている。玉の素材は、出土量から見ると水晶が重量、点数で7割を占めており、重量では「カド石」、メノウが続き、碧玉は5％ほどしかない。また、点数で「カド石」、メノウが続き、碧玉は5％ほどしかない。重量においては大きな原石が出土すれば、割合が変わるが、昭和40年代に調査された宮ノ後・六所脇地区で出土している玉素材は、重量では水晶と碧玉が4割・瑪瑙1割、点数では水晶5割・碧玉4割で[13]、点数では水晶の割合がやや低いが、水晶を中心に生産している。

水晶製玉製品の製作工程は前回の報告でも述べられているように、原石の両端・側面を分割（荒割）－製品を意識した形割・調整剥離－敲打－研磨の順に進められている。基本的な工程は弥生時代後期の平所遺跡で想定されているものと変わらない[14]。穿孔については、第39図39を見ると、両面穿孔である。

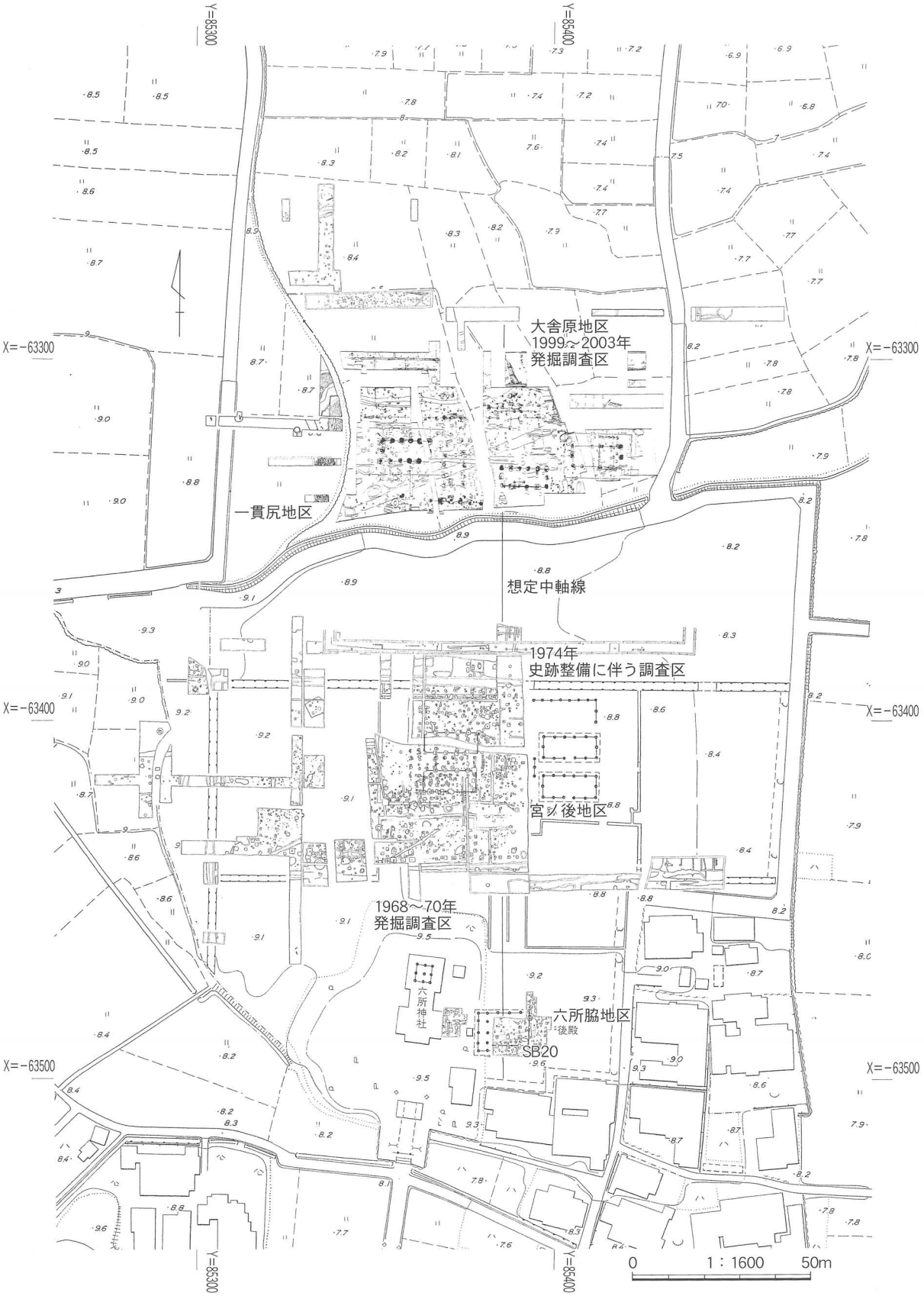
玉生産用の明確な砥石は、1号柵列P6の柱の根巻き石として使用されていた筋砥石（第15図34）のみであった。前回報告でも3号建物P11・P13・P14に筋砥石が掘立柱の根巻き石として使用されていた。筋砥石[15]が砥石としての用途以外に使用されているのがⅡ期であり、出雲国府跡大舎原地



第60図　平安時代後半の遺構分布図

区周辺で玉を生産していた時期がある程度推定できる。

奈良・平安時代の玉生産遺跡は玉湯町を中心に知られているが、消費地は出雲国内ではあまり知



第61図　出雲国府跡中心部の遺構配置図

られていない。水晶製丸玉が出土した遺跡としては、松江市竹矢町才ノ峠遺跡[16]、飯石郡三刀屋町馬場遺跡[17]、安来市荒島町中山遺跡[18]が知られ、来美廃寺[19]からは平玉が出土している。

才ノ峠遺跡出土の丸玉は一部に自然面を残すが、敲打され球状に調えられている。穿孔はされておらず、径1.5～1.7cm、5.14ｇ（挿図番号58-484）、6.03ｇ（挿図番号58-485）を計る。これらは出雲国府跡の第39図34の丸玉に相当する。馬場遺跡ではＡ区の平安時代の墓から水晶製や碧玉製平玉21個とともに１点の水晶製丸玉が出土している。丸玉は径1.0～1.1cm、1.72ｇ（挿図番号109-19）を測り、研磨されているが、穿孔はない。中山遺跡は火葬骨が納められた石製骨蔵器が検出され、骨蔵器内から破損した水晶が４片出土した。元は１個体と思われ、研磨されているが被熱により、表面はざらついている。石製骨蔵器の特徴から８世紀前半から９世紀後半と推測している。

来美廃寺は金堂と推定される第２基壇から平玉１点と形態が不明であるが、円形状の破片が１点出土している。平玉（挿図番号48-2）は径1.8cm、厚さ0.7cm、2.92ｇを測り、半透明である。円形状のものは残存長1.2cm、幅0.7cm、厚さ0.9cm、0.8ｇを測り、透明感がある。

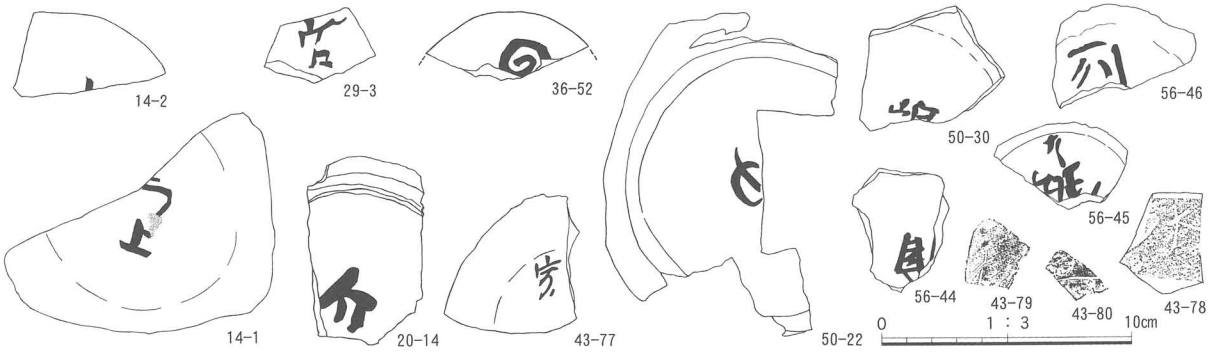
丸玉は穿孔されずに消費され、墓や祭祀に関係がある遺跡から出土している。出雲地域の出土品が出雲国府跡周辺で造られたとは限らないが、国府内での玉生産の時期・場所（工房など）を検討していく必要がある。

（３）平安時代の土器・陶磁器

出雲国府跡の施設群の変遷におけるⅢ期は白磁が出土する時期とし、大きくまとめて検討してい

第８表　墨書・ヘラ書き土器一覧表

挿図番号	釈　文	種 別	器種	部位	型式	出土遺構	取 り 上 げ 番 号
14-2	□	須恵器	坏	外底		１号柵列	P2 №21
14-1	高上	須恵器	坏	外底		１号柵列	P2 №15
29-3	□	須恵器	坏	外底		３号井戸	
20-14	介	須恵器	高台付坏	外底		８号溝	
36-52	σ	須恵器	坏	外底		P144	№５
43-77	家カ	須恵器	坏	外底			３区 N87W15
50-22	σ	須恵器	高台付坏	外底			第30トレンチ PNo.222・234・235 ３層
50-30	嶋	須恵器	蓋	内頂			第31トレンチ
56-44	□	須恵器	坏蓋	内頂			第33トレンチ N102W14 ３層
56-45	□	須恵器	坏	外底			第33トレンチ N102W10 ２層
56-46	□	須恵器	坏	外底			第33トレンチ N102W14 ３層
43-79	在カ(ヘラ書き)	須恵器	蓋	内頂			３区 N77W20
43-80	□(ヘラ書き)	須恵器	不明	外面			２区 N92W30 ２層
43-78	大(ヘラ書き)	須恵器	坏カ	外底			１区 N62W60 １層



第62図　出雲国府跡墨書・ヘラ書き文字実測図

第９表　陶磁器分類表

		1区'02	2区'02	３区	1区'03	2区'03	2区北	T26	T27	T28･29	T33	T30	T32	計	備　考
白 磁 碗	Ⅰ？類									1				1	
白 磁 碗	Ⅰ類						1							1	
白 磁 碗	Ⅱ？類													0	
白 磁 碗	Ⅱ－１類	1			1					3	2			7	
白 磁 碗	Ⅱ－５類								1					1	
白 磁 碗	Ⅱ類	1			1	2								4	
白 磁 碗	Ⅳ？類						1							1	
白 磁 碗	Ⅳ・Ⅴ類			1										1	
白 磁 碗	Ⅳ－１ａ類		1	1										2	
白 磁 碗	Ⅳ－ｃ類	1												1	
白 磁 碗	Ⅳ類	9	1	3	6		3	1			2	1		26	
白 磁 碗	Ⅴ・Ⅵ・Ⅳ類	1												1	
白 磁 碗	Ⅴ･Ⅵ･Ⅷ･Ⅷ-0類				1									1	櫛目でとめる
白 磁 碗	Ⅴ-2･Ⅵ･Ⅶ類				1									1	外反
白 磁 碗	Ⅴ-4･Ⅷ-1･3類			1										1	
白 磁 碗	Ⅷ-2・Ⅴ-1類										1			1	
白 磁 碗	Ⅷ類				1									1	外反 輪花 白堆線
白 磁 碗	Ⅷ類				2									2	
白 磁 碗	ＸⅠ・Ⅳ類			1			1							2	
白 磁 碗	ＸⅢｂ類		1											1	
白 磁 皿	Ⅱ・Ⅲ類			1										1	
白 磁 皿	Ⅱ類				1									1	
白 磁 皿	Ⅳ・Ⅴ類	1												1	
白 磁 皿	Ⅴ－１類										1			1	
白 磁 皿	Ⅵ・Ⅴ類			1			1							2	
白 磁 皿	Ⅵ類		2		2		2				1			7	
白 磁 壷	Ⅱ？類	1	1											2	
白 磁 壷	Ⅱ・Ⅲ類				1									1	
白 磁 壷	Ⅱ類	2	1	1	2	2								8	
白 磁 壷	Ⅲ－１類						1							1	
白 磁 壷	Ⅲ類										1			1	
白磁小壷蓋	Ⅱ類				1									1	
白　磁	森田Ｄ群？		1	1	1									3	
白　磁	森田Ｅ群？	1	1				2		1					5	
白磁碗・皿・鉢	広東	2	2	3	4	3				1				15	
白磁碗・皿・鉢	広東以外	11	2	10	15	2	4	1	1	1	4			51	
白 磁 片	不明	2		1		1	1		1	2	1			9	
青白磁碗							1							1	
青白磁碗？		1		1			1							3	
青 磁 盤	Ⅳ期以降						2				1			3	
龍泉窯系青磁碗	Ⅰ・Ⅱａ類	1	1		1									3	
龍泉窯系青磁碗	Ⅰ-2・Ⅰ-3類						1							1	
龍泉窯系青磁碗	Ⅰ－２類		1											1	
龍泉窯系青磁碗	Ⅰ類			1	1									2	
龍泉窯系青磁碗	Ⅱｂ類									1				1	
龍泉窯系青磁碗	Ⅲ類	1												1	
龍泉窯系青磁碗	Ⅳ期以降			2					1	2				5	
龍泉窯系青磁皿	Ⅰ類						1							1	
龍泉窯系青磁碗破片		1									1			2	
龍泉窯系碗か同安窯系青磁碗		1												1	
越州窯系青磁碗				1										1	
青 花 皿	Ｂ群										1			1	
青 花 碗	Ｃ群				1									1	
青花破片											1			1	
中国陶器鉢	Ⅰ類									1				1	
中国陶器壷	Ⅲ類ｃ群		1											1	
中国陶器？					1									1	
中国陶器鉢か壷	Ａ２群				2									2	
中国陶器鉢か壷			1				1							2	
緑釉陶器		1		1										2	
灰釉？碗								1						1	
灰釉？壷		1		1				1		5				8	
備 前 壷			2											2	
備 前 ？				1										1	
瓷器系甕			1	3			1							5	
不明陶器		1						1					1	3	
計		41	20	36	46	10	25	5	5	17	17	1	1	224	

るが、建物跡は復元できていない。しかし、国産の緑釉陶器、瓷器系陶器、貿易陶磁として白磁、青磁、青白磁、陶器が出土しており、この時期の性格を考える上で整理しておく必要がある。なお、中世後期では備前が少量あり、青花や中国製白磁の森田D群やE群[20]に伴うと考えられる。

A．貿易陶磁・国産陶器（第9表）

本書で報告した調査では、貿易陶磁が202点出土した。分布状況は確認調査区以外の地点ではあまり変化なく散在し、まとまって出土する地点はない。

大舎原地区の出土密度は1～3区では1㎡当たり0.2点（201点÷1004.5㎡）、1点当たり5㎡（1004.5㎡÷201点）である。前回報告の出土密度は、全体では1㎡当たり0.4点（1,005点÷2,414.9㎡）、1点当たり2.4㎡（2,414.9㎡÷1,005点）であり、今年度の出土密度は半分ほどである。しかし、前回報告では第6トレンチの出土量が多く、1㎡当たり6.3点（660点÷104㎡）、1点当たり0.15㎡（104㎡÷660点）であり、これを除くと今回の報告とあまり変わらない。

貿易陶磁器の種別では白磁・青磁の碗・皿の供膳具が88％を占め、残りを青白磁が4点、白磁壺が14点、陶器はⅠ類の鉢、壺Ⅲ類C群など7点が占める。種別では白磁が最も多く、青磁、陶器と続く。

国産の緑釉陶器は10世紀前半の京都産が2点出土し[21]、灰釉陶器は可能性があるものが1点ある。これで大舎原地区での緑釉陶器の出土数は17点になる。そのほとんどが9世紀後半から10世紀前半のもので、近江産が中心となる時期の遺物は確認できず、宮ノ後・六所脇地区の状況と異なる[22]。今後、宮ノ後・六所脇地区の様相が明らかなると、遺構の時期や性格についても検討ができると考えられる。

これらは遺跡全体で見たものであり、各遺構や出土状況を検討しなければ、出雲国府跡での実態に迫れないが、未だ出土状況の良好な資料が少なく、今後の検討課題である。

B．初期貿易陶磁（第10表）

出雲国府跡からは大舎原地区から5点の越州窯系青磁と可能性をあるものを含め2点の白磁碗Ⅰ類が出土し、第44図104～108に図化した。宮ノ後・六所脇地区からは3点が紹介され、初期貿易陶

第10表　初期貿易陶磁出土遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所　在　地	出　土　品	形　態	点数	文献
1	大陰遺跡	鹿足郡津和野町	越州窯系青磁	碗		1
2	高田遺跡	鹿足郡津和野町	越州窯系青磁	四耳壺	1	1・2
3	古市遺跡	浜田市上府町	越州窯系青磁	碗・皿	3	1・3
4	横路遺跡（原井ヶ市地区）	浜田市下府町	越州窯系青磁	碗	3	1・4
5	恵良遺跡	江津市二宮町	越州窯系青磁	碗	1	1・5
6	半田浜西遺跡	江津市二宮町	越州窯系青磁	碗	1	1・6
7	古八幡付近遺跡	江津市敬川町	越州窯系青磁	碗	1	1・7
8	天満谷遺跡	松江市大草町	越州窯系青磁	皿・碗	3	8
9	大屋敷遺跡	松江市大草町	白磁	碗	1	8
10	出雲国府跡	松江市大草町	越州窯系青磁・白磁	碗・皿・坏	10	9・10
11	西川津遺跡	松江市西川津町	越州窯系青磁	碗Ⅰ類	1	11
12	矢原遺跡	隠岐郡海士町	長沙窯系陶器	水注	2	12

1　榊原博英「島根県西部」『第2回山陰中世土器検討会資料緑釉陶器の様相』2002
2　津和野町教育委員会『高田遺跡』Ⅱ　1992
3　浜田市教育委員会『伊甘地区土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報』1995
4　浜田市教育委員会『横路遺跡（原井ヶ市地区）』1998
5　島根県教育委員会他「恵良遺跡」『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　2001
6　島根県教育委員会他「半田浜西遺跡」『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　1995
7　島根県教育委員会他「古八幡付近遺跡」『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ　2000
8　島根県教育委員会他『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
9　西尾克己・守岡正司「出雲国庁跡出土の陶磁器（2）」『八雲立つ風土記の丘』145　1997
10　島根県教育委員会「出雲国府跡Ⅰ」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』14　2003
11　島根県教育委員会他「西川津遺跡Ⅸ」『朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』14　2003
12　山陰中央新報『1998年10月25日』

磁は出雲国府跡からは10点出土していることになる。

島根県内で初期貿易陶磁が出土している遺跡は第10表で、12遺跡28点以上確認されている。出雲国府跡が置かれた松江市意宇平野と石見国府跡が置かれたと推定される浜田市下府川下流域に集中する[23]。意宇平野では出雲国府跡の他、館跡と言われている天満谷遺跡、大屋敷遺跡が知られ、下府川下流域では交易の拠点施設と考えられている古市遺跡や川を挟んだ対岸に位置する横路遺跡に認められる。これらは国府の中心施設ではなく、国府域に存在した館跡や拠点施設が存在した場所と考えられている。種別では、白磁の出土は稀で、越州窯系青磁が多数を占めている。器種は碗や皿などの供膳具が大半で、津和野町高田遺跡や海士町矢原遺跡から壺や水注が出土している。これらの出土状況をみると、越州窯系青磁が出土したからといって、官衙とは言えず、もう少し広い需要層があったと思われる。ただ、出雲国府跡からの出土点数は島根県内では飛び抜けて多いことも確かである。鳥取県をみると因幡国府跡[24]から越州窯系青磁10点、白磁碗Ⅰ類1点が出土し、その他、越州窯系青磁は公的あるいは初期荘園施設の可能性がある鳥取市岩吉遺跡[25]、倉吉市伯耆国分尼寺跡[26]、伯耆国庁跡[27]から出土しており、遺跡の性格としては官衙関連遺跡や寺院である。国府跡といっても「国司館」、「政庁」などいろいろな性格の建物が集まっており、初期貿易陶器の遺構出土例を増やし、遺構群の性格を検討する必要がある。

C. 黒色土器

出雲国府跡では内面が黒色となった土師器が出土している（第24図10、第27図12、第42図48）。これらは、内面が黒色で、外面は褐色を呈し、内面にはミガキ調整が観察できない。これらを黒色土器と言って良いか筆者には判らないが、鳥取県では最終段階にミガキを行うが黒色化しないものが現れるという[28]。出雲地域では黒色化するがミガキを省略するとも考えられ、今後良好な資料の増加を待ち検討したい。

（4）古代の扇（第11表）

今年度の調査では4号井戸から扇（第32図29～32）が出土し、島根県では2例目となった。要は木釘で、現状で4本の骨があり、骨の厚さから親骨の一方がなく、さらに骨があったと思われる。また、骨の先端部分の破片を3本検出した。

古代都城出土の扇を検討された辻裕司氏によると[29]、扇具を団扇、檜扇、蝙蝠扇に分け、さらに各扇具を細分されている。骨に紙（布）を貼って起風部とする蝙蝠扇を本の平面形により、「平形・山形・半円形を呈するもの」と「先端が尖り、平面形が柳葉形を呈するもの」に分け、前者を蝙蝠

第11表　山陰地方の古代の扇一覧表

所在地		形態	時代	備考	文献	
島根県松江市大草町	出雲国府跡 4号井戸	蝙蝠扇	11世紀後半～ 12世紀		本書	
島根県出雲市上塩冶町	三田谷Ⅰ遺跡	蝙蝠扇		第129図14	1	
島根県八東郡鹿島町	佐太神社	檜扇	平安	彩絵　龍胆瑞花鳥蝶文扇箱	5	重文
鳥取県東伯郡東郷町	伯耆一宮経塚	檜扇	平安		2・4	国宝
鳥取県八頭郡八東町	新興寺経塚 （B経塚）	檜扇	12世紀	檜扇の残欠と思われる木材片20片余	3・4	鳥取県指定文化財

文献
1．建設省中国地方建設局・島根県教育委員会『三田谷Ⅰ遺跡Vol.3』2000
2．倉吉博物館『経塚の遺物　こめられた願い』　1993
　本間千恵子「伯耆一宮経塚出土品」『八雲立つ風土記の丘20，21合併号』1976
3．奈良国立博物館『中国・四国地方に埋納されたやきもの』1999
4．亀井熙人「鳥取県の経塚遺物」『鳥取県立科学博物館研究報告』9　1971
5．島根県教育委員会『古代出雲文化展』1997

扇①、後者を蝙蝠扇②に細分している。出雲国府跡例は、本の形態は角が丸い平形を呈していることから蝙蝠扇①の範疇にはいると思われる。

蝙蝠扇①は類例が少なく、平安時代前期の平安京右京八条二坊二町出土品[29・30]や平安時代後期から鎌倉時代前期の鳥羽離宮72次調査出土品[29・31]などが知られている。鳥羽離宮例は6本の骨が木釘で止められ、全長が33.6cmを測る。平安時代中期の石川県寺家遺跡では骨6本の扇が出土し、長さ36.5cmを測る[32]。出雲国府跡例の全長は欠損しているが、復元すると約36cmとなる。時期は平安時代終わり頃であり、他の例からも矛盾するものではない。

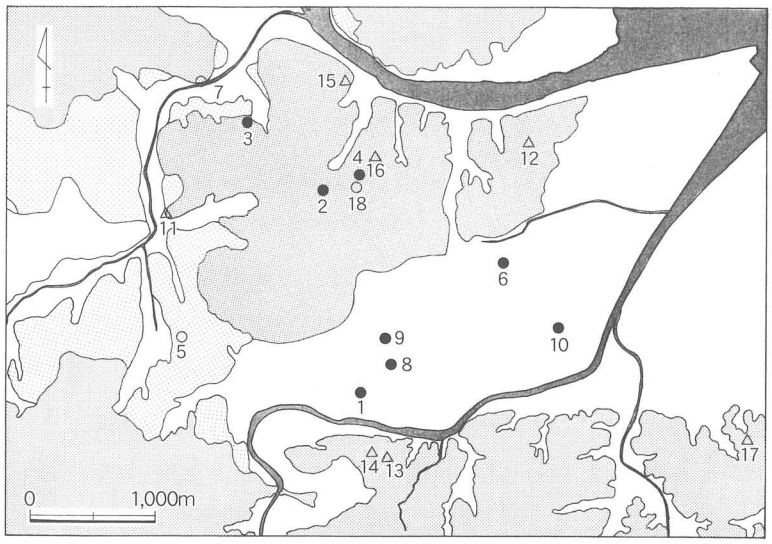
島根県内からは出雲市上塩冶町三田谷Ⅰ区から出土している。骨が1本で、先端は欠損し、残存長15cmを測る。本は半円形で、径5mmの円形の穴があき、幅は最大1.5cmを測る。辻氏の研究では目安として骨幅2cmを越えるか否かで檜扇と蝙蝠扇を分類しており、三田谷Ⅰ遺跡例は蝙蝠扇となる。扇出土の遺跡の性格や使用方法も検討する必要があろう。

第4節　出雲国府跡とその周辺（第63図）

出雲国府跡の発掘調査では古墳時代中期、奈良・平安時代前期、平安時代後期の遺構・遺物が検出された。大舎原地区の各時期の様相は上述したが、意宇平野周辺の様相を見ておく。

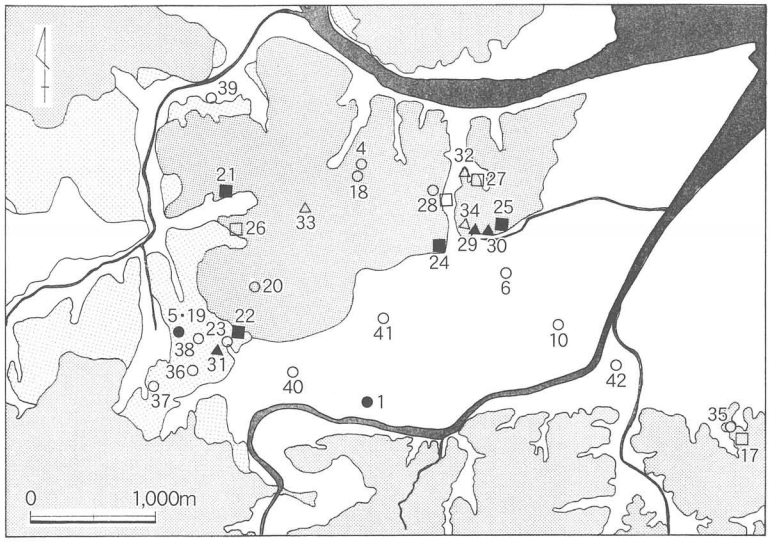
古墳時代中期では、（1）出雲国府跡、（2）寺山小田遺跡[33]、（3）勝負遺跡[34]、（4）矢田平所遺跡[35]などから竪穴住居が確認され、集落の可能性がある（5）下黒田遺跡[36]、（6）布田遺跡[37]、（7）石台遺跡が平野やその周辺丘陵地に立地する。平野に位置する（8）神田遺跡[38]、（9）上小紋遺跡[38]、(10) 夫敷遺跡からは旧河道や溝が検出され、平野部には集落だけでなく、水田も広がっていたと思われる。また、丘陵上には (11) 井出平山古墳群[39]、(12) 観音寺古墳群[40]、(13) 東百塚古墳群[41]、(14) 西百塚古墳群、(15) 石屋古墳、(16) 井ノ奥4号墳[42]、(17) 島田池遺跡などが築かれ、出雲地域でも古墳が多く築かれた地域である。また、(18) 平所遺跡[43]では古墳に供給される埴輪窯跡が丘陵上に営まれた。出雲国府跡、下黒田遺跡、石台遺跡、夫敷遺跡からは朝鮮系遺物が出土し、島根県内でも朝鮮系遺物が集中している地域であり[44]、意宇平野の開発が進み、古墳が継続して造られる背景があったと思われる。

奈良・平安時代前期では、国府が意宇平野の微高地に造られ、北側には古代山陰道や枉北道が通い、平野周辺は出雲地域の政治・経済的中心となり、人々の痕跡が数多く残る。正倉は国府西方の段丘上の (19) 山代郷正倉跡・（5）下黒田遺跡に置かれた。神名樋野である (20) 茶臼山周辺に (21) 来美廃寺、(22) 四王寺跡・(23) 寺の前遺跡[45]、(24) 出雲国分寺跡、(25) 出雲国分尼寺跡の各寺院が築かれ、(26) 狐谷横穴墓群の頂部、(27) 中竹矢後1号墳[46]、(28) 才ノ峠遺跡、(17) 島田池遺跡などからも宗教関連遺物が出土している。また、(29) 中竹矢遺跡、(30) 出雲国分寺瓦窯跡[47]、(31) 小無田Ⅱ遺跡の瓦窯跡が寺院の周辺に造られた。墓は丘陵上に存在し、(32) 長峯遺跡で土坑墓が、(33) 十王免横穴墓群[48]や (34) 社日古墳群では横穴墓が利用されている。(28) 才ノ峠遺跡、（4）矢田平所遺跡、(35) 岸尾遺跡では丘陵斜面の加工段に掘立柱建物が築かれている。丘陵や段丘上には「云石」墨書須恵器が出土した (36) 黒田畦遺跡、(37) 出雲国造館跡[49]、(38) 黒田館跡[50]、(39) 石台遺跡、(18) 平所遺跡があり、遺物が出土している。さらに、平野では延暦銘の木簡が出土した (40) 大坪遺跡、庇付きの掘立柱建物が検出された（6）布田遺跡、(41) 上小紋遺跡、(42) 春日遺跡[54]が知られる。



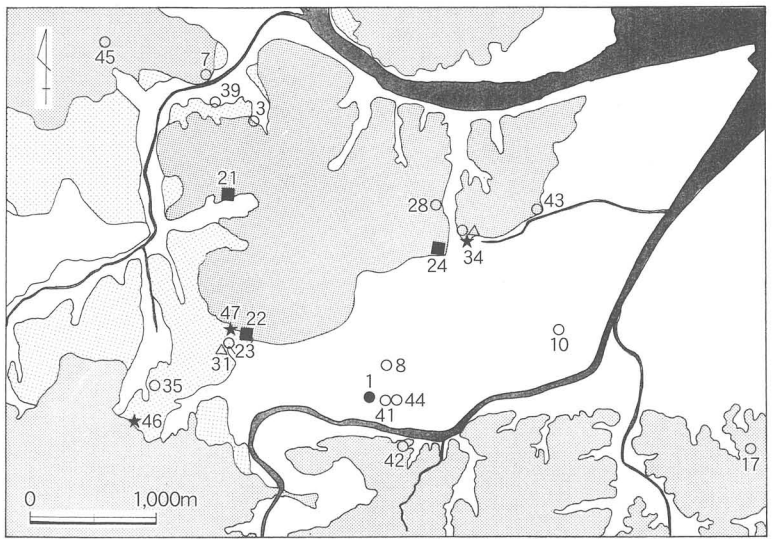
△ 古墳
● 集落（水田を含む）
○ その他（不明）

古墳時代中期



▲ 瓦窯跡
△ 墓
■ 寺院
□ 祭祀
● 役所
○ その他
（集落、不明）

奈良～平安時代前半



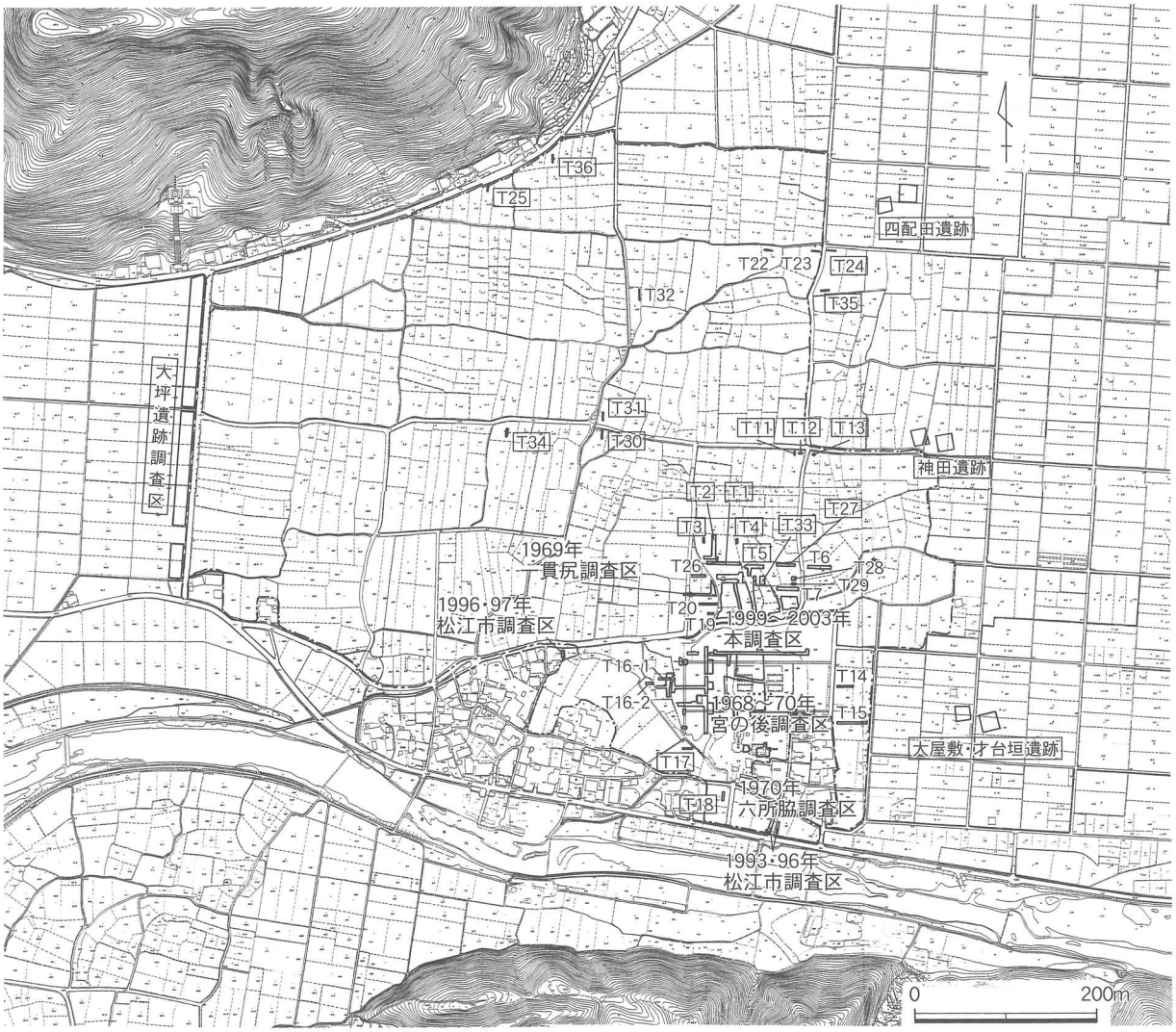
★ 石塔
△ 墓
■ 寺院
● 役所
○ その他（館、不明）

平安時代後半以降

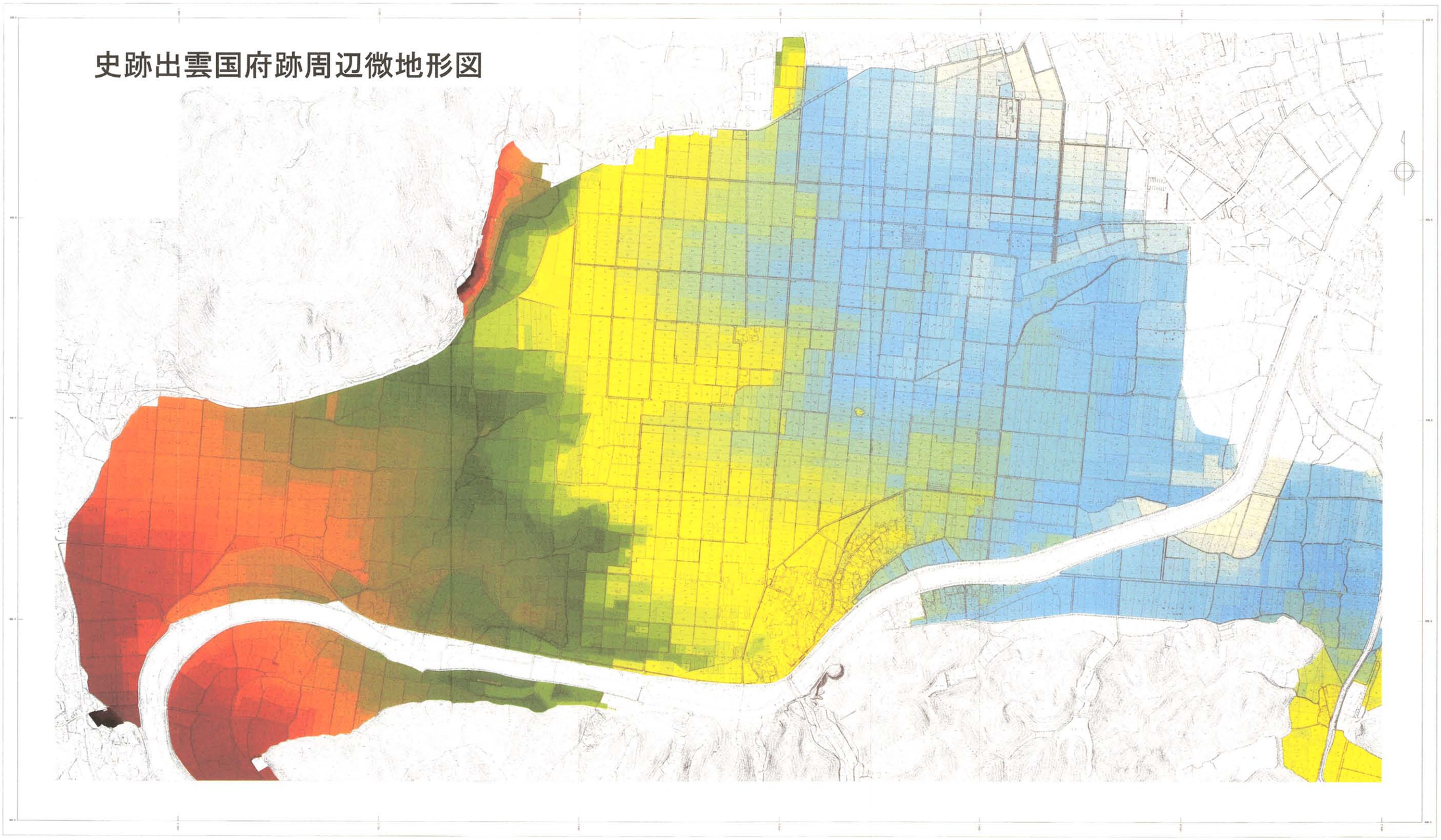
第63図　意宇平野周辺の遺跡（S＝1/60,000）　図中の番号は本文中の遺跡名の前の番号と対応

平安時代後半から鎌倉時代について、出雲国府跡の南東120mの（41）大屋敷遺跡[38]では、掘立柱建物２棟が確認され、初期貿易陶磁も出土している。また、南東250mの谷部にある（42）天満谷遺跡[38]では掘立柱建物６棟、柵列などが検出され、越州窯系青磁・龍泉窯系青磁などの貿易陶磁の他、東播系須恵器や常滑・瀬戸など10世紀～13世紀代の広域流通品も出土した。この時期の遺物は出雲国府跡の東側で多く確認されている。また、（21）来美廃寺、（22）四王寺跡・（23）寺の前遺跡、（24）出雲国分寺跡[52]も存続している。土坑墓が（31）小無田Ⅱ遺跡で、骨蔵器と思われる壺が（34）社日古墳群や（43）的場古墓[38]で発見され、墓域が意宇平野北側で確認できる。平野東側に位置する（17）島田池遺跡からは視界が悪い斜面に掘立柱建物が検出され、柱穴から八稜鏡が出土し、周辺からは多量の土師器や緑釉陶器が見つかり、短期間の宗教関連施設とも考えられる。貿易陶磁などが出土した遺跡としては（44）才台垣遺跡[53]、（３）勝負遺跡、（７・39）石台遺跡、（８）神田遺跡、（10）夫敷遺跡、（28）才ノ峠遺跡、（45）喰ヶ谷古墳群[54]が知られ、かなり広い範囲から出土している。

国司や在庁官人の館などが平野の広い範囲に存在していると考えられ[55]、中世府中を考える上では、意宇平野全体を含めた検討を要する。



第64図　史跡指定地周辺の調査状況（S＝1/4,000）
※口囲いは古代の遺構面が検出できない調査区



第65図　史跡出雲国府跡周辺微地形図

室町時代以降になるが、寺院あるいは丘陵部に石塔が築かれ、著名なものに（46）正林寺石塔群[56]、社日古墳群・中竹矢遺跡、（47）内堀石塔群[57]がある。

第５節　トレンチ調査による周辺の古代遺構残存状況（第64図）

昭和40年代に行われた発掘調査によって出雲国府の中枢部が六所神社周辺に展開していたことが確定的となったものの、『出雲国風土記』に記載の見られる山陰道（正西道・枉北道・十字街）や黒田駅、意宇軍団などの周辺諸施設については具体的な位置が確定できないでいる。古代の山陰道については、主に歴史地理の立場から推定ルートが示されているが、平成11年度からの発掘調査では史跡指定地の広範囲にトレンチを設定し、遺構の残存状況を探ってきた。

昨年までの調査で、大舎原地区からは国司館と推定される建物群や、郡関係の施設と考えられる建物が検出され、また、一貫尻地区から大舎原地区南部、日岸田地区にかけては古代の遺構面が残存している事が判った。しかし、大舎原地区北側へ向かうと、次第に古代の遺構検出が困難になっている。大舎原地区北側は次第に標高が下がっており、それに伴い、第１～５トレンチ付近では古墳時代の遺構しか確認できなくなっている。更に北側の推定十字街付近に設定した第11～13トレンチにおいても現道に平行する杭列が見られたのみで、建物跡等は確認できていない。

一方、平野北側の樋ノ口地区では昭和45年の調査で古代の遺構面が検出されており、平成13・14年の調査でも第22・32トレンチで遺構・遺物が出土している。樋ノ口地区は南西から北東に延びる自然堤防上に立地し、周囲より若干標高が高くなっており、高い部分にのみ遺構が残存しているようである。自然堤防上の遺構の残存状況も推定枉北道を東側に越えた第24・35トレンチでは確認できておらず、遺構残存範囲は狭い地域となっている可能性もある。

古代山陰道（正西道）を探る目的で設定した第30・31・34トレンチではいずれも古代の建物跡等の遺構を検出できなかった。第30トレンチでは、古代の遺物が砂礫層から出土した。特に第34トレンチを設定した場所は山陰道推定の根拠の一つとなっている条理余剰帯の痕跡と言われる水田の隣接地で、なおかつ、樋ノ口地区の自然堤防延長線上に当たる周囲よりも標高の高い位置に設定したにも関わらず、遺構を検出することができなかった。

平成11～13年度に松江市教育委員会の行った大坪遺跡での調査では、真名井神社参道に隣接して南北に長い調査区を設定し、山陰道が通っていればどこかで当たるはずと考えられていたが確認できていない。大舎原地区第33トレンチでの状況からは、水路の移動により古代の遺構面が流出してしまっていると考えたが、同様の状況が平野の各所で想定される。

第６節　成果と今後の課題

今回の調査では、東西に並ぶ掘立柱建物（Ⅱ－１期）の北側に門と考えられる建物が存在することが判明した。しかし、第27トレンチや第33トレンチの状況から、その北側では古代の道路や建物などの施設が残存する可能性が低いと考えられる。

また、国司館の施設（Ⅱ－２期）と同様の規格を持つ建物を検出し、国司館の構造の解明に手掛かりを得た。４号井戸や８号溝など、古代末（Ⅲ期）の遺構の残存状況が良好であり、国府の主要な機能が大舎原地区では12世紀代まで存続していたことが判明した。

今後、建物群の時期の細分や状況が不明なⅢ期の建物群の解明する必要がある。

遺物については良好な一括出土品の検討を継続し、遺構や遺物の変遷を再検討するとともに、金属関係遺物など科学調査と連携を取り、材料調査や技法調査等の方向性を検討する必要がある。

註

（1）本書付論１渡辺正巳「出雲国府跡発掘調査に係る花粉分析」表３

（2）松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』2002

（3）田中義昭氏の御教示による。

（4）松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第８集　1991

（5）大谷晃二「古墳群とその時期」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書16　2003

（6）ａ，大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅲ　1993

ｂ，大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅳ　1995

（7）島根県教育委員会「史跡出雲国府跡－１－」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』14　2003

以下のとおり整理した。14号土坑の出土遺物の様相は、①坏蓋は輪状つまみをもち、口縁が直立する、②坏蓋は頂部に静止糸切りを残すものがある、③無高台の坏身は口縁端部が短く屈曲し外反する、④高台付坏身は体部が丸みを帯びる、⑤坏身底部の切り離しは静止糸切り・回転糸切りの両者があるが、前者の比率が高い、⑥土師器坏・Ⅲが多く伴い、一部は暗文をもつという特徴をもつ。

５号土坑下層出土遺物の様相は、①坏蓋は宝珠つまみをもち、口縁端部が下方に僅かに屈曲する、②坏蓋は頂部に回転糸切り痕を残すものが多い、③無高台の坏身は口縁端部が僅かに屈曲する、④高台付坏身は体部は直線的に外傾または外反する、⑤坏身底部の切り離しは回転糸切り、⑥土師器坏・Ⅲを伴わないという特徴をもつ。

５号土坑上層の様相は、①坏蓋は宝珠つまみをもち、口縁端部が下方に僅かに屈曲する、②無高台の坏身は口縁端部が僅かに屈曲する、③高台付き坏身は体部は直線的に外傾する、④坏身底部の切り離しは回転糸切り、⑤土師器坏・Ⅲを伴わないという下層に共通する特徴をもつものがある。一方、⑥無高台の坏身で口縁が直線的に外傾するもの、⑦高台付坏身で器高が高く、口縁は直線的に外傾し、高台が底部の周縁につくもの、⑧高台付Ⅲなど下層に見られなかったものが加わると言う特徴を持ち、４号溝出土遺物の様相も類似しており、両者は５号土坑下層資料に加え、より新相の遺物を含むものと言えそうであると整理されている。また14号土坑が第３型式、５号土坑下層が第４型式、５号土坑上層と４号溝が第４～５型式と既存の編年（松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1971）と対比し、年代観を第３型式を８世紀前半、第４型式を８世紀後半、第５型式を８世紀末から９世紀初めとした。

（8）①建物配置の中軸線を国庁の中心施設と共有、②「館」と墨書された土器が多数出土、③出雲国内の郡から持ち込まれた土器が出土、④国司の官名である「介」・「少目」と墨書された土器が出土、⑤国庁と中央との文書のやりとりに使われた文書箱が出土するという特徴をから「国司館」と推定した。

（9）出土遺物からⅡ－３期は10世紀を前後する頃と想定される。

（10）１号井戸の出土遺物として、土師質土器坏・Ⅲ・柱状高台付Ⅲと白磁椀（Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅷ類・ⅩⅢ類・ⅢⅦ類）が見られることから、12世紀中頃から後半代のものと考えられる。

（11）時期差とは１号井戸と２号井戸の廃絶の時期の差であり、同時期に存在している可能性もある。

山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　1995

（12）穴沢義功氏の御教示による。

（13）島根県古代文化センター『古代玉作の研究Ⅰ　－中国地方の玉作関係遺跡集成－』島根古代文化センター調査研究報告22　2004

（14）島根県教育委員会『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　1976

（15）国府周辺では筋砥石が表採されている。

濱田耕作他「出雲上代玉作遺物の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』10　1927

（16）島根県教育委員会他「才ノ峠遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1983

（17）島根県教育委員会他「馬場遺跡発掘調査報告書」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』14　2001

(18) 島根県教育委員会他「中山遺跡・巻林遺跡」『一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区』Ⅱ　1994
(19) 島根県教育委員会「来美廃寺」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』13　2002
(20) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』２　1982
(21) 高橋照彦「緑釉陶器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　1995
(22) 榊原博英「山陰地方の古代土器」『中近世土器の基礎研究』ＸＶⅡ　2003
(23) 榊原博英「島根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁」『貿易陶磁研究』19　1998
(24) 八峠興「因幡国庁出土の貿易陶磁」『貿易陶磁研究』22　2002
(25) (財) 鳥取市教育福祉振興会『岩吉遺跡』Ⅳ　1997
(26) 倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺跡発掘調査概報』1973
(27) 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報（第５・６次)』1979
(28) 八峠興「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究』ＸＶ　2000
(29) 辻裕司「古代都城出土の扇」『財団法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』５　1998
(30) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「右京八条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要平成５年度』1996
(31) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代篇』1985
(32) 石川県立埋蔵文化財センター『石川県立埋蔵文化財センター年報』15　1995
(33) 松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団『寺山小田遺跡発掘調査報告書』1996
(34) 島根県教育委員会他「勝負遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1983
(35) 松江市教育委員会『矢田平所遺跡発掘調査報告書』1993
(36) 松江市教育委員会・松江市建設部建築課『下黒田遺跡発掘調査報告書』1988
(37) 島根県教育委員会他「布田遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1983
(38) 島根県教育委員会他『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
(39) 山本清「松江・井出平山古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ　島根県教育委員会　1972
(40) 門脇俊彦「松江・観音寺古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ　島根県教育委員会　1972
(41) 島根県教育委員会「東百塚山１号墳の発掘調査」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』12　1998
(42) 岡崎雄二郎「松江市井ノ奥４号墳の調査」『考古学ジャーナル』120　1976
(43) 島根県教育委員会「平所遺跡２」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ　1977
(44) 亀田修一「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』ＸⅡ　2001
(45) 松江市教育委員会・㈶松江市教育文化振興事業団『寺の前遺跡発掘調査報告書』1995
(46) 松江市教育委員会『中竹矢後１号墳・長峯遺跡』1986
(47) 岡崎雄二郎「出雲国分寺瓦窯跡について」『八雲立つ風土記の丘館報』35　1979
(48) 島根大学考古学研究会「十王免横穴群発掘調査報告」『菅田考古』10　1968
(49) 松江市教育委員会『出雲国造館跡発掘調査報告書』1993
(50) 松江市教育委員会・松江市土地開発公社『黒田館跡』1984
(51) 島根県教育委員会他「春日遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1983
(52) 前島己基「古代寺院跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会　1975
(53) 山本清「松江・的場古墓群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ　1971
(54) 松江市教育委員会『喰ヶ谷古墳群』1981
(55) 井上寛司「出雲国府と中世出雲府中」『季刊文化財』92　島根県文化財愛護協会　1999
検討を要する史料ではあるが、『忌部総社神宮寺縁起』によると「囲出雲郷国司屋敷従四方、焼打」とある。
(56) 近藤正「正林寺の五輪塔群」『島根県文化財調査報告書』５　島根県教育委員会　1968
(57) 島根県教育委員会「内堀石塔群」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅶ　1990

第12表　出雲国府跡出土土器・陶磁器観察表

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	1	30	採集品	須恵器	蓋	14.0	—	3.2	回転糸切り後ナデ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
3	2	30	採集品	須恵器	坏身	12.1	7.5	4.2	ヘラ削り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
3	3	30	採集品	須恵器	長頸壺	—	10.2	—	静止糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	焼成後穿孔
3	4	30	採集品	土製品	支脚	—	14.4	(16.2)		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	橙褐色	
4	5	30	採集品	瓦	平瓦	37.0×26.5	—	2.5	三角格子タタキ・布目	3㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡橙褐色	
8	1	29－1	3号竪穴住居	土師器	高坏の脚	—	14.1	—		1㎜以下の砂粒を含む	やや不良	淡橙褐色	
8	2	30	22号溝	土師器	高坏	(14.7)	7.8	10.0	ハケメ	3㎜以下の砂粒石英少し含む	良好	淡橙褐色	黒斑
8	3	29－1	22号溝	土製品	竈	—	—	—		やや密、微細砂粒含む	不良	乳白色	
8	4	29－1	19号溝	土師器	甕	—	—	—		やや密、1㎜以下の砂粒含む	不良	淡褐色	外面に煤付着
8	5	29－1	18号溝	須恵器	坏	—	(11.1)	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
8	6	29－1	18号溝	須恵器	器台	—	—	—	波状文	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
9	1	30	17号土坑	土師器	甕	(16.6)	—	23.8	ハケメ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	
9	2	29－1	17号土坑	土師器	甕	(15.9)	—	—	ハケメ	密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
9	3	29－1	17号土坑	土師器	甕	(16.5)	—	—		密、5㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡赤褐色	
9	4	29－1	17号土坑	土師器	甕	(19.8)	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	
9	5	30	17号土坑	土師器	甕	(19.7)	—	—	ハケメ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	
9	6	30	17号土坑	土師器	高坏	13.5	9.0	10.4		やや密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡赤褐色	
9	7	29－1	17号土坑	土師器	甕	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
9	8	29－1	17号土坑	土師器	高坏	—	—	—		密、3㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
9	9		17号土坑	土師器	高坏	(16.0)	—	—		密、3㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡赤褐色	
9	10	30	17号土坑	土師器	坏	12.6	—	4.8		やや密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
9	11	29－1	17号土坑	須恵器	甕ヵ	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
9	12	29－1	17号土坑	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
9	13	29－1	17号土坑	須恵器	蓋	(12.5)	—	—		密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
9	14	29－1	25号土坑	土師器	甕	(15.8)	—	—	ハケメ	～2㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
9	15		25号土坑	土師器	小型丸底壺	(7.8)	(2.4)	(8.5)	ハケメ	～2㎜の砂粒・石英含む	良好	淡黄褐色	
9	16	29－1	25号土坑	軟質土器	長胴甕	—	—	—		やや密、～1㎜の砂粒含む	やや不良	淡褐色	内面橙褐色
9	17	29－1	25号土坑	軟質土器	長胴甕	—	—	—	格子タタキ	2㎜以下の砂粒・石英含む	良好	黒灰色	内面橙褐色
9	18	29－1	25号土坑	須恵器	坏	(12.8)	(10.0)	4.0		1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
9	19	29－1	25号土坑	須恵器	坏	—	(9.7)	—	糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
9	20	29－1	25号土坑	須恵器	坏	(8.8)	(7.0)	3.8	糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
9	21	29－1	25号土坑	須恵器	器台ヵ	—	—	—	波状文	～1㎜の砂粒含む	良好	淡青灰色	2方向以上の透孔あり
12	1	29－2	9号建物	須恵器	蓋	—	—	—		～2㎜の砂粒含む	良好	青灰色	
12	2	29－2	9号建物	須恵器	高台付坏	—	(9.4)	—	静止糸切り	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
12	3	29－2	9号建物	須恵器	高台付皿	—	(13.0)	—	静止糸切り	～2㎜の砂粒含む	良好	青灰色	
12	4	30	9号建物	須恵器	長頸壺	—	7.4	—		1～5㎜の砂粒多く含む	良好	淡紫灰色	高台付
12	5	29－2	9号建物	土師器	甕	(15.6)	—	—	ハケメ	～1㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
12	6	29－2	9号建物	瓦	平瓦	—	—	—	布目、縄目	密、微細砂粒含む	やや不良	淡黄白色	釘穴痕ヵあり
12	8	29－2	10号建物	須恵器	蓋	(13.8)	—	—		1㎜前後の白色砂粒含む	良好	青灰色	
12	9	29－2	10号建物	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	1㎜前後の砂粒僅かに含む	良好	青灰色	
12	10	29－2	10号建物	須恵器	器台の脚部	—	—	—	波状文	1㎜前後の砂粒含む	良好	明灰色	三角形透孔あり
12	11	30	10号建物	須恵器	壺	—	12.8	—	回転ヘラ削り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
12	12	29－2	10号建物	土師器	高坏	—	—	—		2㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
12	13	29－2	10号建物	土師器	高坏	—	—	—		1㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
12	14	29－2	10号建物	土師器	高坏	—	—	—		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡橙褐色	赤色顔料塗布
12	15	29－2	10号建物	土師器	甕	—	—	—		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡褐色	
14	1	31	1号柵列	須恵器	坏	—	8.0	—	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	底部墨書「高上」あり
14	2	31	1号柵列	須恵器	坏	—	(8.6)	—	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	底部墨書「□」あり
14	3	31	1号柵列	須恵器	坏	(12.8)	—	—		～0.5㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	
14	4	31	1号柵列	須恵器	坏	—	(8.8)	—	静止糸切り	密、白色砂粒僅かに含む	良好	暗灰色	
14	5	31	1号柵列	須恵器	坏	—	(9.0)	—	回転糸切り	密、微細砂粒多く含む	良好	暗灰色	
14	6	31	1号柵列	須恵器	坏	(17.4)	—	—		密、白色砂粒含む	良好	淡青灰色	
14	7	31	1号柵列	須恵器	坏	(16.6)	—	—	5条沈線	密、白色砂粒僅かに含む	良好	青灰色	
14	8	31	1号柵列	須恵器	高台付坏	(12.5)	(9.1)	4.9	回転糸切り	～3㎜の砂粒含む	良好	青灰色	
14	9	31	1号柵列	須恵器	坏	(11.4)	—	—		密	良好	淡灰色	
14	10	31	1号柵列	須恵器	高台付皿	(18.6)	(15.6)	3.1	回転糸切り	微細砂粒含む	良好	青灰色	
14	11	31	1号柵列	須恵器	高台付皿	(21.6)	(17.6)	4.2		密、微細砂粒含む	やや不良	明橙褐色	
14	12	31	1号柵列	須恵器	皿	(13.4)	(9.4)	2.1	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	転用硯
14	13	31	1号柵列	須恵器	皿	(13.0)	(10.8)	2.6	回転糸切り	密、白色砂粒僅かに含む	良好	暗灰色	
14	14	31	1号柵列	須恵器	高坏	(27.6)	—	—	回転ヘラ削り	密	良好	暗灰色	
14	15	31	1号柵列	土師器	甕	—	—	—	ハケメ	やや粗、3㎜以下の砂粒含む	良好	暗灰褐色	内外面煤付着
14	16	31	1号柵列	土製品	竈	—	—	—		3㎜以下の砂粒多く含む	良好	茶褐色	
14	17	31	1号柵列	須恵器	坏	—	—	—	糸切り	密、微細砂粒含む	良好	淡青灰色	
14	18	31	1号柵列	須恵器	甕	—	—	—		精良	良好	灰色	孔に1㎝の木栓あり、周囲に漆付着
14	19	31	1号柵列	須恵器	坏	—	—	—	糸切り	～2㎜の砂粒含む	良好	濃青灰褐色	
14	20	31	1号柵列	須恵器	坏	(13.6)	(8.6)	3.9	糸切り	～1㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	
14	21	31	1号柵列	須恵器	坏	(12.4)	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
14	22	31	1号柵列	須恵器	高台付坏	(13.0)	(8.2)	4.0	回転糸切り	～3㎜の砂粒僅かに含む	良好	青灰色	
14	23	31	1号柵列	須恵器	高台付坏	—	—	—	糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14	24	31	1号柵列	須恵器	皿	(14.2)	(10.0)	(1.9)	回転糸切り	微細砂粒多く、～2㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	
14	25	31	1号柵列	須恵器	蓋	(13.7)	－	－		～2㎜の砂粒少し含む	良好	淡青灰色	
14	26	31	1号柵列	須恵器	壺	－	(8.0)	－		～1㎜の砂粒含む	良好	淡褐色	
14	27	31	1号柵列	土師器	甕	－	－	－		～2㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
14	28	31	1号柵列	製塩土器	焼塩壺	－	－	－		～1㎜の砂粒少し含む	良好	淡褐色	
15	29	32－1	1号柵列	須恵器	坏蓋	－	－	－		密、微細砂粒含む	不良	黒灰色	
15	30	32－1	1号柵列	須恵器	坏	(12.1)	－	－		～2㎜の砂粒少し含む	良好	淡青灰色	
15	31	32－1	1号柵列	須恵器	皿	(16.8)	(10.4)	3.3	回転糸切り	密	不良	淡黄白色	
15	32	32－1	1号柵列	須恵器	皿	－	－	－	回転糸切り	密、白色砂粒多く含む	良好	暗灰色	
15	35	32－1	1号柵列	須恵器	坏蓋	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	内面墨痕あり、転用硯
15	36	32－1	1号柵列	須恵器	高坏	(20.0)	－	－		密、白色砂粒僅かに含む	良好	淡灰色	
15	37	32－1	1号柵列	須恵器	短頸壺	－	－	－		密、白色砂粒僅かに含む	良好	暗灰色	
15	38	32－1	2号柵列	須恵器	坏蓋	(14.0)	－	－		～2㎜の砂粒含む	良好	灰色	
15	39	32－1	2号柵列	須恵器	坏蓋	(11.9)	－	－		微細砂粒少し含む	良好	青灰色	
15	40	32－1	2号柵列	須恵器	坏	(14.8)	－	－		微細砂粒含む	やや不良	淡黄褐色	外面煤付着
15	41	32－1	2号柵列	須恵器	高台付皿	(19.8)	－	－		密、白色砂粒僅かに含む	やや不良	暗黄褐色	
15	42	32－1	2号柵列	須恵器	高台付皿	(21.4)	－	－		密、白色砂粒含む	やや不良	淡茶褐色	
15	43	32－1	2号柵列	須恵器	高台付皿	－	(16.4)	－		密、白色砂粒を含む	不良	灰白色	
15	44	32－1	2号柵列	須恵器	高坏	(21.0)	－	－		密、微細砂粒含む	良好	暗灰色	外面赤色顔料付着
15	45	32－1	2号柵列	須恵器	坏蓋	(15.4)	－	－		密、微細砂粒含む	良好	淡青灰色	
15	46	32－1	2号柵列	須恵器	坏	(10.6)	－	－		密	良好	灰白色	
15	47	32－1	2号柵列	須恵器	坏	(11.8)	－	－		密	良好	淡灰色	
15	48	32－1	2号柵列	須恵器	坏蓋	(14.6)	－	－		～1㎜の砂粒含む	良好	青灰色	
15	49	32－1	2号柵列	須恵器	坏	(10.3)	(8.2)	3.7	回転糸切り	～4㎜の砂粒含む	良好	青灰色	
15	50	41	2号柵列	須恵器	高坏	(23.8)	－	－		密、白色砂粒含む	良好	淡青灰色	
15	51	41	2号柵列	須恵器	坏	(11.8)	－	－		微細砂粒含む	良好	赤灰色	内面濃赤灰色
17	1	32－2	18号土坑	須恵器	坏	(13.6)	(5.0)	4.3	回転糸切り	～0.5㎜の砂粒少し含む	良好	灰色	
17	2	32－2	18号土坑	須恵器	高台付坏	－	(9.6)	－	糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
17	3	32－2	20号土坑	須恵器	坏	－	－	－		2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
17	4	32－2	20号土坑	須恵器	高台付皿	－	(15.2)	－	タタキ	微細砂粒含む	良好	灰白色	
17	5	32－2	20号土坑	須恵器	高台付皿	－	－	－		～1㎜の砂粒含む	良好	淡青灰色	
17	6	32－2	23号土坑	須恵器	蓋	13.5	－	－	削り後ナデ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	内面墨痕あり、転用硯
17	7	32－2	21号土坑	土師器	甕	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	不良	淡褐色	風化著しい
17	8	36	23号土坑	須恵器	蓋	12.5	－	3.3		2㎜以下の砂粒含む	良好	暗青灰色	
17	9	32－2	22号土坑	須恵器	坏蓋	－	－	－		密、1㎜以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	
17	10	32－2	22号土坑	土師器	壺	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	暗褐色	外面赤色顔料塗布
18	1	32－2	23号土坑	須恵器	蓋	(16.6)	－	－		2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
18	2	32－2	23号土坑	須恵器	蓋	－	－	－		密、1㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	
18	3	32－2	23号土坑	須恵器	坏身	－	－	－		やや密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	乳白色	
18	4		23号土坑	須恵器	坏	11.3	8.0	4.0	回転糸切り	～3㎜の砂粒少し含む	やや不良	橙褐色	
18	5		23号土坑	須恵器	坏	－	(9.6)	－	糸切り	1㎜以下の白色砂粒少し含む	良好	灰色	
18	6		23号土坑	須恵器	坏	(12.0)	(8.2)	4.1		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
18	7	32－2	23号土坑	須恵器	坏	－	7.8	－	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	内面摩滅
18	8	33－1	23号土坑	須恵器	坏	－	8.5	－	回転糸切り	密、5㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
18	9	33－1	23号土坑	須恵器	高台付坏	(11.6)	(8.8)	4.3	糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
18	10	36	23号土坑	須恵器	高台付皿	18.3	14.2	4.0	回転糸切り後ナデ	1㎜以下の白色砂粒多く含む	良好	青灰色	瓜形圧痕
18	11	33－1	23号土坑	須恵器	高台付皿	－	(14.9)	－		～2㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	
18	12	33－1	23号土坑	須恵器	皿	(14.6)	(10.6)	2.4	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	内面摩滅
18	13	33－1	23号土坑	須恵器	高台付皿	(14.3)	－	－	糸切り	1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
18	14	33－1	23号土坑	須恵器	短頸壺	(9.2)	－	－		1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
18	15	33－1	23号土坑	製塩土器	焼塩壺	－	－	－		密、3㎜以下の砂粒多く含む	良好	橙褐色	
18	16	33－1	23号土坑	土師器	甑	－	(17.7)	－	ハケメ	密、2㎜以下の砂粒多く含む	良好	灰褐色	上半部に黒斑あり、穿孔あり
18	17	33－1	20号溝	須恵器	蓋	－	－	－		密、4㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
18	18	33－1	20号溝	須恵器	蓋	(15.1)	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
18	19	33－1	20号溝	須恵器	皿	(14.8)	(11.6)	2.7	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒多く含む	良好	青灰色	
18	20	33－1	20号溝	須恵器	高台付坏	－	(21.8)	－		～1㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
18	21	33－1	20号溝	須恵器	坏	－	(8.6)	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	内面摩滅
18	22	33－1	20号溝	土師器	高台付坏	－	－	－		密	不良	乳白色	内外面赤色顔料塗布
18	23	33－1	20号溝	土師器	甑把手	－	－	－	ハケメ	～2㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
18	24	33－2	20号溝	瓦	丸瓦	－	－		布目	～1㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	
19	1	36	24号土坑	須恵器	蓋	(16.0)	－	2.85		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
19	2	33－2	21号溝	須恵器	蓋	－	－	－		2㎜以下の砂粒ごく僅かに含む	良好	青灰色	
19	3	36	24号土坑	須恵器	蓋	15.5	－	2.65		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	墨痕あり
19	4	33－2	24号土坑	須恵器	蓋	(16.8)	－	－		2㎜大の石英1ヶ、1㎜以下の砂粒僅かに含む	良好	灰色	内面全面に墨痕あり、転用硯、外面に自然釉付着
19	5	33－2	24号土坑	須恵器	蓋	(14.0)	－	－		微細白色砂粒含む	良好	青灰色	内面全面に墨痕あり 転用硯
19	6	33－2	21号溝	須恵器	蓋	－	－	－		密、1㎜以下の砂粒を含む	良好	灰白色	
19	7	33－2	21号溝	須恵器	坏	(12.1)	－	－	回転ナデ	密、1㎜以下の白色砂粒含む	良好	灰色	
19	8	33－2	21号溝	須恵器	坏	－	(6.0)	－		密、1㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
19	9	33－2	24号土坑	須恵器	坏	(12.7)	(10.3)	3.5	糸切り	密、1㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	
19	10	33－2	21号溝	須恵器	坏	(12.9)	－	－		密、1㎜以下の砂粒少し含む	良好	紫灰色	
19	11	36	21号溝	須恵器	坏	(14.0)	(10.2)	4.15	糸切り	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	暗青灰色	
19	12	33－2	24号土坑	須恵器	高台付坏ヵ	－	(9.6)	－		3㎜以下の砂粒多く含む	やや不良	紫灰色	
19	13	36	24号土坑	須恵器	高台付坏	13.2	8.0	4.2		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
19	14	36	24号土坑	須恵器	高台付坏	13.0	8.8	4.3		微細砂粒含む	良好	青灰色	墨痕あり、転用硯
19	15	36	24号土坑	須恵器	壺	10.3	－	－	タタキ	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
19	16	33－2	24号土坑	須恵器	壺	－	－	－		1㎜以下の砂粒少し含む	良好	淡青灰色	内面と断面に漆付着、破片にした後漆容器として使用
19	17	33－2	21号溝	須恵器	皿	－	－	－		密、～1㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	全面漆付着
19	18	33－2	24号土坑	土師器	坏	(16.8)	(5.0)	4.4	削り	1㎜以下の砂粒僅かに含む	良好	淡黄赤色	全面赤色顔料塗布
19	19	33－2	24号土坑	土師器	皿	－	(10.0)	－		微細砂粒僅かに含む	良好	淡黄褐色	全面赤色顔料塗布
19	20	33－2	21号溝	土師器	皿	－	10.6	－	回転ヘラ削り	2㎜以下の砂粒少し含む	良好	淡黄褐色	全面赤色顔料塗布、外面一部黒斑あり（黒斑には赤色顔料なし）
19	21	36	24号土坑	土師器	甕	(19.0)	－	－	ハケメ	3㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	外面一部に煤付着
20	1	34－1	5号溝	須恵器	蓋	－	－	－		白色砂粒多く含む	良好	灰色	
20	2	34－1	5号溝	須恵器	蓋	－	－	－		白色砂粒少し含む	良好	灰色	
20	3	34－1	5号溝	須恵器	高台付坏	－	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
20	4	34－1	5号溝	須恵器	高台付坏	－	8.5	－		密、3㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	
20	5	34－1	5号溝	須恵器	坏	(7.0)	－	－	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
20	6	34－1	5号溝	瓦	平瓦	－	－	－		2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	
20	7	34－1	8号溝	須恵器	坏蓋	－	－	－		密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
20	8	34－1	8号溝	須恵器	坏蓋	－	－	－		密	良好	灰白色	
20	9	34－1	8号溝	須恵器	坏身	－	－	－		密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
20	10	34－1	8号溝	須恵器	坏	(13.6)	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	
20	11	34－1	8号溝	須恵器	坏	(13.8)	－	－		密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
20	12	34－1	8号溝	須恵器	坏	(15.9)	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	紫灰色	
20	13	34－1	8号溝	須恵器	高台付坏	－	(9.1)	－	糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	底部ヘラ記号あり
20	14	34－1	8号溝	須恵器	高台付坏	－	(9.6)	－	回転ヘラ切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡青灰色	底部墨書「介」あり
20	15	34－1	8号溝	須恵器	壺	－	(12.8)	－	静止糸切り	砂粒を殆ど含まない	良好	青灰色	底部穿孔
20	16	34－1	8号溝	須恵器	鉢	－	(13.1)	－		やや密、4㎜以下の砂粒含む	やや不良	灰色	白色・黒色粒子多く含み産地不明
20	17	34－1	8号溝	須恵器	鉢ヵ	－	(23.0)	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
20	18	34－1	8号溝	須恵器	甕	－	－	－	格子タタキ	やや密、2㎜以下の砂粒含む	良好	乳褐色	
20	19	34－2	8号溝	須恵器	提瓶	－	－	－	カキメ	～3㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	
21	20	36	8号溝	土師器	坏	(10.8)	5.2	4.5	回転糸切り	1㎜程度の白色砂粒含む	良好	黄褐色	表面風化
21	21	34－2	8号溝	土師器	坏	－	6.0	－	回転糸切り	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	乳褐色	
21	22	34－2	8号溝	土師器	坏	－	(6.0)	－	回転糸切り	密	良好	灰白色	
21	23	34－2	8号溝	土師器	坏	－	(7.0)	－	回転糸切り	～2㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
21	24	34－2	8号溝	土師器	坏	－	(6.8)	－	回転糸切り	やや密、微細砂粒含む	不良	乳白色	
21	25	36	8号溝	土師器	高台付坏	－	8.4	－		～1㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄桃色	
21	26	36	8号溝	土師器	高台付坏	－	7.5	－		微細砂粒、～1㎜石英含む	良好	淡赤褐色	
21	27	36	8号溝	土師器	高台付坏	－	(8.2)	－		～2㎜の砂粒含む	良好	暗黄褐色	内画面ロクロ目著しい
21	28	34－2	8号溝	土師器	坏	(12.4)	－	－		やや密、微細砂粒多く含む	不良	乳白色	
21	29	36	8号溝	土師器	皿	9.4	4.1	1.9	回転糸切り	～1㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
21	30	34－2	8号溝	土師器	皿	－	4.0	－	回転糸切り	密、4㎜以下の砂粒含む	良好	乳白色	
21	31	36	8号溝	土師器	皿	8.6	4.7	1.8	糸切り	1㎜以下の白色砂粒少し含む	良好	明黄褐色	
21	32	36	8号溝	土師器	皿	8.7	4.2	2.6	回転糸切り	3㎜以下の白色砂粒含む	良好	橙褐色	内面に煤付着　灯明皿
21	33	36	8号溝	土師器	高台付皿	－	5.0	－		～2㎜の砂粒含む	良好	淡褐色	
21	34	34－2	8号溝	土師器	高台付皿	(8.6)	(5.4)	(3.25)		橙色粒子少し含む	良好	黄褐色	
21	35	34－2	8号溝	土師器	高台付皿	－	4.7	－		微細砂粒多く含む	良好	淡褐色	
21	36	36	8号溝	土師器	高台付皿	8.6	4.8	2.7	回転糸切り	～1㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
21	37	36	8号溝	土師器	皿	8.5	4.6	3.9	回転糸切り	精良	良好	淡黄褐色	柱状高台付
21	38	34－2	8号溝	土師器	皿	－	4.0	－	回転糸切り	～1㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	柱状高台付
21	39	34－2	8号溝	土師器	皿	－	4.0	－	回転糸切り	～1㎜の砂粒含む	良好	暗黄褐色	柱状高台付
21	40	36	8号溝	土師器	高台付皿	8.2	－	－		やや密	良好	灰白色	
21	41	36	8号溝	土師器	皿	(9.9)	4.5	3.0	回転糸切り	微細砂粒含む	良好	淡褐色	柱状高台付
21	42	34－2	8号溝	土師器	皿	－	5.0	－	回転糸切り	精良	良好	黄白色	柱状高台付　赤色顔料塗布
21	43	34－2	8号溝	土師器	甕ヵ壺	－	－	－	ハケメ	やや粗、4㎜以下の砂粒多く含む	良好	明赤橙色	内面一部煤付着
21	44	34－2	8号溝	土製品	竈	－	－	－		～2㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
22	47	35－1	8号溝	瓦	平瓦	－	－	－	糸切り	砂粒を殆ど含まない	良好	暗黄灰色	軟質
22	48	35－1	8号溝	瓦	平瓦	－	－	－	布目、粗いタタキ	～3㎜の砂粒含む	良好	灰色	須恵質
22	49	35－1	8号溝	瓦	丸瓦	－	－	－	布目	～3㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	土師質
22	50	35－1	8号溝	瓦	丸瓦	－	－	－	糸切り	～2㎜の砂粒含む	良好	灰白色	軟質
22	51	35－1	8号溝	白磁	碗	－	(6.8)	－		密	良好	灰色	Ⅳ－1b類
22	52	35－1	9号溝	白磁	碗	(16.2)	－	－		黒色粒子含む	良好	黄白色	Ⅳ類　表面貫入が多くはいる
22	53	35－1	10号溝	須恵器	蓋	－	－	－		密、6㎜以下の砂粒を含む	良好	青灰色	
22	54	35－1	10号溝	須恵器	蓋	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒を含む	良好	灰白色	
22	55	35－1	10号溝	須恵器	皿ヵ	－	－	－		密	良好	青灰色	
22	56	35－2	10号溝	土師器	竈	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒を含む	良好	淡褐色	

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
22	57	36	11号溝	須恵器	蓋	16.8	－	2.5	糸切り	1㎜以下の白色砂粒少し含む	良好	灰色	
22	58	35－2	11号溝	須恵器	蓋	(16.3)	－	－		密、2㎜までの砂粒含む	良好	灰白色	内面墨痕あり、転用硯
22	59	36	P371	土師器	壺	8.4	－	－	ハケメ	やや密	やや不良	淡褐色	風化著しい
23	1	35－2	12号溝	須恵器	坏蓋	－	－	－	ヘラ削り	～2㎜の砂粒含む	良好	淡青灰色	
23	2	35－2	12号溝	須恵器	坏蓋	(14.7)	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
23	3	35－2	12号溝	須恵器	蓋	(16.1)	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	内面墨付着　転用硯
23	4	35－2	12号溝	須恵器	坏身	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
23	5	35－2	12号溝	須恵器	坏	(12.0)	－	－		密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
23	6	35－2	12号溝	須恵器	坏	－	(8.2)	－	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
23	7	35－2	12号溝	須恵器	蓋	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	
23	8	35－2	12号溝	須恵器	坏	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
23	9	35－2	12号溝	須恵器	壺	－	－	－	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	漆付着
23	10	35－2	12号溝	土師器	皿	(15.0)	(12.0)	－		0.5㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	内面赤色顔料塗布
23	11	35－2	12号溝	土師器	甕	－	－	－		3㎜以下の砂粒多く含む	良好	灰黄褐色	
23	12	35－2	12号溝	土師器	甕	－	－	－	ヘラ削り	密、2㎜以下の砂粒含む	不良	淡黄褐色	
23	13	35－2	12号溝	弥生土器ヵ	不明	－	－	－	櫛描き　ハケメ	2㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
24	1	37－1	13号溝	須恵器	坏	(12.6)	－	－		～1㎜の砂粒僅かに含む	良好	青灰色	
24	2	37－1	13号溝	須恵器	坏	(13.3)	－	－		微細砂粒少し含む	良好	青灰色	
24	3	37－1	13号溝	須恵器	坏	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
24	4	37－1	13号溝	須恵器	坏	－	(8.8)	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
24	5	37－1	13号溝	須恵器	坏	－	－	－	回転糸切り後ナデ	～1㎜の砂粒少し含む	良好	濃灰色	
24	6	37－1	13号溝	須恵器	高坏	－	－	－		～2㎜の砂粒少し含む	良好	灰色	
24	7	37－1	13号溝	須恵器	高台付皿	－	(6.8)	－		～1㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
24	8	37－1	14号溝	須恵器	横瓶	－	－	－	タタキ	～1㎜の砂粒僅かに含む	良好	灰色	
24	9	37－1	16号溝	須恵器	壺	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	
24	10	37－1	16号溝	土師器	坏	－	(7.8)	－	糸切り	密、微細砂粒僅かに含む	良好	淡灰褐色	内面黒色
24	11	37－1	16号溝	瓦	平瓦	－	－	－	格子タタキ、布目	やや密、微細砂粒含む	良好	淡灰白色	
24	12	37－1	15号溝	須恵器	坏	(8.6)	－	－	静止糸切り	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
24	13	37－1	15号溝	須恵器	蓋	(15.9)	－	－		密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
24	14	37－1	15号溝	須恵器	坏	(16.6)	－	－		密、1㎜以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	
24	15	37－1	15号溝	須恵器	坏	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	
24	16	37－1	15号溝	須恵器	高台付坏	－	－	－		1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
24	17	37－1	15号溝	須恵器	皿	－	－	－		密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
24	18	37－2	15号溝	土製品	竈	(38.2)	－	－		～3㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
24	19	37－2	15号溝	土製品	竈	－	－	1.7		2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
24	20	37－2	15号溝	須恵器	高坏	－	－	－		～2㎜の砂粒少し含む	良好	青灰色	
24	21	38	15号溝	土師器	高坏	－	－	－		～2㎜の石英、砂粒含む	良好	淡赤褐色	変則的な3方向に透孔あり
25	1	38	17号溝	須恵器	坏蓋	15.8	－	3.0		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	輪状つまみ
25	2	38	17号溝	須恵器	高台付坏	14.0	8.4	5.4	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
25	3	38	17号溝	須恵器	高台付坏	13.0	8.7	5.0	回転糸切り	2㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
25	4	38	17号溝	須恵器	長頸壺	7.0	7.4	17.9	ヘラ切り後ナデ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡灰色	底部ヘラ記号あり
25	5	37－2	17号溝	土師器	坏	(17.4)	(14.5)	(3.95)	回転糸切り	～2㎜の砂粒含む	良好	淡橙褐色	内外面赤色顔料塗布
25	6	37－2	17号溝	土師器	高台付皿	－	(17.6)	－		～2㎜の砂粒少し含む	良好	淡黄褐色	外面赤色顔料塗布
25	7	38	17号溝	土師器	甕	(19.0)	－	－		～2㎜の砂粒多く含む	良好	淡橙褐色	
25	8	37－2	17号溝	土師器	甑把手	－	－	－		～1㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
25	9	37－2	17号溝	土製品	竈	－	－	－		～2㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
25	10	37－2	17号溝	土製品	支脚	－	－	－		～3㎜の砂粒多く含む	良好	淡橙褐色	
25	11	37－2	17号溝	瓦	平瓦	－	－	－	格子タタキ、布目	～3㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
27	1	38	2号井戸	須恵器	高台付坏	－	(10.0)	－	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	灰白色	軟質
27	2	38	2号井戸	須恵器	高台付坏	－	(10.2)	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
27	3	38	2号井戸	須恵器	短頸壺	(8.8)	－	－		密	良好	青灰色	
27	4	38	2号井戸	須恵器	壺	－	－	－	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
27	5	38	2号井戸	須恵器	鉢ヵ	－	－	－	カキ目	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	
27	6	38	2号井戸	須恵器	長頸壺	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
27	7	38	2号井戸	土師器	坏	－	(7.0)	－	回転糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	柱状高台付
27	8	38	2号井戸	土師器	坏	－	(5.1)	－	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	乳褐色	
27	9	38	2号井戸	土師器	坏	15.7	6.0	4.6	回転糸切り	1㎜以下の砂粒含む	良好	淡茶褐色	
27	10	38	2号井戸	土師器	坏	14.0	5.2	4.3	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡橙褐色	
27	11	38	2号井戸	土師器	皿	(10.0)	(6.5)	1.8		密	良好	乳褐色	
27	12	38	2号井戸	黒色土器	坏	－	(6.2)	－	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	内面黒色
27	13	38	2号井戸	瓦	平瓦	－	－	－	格子タタキ、布目	～1㎜の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
27	14	38	2号井戸	土製品	支脚	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡赤褐色	
29	1	38	3号井戸	須恵器	蓋	(16.4)	－	－		密、2㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	
29	2	38	3号井戸	須恵器	坏ヵ	－	(17.1)	－	回転糸切り	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	乳褐色	
29	3	38	3号井戸	須恵器	坏	－	－	－	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	底部墨書あり
29	4	38	3号井戸	須恵器	坏	－	(11.4)	－	静止糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
29	5	38	3号井戸	須恵器	坏	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
29	6	38	3号井戸	須恵器	皿	(9.9)	(6.8)	2.8	静止糸切り	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
29	7	38	3号井戸	須恵器	高坏	－	－	－	1条沈線	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種 別	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
29	8	38	3号井戸	須恵器	高坏	－	－	－		～2㎜の砂粒含む	良好	青灰色	
29	9	38	3号井戸	須恵器	壺	－	(9.7)	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	漆付着
29	10	38	3号井戸	製塩土器	焼塩壺	－	－	－	指頭圧痕	密、微細砂粒含む	良好	淡橙白色	
29	11	40－1	3号井戸	土師器	皿	－	(9.4)	－		～1㎜の砂粒含む	良好	淡褐色	内外面とも赤色顔料塗布
29	12	40－1	3号井戸	土師器	甕	－	－	－		やや密、3㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
29	13	40－1	3号井戸	土師器	甕	(10.6)	－	－		～2㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
29	14	40－1	3号井戸	土師器	甕	－	－	－		やや密、3㎜以下の砂粒含む	不良	淡褐色	
31	1	40－1	4号井戸	須恵器	坏蓋	－	－	－		密、1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
31	2	40－1	4号井戸	須恵器	高台付坏	－	(7.8)	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
31	3	40－1	4号井戸	須恵器	坏	－	(7.8)	－	糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	少し上げ底
31	4	40－1	4号井戸	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
31	5	40－1	4号井戸	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
31	6	40－1	4号井戸	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
31	7	40－1	4号井戸	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	密	良好	灰白色	
31	8	40－1	4号井戸	土師器	坏	(14.4)	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗茶褐色	
31	9	40－1	4号井戸	土師器	坏	－	(5.6)	－	回転糸切り	1㎜程度の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
31	10	40－1	4号井戸	土師器	坏	－	(5.2)	－	回転糸切り	赤色、白色粒子少し含む	良好	淡黄褐色	
31	11	40－2	4号井戸	土師器	坏	－	(6.2)	－	糸切り	密	良好	淡褐色	
31	12	40－1	4号井戸	土師器	坏ヵ	－	(5.2)	－	糸切り	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	黄褐色	
31	13		4号井戸	土師器	高台付坏	－	(7.4)	－		密、1.5㎜以下の砂粒含む	良好	淡橙褐色	
31	14	40－2	4号井戸	土師器	皿	(8.8)	3.1	2.35	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒少し含む	良好	淡黄褐色	
31	15	40－1	4号井戸	土師器	皿	(9.4)	－	－		精良	良好	淡黄褐色	
31	16	40－2	4号井戸	土師器	皿	－	(3.3)	－	回転糸切り	密	良好	灰褐色	
31	17	40－2	4号井戸	土師器	皿	－	(3.4)	－	糸切り	精良	良好	淡黄褐色	
31	18	40－2	4号井戸	土師器	皿	－	(4.1)	－	回転糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	
31	19	40－2	4号井戸	土師器	皿	－	(3.8)	－	回転糸切り	1㎜以下の白色粒子多く含む	良好	淡黄褐色	
31	20	38	4号井戸	土師器	皿	(7.6)	5.8	4.25	回転糸切り	精良	良好	淡黄褐色	柱状高台付
31	21	38	4号井戸	土師器	皿ヵ	－	(5.4)	－	回転糸切り	やや密、1㎜以下の砂粒含む	良好	淡灰色	柱状高台付
31	22	40－2	4号井戸	土師器	皿ヵ	－	6.1	－	回転糸切り	1㎜程度の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	柱状高台部
31	23	38	4号井戸	土師器	皿ヵ	－	4.6	－	糸切り	やや密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	柱状高台付
31	24	38	4号井戸	土師器	皿ヵ	－	(5.6)	－	糸切り	1㎜程度の砂粒含む	良好	淡黄褐色	柱状高台付
31	25	40－2	4号井戸	白磁	蓋	2.7	1.5	1.1	施釉	精緻	良好	灰白色	
31	26	40－2	4号井戸	白磁	碗	(14.8)	－	－	施釉	精緻	良好	黄灰色	太宰府分類Ⅱ類、内外面釉剥離
31	27	40－2	4号井戸	瓦	丸瓦	－	－	－	布目	密、5㎜以下の砂粒少し含む	良好	淡褐色	
31	28	46	4号井戸	ガラス小玉		幅0.385	厚0.23	孔0.125				濃紺色	0.05g
34	1	40－2	3区黒色土	須恵器	高坏	－	(8.4)	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	明灰色	3方向に透孔
34	2	40－2	3区黒色土	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	灰色	
34	3	40－2	3区黒色土	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	灰色	軟質
34	4	38	3区黒色土	土師器	甕	(18.0)	－	－	ハケメ	～3㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
34	5	40－2	3区黒色土	土師器	甑	－	－	－	ハケメ	密、1㎜以下の砂粒多く含む	良好	黒褐色	全面黒斑付着
35	1	40－2	1区 P8	須恵器	坏蓋	－	－	－		密	良好	淡灰色	
35	2	40－2	1区 P8	土師器	皿	(7.8)	3.7	(1.9)	回転糸切り	密	やや不良	乳白色	
35	3	38	1区 P8	土師器	高台付坏	15.8	－	－		3㎜以下の砂粒含む	良好	白色	
35	4	40－2	1区 P16	須恵器	坏	－	－	－	静止糸切り	密、白色砂粒を含む	やや不良	淡灰色	
35	5	40－2	1区 P16	須恵器	坏	(12.5)	－	－		微細砂粒含む	良好	淡青灰色	
35	6	40－2	1区 P16	土師器	高台付坏	－	(10.4)	－		密	やや不良	淡黄褐色	内外面赤色顔料塗布
35	7	40－2	1区 P23	土師器	高台付坏	－	(8.4)	－		密、微細砂粒含む	やや不良	明橙褐色	
35	8	46	1区 P24	土師器	皿	9.5	5.0	2.6～1.9	回転糸切り	1㎜程度の白色砂粒少し含む	良好	淡灰白色	
35	9	40－2	1区 P24	土師器	高台付坏	－	－	－		密、微細砂粒僅かに含む	やや不良	淡橙白色	
35	10	46	1区 P277	須恵器	蓋	(14.4)	－	2.65		3㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	外面つまみ内ヘラ記号「×」あり
35	11	40－2	1区 P389	須恵器	蓋	(15.4)	－	－		砂粒を多く含む	良好	茶灰色	
35	12	41	1区 P400	肥前系陶器	皿	－	(11.6)	－	施釉	精緻	良好	乳白色	
35	13		1区 P433	土師器	甕	12.8	－	－	ヘラ削り、ハケメ	密	良好	淡褐色	風化著しい
35	14	41	1区 P433	須恵器	壺	－	－	－		密	良好	淡褐色	
35	15	41	1区 P433	須恵器	蓋	－	－	－		密、2㎜以下の砂粒を含む	良好	青灰色	
35	16	41	2区 P27	須恵器	坏	－	－	－	回転糸切り	密、白色砂粒含む	良好	青灰色	
35	17	41	2区 P30	須恵器	坏蓋	(16.6)	－	－		密、微細砂粒含む	良好	淡灰色	
35	18	41	2区 P30	須恵器	高台付坏	－	－	－		密	良好	暗灰色	外面底部自然釉付着
35	19	41	2区 P38	土師器	甕	(20.0)	－	－	ハケメ	やや粗、微細砂粒多く含む	良好	淡灰褐色	外面に煤付着
35	20	46	2区 P62	土師器	皿	7.8	3.4	2.6	糸切り	精良	良好	黄褐色	柱状高台付
35	21	46	2区 P62	土師器	皿	8.2	4.6	3.0	回転糸切り	精良	良好	灰黄褐色	柱状高台付
35	22	41	2区 P62	土師器	坏	－	(6.4)	－	静止糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰褐色	
35	23	41	2区 P73	須恵器	坏蓋	(14.4)	－	－		～2㎜の砂粒含む	良好	灰色	転用硯
35	24	41	2区 P73	須恵器	高台付坏	－	(8.5)	－	静止糸切り	～3㎜の砂粒含む	良好	灰色	墨痕あり、転用硯
35	25	41	2区 P73	製塩土器	焼き塩壺	－	－	－	布目	密、微細砂粒多く含む	良好	暗淡黄褐色	
35	26		2区 P93	土師器	坏	25.8	5.0	4.5	回転糸切り	密、微細砂粒含む	やや不良	淡白褐色	内外面煤付着
35	27		2区 P93	土師器	坏	16.2	6.0	3.5	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	橙褐色	著しく変形

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
35	28	41	2区 P82	土師器	甑把手	—	—	—		やや粗、微細砂粒多く含む	良好	淡橙褐色	
35	29	41	2区 P92	弥生土器	壺	—	—	—		やや粗、2㎜以下の砂粒多く含む	やや不良	淡黄褐色	指頭圧痕突帯文　貼付帯文　弥生中期
35	30	41	2区 P358	土師器	高台付坏	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒を含む	不良	淡褐色	風化著しい
35	31	41	2区 P429	須恵器	坏	(10.7)	(8.6)	2.9	静止糸切り	密、2㎜以下の砂粒を含む	良好	灰白色	
35	32	41	2区 P412	白磁	皿	—	(5.6)	—	施釉	精緻	良好	淡黄色	
35	33	41	2区 P110	瓦	平瓦	—	—	—	布目、縄目	密、微細砂粒多く含む	良好	淡灰色	
36	38	41	3区 P214	土製品	土錘	長さ7.0	幅3.4	厚み3.15	指頭圧痕	2㎜以下の砂粒多く含む	良好	暗黄褐色	
36	39	41	3区 P214	須恵器	坏蓋	(13.8)	—	—		～2㎜の砂粒含む	良好	青灰色	
36	40	41	3区 P214	須恵器	坏蓋	(14.4)	—	—		密	良好	暗灰色	内面墨付着　転用硯
36	41	41	3区 P214	須恵器	坏蓋	(14.6)	—	—	回転ヘラ削り	密、白色砂粒を含む	良好	灰白色	
36	42	41	3区 P214	須恵器	坏	(14.6)	—	—		密	良好	暗灰色	
36	43	41	3区 P214	須恵器	高台付坏	—	(9.2)	—		密、微細砂粒含む	良好	淡灰色	
36	44	41	3区 P214	須恵器	壺	—	(7.0)	—		密、白色砂粒含む	良好	暗灰色	
36	45	41	3区 P183	須恵器	器台	—	(29.2)	—		密、白色砂粒を含む	良好	灰白色	
36	46	41	3区 P152	須恵器	高台付坏	—	(13.2)	—	糸切り後ナデ	密、微細砂粒僅かに含む	良好	淡灰色	瓜形圧痕
36	47	41	1区 P247	土師器	甕	(19.6)	—	—	ハケメ	やや密、微細砂粒多く含む	やや不良	暗乳白色	
36	48	41	3区 SK13	須恵器	坏蓋	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	
36	49	41	3区 P144	須恵器	坏蓋	(14.4)	—	—		密、白色砂粒含む	良好	淡灰色	
36	50	41	3区 P144	須恵器	坏蓋	(14.0)	—	—		密、微細砂粒含む	良好	暗灰色	外面に灰を受ける、自然釉付着
36	51	41	3区 P144	須恵器	坏蓋	—	—	—		密、微細砂粒含む	良好	淡灰色	
36	52	41	3区 P144	須恵器	坏	—	—	—	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	底部墨書「σ」あり
36	53	41	3区 P144	須恵器	坏	—	—	—		密、白色砂粒を含む	良好	淡灰色	
36	54	41	3区 P144	須恵器	高坏	(24.8)	—	—		密、微細砂粒含む	やや不良	淡灰白色	
36	55	41	3区 P144	須恵器	甕	—	—	—	青海波文 タタキ	密、微細砂粒含む	良好	淡灰色	
36	56		3区 P144	須恵器	高坏	—	(15.6)	—		密、微細砂粒含む	不良	乳白色	
41	1	43	2区	弥生土器	甕	(23.4)	—	—	3条凹線、刺突文、円形浮文、指頭圧痕突帯文	やや粗、1㎜大の砂粒多く含む	やや不良	乳白色	
41	2	43	2区	弥生土器	高坏	—	(19.0)	—	5条凹線	やや密、1㎜大の砂粒多く含む	良好	乳白色	透孔あり
41	3	43	3区	土師器	高坏	(31.4)	—	—	ヘラ磨き	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡赤褐色	
41	4	46	1区	土師器	高坏	—	(8.4)	—		密、2㎜以下の砂粒含む	不良	淡褐色	
41	5	43	1区	土師器	高坏	(18.5)	—	—		やや密、3㎜以下の砂粒含む	不良	淡明褐色	風化著しい
41	6	43	1区	土師器	高坏	—	—	—		2㎜以下の砂粒を含む	不良	淡褐色	
41	7	46	1区	土師器	高坏	—	(11.0)	—		密、2㎜以下の砂粒含む	不良	淡黄褐色	風化著しい
41	8	46	1区	土師器	高坏	—	(9.1)	—		密、2㎜以下の砂粒含む	不良	淡黄褐色	風化著しい
41	9	43	3区	土師器	高坏	—	(15.4)	—	ハケメ	密、微細砂粒僅かに含む	良好	乳白色	
41	10	43	3区	土師器	甕	(14.6)	—	—		やや粗、2㎜以下の砂粒多く含む	やや不良	乳白色	
41	11	43	2区	土師器	甕	—	—	—	ハケメ		良好	淡褐色	風化著しい
41	12	43	3区	須恵器	坏蓋	—	—	—		密、微細砂粒含む	不良	淡灰色	軟質
41	13	43	3区	須恵器	坏蓋	—	—	—		密、微細砂粒多く含む	不良	乳白色	軟質
41	14	43	1区	須恵器	坏蓋	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
41	15	46	2区北	須恵器	坏蓋	(12.0)	—	—	ヘラ削り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
41	16	43	3区	須恵器	坏蓋	(13.6)	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
41	17	43	2区北	須恵器	坏身	(10.8)	—	—	削り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	自然釉付着・口縁内段あり
41	18	43	2区北	須恵器	高坏	—	—	—		密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	坏部
41	19	43	3区	須恵器	高坏	—	—	—	波状文、1条沈線	1㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	
41	20	43	2区	須恵器	高坏	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	2段3方向方形透孔
41	21	43	1区	須恵器	高坏	—	(16.4)	—		密、微細砂粒僅かに含む	良好	淡灰色	
41	22	43	2区北	須恵器	高坏	—	—	—		密、1.5㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	透孔
41	23	43	1区	須恵器	瓶	—	—	—	波状文	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
41	24	43	1区	須恵器	瓶ヵ	—	—	—	波状文	1㎜以下の砂粒を含む	良好	濃青灰色	自然釉付着
41	25	43	2・3区	須恵器	二重瓶	—	—	—	波状文	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
41	26	43	1区	須恵器	器台	(28.3)	—	—	組紐文	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
41	27	43	1区	須恵器	器台	—	—	—	波状文	密	良好	淡灰色	
41	28	43	3区	須恵器	器台	—	—	—	櫛描組紐文	密、微細砂粒僅かに含む	良好	淡灰色	
41	29	43	3区	須恵器	器台	—	—	—	櫛描組紐文	密、微細砂粒含む	良好	淡灰色	
41	30	43	3区	須恵器	器台	—	—	—	櫛描文	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	灰色	古墳時代
41	31	43	3区	須恵器	器台	(19.8)	—	—	波状文	密2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	古墳時代
41	32	43	2区	須恵器	蓋	—	—	—	波状文	砂粒を含む	良好	灰色	自然釉付着 つまみ部胴径1.6㎝
41	33	43	2区	須恵器	蓋	—	—	—	波状文、1条沈線	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
41	34	43	1区	須恵器	蓋	(13.8)	—	—	波状文、1条沈線	密	良好	青灰色	自然釉付着
42	35	43	3区	軟質土器	甕	—	—	—	格子タタキ	密、微細砂粒多く含む	良好	黄白色	外面煤付着
42	36	43	3区	軟質土器	甕	—	—	—	格子タタキ	密	良好	淡灰色	
42	37	43	3区	軟質土器	甕	—	—	—	格子タタキ	密、微細砂粒含む	良好	橙褐色	
42	38	43	3区	軟質土器	甕	—	—	—	格子タタキ	密、微細砂粒含む	良好	橙褐色	
42	39	43	3区	軟質土器	甕	—	—	—	格子タタキ	やや密、微細砂粒含む	良好	橙褐色	
42	40	43	T2	土製品	甑	長さ6.0	幅4.6	高さ2.6	手捏ね	砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	把手（穴があく）
42	41	46	2区北	土師器	甑	(23.2)	—	—	ヘラケズリ	密、5㎜以下の砂粒含む	良好	乳褐色	
42	42	43	2区	土製品	不明	縦2.85	横2.3	厚み1.1		1㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	

挿図 番号	写真図版	出土遺構名	種 別	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
42 43	46	2区北	土製品	竈	—	—	—		～2㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
42 44	46	2区北	土製品	竈	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	
42 45	46	1区	土製品	支脚	—	—	—	ハケ目	～3㎜の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	
42 46	43	2区北	土師器	坏	(10.5)	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	外面赤色顔料塗布・須恵器を模した土師器
42 47	43	2区北	土師器	高台付皿	—	(13.8)	—		密(1㎜以下の砂粒を含む)	不良	乳褐色	
42 48	43	1区	土師器	坏	—	—	—		密、微細砂粒含む	良好	淡赤褐色	内面黒色
42 49	44	2区	須恵器	坏蓋	(15.8)	—	3.3		～1㎜の砂粒極僅かに含む	良好	淡青灰色	つまみ部径4.8cm
42 50	44	3区	須恵器	坏蓋	(14.6)	—	—		密、微細砂粒僅かに含む	良好	暗灰色	墨痕あり　転用硯
42 51	44	3区	須恵器	坏蓋	(14.4)	—	—	糸切り	密、1㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	
42 52	44	3区	須恵器	蓋ヵ	—	(16.0)	—		やや密	良好	淡灰色	自然釉付着
42 53	44	2区	須恵器	坏蓋	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
42 54	44	1区	須恵器	坏	—	—	—		密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	煤付着
42 55	44	3区	須恵器	坏	(13.6)	(10.2)	(3.1)	回転糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
42 56	44	3区	須恵器	坏	—	(9.2)	—	回転糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
42 57	44	3区	須恵器	坏	(12.4)	9.0	4.3	回転糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
42 58	44	3区	須恵器	坏	(11.2)	6.6	4.0		密、1㎜以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	
42 59		2区北	須恵器	坏	—	(9.7)	—	糸切り後ナデ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
42 60	44	2区北	須恵器	高台付坏	—	—	—	削り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	表面全体が滑らか
42 61		3区	須恵器	坏	(13.4)	(8.8)	4.8	静止糸切り	1㎜以下の白色砂粒を多く含む	良好	青灰色	
42 62		3区	須恵器	高台付坏	(14.0)	(10.7)	4.65	糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	
43 63	46	3区	須恵器	坏	(14.6)	(10.0)	5.0	糸切り	密、1㎜以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	
43 64	44	3区	須恵器	高台付坏ヵ	—	(9.2)	—	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒少し含む	良好	青灰色	
43 65	46	3区	須恵器	坏	13.6	7.7	4.2	回転糸切り	1㎜の白色砂粒を多く含む	良好	青灰色	
43 66	44	3区	須恵器	長頸壺	(7.0)	—	—	1条沈線	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	灰色	
43 67	44	1区	須恵器	長頸壺ヵ	—	—	—		1㎜以下の砂粒を含む	良好	淡青灰色	
43 68	44	2区北	須恵器	甕	—	—	—	波状文	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
43 69	44	1区	須恵器	甕	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
43 70	44	1区	須恵器	鉢	—	(16.8)	—	カキメ	密	良好	淡灰色	
43 71	44	2区北	須恵器	鉢	(22.2)	—	—	タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
43 72	44	1区	須恵器	鉢ヵ	—	—	—		密、微細砂粒僅かに含む	良好	淡灰色	獣足
43 73	44	3区	須恵器	硯	—	(12.8)			密	良好	青灰色	透孔あり　自然釉付着
43 74	44	1区	須恵器	硯	—	—	—		砂粒少し含む	良好	青灰色	透孔あり
43 75	44	1区	須恵器	硯	—	—	—		密	良好	暗青灰色	幅4㎜の方形透孔あり
43 76	44	2区	須恵器	把手ヵ	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
43 77	44	3区	須恵器	坏	—	(7.6)	—	回転糸切り	3㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	底部墨書「家ヵ」あり
43 78	44	1区	須恵器	坏ヵ	—	—	—		2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	「大」のヘラ描文字あり
43 79	44	3区	須恵器	蓋	—	—	—	回転糸切り	密	良好	淡青灰色	内面「在ヵ」ヘラ描文字あり
43 80	44	2区	須恵器	不明	—	—	—		密	良好	淡灰色	「□」ヘラ描文字あり
43 81	44	3区	須恵器	不明	—	—	—	櫛描文	2㎜以下の砂粒含む	良好	淡青灰色	10条　斜め1条
43 82	44	2区	土製品	円形加工品	径1.2	—	厚み1.75	縄目．布目	1㎜以下の砂粒を含む	良好	青灰色	瓦の再利用
43 83	44	2区	土製品	円形加工品	径2～2.3	—	—		1㎜程度の砂粒含む	良好	灰色	瓦の再利用　12.26g
43 84	44	3区	土製品	土錘	長さ4.3	—	厚み1.4～5	指頭圧痕	1㎜以下の白色砂粒若干含む	良好	濃青灰色	須恵質
43 85	44	2区	土製品	土錘	長さ3.1	幅3.5	厚み2.9		1㎜以下の砂粒を多く含む	良好	灰白色	径9㎜の孔があく
43 86	44	3区	土製品	土錘	長さ6.7	幅3.0	厚み3.2		～3㎜の砂粒多く含む	良好	黄褐色	外面一部に煤付着 51.94g
43 87	44	1区	製塩土器	焼塩壺	—	—	—	指頭圧痕	やや密、微細砂粒多く含む	良好	淡黄白色	
43 88	44	1区	土製品	中蓋ヵ	—	—	—		砂粒を多く含む	良好	灰黄褐色～黄褐色	
43 89	44	3区	瓦	軒丸瓦	—	—	—	珠文帯	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	乳褐色	国分寺2類
43 90	45	1区	瓦	丸瓦	—	—	—		やや密、微細砂粒多く含む	やや不良	暗淡黄白色	
43 91	45	2区	瓦	平瓦	—	—	—	格子タタキ、布目	～1㎜の砂粒含む	良好	淡橙灰色	
43 92	45	1区	瓦	平瓦	—	—	—	格子タタキ、布目	5㎜以下の砂粒含む	良好	乳褐色	
43 93	45	3区	瓦	平瓦	—	—	—	縄目、タタキ	密、微細砂粒多く含む	良好	淡青灰色	
44 94	45	1区	瓦	平瓦	—	—	—		2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
44 95	45	3区	緑釉陶器	碗ヵ皿	—	—	—	薄く淡緑色釉施釉	密	良好　硬質	淡緑色	高台付　10c前半京都産
44 96	45	1区	緑釉陶器	碗ヵ皿	—	—	—	淡緑色釉施釉	密	良好	青灰色	高台付　10c前半京都産
44 97	45	1区	瓦質土器	鍋	—	—	—		やや密	不良	暗灰色	
44 98	45	1区	瓷器系陶器	甕	—	—	—		1～3㎜の白色砂粒含む	良好	茶褐色	自然釉付着
44 99	45	1区	土師器	高台付坏	—	—	—		～1㎜の砂粒含む	良好	淡赤褐色	
44 100	45	1区	須恵器	甕	—	—	—	格子目タタキ	1㎜以下の砂粒を少し含む	良好	青灰色	
44 101	45	1区	須恵器	甕	—	—	—	あて具痕 タタキ	極小砂粒少量含む	良好	青灰色	
44 102	45	3区	須恵器	甕	—	—	—	格子目タタキ	密、微細砂粒含む	やや不良	乳白色	中世須恵器
44 103		3区	備前	鉢	—	—	—		3㎜以下の砂粒含む	良好	黒褐色	
44 104	45	T6	越州窯系青磁	碗ヵ皿	—	—	—	施釉	精良	良好	黄茶褐色	Ⅰ類
44 105	45	3区	越州窯系青磁	碗	—	—	—	施釉	精良	良好	淡黄緑色	Ⅰ－1類
44 106	45	T6	越州窯系青磁	坏ヵ皿	—	—	—	施釉	精良	良好	緑黄色	Ⅰ類
44 107	45	T15	越州窯系青磁	碗	—	—	—	施釉 ヘラ押圧縦線文	精良（灰色）	良好	緑色	Ⅰ2b・Ⅲ類
44 108	45	2区北	白磁	碗	—	—	—	施釉	精良	良好	淡白色	Ⅰ類
44 109	45	T6	白磁	碗	—	—	—	ヘラ描、クシ描	精良	良好	黄灰色	広東ヵ 表面は貫入著しい
44 110	45	T6	白磁	合子蓋	(5.8)	—	—	施釉	精良	良好	白色	内面無釉、灰白色

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
44	111	45	2区北	白磁	水注	－	(8.4)	－	施釉	精緻	良好	灰白色	Ⅲ－1類
44	112	45	2区北	青白磁	碗	－	6.8	－	施釉	精緻	良好	青白色	太宰府C～D期に多い
44	113	45	T27	青磁	碗	－	－	－	施釉	精緻	良好	黄褐色	龍泉窯系青磁碗D類
44	114	45	2区	中国陶器	壺	－	－	－	施釉	白色、黒色粒子少し含む	良好	灰褐色	Ⅲ類　C群
44	115	45	T27	中国陶器	鉢	－	－	－		白色砂粒多く含む	良好	淡紫褐色	Ⅰ類
44	116	45	2区北	肥前系陶器	皿	－	(5.0)	－	施釉	精緻	良好	淡茶褐色	
44	117	46	T16－2	古銭	元豊通寶	2.4		厚み0.125					模鋳銭　1.60g
46	1	48	26号溝	須恵器	蓋	14.8	－	4.15	ヘラケズリのちナデ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
46	2	46	4号溝	須恵器	蓋	(16.4)	－	(2.0)		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	紫灰色	転用硯
46	3	46	4号溝	須恵器	坏	－	(9.0)	－	糸切り	～2㎜の砂粒少し含む	良好	淡青灰色	
46	4	46	4号溝	須恵器	坏	－	－	－	糸切り	密、4㎜以下の砂粒含む	良好	赤褐色	
46	5	48	4号溝	須恵器	坏	(13.3)	(8.0)	4.5	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	灰白色	
46	6	46	4号溝	須恵器	坏	－	－	－		砂粒を殆ど含まない	良好	濃青灰色	内面青灰色
46	7	46	4号溝	須恵器	高台付坏	(13.4)	(11.0)	3.9	糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	内面淡赤褐色
46	8	46	4号溝	須恵器	高台付坏	－	(13.4)	－	回転糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
46	9	46	4号溝	須恵器	高台付皿	－	(13.7)	－		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	底部ヘラ記号あり
46	10	46	4号溝	須恵器	高台付坏	－	(9.2)	－	回転糸切り	1㎜以下の砂粒含む	良好	淡赤褐色	
46	11	47－1	4号溝	須恵器	高台付皿	(18.0)	－	－	糸切り	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	
46	12	46	4号溝	須恵器	高台付坏	－	(9.5)	－		～2㎜の砂粒含む	良好	暗灰色	
46	13	48	4号溝	須恵器	長頸壺	－	－	－		～2㎜の砂粒含む	良好	青灰色	1条沈線
46	15	47－1	T28・29	須恵器	蓋	－	－	－	回転糸切り	1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	転用硯
46	16	47－1	T28・29	須恵器	坏	(13.4)	(7.6)	4.1	回転糸切り	2㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
46	17	47－1	T28	須恵器	高台付皿	－	(12.0)	－	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	転用硯
46	18	47－1	T29	須恵器	高台付皿	(20.5)	(14.6)	4.0	回転糸切り	～1㎜の砂粒多く含む	やや不良	灰色	
46	19	47－1	T28	須恵器	壺	－	－	－		精良、茶褐色砂粒少し含む	良好	茶褐色	
46	20	47－1	T28	須恵器	円形加工品	径2.3	－	厚み1.4	同心円タタキ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
46	21	48	T28・29	須恵器	高坏	－	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
46	22	47－1	T28	瓦	軒丸瓦	－	－	2.5	枷型不明	1㎜以下の白色砂粒含む	やや良	乳褐色	国分寺3類か
46	23	47－1	T28	須恵器	不明	－	－	－	布目後青海波文	1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
48	1	47－2	T26	須恵器	坏蓋	(11.0)	－	－		密、3㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	微小光沢ある砂粒含む
48	2	47－2	T26	須恵器	高坏	－	(9.6)	－		1㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	透孔あり
48	3	47－2	T26	須恵器	壺	－	－	－		～2㎜の白色砂粒少し含む	良好	青灰色	
48	4	47－2	T26	須恵器	坏	(11.7)	－	－		微細砂粒含む	良好	灰白色	
48	5	47－2	T26	土師器	皿	－	－	－		密、微細砂粒含む	やや不良	淡黄褐色	赤色顔料塗布
48	6	47－2	T26	土師器	甕	－	－	－	ハケ目	密、微細砂粒少し含む	良好	淡灰褐色	外面煤付着
48	7	47－2	T26	土師器	高坏	－	－	－	ハケ目	密、白色砂粒含む	良好	淡橙褐色	
49	1	48	T26	土師器	坏	(13.8)	6.5	(5.3)	回転糸切り	～2㎜の赤色砂粒少し含む	良好	淡橙褐色	柱状高台付
49	2	48	T26	土師器	坏	－	5.0	－	回転糸切り	～1㎜の砂粒石英少し含む	良好	淡黄褐色	柱状高台付
49	3	48	T26	土師器	坏	－	5.9	－	回転糸切り	～2㎜の砂粒含む	良好	淡橙褐色	柱状高台付
49	4	48	T26	土師器	高台付坏	－	5.1	－		微細砂粒僅かに含む	良好	淡橙褐色	
49	5	47－2	T26	土師器	把手	長さ5.5	幅3.3	厚み2.5		3㎜以下の白色砂粒石英含む	良好	淡乳褐色	溝あり
49	6	47－2	T26	須恵器	小型壺	－	(3.4)	－		～2㎜の砂粒含む	良好	青灰色	高台付
49	7	47－2	T26	須恵器	蓋	－	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
49	8	47－2	T26	須恵器	坏身	(12.6)	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	古墳時代
49	10	47－2	T28	土師器	皿	(7.4)	(3.4)	(1.8)		精良	良好	淡黄褐色	全面煤付着
49	11	47－2	T27	土師器	坏	－	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	不良	淡橙褐色	
49	12	47－2	T27	土師器	皿か坏	5.9	－	－	回転糸切り	2～3㎜の砂粒少し含む	良好	淡黄褐色	柱状高台付 全面赤色顔料塗布
49	13		T27	須恵器	高台付皿	19.0	12.6	3.9		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
49	14	47－2	T27	須恵器	坏	－	(9.6)	－	回転糸切り後ナデ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
49	15	47－2	T27	須恵器	甕	－	－	－	格子タタキ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰白色	
49	16	48	T27	瓦	平瓦	－	－	－	布目	1㎜以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	
49	18		T30	須恵器	甕	(19.8)	－	－	タタキ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
49	19	48	T30	須恵器	皿	(15.5)	(8.9)	2.4	回転糸切り	～5㎜の砂粒少し含む	良好	灰色	
49	20	48	T30	須恵器	坏	－	(6.8)	－	回転糸切り	1㎜以下の白色粒子含む	良好	青灰色	内面漆付着
49	21	48	T30	須恵器	坏	10.4	6.6	4.3	回転糸切り	3㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
50	22		T30	須恵器	高台付坏	－	(10.7)	－	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	底部墨書「σ」あり
50	23		T30	須恵器	壺	－	(10.0)	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗灰褐色	内面青灰色
50	24	46	T31	古銭	開元通寶	2.45	－	0.115				濃銅色(出土時)	初鋳年：621年　2.87g
50	25	48	T31	土師器	甑	－	－	－	タタキ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡茶褐色	外面煤付着
50	26	48	T31	土師器	甑	－	－	－	タタキ	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	茶褐色	外面煤付着
50	27	48	T31	土師器	甕	(25.8)	－	－	ハケメ	1㎜以下の砂粒含む	良好	暗茶褐色	
50	28	46	T31	土製品	支脚	－	－	－		2㎜以下の砂粒多く含む	良好	暗灰褐色	
50	29	48	T31	須恵器	硯					1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
50	30	48	T31	須恵器	蓋	－	－	－	回転糸切り	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	赤茶褐色	天井内面部墨書「嶋」あり
50	31	48	T31	須恵器	壺	(18.0)	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
50	32	48	T31	須恵器	蓋	(15.0)	－	－		1㎜以下の白色砂粒少し含む	良好	青灰色	
50	33	48	T31	須恵器	坏身	－	－	－		1㎜程度の白色砂粒多く含む	良好	灰色	
50	34	48	T31	須恵器	坏身	－	－	－		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	灰色	

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
50	35	48	T31	瓦	平瓦	—	—	—	縄目、布目	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
50	36	48	T32	須恵器	壺	—	(9.0)	—		1㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	内外面に漆付着
50	37	48	T32	土師器	高台付坏ヵ	—	(10.8)	—		精良	良好	黄褐色	外面赤色顔料塗布
50	38	48	T32	瓦	平瓦	—	—	—	縄目、布目	1㎜以下の白色砂粒含む	良好	淡茶褐色	
55	1	51	23号溝	土師器	高坏	13.6	8.2	10.6	ヘラミガキ・指頭圧痕・ハケ目	やや密、2.5㎜以下の砂粒含む	良好	淡～赤褐色	脚部煤付着 体部が緩やかに内湾する
55	2	51	23号溝	土師器	高坏	15.6	8.4	10.7	ヘラミガキ・指頭圧痕・ハケ目	やや密、1㎜以下の白色砂粒含む	良好	白～明橙褐色	坏部が直線的に開く
55	3	51	23号溝	土師器	高坏	(15.0)	—	—	指頭圧痕	やや密、3㎜以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	体部が緩やかに内湾する
55	4	51	23号溝	土師器	碗ヵ	(14.6)	—	—	ハケ目	密、微細砂粒含む	良好	灰～淡黄褐色	
55	5	51	23号溝	土師器	甕	(15.6)	—	—	ハケ目 ヘラケズリ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	暗灰褐色	
55	6	51	23号溝	土師器	甕	(16.8)	—	—	ヘラケズリ	やや粗、1㎜大の砂粒多く含む	良好	淡灰褐色	口縁端部をつまみだす
55	7	51	23号溝	土師器	甕	(19.4)	—	—		やや粗、1㎜以下の砂粒やや多く含む	良好	淡褐色	
55	8	51	T33	土師器	高坏	—	8.6	—	ヘラケズリ	密、3㎜以下の砂粒含む	良好	淡褐色	脚部煤付着
55	9	52	T33	土師器	高坏	—	—	—		やや密、細かい砂粒多く含む	良好	白褐色	円形の透孔あり
55	10	52	T33	土師器	低脚坏	—	5.6	—		やや粗、3㎜以下の砂粒含む	やや不良	白褐色	
55	11	52	T33	土製品	土錘	長さ4.3	幅1.35	厚み1.35		砂粒を殆ど含まない	良好	濃青灰色	
55	12	52	T33	須恵器	甕	—	—	—	波状文	やや密	良好	淡灰色	
55	13	52	T33	須恵器	甕	—	—	—	沈線・刺突文	密、細かい砂粒多く含む	良好	淡灰色	円形の透孔あり
55	14	52	T33	須恵器	壺	—	9.4	—	回転ヘラケズリ	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	
55	15	52	T33	土製品	支脚	—	—	—		やや粗、1ミリ大の砂粒多く含む	良好	白褐色	
56	16	53	T33	須恵器	蓋	—	—	—		密、1㎜以下の砂粒含む	良好	灰～暗灰色	内面墨痕あり 転用硯 外面灰を被る つまみ径3.6cm
56	17	53	T33	須恵器	蓋	—	—	—	回転ヘラケズリ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	灰～淡灰色	転用硯 外面灰を被る つまみ径4.6cm
56	18	53	T33	須恵器	蓋	—	—	—	回転ヘラケズリ	密、2㎜以下の白色砂粒含む	良好	灰～青灰色	つまみ径3.2cm
56	19	55	T33	須恵器	蓋	(15.0)	—	2.85	回転ヘラケズリ	密、細かい砂粒含む	やや不良	青灰色	つまみ径5.2cm
56	20	53	T33	須恵器	蓋	—	—	—	回転ヘラケズリ	密	良好	淡赤灰色	転用硯 つまみ径5.2cm
56	21	53	T33	須恵器	蓋	(14.9)	—	—	回転ヘラケズリ	密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡紫灰色	転用硯
56	22	53	T33	須恵器	蓋	(16.6)	—	—	回転ヘラケズリ	密、3㎜以下の砂粒含む	不良	淡青灰色	重ね焼き痕あり 自然釉付着
56	23	53	T33	須恵器	蓋	—	—	—	回転ヘラケズリ	密	良好	淡灰色	つまみ径5.6cm
56	24	53・54	T33	須恵器	高台付坏	—	(9.0)	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	
56	25	55	T33	須恵器	高台付坏	14.2	8.4	5.7	静止糸切りヵ	密、1㎜大の砂粒多く含む	良好	暗青灰色	窯着ガラス質付着
56	26	53・54	T33	須恵器	高台付坏	—	(9.8)	—D:D	回転糸切りヵ	密、2㎜以下の砂粒やや含む	良好	青灰色	
56	27	53・54	T33	須恵器	高台付坏	—	(8.9)	—	回転糸切り	密、1㎜以下の白色砂粒含む	良好	暗紫～青灰色	外面脚部～底部に炭化物付着
56	28	53・54	T33	須恵器	高台付坏	—	(8.0)	—	糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	灰色	
56	29	53・54	T33	須恵器	高台付坏	—	(10.0)	—	ヘラケズリ	密、細かい砂粒含む	良好	暗青灰色～赤紫色	
56	30	53・54	T33	須恵器	高台付坏	—	(7.9)	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	淡灰色	転用硯
56	31	54	T33	須恵器	坏	—	(4.8)	—	糸切り	密	良好	淡灰～茶褐色	内面黒色物付着
56	32	54	T33	須恵器	坏	—	(8.0)	—	回転糸切りヵ	密、細かい砂粒含む	不良	白～灰褐色	
56	33	55	T33	須恵器	壺	—	—	—		密、2㎜以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	内面漆付着
56	34	55	T33	須恵器	長頸壺	—	—	—		密、2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	頸部
56	35	54	T33	須恵器	壺	—	(10.8)	—		密、1㎜大の砂粒含む	良好	暗青灰色～赤褐色	
56	36	54	T33	須恵器	壺	—		—	回転ヘラケズリ	密、2㎜以下の白色砂粒含む	良好	灰～青灰色	つまみ径3.2cm
56	37	55	T33	須恵器	壺	—	(8.3)	—	回転ヘラケズリ	密、5㎜以下の砂粒含む	良好	灰色	内面・断面に漆付着
56	38	55	T33	須恵器	壺	—	7.6	—	回転糸切り	密、2㎜以下の砂粒含む	やや不良	淡灰色	体部が直線的に立ち上がる
56	39	55	3区・T33	須恵器	甕	—	4.0	—	手持ちヘラケズリ	精良	良好	青灰色	内面・断面に漆付着
56	40	56	T33	瓦	軒丸瓦	—	—	—	唐草文帯・蓮華文	1㎜以下の白色砂粒含む	やや軟質	乳褐色	国分寺第3形式
56	41	56	T33	瓦	軒丸瓦	—	—	—	唐草文帯・蓮華文	白色・黒色の微細砂粒含む	軟質	灰色～淡褐色	国分寺第3形式
56	42	56	T33	瓦	軒丸瓦	—	—	—	唐草文帯・蓮華文	1㎜以下の白色砂粒含む	やや軟質	暗灰褐色	国分寺第3形式
56	43	56	T33	瓦	軒丸瓦	—	—	—	布目	白色の微細砂粒含む	やや軟質	明褐色	
56	44	56	T33	須恵器	坏蓋	—	—	—	糸切り	1㎜以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	外面頂部墨書「□」あり
56	45	56	T33	須恵器	坏	—	—	—	回転糸切り	2㎜以下の砂粒含む	良好	青灰色	外面底部に墨書「□」あり
56	46	56	T33	須恵器	坏	—	—	—	糸切り	1㎜程度の白色砂粒多く含む	良好	青灰色	外面底部墨書「□」あり 内面に墨痕あり
56	48	56	T33	須恵器	坏	—	—	—	回転糸切り	精良	良好	淡青灰色	外面底部ヘラ記号あり
56	49	56	T33	製塩土器	焼き塩壺	—	—	—	指押さえ	やや粗、3㎜以下の砂粒含む	良好	淡橙褐色	
56	50	56	T33	瓦質土器	鉢ヵ	—	—	—	ハケによる袈裟襷文	密、1㎜以下の砂粒含む	良好	外面暗灰色	内面灰色
56	51	56	T33	白磁	碗	—	6.4	—	施釉	精緻	良好	乳白色	Ⅷ類
56	52	56	T33	白磁	皿	—	—	—	施釉	灰白色で精良	良好	灰白色	Ⅴ－1類（広東系）
57	1	59－3	T33	土師器	高坏	(16.2)	—	—	ハケ目		良好	淡橙褐色	
		46－1	2区	土師器ヵ	不明	—	—	—		砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	内外面赤色顔料塗布
		46－2	2区	須恵器	蓋	—	—	—	沈線、波状文	精良	良好	青灰色	
		46－3	2区	須恵器	蓋	—	—	—	波状文	精良	良好	灰色	
		46－4	1区	須恵器	蓋	—	—	—		精良	良好	灰色	
		46－5	15号溝	土師器ヵ	不明	—	—	—		砂粒少し含む	不良	橙褐色	内外面剥離
		46－6	1区	土師器	不明	—	—	—		砂粒少し含む	良好	淡黄褐色	黒曜石片を含む
		46－7	P111	肥前系陶器	皿	—	—	—	内外面施釉	精良	良好	淡青白色	畳付は無釉
		46－8	17号土坑	須恵器	坏身	—	—	—		砂粒少し含む	良好	青灰色	
		46－9	T27	肥前系陶器	皿	—	—	—	口縁部施釉	精良	良好	淡茶褐色	灰釉皿

第13表　出雲国府跡出土玉作関係遺物観察表

挿図	番号	写真図版	出土地点	石材	製作段階	重量(g)	特徴
38	1	42	2区	水晶	原石	70.78	
38	2	42	3区	水晶	原石	79.72	自然石、加工なし
38	3	42	1区	水晶	荒割	227.39	
38	4	42	1区	水晶	荒割	149.46	
38	5	42	3区	水晶	荒割	95.64	
38	6	42	3区	水晶	原石	27.89	折っただけ、加工なし
38	7	42	3区	水晶	荒割	21.28	
38	8	42	1区	水晶	荒割	17.32	調整剥離なし
38	9	42	1区	水晶	原石	11.95	
38	10	42	1区	水晶	荒割	7.02	原石を折っただけ
38	11	42	1区	水晶	荒割	11.70	折っただけ、殆どが自然面
38	12	42	1区	水晶	荒割	4.03	折っただけで、細かな加工は見られない
38	13	42	2号井戸	黒水晶	調整剥離	16.41	自然面を残す
38	14	42	第33トレンチ	水晶	素材大、半割	28.34	
38	15	42	2区	水晶	素材大	10.10	折った次の段階、二次調整を始めたあたりか
38	16	42	2区	水晶	素材大、半割	6.36	折っただけ、加工なし
38	17	42	1区	水晶	平玉（形割）素材	4.79	調整なし
38	18	42	1区	水晶	平玉（形割）素材	13.11	調整なし、大きく割っただけで自然面を大きく残す
38	19	42	3区	水晶	平玉（形割）素材	7.90	調整なし
38	20	42	1区	水晶	平玉（形割）素材	11.23	調整なし
38	21	42	2区	水晶	勾玉素材ヵ	53.13	片面は、自然面そのまま、折っただけで細かい調整は見られない
39	22	42	3区	水晶	平玉未成品	4.55	二次調整あり、敲打前
39	23	42	2号井戸	水晶	調整剥離（敲打なし）	5.68	
39	24	42	3区	水晶	玉未成品	2.31	二次調整あり、敲打前
39	25	42	3区	水晶	勾玉未成品（形割）	20.74	自然面を大きく残す、敲打は行われていない
39	26	42	2号井戸	石英	勾玉未成品　形割	40.18	片面は自然面がそのまま、大きくラフな剥離
39	27	42	3区	水晶	平玉の失敗作	1.64	敲打
39	28	42	1区	水晶	平玉未成品	15.13	わずかに敲打あり、自然面をわずかに残す
39	29	42	8号溝	水晶	丸玉未成品(敲打あり)	13.93	自然面を多く残し大きな剥離を行う、わずかに敲打痕が見られる
39	30	42	第33トレンチ	水晶	丸玉未成品	7.47	わずかに敲打あり、大きな自然面を残す
39	31	42	15号溝	水晶	丸玉未成品	6.16	敲打あり、自然面をわずかに残す
39	32	42	3区	水晶	丸玉	4.81	敲打あり
39	33	42	3区	水晶	丸玉	2.18	敲打あり
39	34	42	3区	水晶	丸玉	6.92	敲打あり
39	35	42	3区	水晶	大玉	52.51	
39	36	42	1区	水晶	大玉	46.74	調整剥離段階、敲打は殆ど見られない、3面程度の自然面を残している
39	37	42	2区	水晶	大玉	33.40	質の悪い水晶、折っただけの原石に敲打を加え、角を丸めたもの
39	38	42	1区	水晶	平玉仕上げ	2.57	敲打完了に近い
39	39	42	1区	水晶	丸玉仕上げ	0.89	
39	40	42	1区	めのう	円礫　原石	37.98	
39	41	42	3区	めのう	円礫　原石	115.23	
39	42	42	第28トレンチ	めのう	原石	12.91	
39	43	42	3区	めのう	原石	334.22	
40	44	42	3区	碧玉	原品	164.05	
40	45	42	1区	碧玉	素材ヵ	35.06	
40	46	42	1区	碧玉	素材ヵ	16.39	
40	47	42	3区	碧玉	素材	33.65	
40	48	42	3区	碧玉	素材ヵ	18.20	
40	49	42	3区	碧玉	素材ヵ	13.35	
40	50	42	2区	碧玉	素材	19.23	
40	51	42	3区	碧玉	素材ヵ	22.97	
40	52	42	2区	碧玉	平玉の素材ヵ	15.42	
40	53	42	1区	碧玉	素材ヵ	22.56	
40	54	42	1区	碧玉	平玉ヵ	9.60	
40	55	42	1区	碧玉	平玉ヵ	9.50	
40	56	42	2区	碧玉	平玉ヵ	4.41	
40	57	42	3区	碧玉	平玉成品	2.35	
40	58	42	1区	頁岩	黒成品	1.76	
40	59	42	1区	玉類	白成品	2.42	
40	60	42	3区	頁岩	黒成品	1.55	
40	61	42	3区	玉類	白成品	7.31	
40	62	42	1区	玉類	白成品	10.98	

第14表　出雲国府跡出土石製品観察表

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	器　種	石　材	長さ×幅(cm)	厚み (cm)	重　量	色　調	備　考
1	1	46	来美廃寺	ナイフ形石器	玉髄質めのう	4.69×2.91	0.88	8.00 g	黄褐色	
4	6	30	採集品	筋砥石	細粒花崗岩	33.7×20.3	14.8	12.8kg	淡黄褐色	3面使用
4	7	30	採集品	筋砥石	細粒花崗岩	22.4×17.7	13.1	7.4kg	淡黄褐色	3面使用
12	7	36	9号建物	磨石	玄武岩	19.0×18.3	7.0	4100 g	灰色	煤付着
15	33	36	1号柵列	砥石	凝灰岩	8.7×10.7	5.9	886.83 g	淡青灰色	
15	34	36	1号柵列	筋砥石	細粒花崗岩	13.0×15.0	9.3	2.6kg	灰白色	
17	11	32－2	22号土坑	磨石	不明	15.0×9.4	4.2	749.78 g	灰白色	煤付着
18	25	33－2	20号溝	磨石	流紋岩	8.8×9.0	—	285.00 g	白色	
18	26	33－2	20号溝	敲石ヵ	流紋岩	10.4×6.8	4.1	341.58 g	灰色	
21	45	34－2	8号溝	砥石	凝灰岩	9.5×9.4	2.0	204.86 g	白褐色	
21	46	35－1	8号溝	石棒	流紋岩	19.8×8.0	6.3	1502.62 g	淡緑灰色	
25	12	36	17号溝	砥石	流紋岩	21.8×14.5	4.9	1858.7 g	灰色	
27	15	38	2号井戸	磨石	流紋岩	14.7×12.8	6.4	1730 g	灰白色	
29	15	40－1	3号井戸	砥石	細粒花崗岩	12.7×9.0	7.1	1161.19 g	灰白色	
44	118	46	3区	石鏃	黒曜石	1.9×1.4	0.35	0.75 g	黒色	凹基式
44	119	46	十字街	硯	頁岩	4.1×4.1	1.0	27.15 g	灰色	
44	120	46	2区	石鍬	流紋岩	8.6×5.8	1.6	159.77 g	灰色	
44	121	46	1区	扁平片刃石斧	凝灰岩	5.2×2.2	0.7	17.05 g	淡青白色	
44	122	46	3区	敲石	玄武岩	6.2×3.8	3.0	76.9 g	淡灰色	
44	123	46	3区	砥石	流紋岩	13.2×10.4	1.5	433.87 g	淡黄色	
44	124	46	3区	磨石	凝灰岩	6.2×8.6	3.0	233.84 g	淡緑灰色	
46	24	47－1	T28・29	石鍬	流紋岩	7.1×8.1	1.7	127.16 g	灰色	
49	9	47－2	T26	砥石	凝灰岩	11.6×5.1	4.9	387.08 g	淡灰黄色	
49	17	48	T27	原石	碧玉	6.8×4.2	2.5	96.47 g	淡緑色	
56	47	56	T33	硯	頁岩	3.6×4.6	1.2	25.15 g	灰色	
		10	1区	剥片	玉髄	2.0×1.2	0.4	1.02 g	褐色	
		11	2区	鏃の未成品ヵ	玉髄	2.8×2.1	0.5	3.49 g	褐色	

第15表　出雲国府跡出土木製品観察表

挿図	番号	写真図版	出土遺構名	取り上げ番号	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備　考
4	8	30	採集品		柱根	(64.5)	23.6	22.0	
4	9	30	採集品		柱根	(49.5)	21.7	20.3	
27	16	39	2号井戸	No.47	下駄	21.7	(11.4)	3.0	
28	17	39	2号井戸	No.48	皿	(10.8)	(9.0)	0.8	
28	18	39	2号井戸	No.69	曲げ物の蓋板か底板	9.2	(3.6)	0.2	
28	19	39	2号井戸	No.51	不明	(12.7)	(2.0)	0.2	炭付着
28	20	39	2号井戸	No.6・64	不明	(16.7)	2.5	0.5	墨痕あり
28	21	39	2号井戸	No.53	不明	(23.0)	0.7～1.1	0.4	墨痕あり
32	29	39	4号井戸	No.101	扇	(20.0)	1.2	0.4～0.2	墨痕あり
32	30	39	4号井戸	No.149	扇	(15.9)	0.75	0.2	
32	31	39	4号井戸	No.150	扇	(16.0)	0.8	0.2	
32	32	39	4号井戸	No.151	扇	(15.3)	0.8	0.2	
32	33	39	4号井戸	No.153	箸	(13.1)	0.6	0.6	箸の先端付近
32	34	39	4号井戸	No.55	箸	(14.3)	0.7	0.5	面取り
32	35	39	4号井戸	No.139	箸	(7.5)	0.5	0.5	面取り
32	36	39	4号井戸	No.43	組み合わせ容器の蓋ヵ	13.0	2.0	0.8	
32	37	39	4号井戸	No.132	板状のもの	25.2	5.5	0.3～0.2	墨痕あり
32	38	39	4号井戸	No.45	不明	11.6	(8.7)	1.8	
32	39	39	4号井戸	No.138	不明	(14.1)	1.1	1.3	
32	40	39	4号井戸	No.158	不明	6.1	8.1	4.8	
32	41	39	4号井戸	No.154	曲げ物ヵ	(8.5)	(3.3)	0.6～0.8	
36	34	39	P157	No.1	礎盤ヵ	22.5	11.6	4.0	
36	35	46	P175	No.2	栓ヵ	6.8	3.0	1.9	
36	36	46	P175	No.4	栓ヵ	6.4	3.0	2.8	
36	37	46	P175	No.3	栓ヵ	8.3	3.6	2.5	
48	8	46		第26トレンチ　PNo.259	栓ヵ	9.1	4.7	2.3	
46	14	46	4号溝	第28トレンチ　北壁サブトレ	不明	(11.2)	3.3	1.3	
48	9	48		第26トレンチ　PNo.261	板状のもの	(30.9)	3.0	2.5	墨痕あり

第16表　遺構名新旧対照表

新	旧	新	旧
9号建物P1	SB21 SK16	17号土坑	SK28
9号建物P2	SB21 P117	18号土坑	SK01
9号建物P3	SB21 03報告書	19号土坑	SK02
9号建物P4	SB21 03報告書	20号土坑	SK08
9号建物P5	SB21 03報告書	21号土坑	SK27
9号建物P6	SB21 03報告書	22号土坑	SK20
9号建物P7	SB21 SK23	23号土坑	SK17
9号建物P8	SB21 P168	24号土坑	SX05
9号建物P9	SB21 P351	25号土坑	SK18
9号建物P10	SB21 P287	4号溝	SD43
9号建物P11	SB21 P176	5号溝	5号溝
9号建物P12	SB21 P215	8号溝	SD02
10号建物P1	SB22 P1	9号溝	SD01
10号建物P2	SB22 P2	10号溝	SD53
10号建物P3	SB22 P3	11号溝	SD39
10号建物P4	SB22 P4	12号溝	SD19
10号建物P5	SB22 P5	13号溝	SD15・16
10号建物P6	SB22 P6	14号溝	SD12
10号建物P7	SB22 P7	15号溝	SD20・55
1号柵列P1	P269	16号溝	SD37
1号柵列P2	P2	17号溝	SD23
1号柵列P3	P10	18号溝	SD54
1号柵列P4	P33	19号溝	SD52
1号柵列P5	SD16	20号溝	SD36
1号柵列P6	P89	21号溝	SD59
1号柵列P7	P90	22号溝	SD06
1号柵列P8	P28	26号溝	SD42
2号柵列P1	P200	2号井戸	SK04
2号柵列P2	P233	3号井戸	SD11
2号柵列P3	P155	4号井戸	SX04
2号柵列P4	P153	第26トレンチ	1T
2号柵列P5	P126	第27トレンチ	3T
2号柵列P6	P149	第28・29トレンチ	4T
3号柵列P1	SB23 P2	第30トレンチ	6T
3号柵列P2	SB23 P3	第31トレンチ	7T
3号柵列P3	SB23 P4	第32トレンチ	8T
3号柵列P4	SB23 P5	第33トレンチ	5T
3号竪穴住居	SI01		

付論１

出雲国府跡発掘調査に係る花粉分析

文化財調査コンサルタント㈱
渡　辺　正　巳

はじめに

本報告では、遺跡周辺の植生変遷、堆積環境変遷などの古環境変遷を推定するために、発掘調査に伴って露出した各地点より採取した試料を対象として花粉分析を行った。また本報告は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化したものである。

出雲国府跡は島根県東部、松江市大草町地内に立地する遺跡である。

分析試料について

各分析試料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターと協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。図１に試料採取地点を示す。

分析方法

花粉分析処理は渡辺（1995）に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。

分析結果

花粉分析結果を図２、３の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。

また、花粉分析処理の際の残渣を概観した結果を表１、２に示す。

花粉分帯

出雲国府跡では、平成13年度調査に伴って８世紀後半までに埋まったと考えられる４号溝埋土を対象とした花粉分析が行われていた（渡辺2003）。この分析結果（図４）と、今回の花粉分析を対象として、地域花粉帯を再設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料№も下位から上位に向かって記した。

（１）Ⅲ帯：４号溝試料№３～１、T26窪地試料№７～３、２号井戸試料№３～１

スギ属が卓越し、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。

４号溝では試料№３、２から１の間でマツ属（複維管束亜属）の出現率が急増していた。Ⅲ帯の

下部マツ属（複維管束亜属）の出現率が上部に比べ高いと捉えると、４号溝試料№３、２、T26窪地試料№７～３は下部に相当し、４号溝試料№１、２号井戸試料№３～１が上部に相当する。このことから、下部をｂ亜帯（４号溝試料№３、２、T26窪地試料№７～３）、上部をａ亜帯（４号溝試料№１、２号井戸試料№３～１）とした。

（２）Ⅱ帯：T26窪地試料№２

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、モミ属、スギ属、クマシデ属－アサダ属、ブナ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。

（３）Ⅰ帯：T26窪地試料№１

マツ属が卓越し、スギ属を伴う。

各花粉帯の年代観

各花粉帯と堆積年代の関係は、図２、３、４の各花粉ダイアグラムで見ることが出来る。

Ⅰ帯は現代耕土が対応する。また、Ⅰ帯の花粉組成は大西（1993）のイネ科花粉帯スギ亜帯に対比可能であり、AD1900年以降の植生を示す可能性がある。

Ⅱ帯は現代床土が対応する。また、Ⅱ帯の花粉組成は大西（1993）のイネ科花粉帯マツ亜帯に対比可能であり、おおよそ近世の植生を示す可能性がある。「床土」は水田の不透水層として盛土される場合と、耕作土の下層が自然に突き固められ、結果として不透水層のなる場合がある。今回の場合、近世耕土の上位に現代耕土が盛られた（堆積した）結果、近世耕土が「床土」となったと考えられる。

Ⅲ帯は奈良時代から平安時代頃の堆積物が対応する。下部のｂ亜帯の花粉組成は大西（1993）のイネ科花粉帯スギ亜帯に、上部のａ亜帯の花粉組成は大西（1993）のイネ科花粉帯カシ・ナラ亜帯に対比可能である。４号溝の埋積年代から考えると、ｂ亜帯とａ亜帯の境界は奈良時代末頃までであったと考えられる。この年代は、大西（1993）のカシ・ナラ亜帯の開始年代に比べ、およそ100年遅れている。スギの減少は、おそらく人為的な（有用材の）伐採によるものであり、スギ属花粉減少の地域による時期差もすでに確認されていることから、問題は無い。

またT26の「地山」に含まれる炭片の年代値として、3,870±50yBPという値が得られている（表３）。したがって縄文時代後期以降、遺跡の「地山」が形成されたことが解る。

古環境変遷

ここでは、花粉帯毎に遺跡周辺の古環境を推定する。

（１）Ⅲ帯期（奈良時代～平安時代）

①森林植生

Ⅲ帯の特徴はスギ属花粉の卓越であり、遺跡周辺地域の森林植生としてスギ林の存在が示唆される。スギ林は、平野周辺の斜面あるいは扇状地上などの水環境の良い地域に分布していた可能性が高い。一方、大西（1988）における意宇平野の花粉分析結果では、スギ属はせいぜい10％程度の出現率を示すのみであり、アカガシ亜属が卓越する。大西（1988）の出雲郷竹花遺跡、出雲郷今宮遺跡から出雲国府跡までは、せいぜい３㎞までの距離である。このことをを踏まえると、スギ林の分布は国府近辺の局地的な現象であった可能性が指摘され、国府内での植栽である可能性も指摘でき

る。

b亜帯期（奈良時代まで）の意宇平野周辺の丘陵には、カシ類を要素とする照葉樹林が広範囲に分布するものの、アカマツ（あるいはクロマツ）、コナラ（あるいはクヌギ類）などを要素とするいわゆる里山（薪炭林）も広がっていたと考えられる。

a亜帯期（奈良時代末から平安時代）にはいると照葉樹林が開発され、里山が広がったと考えられる。ただしb亜帯期と異なり、アカマツ（あるいはクロマツ）の割合が高くなったと考えられる。一方で国府近辺のスギ林にはあまり手が加えられず、b亜帯期からほとんど変化がなかったと考えられる。

スギ属の減少を周辺地域の開発と関連付けることが、しばしばある。しかし、今回の結果では、開発がより進んだと考えられるa亜帯期に入ってもスギ属の減少傾向が認められていない。また、出土した柱材には現状でスギは報告されていないなど、8世紀後半には、この地域ではスギ材をほとんど使用していなかった可能性もある。

②低地植生

奈良時代頃までに埋まったと考えられる、T26窪地、4号溝の両溝（水路？河川？）でイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現し、両溝の流域上流部で稲作が行われていたことが推測される。また、国府周辺が水田であったと考えることも可能である。

平安時代の井戸である2号井戸からも高率でイネ科（40ミクロン以上）花粉が検出され、2号井戸が稲作に関連した施設である可能性も示唆される。2号井戸へ流入する溝の存在など、今後の発掘成果に期待がかかる。

国府跡の調査では、低率ではあるがオオバコ属の花粉が検出される。オオバコ属として古環境を示唆する種類ではないが、安定して花粉が出現することは少なく注目される。

（2）Ⅱ帯期（近世？）

①森林植生

マツ属（複維管束亜属）花粉が卓越し、アカガシ属、コナラ亜属花粉を伴うことから、遺跡周辺地域の森林はアカマツ（あるいはクロマツ）、コナラ（あるいはクヌギ類）などを要素とする里山（薪炭林）が広がり、カシ類を要素とする照葉樹林も残存していた可能性がある。またスギ属花粉も低率ではあるが出現し、意宇平野周辺に僅かではあるがスギが残っていたことが解る。

②低地植生

近世にはすでに、調査地点近辺は現在見られたような水田地帯となり、稲作のほか、ソバなどが栽培されていたと考えられる。ソバの栽培法としては、秋に稲刈り後の田で栽培する二毛作のほか、休耕田や畦を使った春まき栽培が知られているが、どの方法で栽培されていたかは、断定できない。

（3）Ⅰ帯期（現代）

①森林植生

マツ属（複維管束亜属）花粉が卓越し、スギ属、コナラ亜属花粉を伴う。したがって、現在見られるように遺跡周辺地域の森林はアカマツ（あるいはクロマツ）、コナラ（あるいはクヌギ類）などを要素とする里山（薪炭林）およびスギ植林が広がっていたと考えられる。

②低地植生

引き続き、調査地点近辺は水田地帯であり、ソバも栽培されていたと考えられる。また下位のⅡ帯に比べ、イネ科（40ミクロン以上）以外の草本花粉の出現率、種類数ともに減少し、より集約的な稲作が行われていたと考えられる。

ま と め

出雲国府跡において実施した花粉分析を基に、以下の局地花粉帯を設定した。また、既知の４号溝については局地花粉帯を再設定した。

（１）花粉組成変遷から、Ⅰ～Ⅲ帯の局地花粉帯を設定した。
各種分析結果、および調査に伴う地層観察などから、局地花粉帯に基づく時期毎に周辺の古環境を推定した。主な事柄は、以下に示す通りである。

（２）Ⅲ帯で推定できるスギ林は、調査地（国府跡）近辺に分布していたと考えられる。

（３）奈良時代までの、国府が間違いなく機能していた時期にも、調査地付近には水田が分布していたと考えられる。

（４）Ⅱ帯以降、ソバ栽培が認められた。

引用文献

大西郁夫（1988）意宇平野周辺の最上部完新統の花粉群．山陰地域研究（自然環境），４，81-92.

中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13，187-197.

渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84-85．ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳（2003）出雲国府跡における花粉及び植物遺体分析．史跡出雲国府跡－１－，風土記の丘地内遺跡発掘調査報告，14，209-216.

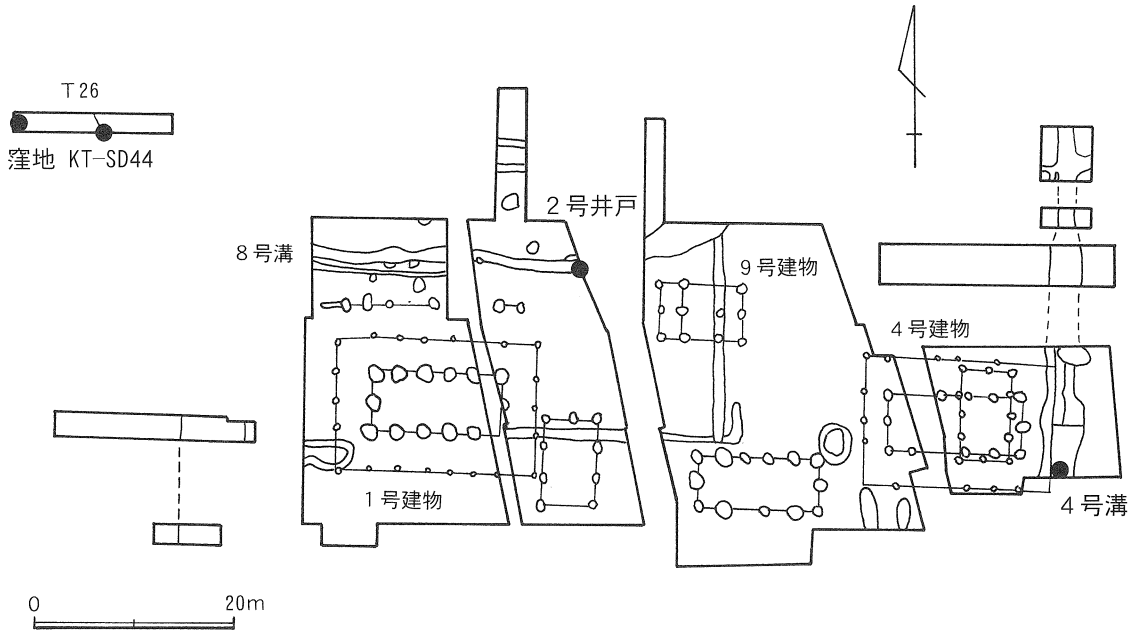


図１　試料採取地点

表１　T26窪地の微化石概査結果

試料No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	◎	△×	○	△×	△	○
2	◎	△×	○	△×	△	○
3	◎	△×	○	×	△	○
4	◎	△	○	×	△	△
5	◎	△×	○	○	△	○
6	◎	△×	○	○	△	△
7	◎	△×	◎	○	△	○

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる
○ ：少ないが検出できる
△ ：非常に少ない
△× ：極めてまれに検出できる
× ：検出できない

表２　２号井戸の微化石概査結果

試料No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	◎	△	△	○	△	○
2	◎	○	△	○	△	△
3	◎	○	△	○	△	○

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる
○ ：少ないが検出できる
△ ：非常に少ない
△× ：極めてまれに検出できる
× ：検出できない

表３　^{14}C年代測定値

整理番号	測定年代 (yBP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C (yBP)	暦年代*1 (cal y.)	測定番号 (PLD-)
KT-SD44	3,900±45	−26.9	3,870±50	BC2,470～2,200	2223

*1：2σ（99.8%領域）

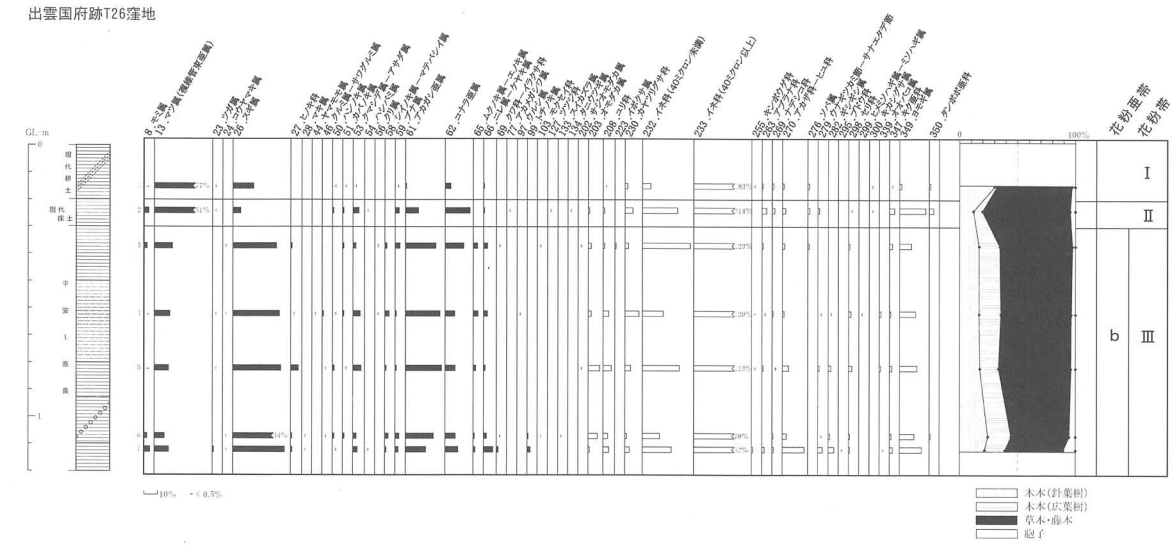


図２　T26窪地の花粉ダイアグラム

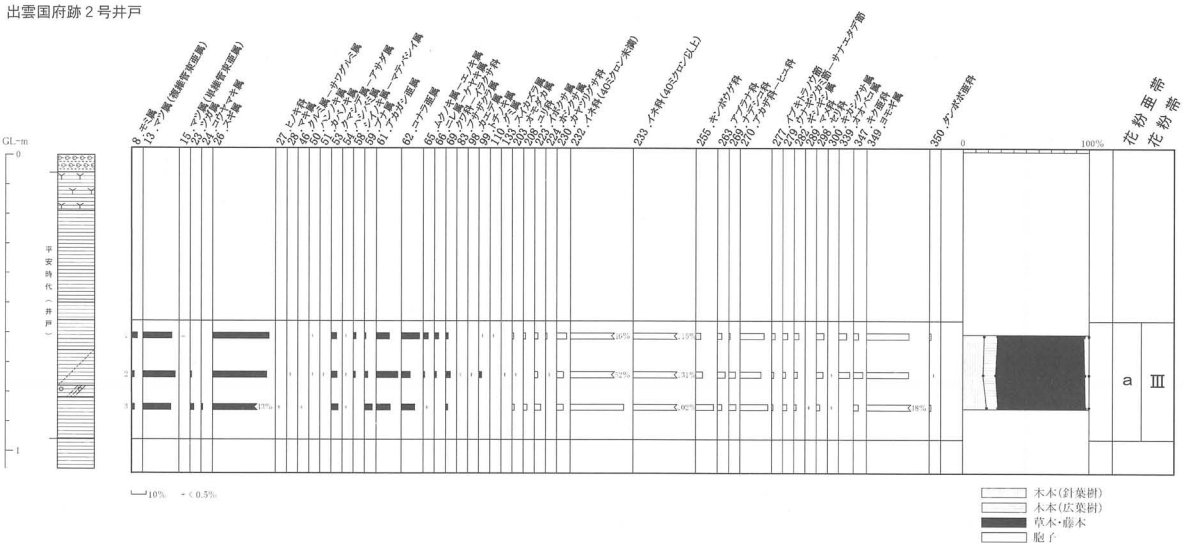


図３　２号井戸の花ダイアグラム

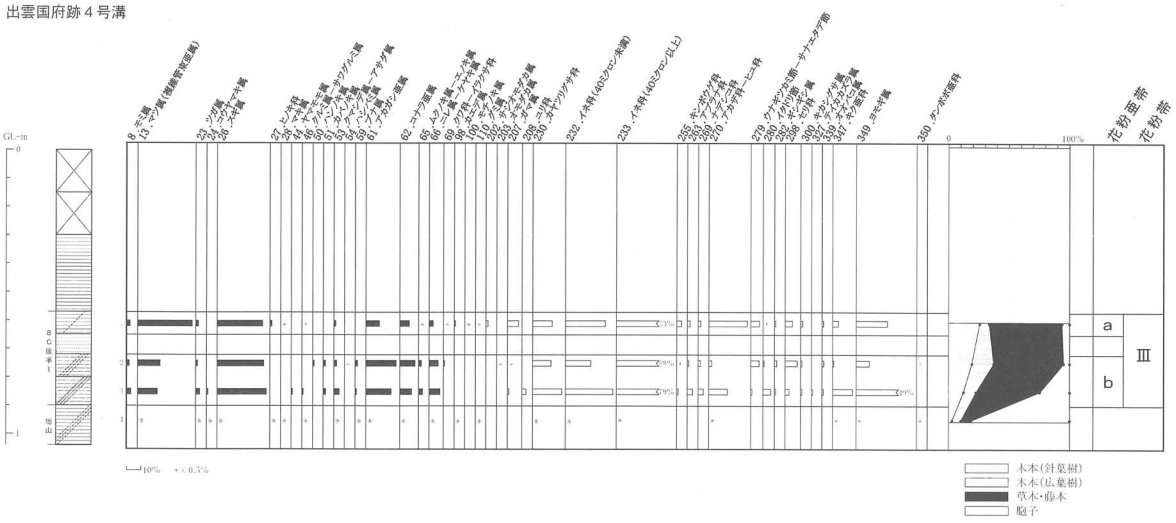


図４　４号溝埋土の花粉ダイアグラム

付論２

出雲国府跡出土木製品の樹種（２）

文化財調査コンサルタント㈱　　島根大学総合理工学部
渡　辺　正　巳　　古　野　　毅

はじめに

本報告では、古代の用材についての基礎資料とする目的で、検出された建物群の柱根および木製品を対象に樹種鑑定を行った。また本報告は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化したものである。

出雲国府跡は島根県東部、松江市大草町地内に立地する遺跡である。

試料について

樹種鑑定を行った試料の一覧を表１に、各試料の分布を図１に示す。表１には、同時に鑑定結果も示してある。

永久プレパラートは渡辺（2000）に従い作成した。また作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント㈱にて保管管理をしている。

作製した永久プレパラートを、光学顕微鏡下で40倍～600倍の倍率で観察し記載を行った。記載にあたって同一分類群は一括して記載し、代表的な試料の３断面の顕微鏡写真を付けた。また用語などは基本的に島地ほか（1985）に従った。

樹種の鑑定結果と記載

表１に鑑定結果を示し、各分類群毎に記載を行った。

①スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don

試料№：７

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で２～３個存在することなどから、スギと同定した。

②ヒノキ属　*Chamaecyparis* sp.

試料№：12,13,（８）

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかあるいはやや急で、晩材の幅は狭い傾向にある。樹脂細胞は晩材部に認められる。分野壁孔は明瞭なヒノキ型で２～３個存在することなどから、ヒノキ属と同定した。試料№８の分野壁孔は不明瞭であったが、他の特徴はヒノキ属と類似する事から、ヒノキ属？（cf. *Chamaecyparis*）とした。

③クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料№：１，５，11,14,15

記載：環孔材で円形ないし楕円形の長径200～300μm程度の道管が単独で多列に配列し、孔圏部の幅はかなり広い。孔圏外の道管は30～100μm程度で、やや火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔でる。また、道管にはチロースが顕著に認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するのが認められる。放射組織は平伏細胞からなる単列同性型である。道管放射組織壁孔は不明瞭であるが階段状を示す。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

④シイ属　*Castanopsis* sp.

試料№：3，4，6

記載：孔圏には楕円形で長径180～250μm程度の道管が単独で疎に並ぶ環孔材である。孔圏外の道管は50～100μm程度で、火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔で、道管中にはチロースが認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するものも認められる。放射組織はすべて単列同性である。さらに道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴からシイ属と同定した。

⑤ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

試料№：2，9

楕円形で長径150～250μm程度の道管が孔圏に1～3列に配列する環孔材である。孔圏外では径30～50μ程度の小道管が集合して斜線状、接線状に配列している。道管せん孔は単せん孔で、道管相互壁孔は交互状を示す。小道管にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性型で1～6細胞幅であり、4～6細胞幅で高さ300～500μm程度の紡錘形放射組織が目立つ。上下辺縁の方形細胞には結晶細胞が顕著である。軸方向柔細胞は孔圏部の大道管および孔圏外の集団管孔を取り囲む周囲柔組織をなしている。以上の組織上の特徴から、ケヤキと同定した。

⑥サクラ属？　cf. *Prunus*

試料№：10

径30～50μm程度の道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して年輪内に散在する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。道管内に着色物質が認められる。放射組織は異性型で上下辺縁に数個の方形細胞ないし直立細胞がある。細胞幅は単列のものと2～3細胞幅のものからなり、高さは600μm程度以下である。軸方向柔細胞は散在状である。以上の組織上の特徴からサクラ属の可能性が指摘できるが、断定には至っていない。

用材（柱）についての特徴

前述の様に14本の柱について樹種鑑定を行った結果、スギが1本、ヒノキ属（断定できない個体を含む）が3本、シイ属が3本、クリが4本、ケヤキが2本、サクラ属？が1本確認できた。出雲国府内での従来の調査で特に多かったクリは、半分にも満たなかった。また、クリと組織が似る、シイ属が3本検出されたことが特徴的であった。

今回の結果で用材に明確な傾向が認められない原因として、樹種鑑定を行った柱に、異なる建物の柱であるとか、建物の用途が異なっていたことなどが上げられる。また、柱（建物）が実際に建っていた時期の違いなども原因として考えられる。今後、このような基礎資料を踏まえることも重要であろう。

引用文献

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p．文永堂，東京．

渡辺正巳（2000）長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定．長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ－1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書－，247-249，財団法人大阪市文化財協会．

渡辺正巳（2003）出雲国府跡出土柱根・木製品の樹種（1）．史跡出雲国府跡－1－，風土記の丘地内遺跡発掘調査報告，14，199-208．

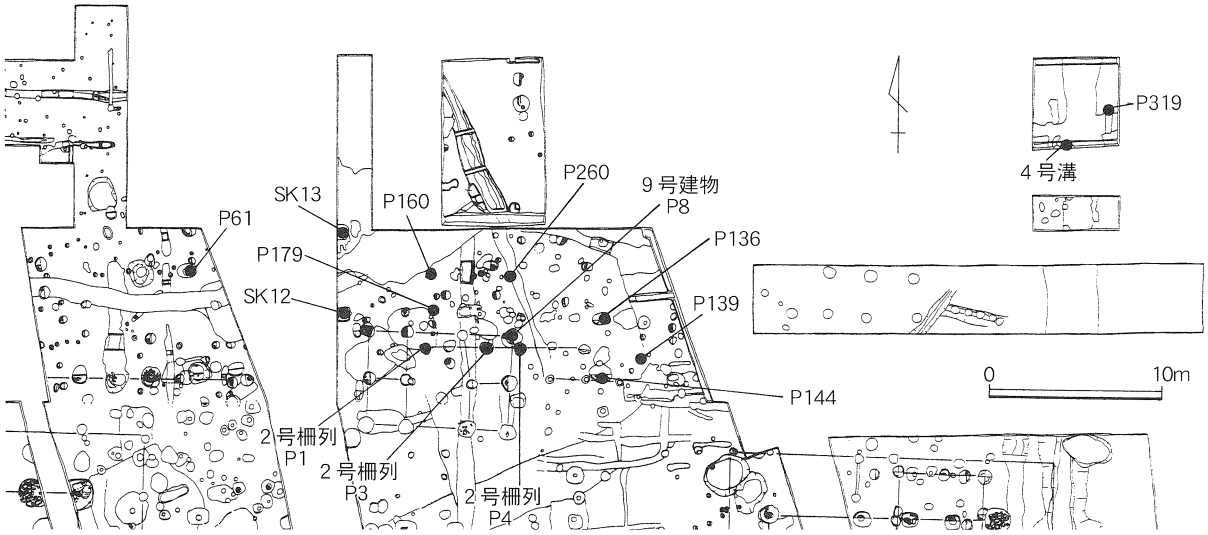
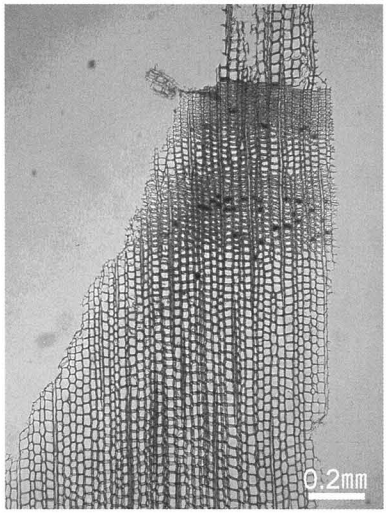


図1　試料の分布

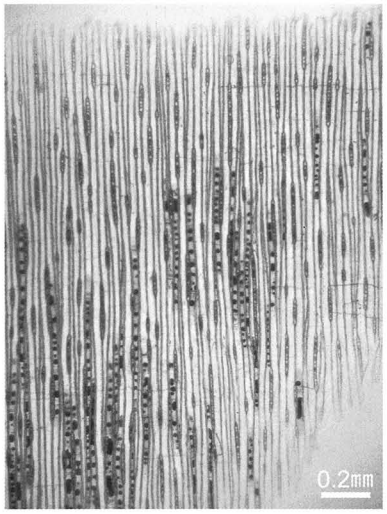
表1　樹種鑑定結果一覧表

試料番号	整理番号	樹　種　名	遺構(取上番号)	種　別	備　考
1	W02111504	クリ	2区P61	柱	古　代
2	W02111503	ケヤキ	3区P136	柱	〃
3	W02111508	シイ属	3区P139	柱	〃
4	W02111502	シイ属	3区P144	柱	〃
5	W02110805	クリ	2号柵列P4	柱	〃
6	W02110804	シイ属	2号柵列P3	柱	〃
7	W02111509	スギ	3区P160	柱	〃
8	W02111510	ヒノキ属？	9号建物P8	柱	〃
9	W02111506	ケヤキ	3区P179	柱	〃
10	W02111505	サクラ属？	2号柵列P1	柱	〃
11	W02111507	クリ	3区P260	柱	〃
12	W02111501	ヒノキ属	3区SK12	柱	〃
13	W02112901	ヒノキ属	T28P319	柱	〃
14	W02120601	クリ	3区SK13	柱	〃
15	W02112902	クリ	T28 4号溝	製品？	〃

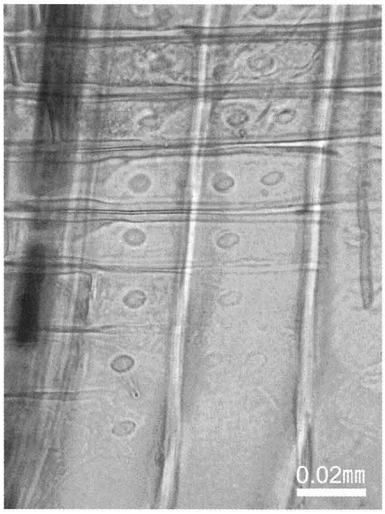
スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　取上No.：３区P160



横断面

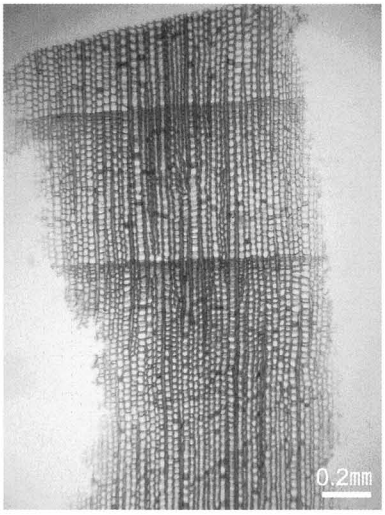


接線断面

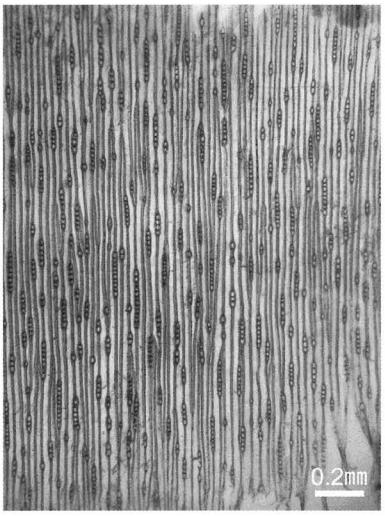


放射断面

ヒノキ属　*Chamaecyparis* sp.　取上No.：３区SK12①



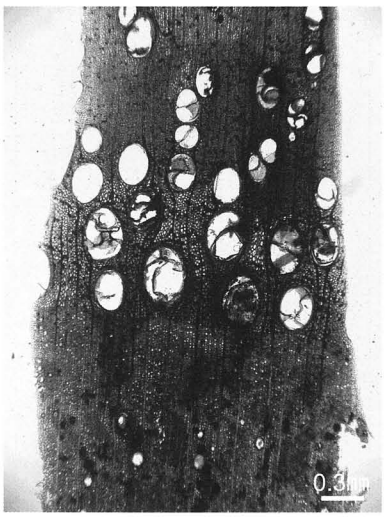
横断面



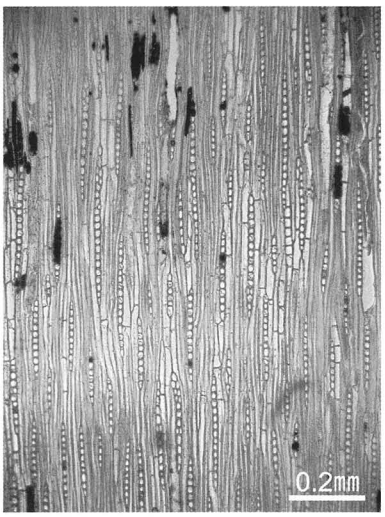
接線断面

放射断面

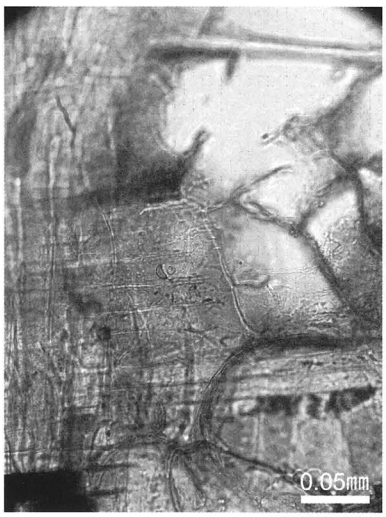
クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　取上No.：２区P61



横断面

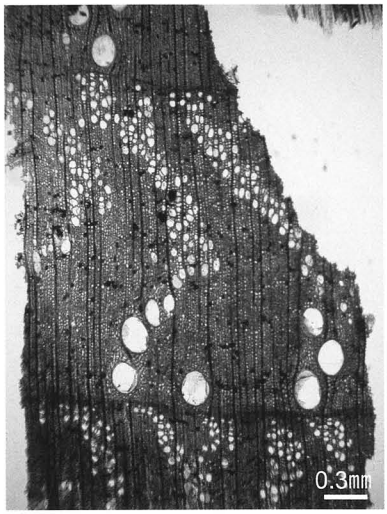


接線断面

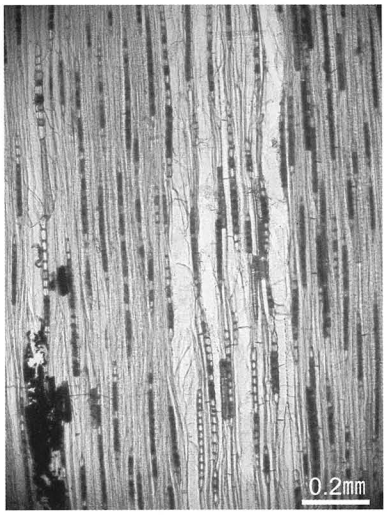


放射断面

シイ属　*Castanopsis* sp.　取上No.：３区P144



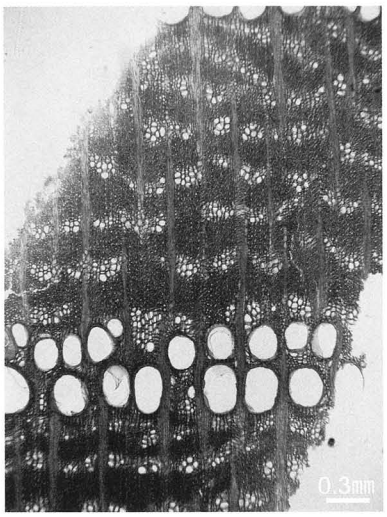
横断面



接線断面

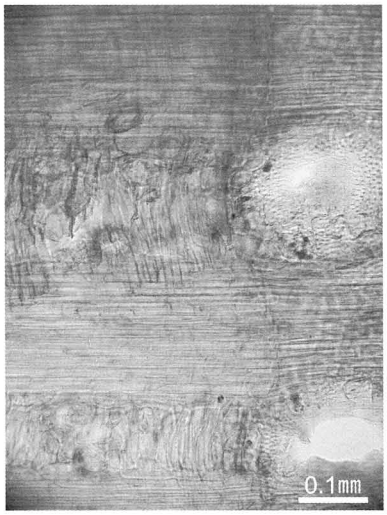
放射断面

ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　取上No.：３区P179



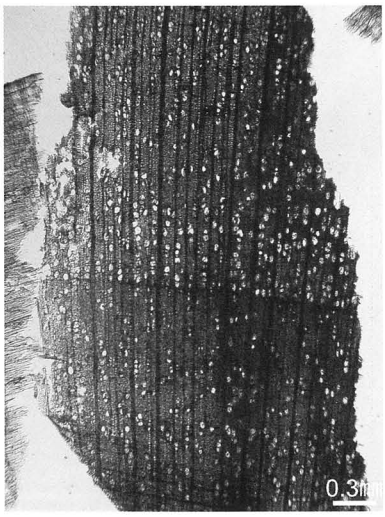
横断面

接線断面

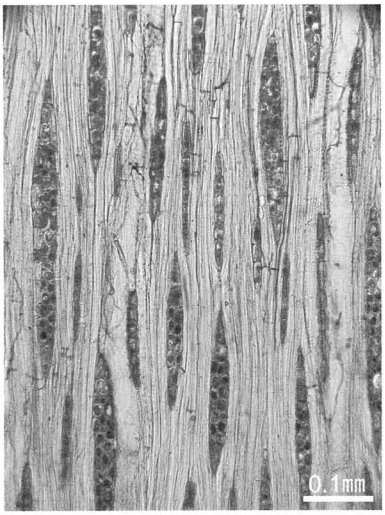


放射断面

サクラ属？　*Prunus* sp.　？　取上No.：３区P200



横断面

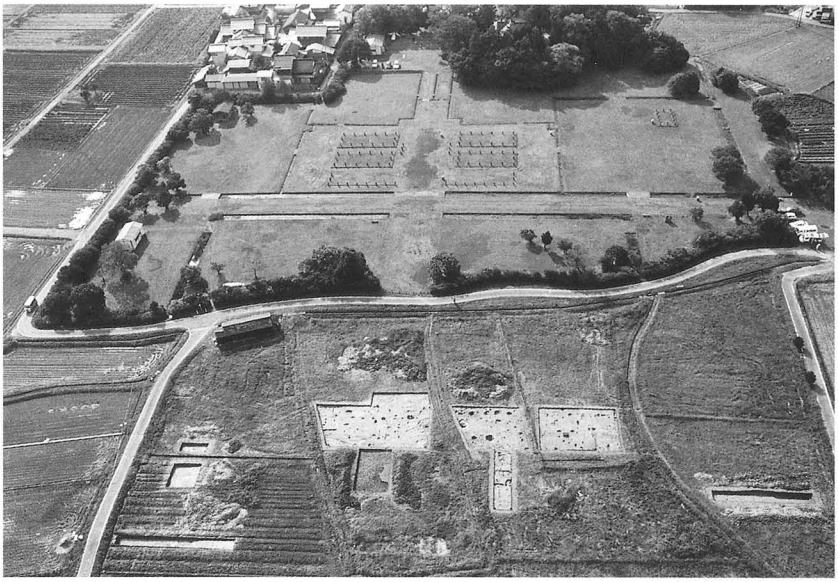


接線断面

放射断面

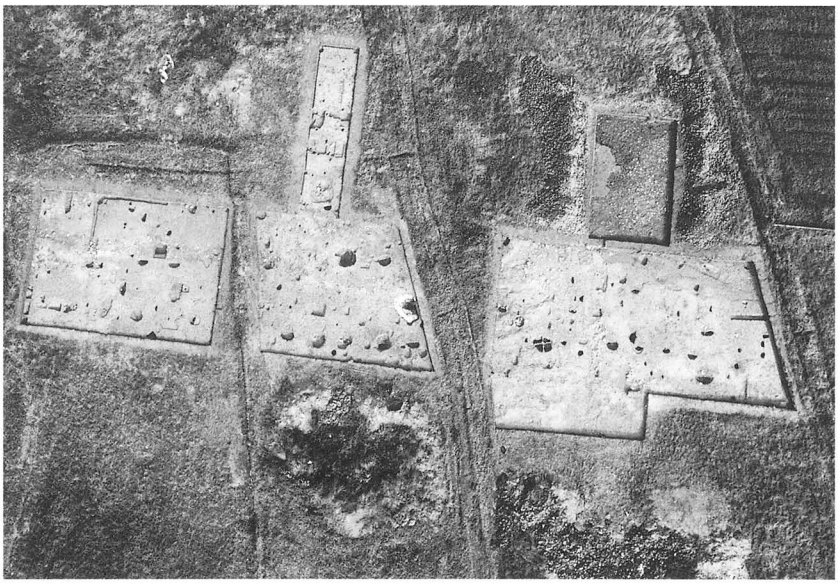
図　　版

図版 1



1，出雲国庁跡史跡公園と
本調査区（北から）

2，意宇平野と本調査区
（東から）



3，本調査区（上が北）